

Sun Secure Global Desktop 4.4

リファレンスマニュアル

Sun Microsystems, Inc.
www.sun.com

Part No. 820-2821-10
2007 年 10 月, Revision 01

このマニュアルに関するコメントの送付先:<http://docs.sun.com/app/docs/form/comments>

Copyright 2007 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) は、本書に記述されている技術に関連する知的財産権を所有します。特に、この知的財産権はひとつかそれ以上の米国における特許 (<http://www.sun.com/patents> を参照)、あるいは米国およびその他の国において追加または申請中の特許を含んでいることがあります、それらに限定されるものではありません。

本書およびそれに付属する製品は、その使用、複製、頒布、および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。サン・マイクロシステムズ株式会社およびそのライセンサ(該当する場合)の書面による事前の許可なく、本製品および本書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。

フォント技術を含む第三者のソフトウェアは、著作権により保護されており、提供者からライセンスを受けているものです。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company, Ltd. が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴマーク、Java、AnswerBook2、docs.sun.com、および Solaris は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems 社の商標、登録商標もしくは、サービスマークです。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

Adobe は、Adobe Systems, Incorporated の登録商標です。

OPEN LOOK および Sun Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカル・ユーザーインタフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは OPEN LOOK GUI を実装する、あるいは米国 Sun Microsystems 社の書面によるライセンス契約書に適合する、米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

U.S. Government Rights Commercial use. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われえないものとします。



目次

はじめに xxi

1. グローバル設定 1

「Secure Global Desktop 認証」タブ 1

認証ウィザード 2

トークン生成 4

パスワードキャッシュ 4

サードパーティーの認証 5

システム認証 5

ローカルリポジトリの検索 6

LDAP リポジトリを検索 7

デフォルトのサードパーティー識別情報を使用 7

デフォルトの LDAP プロファイルを使用 8

もっとも近い LDAP プロファイルを使用 9

LDAP/Active Directory 10

Unix 10

認証トークン 11

Windows ドメインコントローラ 11

SecurID 12

匿名 12

ローカルリポジトリで Unix ユーザー ID を検索	13
ローカルリポジトリで Unix グループ ID を検索	13
デフォルトのユーザープロファイルを使用する	14
Windows ドメイン	14
Active Directory	15
LDAP	15
URL	16
ユーザー名とパスワード	18
クライアント証明書	18
Active Directory ベースドメイン	19
Active Directory デフォルトドメイン	20
「アプリケーション認証」タブ	20
パスワードキャッシュの使用	21
パスワードの期限が切れたときのアクション	22
スマートカード認証	23
ダイアログ表示	23
「パスワードを保存」ボックス	24
「常にスマートカードを使う」ボックス	25
表示の遅延	26
「起動の詳細」ペイン	26
「通信」タブ	27
暗号化されていない接続ポート	28
暗号化されている接続ポート	29
AIP Keepalive の頻度	29
ユーザーセッション再開機能のタイムアウト	30
全般的な再開機能のタイムアウト	31
リソース同期サービス	32
「クライアントデバイス」タブ	32

クライアントドライブマッピング	33
WINS (Windows インターネットネームサービス)	34
フォールバックドライブの検索	35
Windows オーディオ	36
Windows オーディオの音質	36
Unix オーディオ	37
Unix オーディオの音質	38
スマートカード	38
シリアルポートマッピング	39
コピー&ペースト	40
クライアントの Clipboard Security Level	40
タイムゾーンマップファイル	41
編集	42
「印刷」タブ	42
クライアント印刷	43
Universal PDF プリンタ	44
Universal PDF プリンタをデフォルトにする	44
Universal PDF ビューア	45
Universal PDF ビューアをデフォルトにする	46
Postscript プリンタドライバ	46
「パフォーマンス」タブ	47
アプリケーションセッションの負荷分散	48
アプリケーションの負荷分散	49
「セキュリティ」タブ	50
新規パスワード暗号キー	50
印刷ネームマッピングのタイムアウト	50
接続定義	51
X ディスプレイの X 認証	52

「監視」タブ	53
ログフィルタ	53
課金サービス	54
「ライセンス」タブ	55
新規ライセンスキー	55
「ライセンス」テーブル	55
2. Secure Global Desktop サーバー設定	59
「Secure Global Desktop サーバー」タブ	60
「Secure Global Desktop サーバーのリスト」テーブル	60
「一般」タブ	61
外部 DNS 名	62
ユーザーログイン	63
リダイレクト URL	63
「セキュリティ」タブ	64
接続タイプ	64
SSL アクセラレータのサポート	65
ファイアウォール転送 URL	66
「パフォーマンス」タブ	66
同時要求の最大数	66
同時ユーザーセッションの最大数	67
ファイル記述子の最大数	68
JVM サイズ	68
毎日のリソース同期時刻	69
負荷分散グループ	70
「プロトコルエンジン」タブ	71
「文字型プロトコルエンジン」タブ	71
セッションの最大数	72
終了タイムアウト	72

コマンド行引数	73
「X プロトコルエンジン」タブ	73
モニターの解像度	74
フォントパス	74
RGB データベース	75
キーボードマップ	75
クライアントウィンドウのサイズ	76
セッション開始タイムアウト	77
セッションの最大数	78
終了タイムアウト	78
コマンド行引数	79
「実行プロトコルエンジン」タブ	79
セッションの最大数	80
終了タイムアウト	80
ログインスクリプトディレクトリ	81
コマンド行引数	81
「チャネルプロトコルエンジン」タブ	82
パケット圧縮	82
パケット圧縮しきい値	83
終了タイムアウト	83
「印刷プロトコルエンジン」タブ	84
パケット圧縮	84
パケット圧縮しきい値	85
終了タイムアウト	85
「オーディオプロトコルエンジン」タブ	86
パケット圧縮	86
「スマートカードプロトコルエンジン」タブ	87
パケット圧縮	87

「ユーザーセッション」タブ	88
「ユーザーセッションリスト」テーブル	88
「アプリケーションセッション」タブ	89
「アプリケーションセッションリスト」テーブル	90
3. オブジェクトと属性	93
SGD オブジェクト	93
3270 アプリケーションオブジェクト	94
5250 アプリケーションオブジェクト	96
アプリケーションサーバーオブジェクト	98
文字型アプリケーションオブジェクト	99
ディレクトリ:組織オブジェクト	101
ディレクトリ:組織単位オブジェクト	102
ディレクトリ (軽量):Active Directory コンテナオブジェクト	103
ディレクトリ (軽量):ドメインコンポーネントオブジェクト	104
ドキュメントオブジェクト	104
グループオブジェクト	105
ユーザープロファイルオブジェクト	106
Windows アプリケーションオブジェクト	108
X アプリケーションオブジェクト	109
属性の参照	112
アドレス	112
応答メッセージ	112
アプリケーションコマンド	113
アプリケーションの負荷分散	114
アプリケーションの再開機能	115
アプリケーションの再開機能: タイムアウト	117
「アプリケーションセッション」タブ	119
アプリケーション起動	120

コマンドの引数	121
プロトコルの引数	122
「割り当て済みのアプリケーション」タブ	123
「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ	125
属性マップ	130
オーディオリダイレクトライブラリ	131
背景色	131
帯域幅の制限	132
枠線のスタイル	134
クライアントドライブマッピング	134
クライアント印刷	136
クライアント印刷: 上書き	138
クライアントプロファイルの編集	139
コードページ	140
発色数	141
カラーマップ	143
カラー品質	143
コマンドの圧縮	145
コマンドの実行	146
コメント	146
接続終了アクション	147
接続方法	149
接続	149
接続方法: ssh 引数	152
コピー&ペースト	152
コピー&ペースト: アプリケーションの Clipboard Security Level	154
カーソル	155
カーソルキーコードの変更	156

遅延更新 156

表示されるソフトボタン 157

ドメイン名 158

電子メールアドレス 159

エミュレーションタイプ 159

環境変数 160

エスケープシーケンス 161

ユーロ文字 161

「ファイル」メニューと「設定」メニュー 163

フォントファミリ 164

フォントサイズ 164

フォントサイズ: 固定フォントサイズ 165

前景色 166

グラフィックアクセラレーション 166

ヒント 167

「ホストされているアプリケーション」タブ 168

「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ 170

アイコン 172

割り当て済みアプリケーションを親から継承する 173

インターレースイメージ 174

起動接続をオープンしたまま保持 175

キーボードコードの変更 175

キーボードマップ 176

キーボードマップ: ロック 177

キーボードタイプ 178

行の折り返し 179

負荷分散グループ 180

ログイン 180

ログイン: 複数	181
ログイン名	182
ログインスクリプト	183
Universal PDF プリンタをデフォルトにする	184
Universal PDF ビューアをデフォルトにする	185
「メンバー」タブ	186
メニューバー	188
マウスの中ボタンのタイムアウト	189
モニターの解像度	189
マウス	190
名前	191
セッション数	193
数字パッドコードの変更	194
「パスワード」タブ	194
パスワードキャッシュの使用	195
Postscript プリンタドライバ	197
プロンプトのロケール	198
スクロールスタイル	199
シリアルポートマッピング	199
サーバーアドレス	201
サーバーポート	202
セッション終了	202
類似セッション間でリソースを共有	204
ステータス行	205
姓	206
端末タイプ	206
「トークン」タブ	207
Universal PDF プリンタ	208

Universal PDF ビューア	209
URL	210
「ユーザーセッション」タブ	211
ウィンドウを閉じるアクション	212
ウィンドウの色	214
ウィンドウの色: カスタム色	214
ウィンドウ管理キー	215
ウィンドウマネージャー	216
ウィンドウのサイズ: クライアントの最大サイズ	217
ウィンドウのサイズ: カラム	218
ウィンドウのサイズ: 高さ	218
ウィンドウのサイズ: 行	219
ウィンドウのサイズ: 最大化	220
ウィンドウのサイズ: ウィンドウに合わせて拡大縮小する	221
ウィンドウのサイズ: 幅	221
ウィンドウタイプ	222
ウィンドウタイプ: 新規ブラウザウィンドウ	225
Windows プロトコル	225
Windows プロトコル: 最初にクライアントからの実行を試行する	226
X セキュリティー拡張機能	227

4. コマンド 229

tarantella コマンド	230
形式	230
説明	231
使用例	233
tarantella archive コマンド	233
形式	233
説明	234

使用例	234
tarantella array コマンド	234
形式	234
説明	234
使用例	235
tarantella array detach	235
tarantella array join	236
tarantella array list	238
tarantella array make_primary	238
tarantella cache コマンド	239
形式	239
説明	239
使用例	240
tarantella config コマンド	240
形式	240
説明	241
使用例	241
tarantella config edit	241
tarantella config list	242
tarantella emulatorsession コマンド	243
形式	244
説明	244
使用例	244
tarantella emulatorsession list	245
tarantella emulatorsession info	246
tarantella emulatorsession shadow	247
tarantella emulatorsession suspend	249
tarantella emulatorsession end	250

tarantella help コマンド	251
形式	251
説明	251
使用例	251
tarantella license コマンド	251
形式	252
説明	252
使用例	252
tarantella license add	252
tarantella license info	253
tarantella license list	254
tarantella license query	254
tarantella license remove	256
tarantella license status	257
tarantella object コマンド	258
形式	258
説明	259
使用例	260
tarantella object add_host	260
tarantella object add_link	261
tarantella object add_member	263
tarantella object delete	264
tarantella object edit	265
tarantella object list_attributes	266
tarantella object list_contents	267
tarantella object new_3270app	268
tarantella object new_5250app	272
tarantella object new_charapp	276

tarantella object new_container	280
tarantella object new_dc	281
tarantella object new_doc	282
tarantella object new_group	284
tarantella object new_host	285
tarantella object new_org	287
tarantella object new_orgunit	289
tarantella object new_person	292
tarantella object new_windowsapp	295
tarantella object new_xapp	299
tarantella object remove_host	304
tarantella object remove_link	305
tarantella object remove_member	306
tarantella object rename	307
tarantella object script	308
tarantella passcache コマンド	309
形式	309
説明	310
使用例	310
tarantella passcache delete	310
tarantella passcache edit	312
tarantella passcache list	314
tarantella passcache new	316
tarantella print コマンド	318
形式	318
説明	318
使用例	318
tarantella print cancel	319

tarantella print list	320
tarantella print move	321
tarantella print pause	322
tarantella print resume	323
tarantella print start	324
tarantella print status	325
tarantella print stop	326
tarantella query コマンド	327
形式	327
説明	328
使用例	328
tarantella query audit	328
tarantella query billing	331
tarantella query errlog	333
tarantella query uptime	334
tarantella restart コマンド	334
形式	334
説明	335
使用例	335
tarantella role コマンド	335
形式	336
説明	336
使用例	336
tarantella role add_link	337
tarantella role add_member	338
tarantella role list	338
tarantella role list_links	339
tarantella role list_members	340

tarantella role remove_link	341
tarantella role remove_member	342
tarantella security コマンド	342
形式	343
説明	343
使用例	344
tarantella security certinfo	344
tarantella security certrequest	346
tarantella security certuse	348
tarantella security customca	350
tarantella security decryptkey	351
tarantella security fingerprint	352
tarantella security peerca	353
tarantella security start	354
tarantella security stop	355
tarantella setup コマンド	355
形式	356
説明	356
使用例	356
tarantella start コマンド	356
形式	356
説明	356
使用例	357
tarantella start cdm コマンド	357
形式	357
説明	357
使用例	357
tarantella status コマンド	357

形式	358
説明	358
使用例	358
tarantella stop コマンド	359
形式	359
説明	359
使用例	360
tarantella stop cdm コマンド	360
形式	360
説明	360
使用例	360
tarantella tokencache コマンド	360
形式	361
説明	361
使用例	361
tarantella tokencache delete	361
tarantella tokencache list	362
tarantella tscal コマンド	363
形式	363
説明	364
使用例	364
tarantella tscal free	364
tarantella tscal list	366
tarantella tscal return	367
tarantella uninstall コマンド	368
形式	368
説明	368
使用例	368

tarantella version コマンド	369
形式	369
説明	369
使用例	369
tarantella webserver コマンド	369
形式	369
説明	370
使用例	370
tarantella webserver add_trusted_user	370
tarantella webserver delete_trusted_user	371
tarantella webserver list_trusted_users	372
tarantella webserver start	373
tarantella webserver stop	374
tarantella webserver restart	374
tarantella webtopsession コマンド	375
形式	375
説明	376
使用例	376
tarantella webtopsession list	376
tarantella webtopsession logout	378
索引	381

はじめに

『Sun Secure Global Desktop 4.4 リファレンスマニュアル』は、Sun Secure Global Desktop Software (SGD) を設定および制御するための使用可能な設定とコマンドの包括的なリファレンスです。このマニュアルは、SGD 管理者向けに記述されています。

内容の紹介

第 1 章では、アレイ内のすべての SGD サーバーに適用されるグローバル設定について説明します。

第 2 章では、アレイ内の指定された SGD サーバーに適用されるサーバー設定について説明します。

第 3 章では、SGD およびその属性に含まれる、サポートされているオブジェクトタイプについて説明します。Administration Console を使って属性を設定する方法と、それに対応する SGD コマンド行の使用法について詳しく説明します。

第 4 章では、使用可能な SGD コマンドについて説明します。コマンドごとに、使用例も記載されています。

UNIX コマンドの使用法

このマニュアルには、システムのシャットダウン、システムのブート、デバイスの設定といった基本的な UNIX® コマンドや手順に関する情報は記載されていない場合があります。このような情報については、使用しているシステムのマニュアルを参照してください。ただし、それぞれの SGD コマンドに関する情報はこのマニュアルに記載されています。

シェルプロンプト

シェル	プロンプト
C シェル	<i>machine-name%</i>
C シェルのスーパーユーザー	<i>machine-name#</i>
Bourne シェルおよび Korn シェル	\$
Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー	#

表記上の規則

字体*	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、およびディレクトリ名を示します。または、画面上のコンピュータ出力を示します。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 % You have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して示します。	% su Password:
<i>AaBbCc123</i>	コマンド行の変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、 rm <i>filename</i> と入力します。

* 使用しているブラウザの設定がこれらの設定と異なっている場合もあります。

関連マニュアル

オンラインと示されているマニュアルは、次のサイトで参照できます。

<http://www.sun.com/documentation>

アプリケーション	タイトル	Part Number	形式	ロケーション
リリースノート	Sun Secure Global Desktop 4.4 リリースノート	820-2811-10	HTML PDF	オンライン ソフトウェア CD および オンライン
インストール	Sun Secure Global Desktop 4.4 インストールガイド	820-2816-10	HTML PDF	オンライン ソフトウェア CD および オンライン
管理	Sun Secure Global Desktop 4.4 管理者ガイド	820-2820-10	HTML	オンライン
ユーザー	Sun Secure Global Desktop 4.4 ユーザーガイド	820-2823-10	HTML	オンライン

コメントの送付先

Sun では、マニュアルの品質向上のために、お客様からのコメントや提案をお待ちしております。Sun へのコメントは、次のアドレスに電子メールでお送りください。

docfeedback@sun.com

電子メールの件名には、次に示すマニュアルタイトルと Part Number を含めるようにしてください。

Sun Secure Global Desktop 4.4 リファレンスマニュアル、Part Number 820-2821-10.

第1章

グローバル設定

Sun Secure Global Desktop (SGD) 全体に適用される設定には、「グローバル設定」タブを使用します。「グローバル設定」タブに変更を加えると、アレイ内のすべての SGD サーバーが影響を受けます。

SGD では、アレイとは、設定情報を共有する一連の SGD サーバーを指します。

この章の内容は、次のとおりです。

- 1 ページの「「Secure Global Desktop 認証」タブ」
- 20 ページの「「アプリケーション認証」タブ」
- 27 ページの「「通信」タブ」
- 32 ページの「「クライアントデバイス」タブ」
- 42 ページの「「印刷」タブ」
- 47 ページの「「パフォーマンス」タブ」
- 50 ページの「「セキュリティ」タブ」
- 53 ページの「「監視」タブ」
- 55 ページの「「ライセンス」タブ」

「Secure Global Desktop 認証」タブ

「Secure Global Desktop 認証」タブを使用して、ユーザーが SGD にログインする方法を制御します。属性は、アレイ内のすべての SGD サーバーに適用されます。設定に対する変更は、すぐに反映されます。

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

ユーザー認証は、外部の認証機構 (サードパーティーの認証) を使って実行できます。また、指定したリポジトリを使って認証を実行することもできます (システム認証)。

「Sun Secure Global Desktop 認証」タブには、次のセクションが含まれます。

- 「トークンとキャッシュ」。このセクションには、次の設定が含まれます。
 - トークン生成
 - パスワードキャッシュ
- 「**Secure Global Desktop** の有効なシーケンス」。このセクションには、現在の SGD 認証設定の概要が表示されます。「ユーザー認証の変更」ボタンをクリックすると、認証ウィザードが起動します。このウィザードを使って、SGD の認証を設定できます。「[認証ウィザード](#)」を参照してください。
- 「**LDAP** リポジトリの詳細」。LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) 認証を使用している場合、このセクションには LDAP ディレクトリサーバー設定の概要が表示されます。

認証ウィザード

認証ウィザードを使用すると、SGD ユーザー用の認証設定処理を簡単に実行できます。認証ウィザードに表示される手順の数は、ウィザード実行時の選択内容に応じて異なります。

認証ウィザードで実行可能な手順は、次のとおりです。

- 「概要」。ユーザーが SGD への認証を実行する方法に関する背景情報を含みます。
- 「サードパーティー/システム認証」。サードパーティーの認証とシステム認証のどちらを使用するか、または両方を使用するかどうかを選択します。

この手順には、次の設定が含まれます。

 - サードパーティーの認証
 - システム認証
- 「サードパーティーの認証 - ユーザーの識別情報とユーザープロファイル」。サードパーティーの認証専用。認証されたユーザーのユーザー識別情報とユーザープロファイルの検索で使用する検索方式を選択します。

この手順には、次の設定が含まれます。

 - ローカルリポジトリの検索
 - LDAP リポジトリを検索
 - デフォルトのサードパーティー識別情報を使用
 - デフォルトの LDAP プロファイルを使用
 - もっとも近い LDAP プロファイルを使用

- 「システム認証 - リポジトリ」。システム認証専用。1 つ以上のチェックボックスを選択して、SGD がユーザー情報の検出に使用するリポジトリを有効にします。リポジトリは、試行される順序に従ってリスト表示されます。1 つのリポジトリがユーザーを認証すると、それ以降のリポジトリは試されません。

この手順には、次の設定が含まれます。

- [LDAP/Active Directory](#)
- [Unix](#)
- [認証トークン](#)
- [Windows ドメインコントローラ](#)
- [SecurID](#)
- [匿名](#)

- 「**Unix 認証 - ユーザープロファイル**」。システム認証専用。UNIX 認証を選択すると、この画面が表示されます。1 つ以上のチェックボックスを選択して、UNIX ユーザーの認証に使用するユーザープロファイルの検索方法を指定します。認証方式は、試行される順序に従ってリスト表示されます。ある検索方式で一致するユーザープロファイルが検索されると、それ以降の方式は試されません。

この手順には、次の設定が含まれます。

- [ローカルリポジトリで Unix ユーザー ID を検索](#)
- [ローカルリポジトリで Unix グループ ID を検索](#)
- [デフォルトのユーザープロファイルを使用する](#)

- 「**Window ドメイン認証 - ドメインコントローラ**」。システム認証専用。Windows ドメインコントローラのシステム認証リポジトリを選択すると、この画面が表示されます。ここでは、ドメインコントローラの名前を指定します。

この手順には、「[Windows ドメイン](#)」設定が含まれます。

- 「**LDAP リポジトリの詳細**」。サードパーティーの認証またはシステム認証用。LDAP または Active Directory システム認証リポジトリを選択した場合、またはサードパーティーの認証に「LDAP リポジトリを検索」オプションを選択した場合に、この画面が表示されます。ここでは、使用する LDAP リポジトリの詳細を指定します。

この手順には、次の設定が含まれます。

- [Active Directory](#)
- [LDAP](#)
- [URL](#)
- [ユーザー名とパスワード](#)
- [クライアント証明書](#)
- [Active Directory ベースドメイン](#)
- [Active Directory デフォルトドメイン](#)

- 「選択項目の確認」。ウィザードで選択した項目の概要が表示されます。変更を確定する前に、認証設定の内容を確認できます。

トークン生成

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

認証トークンを作成してユーザーに提供し、ユーザーが SGD に自動的にログインできるようにするかどうかを設定します。

認証トークンが第三者に盗聴、使用されないよう、セキュア HTTPS (Hypertext Transfer Protocol over Secure Socket Layer) Web サーバーを使い、セキュリティーサービスを有効にします。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」 ⇒ 「Generate Authentication Tokens」

コマンド行

コマンドオプション:--login-autotoken 1 | 0

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、ユーザー用の認証トークンの生成を有効にします。

```
--login-autotoken 0
```

パスワードキャッシュ

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

ユーザーが SGD にログインするために入力したユーザー名とパスワードを、パスワードキャッシュに保存するかどうかを指定します。

SecurID 認証を使用する場合は、SecurID パスワードが再利用されないように、ユーザー名とパスワードを保存しないでください。

Array Manager: 「Application Launch Properties (Array-Wide)」 ⇒
「Authentication」 ⇒ 「Save SGD Login Details in Cache」

コマンド行

コマンドオプション: `--launch-savettpassword 1 | 0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、ユーザーログインの詳細をパスワードキャッシュに保存します。

```
--launch-savettpassword 1
```

サードパーティーの認証

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

サードパーティーの認証を有効にする場合は、チェックボックスを選択します。

この設定を使用すると、Web サーバー認証などのサードパーティーの機構から認証されているユーザーに SGD へのアクセスを許可できます。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」 ⇒
「External Authentication」 ⇒ 「Use Third Party Authentication」

コマンド行

コマンドオプション: `--login-thirdparty 1 | 0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、サードパーティーの認証を無効にします。

```
--login-thirdparty 0
```

システム認証

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

ユーザー認証が SGD サーバーにより実行されることを指定します。このオプションを選択すると、ウィザードの画面でシステム認証の設定が可能になります。

コマンド行

この設定に相当するコマンド行はありません。

ローカルリポジトリの検索

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

この属性は、サードパーティーの認証機構で認証されたユーザーの識別情報とユーザープロファイルを判定するために SGD が使用する検索方式を指定します。

この検索方式は、ユーザーの識別情報をローカルリポジトリ内で検索して、一致するプロファイルを使用します。

追加の検索方式を選択した場合、表示された順番に検索方式が使用されます。ただし、サードパーティーの認証は曖昧なユーザーをサポートしていないため、最初に一致したものが使用されます。

検索して一致するものが見つからなかった場合は、標準のログインページが表示されます。このときユーザーは、通常の方法で SGD にログインする必要があります。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」⇒「User Identity Mapping」⇒「Search ENS for Matching Person」

コマンド行

コマンドオプション:--login-thirdparty-ens 1 | 0

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、ローカルリポジトリ内での一致するユーザープロファイルの検索が無効になります。

```
--login-thirdparty-ens 0
```

LDAP リポジトリを検索

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

LDAP リポジトリに対して、サードパーティーの認証機構で認証されたユーザーのユーザー識別情報を検索することを指定します。

使用する検索方式は、「[デフォルトの LDAP プロファイルを使用](#)」または「[もっとも近い LDAP プロファイルを使用](#)」属性で定義されます。

コマンド行

この設定に相当するコマンド行はありません。

デフォルトのサードパーティー識別情報を使用

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

この属性は、サードパーティーの認証機構で認証されたユーザーの識別情報とユーザープロファイルを判定するために SGD が使用する検索方式を指定します。

この検索方式では、検索は実行されません。ユーザー識別情報は、サードパーティーのユーザー名です。サードパーティーのユーザープロファイル (System Objects/Third Party Profile) が使用されます。

追加の検索方式を選択した場合、表示された順番に検索方式が使用されます。ただし、サードパーティーの認証は曖昧なユーザーをサポートしていないため、最初に一致したものが使用されます。

検索して一致するものが見つからなかった場合は、標準のログインページが表示されます。このときユーザーは、通常の方法で SGD にログインする必要があります。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」⇒「User Identity Mapping」⇒「Use Default Profile」

コマンド行

コマンドオプション:--login-thirdparty-noens 1 | 0

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、デフォルトのユーザープロファイルの使用が無効になります。

```
--login-thirdparty-noens 0
```

デフォルトの LDAP プロファイルを使用

使用法:オプションを選択します。

説明

この属性は、サードパーティーの認証機構で認証されたユーザーの識別情報とユーザープロファイルを判定するために SGD が使用する検索方式を指定します。

この検索方式は、ユーザーの識別情報を LDAP リポジトリ内で検索してから、デフォルト LDAP ユーザープロファイル (System Objects/LDAP Profile) を使用します。

追加の検索方式を選択した場合、表示された順番に検索方式が使用されます。ただし、サードパーティーの認証は曖昧なユーザーをサポートしていないため、最初に一致したものが使用されます。

検索して一致するものが見つからなかった場合は、標準のログインページが表示されます。このときユーザーは、通常の方法で SGD にログインする必要があります。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」⇒ 「User Identity Mapping」⇒ 「Search LDAP and Use LDAP Profile」

コマンド行

コマンドオプション:--login-ldap-thirdparty-profile 1 | 0

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、LDAP の検索とデフォルトの LDAP プロファイルの使用が無効になります。

```
--login-ldap-thirdparty-profile 0
```


もっとも近い LDAP プロファイルを使用

使用法:オプションを選択します。

説明

この属性は、サードパーティーの認証機構で認証されたユーザーの識別情報とユーザープロファイルを判定するために SGD が使用する検索方式を指定します。

この検索方式は、LDAP と SGD の命名体系の違いを考慮して、ユーザーの識別情報を LDAP リポジトリ内で検索してから、ローカルリポジトリ内のもっとも近いユーザープロファイルを使用します。

SGD は、一致するものが見つかるまで次の検索を行います。

- LDAP 人物オブジェクトと同じ名前を持つユーザープロファイル。
たとえば、LDAP 人物オブジェクトが cn=Emma Rald,cn=Sales,dc=Indigo Insurance,dc=com である場合、SGD はローカルリポジトリで、dc=com/dc=Indigo Insurance/cn=Sales/cn=Emma Rald を検索します。
- LDAP 人物オブジェクトと同じ組織単位に含まれるが、cn=LDAP Profile という名前を持つユーザープロファイル。
たとえば、dc=com/dc=Indigo Insurance/cn=Sales/cn=LDAP Profile です。
- いずれかの親の組織単位に含まれ、cn=LDAP Profile という名前を持つユーザープロファイル。
たとえば、dc=com/dc=Indigo Insurance/cn=LDAP Profile です。
- 一致するものが見つからない場合は、プロファイルオブジェクト System Objects/LDAP Profile がユーザープロファイルとして使用されます。

追加の検索方式を選択した場合、表示された順番に検索方式が使用されます。ただし、サードパーティーの認証は曖昧なユーザーをサポートしていないため、最初に一致したものが使用されます。

検索して一致するものが見つからなかった場合は、標準のログインページが表示されます。このときユーザーは、通常の方法で SGD にログインする必要があります。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」⇒ 「User Identity Mapping」⇒ 「Search LDAP and Use Closest ENS Match」

コマンド行

コマンドオプション:--login-ldap-thirdparty-ens 1 | 0

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、LDAP の検索ともっとも近い LDAP プロファイルの使用が無効になります。

```
--login-ldap-thirdparty-ens 0
```

LDAP/Active Directory

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

LDAP ディレクトリサーバーまたは Active Directory サーバーを認証に使用することを指定します。

このオプションを選択すると、ウィザードの画面で、LDAP ディレクトリサーバーまたは Active Directory サーバーの詳細を入力できます。

コマンド行

この設定に相当するコマンド行はありません。

Unix

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

UNIX の認証を有効にします。

このオプションを選択すると、ウィザードの画面で UNIX の認証を設定できます。

コマンド行

この設定に相当するコマンド行はありません。

認証トークン

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

認証トークンを使用した認証を有効にします。

認証トークンを使用した認証を使用できるのは、SGD クライアントが統合モードで動作している場合だけです。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」⇒
「Authentication Token Login Authority」

コマンド行

コマンドオプション:--login-atla 1 | 0

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、認証トークンを使用した認証が無効になります。

```
--login-atla 0
```

Windows ドメインコントローラ

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

Windows ドメインコントローラに対する認証を有効にします。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」⇒ 「NT Login Authority」

コマンド行

コマンドオプション:--login-nt 1 | 0

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、Windows ドメインコントローラの認証が無効になります。

`--login-nt 0`

SecurID

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

RSA SecurID トークンを持つユーザーに、SGD へのログインを許可します。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」⇒
「SecurID Login Authority」

コマンド行

コマンドオプション:`--login-securid 1 | 0`

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、SecurID 認証が無効になります。

`--login-securid 0`

匿名

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

ユーザーがユーザー名とパスワードを入力せずに SGD にログインできるようにします。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」⇒
「Anonymous User Login Authority」

コマンド行

コマンドオプション:`--login-anon 1 | 0`

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、匿名のユーザー認証が無効になります。

```
--login-anon 0
```

ローカルリポジトリで Unix ユーザー ID を検索

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

認証された UNIX ユーザーのユーザープロファイルを検索する方式を指定します。ローカルリポジトリ内でユーザーの識別情報を検索して、一致するユーザープロファイルを使用する場合に、この属性を選択します。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」⇒「ENS Login Authority」

コマンド行

コマンドオプション:--login-ens 1 | 0

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、ローカルリポジトリ内での UNIX ユーザー ID の検索が有効になります。

```
--login-ens 1
```

ローカルリポジトリで Unix グループ ID を検索

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

認証された UNIX ユーザーのユーザープロファイルを検索する方式を指定します。UNIX ユーザー識別情報を使用し、ローカルリポジトリで、ユーザーの UNIX グループ ID に適合するユーザープロファイルを検索する場合に、この属性を選択します。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」⇒「UNIX Group Login Authority」

コマンド行

コマンドオプション:--login-unix-group 1 | 0

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、ローカルリポジトリ内での UNIX グループ ID の検索が有効になります。

```
--login-unix-group 1
```

デフォルトのユーザープロファイルを使用する

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

認証された UNIX ユーザーのユーザープロファイルを検索する方式を指定します。
認証されたユーザーのデフォルトの UNIX ユーザープロファイル (System Objects/UNIX User Profile) を使用する場合に、この属性を選択します。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」⇒「UNIX User Login Authority」

コマンド行

コマンドオプション:--login-unix-user 1 | 0

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、デフォルトの UNIX ユーザープロファイル (System Objects/UNIX User Profile) の使用が有効になります。

```
--login-unix-user 1
```

Windows ドメイン

使用法:Windows ドメイン名をフィールドに入力します。

説明

Windows ドメイン認証で使用するドメインコントローラの名前。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」 ⇒
「Windows NT Domain」

コマンド行

コマンドオプション: `--login-nt-domain dom`

使用法:ここで、*dom* は、ユーザーの認証に使用する Windows ドメインコントローラの名前です。

次の例では、ユーザーの認証に Windows ドメインコントローラ `sales.indigo-insurance.com` が使用されます。

```
--login-nt-domain sales.indigo-insurance.com
```

Active Directory

使用法:オプションを選択します。

説明

Active Directory 認証を有効にします。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」 ⇒
「Active Directory Login Authority」

コマンド行

コマンドオプション: `--login-ad 1 | 0`

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、Active Directory 認証が有効になります。

```
--login-ad 1
```

LDAP

使用法:LDAP オプションを選択します。

説明

LDAP 認証を有効にします。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」 ⇒ 「LDAP Login Authority」

コマンド行

コマンドオプション: `--login-ldap 1 | 0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、LDAP 認証が有効になります。

```
--login-ldap 1
```

URL

使用法: URL (Uniform Resource Locator) をフィールドに入力します。URL は 1 行に 1 つずつ入力し、リターンキーを押します。

説明

次の認証機構で使用する LDAP ディレクトリサーバーまたは Active Directory サーバーの場所です。

- LDAP 認証
- サードパーティーの認証 (「LDAP リポジトリを検索」オプション)
- Active Directory 認証

認証に LDAP ディレクトリを使用する場合は、SGD Directory Services Integration (DSI) を使用できます。DSI では、ローカルリポジトリの代わりに LDAP version 3 ディレクトリを使用してユーザー情報を管理できます。DSI を使用する場合は、ローカルリポジトリ内で LDAP 組織をミラー化する必要はありません。

DSI の使用方法の詳細は、『Sun Secure Global Desktop 管理者ガイド』を参照してください。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」 ⇒ 「LDAP Server」 ⇒ 「URL」

LDAP 認証

「LDAP 認証」または「サードパーティーの認証」の場合は、URL リストを入力します。

URL は、リストに指定した順番で使用されます。リスト内の最初の LDAP ディレクトリサーバーが使用不可能な場合、リスト内の次の LDAP ディレクトリサーバーが SGD により試みられます。

各 URL は、`ldap://server:port/searchroot` の形式になります。これらの各属性は、次のように定義されます。

- 「サーバー」。LDAP ディレクトリサーバーの DNS 名。
- 「ポート」。LDAP ディレクトリサーバーが接続を待機する TCP ポート。デフォルトのポートを使用する場合は、ポートの設定と前に付けるコロン (:) を省略することができます。
- 「検索ルート」。LDAP リポジトリが一致するユーザーの検索を開始する LDAP ディレクトリ構造内の位置。

例: `dc=indigo-insurance,dc=com`

LDAP ディレクトリサーバーが SSL (Secure Sockets Layer) 接続を使用する場合は、`ldaps://` 形式の URL を使用します。SSL の設定には、追加の作業が必要になります。LDAP ディレクトリサーバーへの接続の保護の詳細は、『Sun Secure Global Desktop 管理者ガイド』を参照してください。

Active Directory 認証

Active Directory リポジトリの場合は、Active Directory ドメインの URL に `ad://domain` の形式で入力します。たとえば、`ad://east.indigo-insurance.com` のようになります。

URL は、`ad://` で始まる必要があります。入力できるドメインは 1 つだけです。

コマンド行

コマンドオプション: `--login-ldap-url url`

使用法: ここで、*url* は、1 つ以上の LDAP ディレクトリサーバーの URL です。

次の例では、LDAP ディレクトリサーバーの URL が指定されます。

```
--login-ldap-url "ldap://melbourne.indigo-insurance.com/dc=indigo-insurance,dc=com"
```

ユーザー名とパスワード

使用法: ユーザー名とパスワードをフィールドに入力します。

説明

LDAP ディレクトリサーバーまたは Active Directory サーバーを検索する権限を持つユーザーのユーザー名とパスワードを指定します。LDAP ディレクトリサーバーによっては、この属性を設定する必要がない場合があります。

「LDAP 認証」または「サードパーティーの認証」の場合、ユーザーの識別名を入力します (例: `cn=Bill Orange,cn=Users,dc=indigo-insurance,dc=com`)。

「Active Directory 認証」の場合は、ユーザー主体名を入力します (例: `orange@indigo-insurance.com`)。

注 - セキュリティ上の理由から、パスワードは、設定済みでもディスプレイに表示されません。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」 ⇒ 「LDAP Server」 ⇒ 「Username」

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」 ⇒ 「LDAP Server」 ⇒ 「Password」

コマンド行

コマンド行からは、`tarantella passcache new --ldap` コマンドを使用します。

コマンドオプション:`tarantella passcache new --ldap --resuser resuser -respass respassr`

使用法: ここで、*resuser* と *respass* は、ユーザー名とパスワードです。

次の例では、LDAP ディレクトリサーバーの検索に、ユーザー名 (*test1*) およびパスワード (*test2*) を指定します。

```
tarantella passcache new --ldap --resuser test1 --respass test2
```

クライアント証明書

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

クライアント証明書を使って Active Directory サーバーへの接続を認証するかどうかを設定します。

これにより、Active Directory サーバーにセキュア接続を使用できます。SSL の設定には、追加の作業が必要になります。LDAP ディレクトリサーバーへの接続の保護の詳細は、『Sun Secure Global Desktop 管理者ガイド』を参照してください。

デフォルトでは、オプションは無効になっています。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」⇒
「Active Directory」⇒「Use Certificates」

コマンド行

コマンドオプション: `--login-ldap-pki-enabled 1 | 0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、クライアント証明書を使用した Active Directory サーバーへの接続の認証を有効にします。

```
--login-ldap-pki-enabled 1
```

Active Directory ベースドメイン

使用法: ドメイン名をフィールドに入力します。

説明

ユーザーがログイン時にドメインの一部だけを入力した場合に、SGD が Active Directory 認証に使用するドメイン。

たとえば、ベースドメインが「indigo-insurance.com」に設定されているときに、ユーザーが「rouge@west」というユーザー名でログインした場合、SGD は「rouge@west.indigo-insurance.com」を認証しようとします。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」⇒
「Active Directory」⇒「Base Domain」

コマンド行

コマンドオプション: `--login-ad-base-domain dom`

使用法:ここで、*dom* は、Active Directory 認証に使用するベースドメイン名です。

次の例では、indigo-insurance.com のベースドメインが指定されます。

```
--login-ad-base-domain indigo-insurance.com
```

Active Directory デフォルトドメイン

使用法:ドメイン名をフィールドに入力します。

説明

ユーザーがログイン時にドメインを指定しなかった場合に、SGD が Active Directory 認証に使用するドメイン。

たとえば、デフォルトドメインが「east.indigo-insurance.com」に設定されているときに、ユーザーが「rouge」というユーザー名でログインした場合、SGD は「rouge@east.indigo-insurance.com」を認証しようとします。

Array Manager: 「Secure Global Desktop Login Properties (Array-Wide)」⇒
「Active Directory」⇒「Default Domain」

コマンド行

コマンドオプション:--login-ad-default-domain *dom*

使用法:ここで、*dom* は、Active Directory 認証に使用するデフォルトのドメイン名です。

次の例では、west.indigo-insurance.com のベースドメインが指定されます。

```
--login-ad-default-domain west.indigo-insurance.com
```

「アプリケーション認証」タブ

「アプリケーション認証」タブの設定は、アプリケーションの起動時に、ユーザーに表示される内容を制御します。

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

属性に対する変更は、すぐに反映されます。

このタブには、次のセクションが含まれます。

- 認証

このセクションには、次の設定が含まれます。

- パスワードキャッシュの使用
- パスワードの期限が切れたときのアクション
- スマートカード認証

- 認証ダイアログ

このセクションには、次の設定が含まれます。

- ダイアログ表示
- 「パスワードを保存」ボックス
- 「常にスマートカードを使う」ボックス

- 起動ダイアログ

このセクションには、次の設定が含まれます。

- 表示の遅延
- 「起動の詳細」ペイン

パスワードキャッシュの使用

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

SGD サーバー用にユーザーが入力したパスワードがパスワードキャッシュに格納されている場合、アプリケーションサーバー用のパスワードとして試すかどうかを指定します。

SGD ホスト上で実行するように設定されているアプリケーションがある場合、または「パスワードキャッシュ」が選択されている場合、SGD サーバーのパスワードをキャッシュに格納できます。

この設定は、アプリケーションサーバーオブジェクトの「パスワードキャッシュの使用」属性により無効にされることがあります。

Array Manager: 「Application Launch Properties (Array-Wide)」⇒
「Authentication」⇒ 「Try Secure Global Desktop Password if Cached」

コマンド行

コマンドオプション:--launch-trycachedpassword 1 | 0

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、アプリケーションサーバーへの認証時に、パスワードキャッシュに格納された SGD パスワードが使用されます。

```
--launch-trycachedpassword 1
```

パスワードの期限が切れたときのアクション

使用法:オプションを選択します。

説明

アプリケーションサーバー上でユーザーのパスワードの有効期限が切れた場合に行なわれるアクション。

次の表に、コマンド行オプションおよび対応する Administration Console のオプションを示します。

Administration Console	コマンド行	説明
認証ダイアログ	dialog	SGD の認証ダイアログを表示します。
期限経過パスワードハンドラ	manual	ターミナルウィンドウを表示します。ユーザーは、このウィンドウを使ってパスワードを変更できます。
起動失敗	none	アクションをそれ以上実行しません。起動失敗として処理します。

Array Manager: 「Application Launch Properties (Array-Wide)」 ⇒ 「If Password Has Expired」

コマンド行

コマンドオプション:--launch-expiredpassword manual | dialog | none

使用法: オプションを指定します。

次の例では、ユーザーはターミナルウィンドウを使ってパスワードを変更できます。

```
--launch-expiredpassword manual
```

スマートカード認証

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

ユーザーがスマートカードによるログインを行えるようにします。スマートカード認証は、Microsoft Windows 2003 アプリケーションサーバーで動作するアプリケーションでのみサポートされます。

Array Manager: 「Application Launch Properties (Array-Wide)」 ⇒ 「Authentication」 ⇒ 「Allow Smart Card Authentication」

コマンド行

コマンドオプション: `--launch-allowsmartcard 1 | 0`

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、ユーザーがスマートカードを使ってログインできるようにします。

```
--launch-allowsmartcard 1
```

ダイアログ表示

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

アプリケーションサーバーの認証ダイアログを表示するタイミングを制御します。チェックボックスは相互に関連しており、3つの考えられるオプションの中から選択できます。

次の表に、コマンド行オプションおよび対応する Administration Console のオプションを示します。

Administration Console	コマンド行	説明
Shift キーを押しながらクリックしたとき (選択) パスワードに問題があるとき (選択)	user	ユーザーが Shift キーを押しながらアプリケーションのリンクをクリックした場合、またはパスワードに問題がある場合に、認証ダイアログを表示します。
Shift キーを押しながらクリックしたとき (選択解除) パスワードに問題があるとき (選択)	system	パスワードに問題がある場合にのみ、認証ダイアログを表示します。
Shift キーを押しながらクリックしたとき (選択解除) パスワードに問題があるとき (選択解除)	none	認証ダイアログを一切表示しません。

Array Manager: 「Application Launch Properties (Array-Wide)」 ⇒ 「Authentication Dialog」

コマンド行

コマンドオプション: `--launch-showauthdialog user | system | none`

使用法: オプションを指定します。

次の例では、Shift キーを押しながらリンクをクリックしてアプリケーションを起動した場合、またはパスワードに問題がある場合に、アプリケーションサーバーの認証ダイアログが表示されます。

```
--launch-showauthdialog user
```

「パスワードを保存」ボックス

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

アプリケーションサーバーの認証ダイアログにある「パスワードを保存」チェックボックスの初期状態と、ユーザーがその状態を変更できるかどうかを制御する 2 つの属性。

ユーザーがこの設定を変更できない場合、アプリケーションサーバーのパスワードキャッシュにパスワードを保存できるかどうかは、「初期チェック済み」設定によって決まります。

Array Manager: 「Application Launch Properties (Array-Wide)」⇒ 「Save Password」

コマンド行

コマンドオプション: `--launch-savepassword-initial checked | cleared`

コマンドオプション: `--launch-savepassword-state enabled | disabled`

使用法: 有効なオプションを指定します。

次の例では、「パスワードを保存」チェックボックスの初期状態が選択されます。ユーザーは、この設定を変更できます。

```
--launch-savepassword-initial checked
--launch-savepassword-state enabled
```

「常にスマートカードを使う」ボックス

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

アプリケーションサーバーの認証ダイアログにある「常にスマートカードを使う」チェックボックスの初期状態と、ユーザーがその状態を変更できるかどうかを制御する 2 つの属性。

ユーザーがこの設定を変更できない場合、常にスマートカード認証を使用するというユーザーの決定がキャッシュされるかどうかは、最初に選択されていた設定によって決まります。

Array Manager: 「Application Launch Properties (Array-Wide)」⇒ 「Always Use Smart Card」

コマンド行

コマンドオプション:--launch-alwayssmartcard-initial checked|cleared

コマンドオプション:--launch-alwayssmartcard-state enabled|disabled

使用法:有効なオプションを指定します。

次の例では、「常にスマートカードを使う」チェックボックスの初期状態が選択されます。ユーザーは、この設定に変更できます。

```
--launch-alwayssmartcard-initial checked
--launch-alwayssmartcard-state enabled
```

表示の遅延

使用法:時間を秒単位でフィールドに入力します。

説明

「アプリケーションの起動」ダイアログをユーザーに表示するまでの遅延時間 (単位は秒)。

Array Manager: 「Application Launch Properties (Array-Wide)」⇒ 「Launch Dialog」

コマンド行

コマンドオプション:--launch-showdialogafter secs

使用法:ここで、secs は遅延時間 (単位は秒) です。

次の例では、「アプリケーションの起動」ダイアログを 2 秒後に表示します。

```
--launch-showdialogafter 2
```

「起動の詳細」 ペイン

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

「アプリケーションの起動」ダイアログの「起動の詳細」領域の初期表示状態、ユーザーがその状態を変更できるかどうか、およびアプリケーションの起動に失敗した場合に「起動の詳細」領域を表示するかどうかを制御する属性。

ユーザーがこの設定を変更できない場合、アプリケーションの起動の詳細が表示されるかどうかは、「デフォルトで表示」の設定によって決まります。

Array Manager: 「Application Launch Properties (Array-Wide)」⇒「Launch Details」

Array Manager: 「Application Launch Properties (Array-Wide)」⇒「If Launch Fails」

コマンド行

コマンドオプション: `--launch-details-initial shown | hidden`

コマンドオプション: `--launch-details-state enabled | disabled`

コマンドオプション: `--launch-details-showonerror 1 | 0`

使用法: 有効なオプションを指定します。

次の例では、「起動の詳細」領域の初期状態は非表示です。ユーザーは、この設定を変更できます。アプリケーションの起動に失敗した場合、「起動の詳細」領域が表示されます。

```
--launch-details-initial hidden
--launch-details-state enabled
--launch-details-showonerror 1
```

「通信」タブ

「通信」タブの設定は、クライアントデバイス、SGD サーバー、およびアプリケーションサーバー間の接続を制御します。また、アプリケーションセッションの再開機能の動作も制御します。

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

このタブには、次のセクションが含まれます。

- ポート

このセクションには、次の設定が含まれます。

- 暗号化されていない接続ポート
- 暗号化されている接続ポート
- アプリケーションセッション

このセクションには、次の設定が含まれます。

- AIP Keepalive の頻度
- ユーザーセッション再開機能のタイムアウト
- 全般的な再開機能のタイムアウト
- 同期

このセクションには、「リソース同期サービス」設定が含まれます。

暗号化されていない接続ポート

使用法:ポート番号をフィールドに入力します。

説明

クライアントデバイスと SGD サーバー間の「暗号化しない」接続で使用する TCP (Transmission Control Protocol) ポート番号。

標準接続のユーザーからの接続を可能にするには、ファイアウォールでこのポートを開きます。標準接続は、SSL (Secure Sockets Layer) を使用しない接続です。

この属性に対する変更を反映するには、アレイ内のすべての SGD サーバーを再起動してください。

デフォルトの TCP ポートは 3144 です。

Array Manager: 「Array Properties (Array-Wide)」⇒ 「Port Numbers (Unencrypted Connections)」

コマンド行

コマンドオプション: `--array-port-unencrypted tcp-port`

使用法:ここで、*tcp-port* は、暗号化しない接続で使用するポート番号です。

次の例では、暗号化しない接続に TCP ポート 3144 が使用されます。

```
--array-port-unencrypted 3144
```

暗号化されている接続ポート

使用法:ポート番号をフィールドに入力します。

説明

クライアントデバイスと SGD サーバー間の「暗号化する」接続で使用する TCP ポート番号。

セキュア (SSL ベースの) 接続のユーザーから SGD への接続を可能にするには、ファイアウォールでこのポートを開きます。

この属性に対する変更を反映するには、アレイ内のすべての SGD サーバーを再起動してください。

デフォルトの TCP ポートは 5307 です。

Array Manager: 「Array Properties (Array-Wide)」⇒ 「Port Numbers (Encrypted Connections)」

コマンド行

コマンドオプション: `--array-port-encrypted tcp-port`

使用法:ここで、*tcp-port* は、暗号化する接続で使用するポート番号です。

次の例では、暗号化する接続に TCP ポート 5307 が使用されます。

```
--array-port-encrypted 5307
```

AIP Keepalive の頻度

使用法:時間を秒単位でフィールドに入力します。

説明

アプリケーションセッションが動作している間に、keepalive メッセージをクライアントデバイスに送信する頻度を決定します。デフォルトの値は 100 秒です。

一部の HTTP プロキシサーバーでは、サーバー上でアクティビティがない場合に、接続が閉じます。keepalive を使用すれば、接続を開いたままにすることができます。

keepalive メッセージを無効にする場合は、この値を 0 に設定します。

この設定は、クライアントドライブマッピングのために SGD クライアントと SGD サーバー間の接続を開いたままにする場合にも使用します。

この属性に対する変更は、すぐに反映されます。

Array Manager: 「Emulator Session Properties (Array-Wide)」 ⇒ 「AIP Keepalive」

コマンド行

コマンドオプション: `--sessions-aipkeepalive secs`

使用法: ここで、`secs` は、keepalive の時間 (単位は秒) です。

次の例は、100 秒ごとに keepalive メッセージがクライアントデバイスに送信されます。

```
--sessions-aipkeepalive 100
```

ユーザーセッション再開機能のタイムアウト

使用法: タイムアウト値を分単位でフィールドに入力します。

説明

ユーザーセッションの動作中に再開できるように設定されているアプリケーションで、SGD への接続が失われた場合に、中断したアプリケーションセッションの再開が保証される時間 (分)。ユーザーがログアウトした場合、アプリケーションセッションは終了します。「[アプリケーションの再開機能](#)」属性を参照してください。

この時間が経過すると、SGD サーバーはセッションを終了します。

アプリケーションの「[アプリケーションの再開機能: タイムアウト](#)」属性を使って、この設定を変更できます。

注 – SGD クライアントが突然終了したためにアプリケーションが中止される場合、タイムアウト時間は 20 分延長されます。

この属性に対する変更は、すぐに反映されます。

Array Manager: 「Emulator Session Properties (Array-Wide)」 ⇒ 「Resumability Timeout」 ⇒ 「Webtop Session」

コマンド行

コマンドオプション: `--sessions-timeout-session mins`

使用法:ここで、*mins* はタイムアウト値 (単位は分) です。

次の例では、アプリケーションセッションは 1440 分間 (24 時間) 再開可能です。

```
--sessions-timeout-session 1440
```

全般的な再開機能のタイムアウト

使用法:タイムアウト値を分単位でフィールドに入力します。

説明

一般的に再開可能であると設定されているアプリケーションで、ユーザーがログアウトするか、SGD への接続が失われた場合に、中断したアプリケーションセッションの再開が保証される時間 (単位は分)。「[アプリケーションの再開機能](#)」属性を参照してください。

この時間が経過すると、SGD サーバーはセッションを終了します。

アプリケーションの「[アプリケーションの再開機能: タイムアウト](#)」属性を使って、この設定を変更できます。

注 – SGD クライアントが突然終了したためにアプリケーションが中止される場合、タイムアウト時間は 20 分延長されます。

この属性に対する変更は、すぐに反映されます。

Array Manager: 「Emulator Session Properties (Array-Wide)」⇒ 「Resumability Timeout」⇒ 「Always」

コマンド行

コマンドオプション: `--sessions-timeout-always mins`

使用法:ここで、*mins* はタイムアウト値 (単位は分) です。

次の例では、アプリケーションセッションは 11500 分間再開可能です。

```
--sessions-timeout-always 11500
```

リソース同期サービス

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

アレイのリソース複製を有効にするかどうかを設定します。

有効にした場合、アレイ内の各 SGD サーバーの「[毎日のリソース同期時刻](#)」によって決められた時刻に、同期が開始されます。

リソースの同期はデフォルトで有効に設定されています。

この属性に対する変更は、すぐに反映されます。

Array Manager: 「Array Properties (Array-Wide)」 ⇒ 「Enable Resource Synchronization」

コマンド行

コマンドオプション: `--array-resourcesync 1 | 0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、アレイのリソース同期を無効にします。

```
--array-resourcesync 0
```

「クライアントデバイス」タブ

「クライアントデバイス」タブに表示される属性は、ユーザーのクライアントデバイスの設定です。このタブは、SGD を介して表示されるアプリケーションのクライアントデバイス機能の使用を制御します。

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

このタブには、次のセクションが含まれます。

- クライアントドライブマッピング

このセクションには、次の設定が含まれます。

- [クライアントドライブマッピング](#)

- WINS (Windows インターネットネームサービス)
- フォールバックドライブの検索
- オーディオ
このセクションには、次の設定が含まれます。
 - Windows オーディオ
 - Unix オーディオ
- その他の機能
このセクションには、次の設定が含まれます。
 - スマートカード
 - シリアルポートマッピング
 - コピー&ペースト
 - クライアントの Clipboard Security Level
 - タイムゾーンマップファイル
- プロファイルの編集
このセクションには、「編集」設定が含まれます。

クライアントドライブマッピング

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

アレイのクライアントドライブマッピング (CDM) を有効にするかどうかを設定します。

クライアントドライブマッピングを使用するには、Sun Secure Global Desktop 拡張モジュール (SGD 拡張モジュール) がアプリケーションサーバーにインストールされ、稼働している必要があります。

ドライブマッピングを有効にしても、アレイのすべての SGD サーバーを再起動しないと、CDM サービスを利用できるようになりません。アレイを再起動せずに、手動で CDM サービスを開始するには、アレイ内のすべての SGD サーバーで `tarantella start cdm` コマンドを実行します。

ドライブマッピングを無効にしても、アレイ内のすべての SGD サーバーを再起動しないと、CDM プロセスは停止しません。アレイを再起動せずに、手動で CDM サービスを停止するには、アレイ内のすべての SGD サーバーで `tarantella stop cdm` コマンドを実行します。

この属性に対する変更が反映されるのは、新規ユーザーセッションだけです。

Array Manager: 「Array Properties (Array-Wide)」⇒「Client Drive Mapping」⇒
「Let Users Access Client Drives」

コマンド行

コマンドオプション:--array-cdm 1 | 0

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例は、アレイの CDM を有効にします。

```
--array-cdm 1
```

WINS (Windows インターネットネームサービス)

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

クライアントドライブアクセスのパフォーマンスを向上させるために、WINS (Windows インターネットネームサービス) を有効にするかどうかを設定します。WINS を使用しないと、Microsoft Windows ネットワーキングの既知の問題が原因で、パフォーマンスが制限される場合があります。

WINS サービスは、SGD サーバー上の UDP (User Datagram Protocol) ポート 137 を使用します。

次の場合にのみ、WINS を有効にしてください。

- 使用する Microsoft Windows アプリケーションサーバーが、アレイ内の SGD サーバーと同じサブネット上にある
- 使用する Microsoft Windows アプリケーションサーバーで、アレイ内の SGD サーバーが WINS サーバーとして表示される

この属性に対する変更が SGD サーバーに反映されるのは、サーバーの次回起動時です。

Array Manager: 「Array Properties (Array-Wide)」⇒「Client Drive Mapping」⇒
「Use WINS for Better Performance」

コマンド行

コマンドオプション:--array-cdm-wins 1 | 0

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、アレイの WINS サービスを無効にします。

```
--array-cdm-wins 0
```

フォールバックドライブの検索

使用法:「開始」リストからドライブ文字を選択して、「方向」オプションを選択します。

説明

ドライブ文字がすでに使用されているために、設定されたドライブ文字を使ってマッピングできないクライアントドライブで使用されます。この属性は、検索を開始するドライブ文字および検索方向を指定します。クライアントドライブのマッピングには、最初の未使用のドライブ文字が使用されます。

「開始」リストを使用して、検索を開始するドライブ文字を指定します。「方向」オプションは、アルファベット検索を降順に実行するか、昇順に実行するかを指定します。

この属性に対する変更は、新しいユーザーセッションに反映されます。

Array Manager: 「Array Properties (Array-Wide)」⇒ 「Client Drive Mapping」⇒ 「Fallback Drive」

コマンド行

コマンドオプション:--array-cdm-fallbackdrive *letter-direction*

使用法:ここで、*letter-direction* は、検索を開始するドライブ文字および検索方向です。

指定可能な値は、[a-zA-Z][+-] の形式になります。たとえば、「v-」は、ドライブ V からアルファベットを降順で検索します。「f+」はドライブ F から昇順で検索します。ドライブ文字に、大文字と小文字の区別はありません。

CDM が有効な場合、デフォルトでは、ドライブ V から昇順に検索が実行されます。

次の例では、検索がドライブ T から昇順に実行されます。

```
--array-cdm-fallbackdrive t-
```

Windows オーディオ

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

アレイの Windows オーディオサービスを使用可能にするかどうかを設定します。

オーディオは、Microsoft Windows 2003 アプリケーションサーバーで動作するアプリケーションでのみ使用できます。アプリケーションサーバーでは、オーディオのリダイレクトも有効にする必要があります。

この属性に対する変更が反映されるのは、新規ユーザーセッションだけです。

Array Manager: 「Array Properties (Array-Wide)」⇒「Audio」⇒「Enable Windows Audio Service」

コマンド行

コマンドオプション:--array-audio 1 | 0

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、アレイの Windows オーディオサービスを無効にします。

```
--array-audio 0
```

Windows オーディオの音質

Array Manager: 「Array Properties (Array-Wide)」⇒「Audio」⇒「Windows Audio Sound Quality」

使用法:オプションを選択します。

説明

オーディオデータのサンプリングレート。

オーディオの音質を調整すると、送信されるオーディオデータ量が増加または減少します。

デフォルトでは、「中音質オーディオ」が使用されます。

次のサンプリングレートがあります。

- 「低音質オーディオ」 8 kHz。
- 「中音質オーディオ」 22.05 kHz。
- 「高音質オーディオ」 「中音質オーディオ」と同じ。これは、ターミナルサービスの制限です。

コマンド行

コマンドオプション: `--array-audio-quality low | medium | high`

使用法:オーディオの音質を指定します。

次の例では、Windows オーディオサービスに中音質オーディオを指定します。

```
--array-audio-quality medium
```

Unix オーディオ

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

アレイの UNIX オーディオサービスを使用可能にするかどうかを設定します。

Unix オーディオは X アプリケーションでのみ使用できます。SGD 拡張モジュールのオーディオモジュールがアプリケーションサーバーにインストールされ、稼働している必要があります。

この属性に対する変更が反映されるのは、新規ユーザーセッションだけです。

Array Manager: 「Array Properties (Array-Wide)」 ⇒ 「Audio」 ⇒ 「Enable UNIX Audio Service」

コマンド行

コマンドオプション: `--array-unixaudio 1 | 0`

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、アレイの UNIX オーディオサービスを無効にします。

```
--array-unixaudio 0
```

Unix オーディオの音質

使用法:オプションを選択します。

説明

オーディオデータのサンプリングレート。

オーディオの音質を調整すると、送信されるオーディオデータ量が増加または減少します。

デフォルトでは、「中音質オーディオ」が使用されます。

次のサンプリングレートがあります。

- 「低音質オーディオ」 8 kHz
- 「中音質オーディオ」 22.05 kHz
- 「高音質オーディオ」 44.1 kHz

Array Manager: 「Array Properties (Array-Wide)」 ⇒ 「Audio」 ⇒ 「UNIX Audio Sound Quality」

コマンド行

コマンドオプション: `--array-unixaudio-quality low | medium | high`

使用法:オーディオの音質を指定します。

次の例では、UNIX オーディオサービスに中音質オーディオを指定します。

```
--array-unixaudio-quality medium
```

スマートカード

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

アレイのスマートカードサービスを使用可能にするかどうかを設定します。

スマートカードは、Microsoft Windows 2003 アプリケーションサーバーで動作するアプリケーションでのみ使用できます。

この属性に対する変更が反映されるのは、新規ユーザーセッションだけです。

Array Manager: 「Array Properties (Array-Wide)」⇒「Smart Card」⇒「Enable Smart Card Services」

コマンド行

コマンドオプション: `--array-scard 1 | 0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例は、アレイのスマートカードサービスを有効にします。

```
--array-scard 1
```

シリアルポートマッピング

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

アレイのシリアルポートにアクセス可能にするかどうかを設定します。

デフォルトでは、シリアルポートへのアクセスは有効です。

シリアルポートへのアクセスをユーザーごとに設定する場合は、組織、組織単位、またはユーザープロファイルオブジェクトの「[シリアルポートマッピング](#)」属性を使用します。

この属性に対する変更が反映されるのは、新規ユーザーセッションだけです。

Array Manager: 「Array Properties (Array-Wide)」⇒「Serial Port」⇒「Enable Serial Port Mapping」

コマンド行

コマンドオプション: `--array-serialport 1 | 0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例は、アレイのシリアルポートへのアクセスを有効にします。

```
--array-serialport 1
```

コピー&ペースト

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

Windows および X アプリケーションセッションのコピー&ペースト操作を、アレイで使用可能にするかどうかを設定します。

デフォルトでは、コピー&ペーストは使用可能になっています。

コピー&ペースト操作をユーザーごとに設定する場合は、組織、組織単位、またはユーザープロファイルオブジェクトの「**コピー&ペースト**」属性を使用します。

この属性に対する変更が反映されるのは、新規アプリケーションセッションだけです。

Array Manager: 「Array Properties (Array-Wide)」⇒「Clipboard」⇒「Enable Copy and Paste」

コマンド行

コマンドオプション:--array-clipboard-enabled 1 | 0

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、Windows および X アプリケーションセッションでコピー&ペーストを有効にします。

```
--array-clipboard-enabled 1
```

クライアントの Clipboard Security Level

使用法:フィールドに数値を入力します。

説明

SGD クライアントのセキュリティーレベル。

Windows または X アプリケーションセッションおよびクライアントドライブ上で実行中のアプリケーション間で、コピー&ペースト操作の制御に使用します。

セキュリティーレベルには、任意の正の整数を指定できます。数値が大きくなるほど、セキュリティーレベルも高くなります。デフォルトのセキュリティーレベルは 3 です。

この属性に対する変更が反映されるのは、新規アプリケーションセッションだけです。

Array Manager: 「Array Properties (Array-Wide)」⇒「Clipboard」⇒「Client Security Level」

コマンド行

コマンドオプション: `--array-clipboard-clientlevel num`

使用法:ここで、*num* は、セキュリティーレベルを指定する正の整数です。

次の例では、クライアントのクリップボードセキュリティーレベルに 3 を指定します。

```
--array-clipboard-clientlevel 3
```

タイムゾーンマップファイル

使用法:ファイル名をフィールドに入力します。

説明

UNIX クライアントデバイスと Windows アプリケーションサーバーのタイムゾーン名との間のマッピングを含むファイル。

コマンド行

コマンドオプション: `--xpe-tzmapfile filename`

使用法:ここで、*filename* は、タイムゾーンマップファイルのパスです。

次の例では、タイムゾーンマップファイルが指定されます。

```
--xpe-tzmapfile "%INSTALLDIR%/etc/data/timezonemap.txt"
```

編集

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

SGD クライアントで使う独自のプロファイルの編集を、ユーザーに許可するかどうかを設定します。

デフォルトでは、プロファイル編集は有効になっています。

プロファイルの編集を禁止すると、それは SGD 管理者を含む全ユーザーについて禁止したことになります。その場合でも、SGD 管理者は Profile Editor アプリケーションを使用してプロファイルを作成および編集できます。

プロファイル編集をユーザーごとに設定する場合は、組織、組織単位、またはユーザープロファイルオブジェクトの「[クライアントプロファイルの編集](#)」属性を使用します。

この属性に対する変更が反映されるのは、新規ユーザーセッションだけです。

Array Manager: 「Array Properties (Array-Wide)」⇒「Profile Editing」⇒「Enable User Profile Editing」

コマンド行

コマンドオプション:--array-editprofile 1 | 0

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例は、アレイのユーザープロファイル編集を有効にします。

```
--array-editprofile 1
```

「印刷」タブ

「印刷」タブに表示される属性は、Microsoft RDP Windows プロトコルを使用する Windows アプリケーションからの印刷を制御します。このタブの設定は、デフォルトの設定で、組織、組織単位、またはユーザープロファイルオブジェクトの「[クライアント印刷: 上書き \(--userprintingconfig\)](#)」属性で上書きできます。

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

クライアント印刷

使用法: オプションを選択します。

説明

ユーザーが Windows アプリケーションから印刷できるクライアントプリンタを制御します。

デフォルトでは、すべてのクライアントプリンタに出力できます。

「プリンタなし」オプションを選択した場合でも、SGD PDF プリンタは使用できます。

この属性に対する変更は、新しいユーザーセッションに反映されます。

印刷をクライアントのデフォルトプリンタのみで実行するように SGD が設定されている場合に、別のプリンタで印刷したいときは、SGD からログアウトします。次に、デフォルトのプリンタを変更して、SGD に再度ログインします。

Array Manager: 「Printing Properties (Array-Wide)」⇒「Printing」

コマンド行

コマンドオプション: `--printing-mapprinters 2 | 1 | 0`

使用法: 次のオプションのいずれかを指定します。

- **2** すべてのクライアントプリンタへの印刷をユーザーに許可します。
- **1** クライアントのデフォルトプリンタへの印刷をユーザーに許可します。
- **0** 使用可能なクライアントプリンタは存在しません。

次の例は、ユーザーが Windows アプリケーションからすべてのクライアントプリンタに印刷できるようにします。

```
--printing-mapprinters 2
```

Universal PDF プリンタ

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

ユーザーが SGD Universal PDF プリンタを使用して Windows アプリケーションから印刷することを可能にします。

ユーザーが Universal PDF プリンタに印刷する場合、印刷ジョブが PDF ファイルに変換され、ユーザーのクライアントデバイス上で印刷されます。

デフォルトでは、この機能は使用可能になっています。

この属性に対する変更は、新しいユーザーセッションに反映されます。

Array Manager: 「Printing Properties (Array-Wide)」⇒「PDF Printing」⇒「Let Users Print to a PDF Printer」

コマンド行

コマンドオプション:--printing-pdfenabled 1 | 0

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、Windows アプリケーションから SGD Universal PDF プリンタへの印刷を可能にします。

```
--printing-pdfenabled 1
```

Universal PDF プリンタをデフォルトにする

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

Windows アプリケーションから印刷する場合に、SGD Universal PDF プリンタをクライアントのデフォルトプリンタとして設定します。

ユーザーが Universal PDF プリンタに印刷する場合、印刷ジョブが PDF ファイルに変換され、ユーザーのクライアントデバイス上で印刷されます。

この属性は、Universal PDF プリンタが有効な場合にのみ使用できます。

Universal PDF プリンタはデフォルトプリンタではありません。

この属性に対する変更は、新しいユーザーセッションに反映されます。

Array Manager: 「Printing Properties (Array-Wide)」 ⇒ 「PDF Printing」 ⇒ 「Make PDF Printer the Default for Windows 2000/3」

コマンド行

コマンドオプション: `--printing-pdfisdefault 1 | 0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、SGD Universal PDF プリンタがクライアントのデフォルトプリンタに設定されます。

```
--printing-pdfisdefault 1
```

Universal PDF ビューア

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

ユーザーが SGD Universal PDF ビューアプリンタを使用して Windows アプリケーションから印刷することを可能にします。

ユーザーが Universal PDF ビューアプリンタに印刷する場合、印刷ジョブが PDF ファイルに変換されて、ユーザーのクライアントデバイス上で表示、保存、または印刷を実行できます。

デフォルトでは、この設定は有効になっています。

この属性に対する変更は、新しいユーザーセッションに反映されます。

Array Manager: 「Printing Properties (Array-Wide)」 ⇒ 「PDF Printing」 ⇒ 「Let Users Print to a PDF Local File」

コマンド行

コマンドオプション: `--printing-pdfviewerenabled 1 | 0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、Windows アプリケーションから SGD Universal PDF ビューアプリンタへの印刷を可能にします。

```
--printing-pdfviewerenabled 1
```

Universal PDF ビューアをデフォルトにする

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

Windows アプリケーションから印刷するときに、SGD Universal PDF ビューアプリンタをクライアントのデフォルトプリンタとして設定します。

ユーザーが Universal PDF ビューアプリンタに印刷する場合、印刷ジョブが PDF ファイルに変換されて、ユーザーのクライアントデバイス上で表示、保存、または印刷を実行できます。

この属性は、Universal PDF ビューアが有効な場合にのみ使用できます。

Universal PDF ビューアプリンタはデフォルトプリンタではありません。

この属性に対する変更は、新しいユーザーセッションに反映されます。

Array Manager: 「Printing Properties (Array-Wide)」⇒「PDF Printing」⇒「Make PDF File Printer the Default for Windows 2000/3」

コマンド行

```
コマンドオプション:--printing-pdfviewerisdefault 1 | 0
```

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、SGD Universal PDF ビューアプリンタがクライアントのデフォルトプリンタに設定されます。

```
--printing-pdfviewerisdefault 0
```

Postscript プリントドライバ

使用法:プリンタドライバ名をフィールドに入力します。

説明

SGD の PDF 印刷に使用するプリンタドライバの名前。このプリンタドライバは、SGD で使用するすべての Windows アプリケーションサーバーにインストールされている必要があります。

PostScript プリンタドライバを指定してください。

デフォルトは、HP Color LaserJet 8500 PS です。

プリンタドライバの名前は、Windows アプリケーションサーバーにインストールされているプリンタドライバと正確に一致する必要があります。特に、大文字と空白文字に注意してください。`install-dir/etc/data/default.printerinfo.txt` ファイルには、製造元別に並べられた一般的なプリンタドライバ名のリストが含まれています。エラーを防ぐために、このファイルからドライバ名をコピー&ペーストしてください。

この属性に対する変更は、新しいユーザーセッションに反映されます。

Array Manager: 「Printing Properties (Array-Wide)」⇒「PDF Printing」⇒「Driver Name」

コマンド行

コマンドオプション: `--printing-pdfdriver driver_name`

使用法:ここで、`driver_name` は PDF プリンタのドライバ名です。

次の例では、HP Laserjet 4000 ドライバが PDF 印刷に使用されます。

```
--printing-pdfdriver "HP Laserjet 4000 Series PS"
```

「パフォーマンス」タブ

「パフォーマンス」タブの属性は、次の負荷分散設定に使用します。

- アプリケーションセッションのホストに使用する SGD サーバーを選択する方法
- アプリケーションのホストに使用するアプリケーションサーバーを選択する方法

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

属性に対する変更は、すぐに反映されます。

アプリケーションセッションの負荷分散

使用法:オプションを選択します。

説明

アプリケーションの起動時に、アプリケーションセッションをホストするアレイ内の SGD サーバーの選択に使用されるアルゴリズム。言い換えると、ユーザーがアプリケーションを起動したときに、プロトコルエンジンの実行場所の選択に使用する方法。

ユーザーセッションをホストするアレイ内の SGD サーバーを選択する場合は、「ユーザーセッションをホストするサーバー」を選択します。

Array Manager: 「Load Balancing Properties (Array-Wide)」⇒「Emulator Sessions」⇒「Use Array Member With」

コマンド行

コマンドオプション: `--sessions-loadbalancing-algorithm algorithm`

使用法:ここで、*algorithm* は、アプリケーションセッションで使用する負荷分散アルゴリズムです。

次に示すアルゴリズムを使用できます。

- ユーザーセッションをホストするサーバー
.../_beans/com.sco.tta.server.loadbalancing.tier2.LocalLoadBalancingPolicy
- 最小 CPU 負荷
.../_beans/com.sco.tta.server.loadbalancing.tier2.CpuLoadBalancingPolicy
- 最少アプリケーションセッション数
.../_beans/com.sco.tta.server.loadbalancing.tier2.SessionLoadBalancingPolicy

次の例では、アプリケーションセッションのホストに使用するユーザーセッションをホストする SGD サーバーを指定します。

```
--sessions-loadbalancing-algorithm \  
.../_beans/com.sco.tta.server.loadbalancing.tier2.LocalLoadBalancingPolicy
```


アプリケーションの負荷分散

使用法:オプションを選択します。

説明

アプリケーションの実行にもっとも適したアプリケーションサーバーを選択するために、SGD が使用するデフォルトアルゴリズム。アプリケーションサーバーは、アプリケーションオブジェクトの「ホストしているアプリケーションサーバー」タブで定義されたサーバーから選択されます。

この属性は、アプリケーションオブジェクトの「[アプリケーションの負荷分散](#)」属性の値が「グローバル設定の上書き」に設定されていない場合にのみ使用されます。

次のいずれかの設定を選択します。

- 「最大空きメモリ」。もっとも空きメモリが大きいアプリケーションサーバーを選択します。
- 「最小 CPU 負荷」。もっとも CPU のアイドル時間が長いアプリケーションサーバーを選択します。
- 「最少アプリケーション数」。SGDを通じて実行されるアプリケーションセッションがもっとも少ないアプリケーションサーバーを選択します。これは、デフォルト設定です。

注 - 「最大空きメモリ」および「最小 CPU 負荷」のアルゴリズムを使用するには、アプリケーションサーバーに SGD 拡張モジュールをインストールする必要があります。

Array Manager: 「Load Balancing Properties (Array-Wide)」⇒「Applications」⇒「Use Application Server With」

コマンド行

コマンドオプション:--launch-loadbalancing-algorithm cpu | memory | sessions

使用法:有効なオプションを指定します。

次の例では、アプリケーションセッションがもっとも少ないアプリケーションサーバーが、アプリケーションの実行に使用されます。

```
--launch-loadbalancing-algorithm sessions
```

「セキュリティ」タブ

「セキュリティ」タブ内の属性は、アレイ内のすべての SGD サーバーに適用されるグローバルセキュリティ設定です。

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

新規パスワード暗号キー

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

パスワードキャッシュ用の新規暗号キーを、SGD サーバーの再起動時に生成するかどうかを設定します。

新しい暗号キーが生成された場合、既存のパスワードキャッシュはその新しいキーを使用して暗号化され、キャッシュにそのまま残ります。

Array Manager: 「Security Properties (Array-Wide)」⇒「Password Cache」⇒「Generate New Encryption Key on Restart」

コマンド行

コマンドオプション:`--security-newkeyonrestart 1 | 0`

使用法:1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、パスワードキャッシュ用の新規暗号キーは、SGD サーバーの再起動時に生成されません。

```
--security-newkeyonrestart 0
```

印刷ネームマッピングのタイムアウト

使用法:タイムアウト値を秒単位でフィールドに入力します。

説明

印刷ネームマッピングテーブルのエントリを保持する期間。このテーブルを使って、ユーザーがアプリケーションで印刷してから、印刷ジョブを失うことなくアプリケーションを終了できるようにします。

アプリケーションサーバー上の最後のアプリケーションをユーザーが閉じた時点から、タイマーの計時が始まります。

タイムアウト値には、アプリケーションでプリンタを選択してからプリンタが応答するまでの最大遅延時間よりも長い値を設定します。

この値を変更した場合、既存の終了タイムアウトはすべてリセットされます。この属性に対する変更は、すぐに反映されます。

テーブルをフラッシュするには、0 を入力して、「適用」をクリックします。次に、タイムアウトを必要な値に設定できます。

テーブルを表示するには、`tarantella print status --namemapping` コマンドを使用します。

Array Manager: 「Security Properties (Array-Wide)」⇒「Print Name Mapping」⇒「Expire After」

コマンド行

コマンドオプション: `--security-printmappings-timeout seconds`

使用法: ここで、*seconds* はタイムアウト値 (単位は秒) です。

次の例では、印刷ネームマッピングテーブルは 1800 秒間 (30 分間) 保持されます。

```
--security-printmappings-timeout 1800
```

接続定義

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

SGD へのユーザーのログイン時に、[接続](#)属性を記録するかどうかを設定します。

ユーザープロファイル、組織単位、または組織オブジェクトの「接続」属性を使用する場合、このボックスを選択します。コマンド行オプションの場合は 1 を設定します。

SGD セキュリティーサービスが有効でない場合、このチェックボックスの選択を解除します。

SGD セキュリティーサービスが有効な場合には、このチェックボックスが選択されていて、かつほかの接続が定義されていないかぎり、セキュア接続が使用されます。

このチェックボックスの選択を解除すると、ユーザーはより迅速にログインできます。

この属性に対する変更は、すぐに反映されます。

Array Manager: 「Security Properties (Array-Wide)」⇒「Connection Types」⇒「Apply When Users Log In」

コマンド行

コマンドオプション: `--security-applyconnections 1 | 0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、SGD ログイン時の接続チェックを無効にします。

```
--security-applyconnections 0
```

X ディスプレイの X 認証

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

X 認証を使用してすべての SGD X ディスプレイのセキュリティを向上させるかどうかを指定します。この属性を設定すると、承認されていないユーザーが X ディスプレイにアクセスすることを防ぐことができます。

デフォルトでは、X 認証が有効になっています。

X 認証を使用するには、アプリケーションサーバーに `xauth` がインストールされている必要があります。

X 認証が有効になっている場合は、SGD の標準の場所で `xauth` バイナリが検査されます。バイナリが標準以外の場所にある場合は、追加の設定が必要になることがあります。

この属性に対する変更は、すぐに反映されます。

注 - この設定によりセキュリティが向上するのは、SGD サーバーとアプリケーションサーバーの間にある X ディスプレイだけです。

Array Manager: 「Security Properties (Array-Wide)」⇒「X Displays」⇒「Use X Authorization (xauth)」

コマンド行

コマンドオプション: `--security-xsecurity 1 | 0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、X 認証を有効にします。

```
--security-xsecurity 1
```

「監視」タブ

「監視」タブの設定は、システムメッセージログフィルタの設定や、課金サービスの有効化で使用されます。

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

ログフィルタ

使用法: フィルタ定義をフィールドに入力します。新規エントリを追加するには、リターンキーを押します。

説明

この属性は、ログに記録する診断メッセージ、およびログメッセージの出力先のファイルまたはハンドラを指定します。

この属性には複数の値を指定できます。各ログフィルタの形式は

`component/subcomponent/severity:destination` です。

複数のコンポーネント、サブコンポーネント、および重要度に一致させるには、ワイルドカード「*」を使用します。

有効な出力先は、ファイル名またはプラグインログハンドラの名前です。

ファイル名に、プレースホルダ %%PID%% を使用できます。%%PID%% には、プロセス ID が代入されます。

この属性に対する変更は、すぐに反映されます。

使用可能なログフィルタの詳細および設定方法については、『Sun Secure Global Desktop 管理者ガイド』を参照してください。

Array Manager: 「Array Properties (Array-Wide)」⇒「Log Filter」

コマンド行

コマンドオプション: `--array-logfilter filter...`

使用法:ここで、*filter...* は、ログフィルタ定義のリストです。各フィルタ定義は、空白文字で区切ります。フィルタにワイルドカード「*」を使用する場合は、シェルによって展開されないよう、フィルタを引用符で囲みます。

次の例では、SGD サーバーの警告とエラーメッセージをすべて .log ファイルに格納するログフィルタを指定します。

```
--array-logfilter */*/*error:jserver%%PID%%_error.log
```

課金サービス

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

アレイで請求処理サービスを使用可能にするかどうかを設定します。

このサービスは、アレイ内の SGD サーバーのディスク容量を大量に使用する場合があります。

使用可能にした場合、`tarantella query billing` コマンドを使って、請求処理のログを分析できます。

課金サービスを開始するには、SGD サーバーを再起動する必要があります。

Array Manager: 「Array Properties (Array-Wide)」⇒「Enable Billing Services」

コマンド行

コマンドオプション: `--array-billingservices 1 | 0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、アレイの課金サービスを無効にします。

```
--array-billingservices 0
```

「ライセンス」タブ

「ライセンス」タブは、次の 2 つのセクションで構成されます。

- 「新規ライセンスキー」フィールドでは、新規 SGD ライセンスキーを追加できます
- 「ライセンス」テーブルは、アレイのライセンスステータスの概要を表示します

新規ライセンスキー

使用法: ライセンスキーをフィールドに入力します。

説明

ライセンスキーを追加するには、空のフィールドにキーを入力またはペーストします。「追加」ボタンをクリックして、キーを検証および有効にします。

ライセンスキーを追加すると、「ライセンス」テーブル内の情報が更新されます。

無効なライセンスキーが入力されると、検証エラーメッセージが表示されます。

Array Manager: 「Licenses Properties (Array-Wide)」⇒「License Keys」

「ライセンス」テーブル

「ライセンス」テーブルは、SGD アレイのユーザーライセンスとアプリケーションライセンスの数を表示します。現在のライセンス使用状況も表示します。

ライセンスキーの数は、テーブル上部の括弧内に示されます。

Array Manager: 「Licenses Properties (Array-Wide)」⇒「License Summary」

「ライセンス」テーブルには、次の列が含まれます。

- キー
- ユーザー
- アプリケーション
- 負荷管理

キー

SGD アレイ用にインストールされているライセンスキーのリストを表示します。

ライセンスキーを削除するには、「ライセンス」テーブル内の「削除」リンクをクリックします。

ライセンスキーを削除すると、「ライセンス」テーブル内の情報が更新されます。

すべてのライセンスキーを削除すると、ソフトウェアをインストールした時期に応じて、評価モードまたは期限切れ評価モードに戻ります。

期限切れ評価モードになると、SGD サーバーにログインできなくなります。

期限切れ評価モードのサーバーにライセンスを付与するには、[tarantella license add](#) コマンドを使用して有効なライセンスキーを追加するか、またはすでにフルライセンスが付与されているアレイにそのサーバーを連結する必要があります。

ユーザー

各ライセンスキーのユーザーライセンス数を表示します。

「ユーザー」列内のサブ列は、標準のユーザーライセンスおよびセキュリティー保護されたユーザーライセンスの数を示します。

使用中のユーザーライセンス数は、テーブルの「現在の使用」行に示されます。

ユーザーライセンスは、ユーザーのログイン時に使用され、ログアウト時に開放されます。

アプリケーション

各ライセンスキーのアプリケーションライセンス数を表示します。

「アプリケーション」列内のサブ列は、各アプリケーションタイプ（Windows、Unix、AS/400、およびメインフレーム）のライセンス数を示します。

使用中のアプリケーションライセンス数は、テーブルの「現在の使用」行に示されます。

アプリケーションライセンスは、ユーザーが各アプリケーションタイプのアプリケーションを最初に起動するときに使用されます。アプリケーションライセンスは、同タイプの最後のアプリケーションが終了すると、解放されます。同じユーザーが同タイプのアプリケーションをさらに起動しても、追加のライセンスは使用されません。中断しているアプリケーションは、ライセンスを使用します。

負荷管理

各ライセンスキーの負荷管理が有効かどうかを示します。

コマンド行

ライセンスキーを追加/削除したり、ライセンスステータスやライセンス使用状況を表示したりするには、コマンド行で `tarantella license` コマンドを使用します。[251 ページの「tarantella license コマンド」](#)を参照してください。

Secure Global Desktop サーバー設定

Secure Global Desktop サーバーとは、SGD ソフトウェアを実行するマシンを指します。1 台以上のほかのサーバーを追加すると、アレイを作成できます。アレイでは、サーバー間で負荷を分散させることにより、信頼性を高めることができます。アレイには、設定データの複製を行う 1 台の「プライマリサーバー」があります。アレイ内のほかのサーバーは、「セカンダリサーバー」と呼ばれます。

「Secure Global Desktop サーバー設定」タブを使用して、SGD サーバーアレイを設定したり、特定の SGD サーバーを設定したりします。

この章の内容は、次のとおりです。

- 60 ページの「「Secure Global Desktop サーバー」タブ」
- 61 ページの「「一般」タブ」
- 64 ページの「「セキュリティ」タブ」
- 66 ページの「「パフォーマンス」タブ」
- 71 ページの「「プロトコルエンジン」タブ」
- 71 ページの「「文字型プロトコルエンジン」タブ」
- 73 ページの「「X プロトコルエンジン」タブ」
- 79 ページの「「実行プロトコルエンジン」タブ」
- 82 ページの「「チャネルプロトコルエンジン」タブ」
- 84 ページの「「印刷プロトコルエンジン」タブ」
- 86 ページの「「オーディオプロトコルエンジン」タブ」
- 87 ページの「「スマートカードプロトコルエンジン」タブ」
- 88 ページの「「ユーザーセッション」タブ」
- 89 ページの「「アプリケーションセッション」タブ」

「Secure Global Desktop サーバー」タブ

「Secure Global Desktop サーバー」タブには、各サーバーがホストしているユーザーセッションやアプリケーションセッションの数を含み、アレイ内の各 SGD サーバーの現在のステータスの概要が表示されます。

SGD サーバーの情報は、「Secure Global Desktop サーバーのリスト」テーブルに表示されます。

「Secure Global Desktop サーバーのリスト」テーブル内のサーバーの名前をクリックすると、一連のタブが表示されます。これらのタブは、サーバーの設定を表示したり変更したりするために使用されます。

次のタブが表示されます。

- 「一般」タブ
- 「セキュリティ」タブ
- 「パフォーマンス」タブ
- 「プロトコルエンジン」タブ
- 「ユーザーセッション」タブ
- 「アプリケーションセッション」タブ

「Secure Global Desktop サーバーのリスト」テーブル

このテーブルの最上部に、アレイ内の SGD サーバーの数が括弧で囲まれて表示されます。

「サーバーの追加」ボタンは、アレイに SGD サーバーを追加します。この SGD サーバーは、セカンダリサーバーとして追加されます。

このテーブルでセカンダリサーバーを選択し、「プライマリ化」ボタンをクリックすると、選択したサーバーが SGD アレイ内のプライマリサーバーになります。

「サーバーの削除」ボタンは、選択された SGD サーバーをアレイから削除します。選択された SGD サーバーは、セカンダリサーバーである必要があります。

「再読み込み」ボタンをクリックすると、「Secure Global Desktop サーバーのリスト」テーブルが更新されます。

「Secure Global Desktop サーバーのリスト」テーブルには、アレイ内の各 SGD サーバーに関する次の情報が含まれています。

- 「サーバー」。SGD サーバーのドメインネームシステム (DNS) 名。
- 「タイプ」。サーバーがプライマリサーバーまたはセカンダリサーバーのどちらであるかを示します。
- 「ステータス」。サーバーのステータス。たとえば、サーバーが実行中かどうかを示します。
- 「起動時刻」。サーバーが最後に起動された時刻。
- 「接続を受け入れる」。サーバーが標準接続、セキュア接続、または両方のタイプの接続を受け入れるかどうかを示します。セキュア接続では、SSL (Secure Sockets Layer) を使用してデータを暗号化します。標準接続では、データは暗号化されません。
- 「ユーザーセッション」。このサーバー上のユーザーセッションの現在の数。標準接続およびセキュア接続を使用しているユーザーセッションの数が表示されます。
- 「アプリケーションセッション」。このサーバー上のアプリケーションセッション (現在中断しているものも含める) の現在の数。グラフィカルアプリケーションセッションおよび端末ベースのアプリケーションセッションの数が表示されます。

コマンド行

コマンド行で `tarantella array` コマンドを使用して、SGD アレイにサーバーを追加したり、SGD アレイからサーバーを削除したり、セカンダリサーバーをプライマリサーバーにしたり、SGD アレイに関する情報を表示したりします。[234 ページの「tarantella array コマンド」](#)を参照してください。

「一般」タブ

「一般」タブに表示される属性は、特定の SGD サーバー用の一般的な設定です。

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

属性に対する変更は、すぐに反映されます。

外部 DNS 名

使用法:フィールドにこのサーバーの外部 DNS 名を入力します。それぞれの名前定義のあとで、リターンキーを押します。

説明

このサーバーの外部 DNS 名。

この設定を使用すると、クライアントの IP アドレスに応じて、複数の異なる名前を使用できます。

ファイアウォールの内側と外側など、このサーバーがネットワーク上で複数の異なる名前を使って認識されている場合にだけ、この設定を変更してください。

各名前の形式は次のとおりです。

IP-pattern:DNS name

IP-pattern は、クライアント IP アドレスに合致する正規表現 (サブネットマスク) です。たとえば、「192.168.10.*」または「192.168.10.0/24」のように指定します。

このサーバーの名前が 1 つだけの場合は、すべてのクライアントに一致する行を 1 行だけ使用します。たとえば、「*:www.indigo-insurance.com」のように指定します。

名前の順番は重要です。最初に一致する IP パターンの DNS 名が使用されます。

注 - この設定への変更を有効にするには、SGD サーバーを再起動する必要があります。

Array Manager: 「General Properties (Server-Specific)」⇒「DNS Name」

コマンド行

コマンドオプション: `--server-dns-external IP-pattern:dns-name`

使用法: ここで、*IP-pattern* はクライアント IP アドレスの正規表現です。*dns-name* は、サーバーの外部 DNS 名です。複数の DNS 名を区切るにはコンマを使用します。

次の例では、IP アドレスが 192.168.10.* の範囲にあるクライアントでは `boston.indigo-insurance.com` の DNS 名が使用されます。ほかのクライアントはすべて `www.indigo-insurance.com` の DNS 名を使用します。

```
--server-dns-external "192.168.10.*:boston.indigo-insurance.com, \  
*:www.indigo-insurance.com"
```

ユーザーログイン

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

この SGD サーバーへのログインをユーザーに許可するかどうかを設定します。

SGD サーバーを「運用停止」するには、チェックボックスを選択解除します。ユーザーはログインできなくなり、新しいアプリケーションセッションを開始できなくなります。このサーバーに現在ログインしているユーザー、またはこのサーバー上で実行中のアプリケーションセッションを使用しているユーザーに影響はありません。ユーザーはアレイ内の別の SGD サーバーにログインし、このサーバー上で実行中のアプリケーションセッションを再開できます。

ユーザーは「[リダイレクト URL](#)」属性で定義した Web ページにリダイレクトされます。一般に、管理者はリダイレクト先としてアレイ内の別の SGD サーバーを設定します。

Array Manager: 「General Properties (Server-Specific)」⇒「Secure Global Desktop Login」

コマンド行

コマンドオプション:--server-login enabled | disabled

使用法:enabled または disabled を指定します。

次の例では、SGD ホストのユーザーログインを無効にしています。

```
--server-login disabled
```

リダイレクト URL

使用法:フィールドにリダイレクト URL を入力します。

説明

SGD サーバーでユーザーのログインが許可されていない場合、クライアントデバイスはこの URL にリダイレクトされます。

この属性が設定されていない場合、クライアントデバイスは、ユーザーにログインできないことを通知するページにリダイレクトされます。

Array Manager: 「General Properties (Server-Specific)」⇒「Redirection URL」

コマンド行

コマンドオプション: `--server-redirectionurl url`

使用法: ここで、*url* はリダイレクト先の Web ページのアドレスです。

次の例は、`www.indigo-insurance.com` のリダイレクト URL を指定します。

```
--server-redirectionurl "www.indigo-insurance.com"
```

「セキュリティ」タブ

「セキュリティ」タブに表示される属性は、アレイ内の特定の SGD サーバー用のセキュリティ設定です。

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

属性に対する変更は、すぐに反映されます。

接続タイプ

使用法: ユーザーが使用できるようにする各接続タイプのチェックボックスを選択します。

説明

ユーザーが使用できる接続タイプ。

セキュア接続では、SSL を使用して送信を暗号化します。

標準接続では、送信は暗号化されません。

Array Manager: 「Security Properties (Server-Specific)」⇒「Connection Types」

コマンド行

コマンドオプション: `--security-connectiontypes types`

使用法: 使用する接続タイプを指定します。

有効な設定は、`std` (標準接続専用)、`ssl` (セキュア接続専用)、または `std,ssl` (標準接続とセキュア接続の両方) です。

次の例は、標準接続のみを指定します。

```
--security-connectiontypes std
```

SSL アクセラレータのサポート

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

説明

外部 SSL アクセラレータのサポートを有効にするためのチェックボックスを選択します。

このチェックボックスを選択すると、SGD SSL デーモンはプレーンテキストトラフィックを受け入れて、暗号解除済みの SSL トラフィックとして SGD サーバーに渡すことができます。

Array Manager: 「Security Properties (Server-Specific)」⇒「SSL Accelerator Support」

コマンド行

コマンドオプション: `--security-acceptplaintext 1 | 0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例は、SSL アクセラレータのサポートを有効にします。

```
--security-acceptplaintext 1
```

ファイアウォール転送 URL

使用法:フィールドに URL を入力します。

説明

SGD に関連しないすべての Web サーバートラフィックを転送する絶対 URL。

Web サーバーと同じポートで SGD を稼働させる場合、この機能を使用してファイアウォール内で追加のポートをオープンしないようにします。

Array Manager: 「Security Properties (Server-Specific)」⇒「Firewall Forwarding URL」

コマンド行

コマンドオプション: `--security-firewallurl server-url`

使用法:ここで、*server-url* はファイアウォール転送 URL です。

次の例は、SGD に関連しないすべての Web トラフィックの転送先の URL を指定します。

```
--security-firewallurl https://127.0.0.1:443
```

「パフォーマンス」タブ

「パフォーマンス」タブに表示される属性を使用して、SGD サーバーを調整します。

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

同時要求の最大数

使用法:フィールドに数値を入力します。

説明

サーバーが同時に処理する要求の最大数。

大まかな目安として、CPU (Central Processing Unit) の数を 4 倍した値を設定します。

この設定を高くしすぎると、パフォーマンスが低下します。

この属性に対する変更は、すぐに反映されます。

Array Manager: 「Tuning Properties (Server-Specific)」⇒「Processing Limits」⇒「Maximum Simultaneous Requests」

コマンド行

コマンドオプション: `--tuning-maxrequests num`

使用法: ここで、*num* は同時要求の最大数です。

次の例は、同時要求の最大数を 7 に設定します。

```
--tuning-maxrequests 7
```

同時ユーザーセッションの最大数

使用法: フィールドに数値を入力します。

説明

同時ユーザーセッション (SGD クライアントと SGD サーバーの間の接続) の最大数。

上限値に達すると、新たな接続は拒否されます。

この設定を高くしすぎると、パフォーマンスが低下します。

この属性に対する変更は、すぐに反映されます。

Array Manager: 「Tuning Properties (Server-Specific)」⇒「Processing Limits」⇒「Maximum Simultaneous Webtop Connections」

コマンド行

コマンドオプション: `--tuning-maxconnections num`

使用法:ここで、*num* は同時ユーザーセッションの最大数です。

次の例は、同時ユーザーセッションの最大数を 1000 に設定します。

```
--tuning-maxconnections 1000
```

ファイル記述子の最大数

使用法:フィールドに数値を入力します。

説明

許容できる open ファイル記述子の最大数。

この値を増やすと、処理できる同時接続の数が増えます。

この値は、すべての SGD サーバーコンポーネントに影響を与えます。

この設定を高くしすぎると、パフォーマンスが低下します。

この属性に対する変更は、サーバーを再起動した時点で反映されます。

Array Manager: 「Tuning Properties (Server-Specific)」⇒「File Descriptors」

コマンド行

コマンドオプション:--tuning-maxfiledescriptors *num*

使用法:ここで、*num* は open ファイル記述子の最大数です。

次の例は、open ファイル記述子の最大数を 4096 に設定します。

```
--tuning-maxfiledescriptors 4096
```

JVM サイズ

使用法:フィールドに数値を入力します。

説明

これらの属性は、SGD サーバーの Java™ Platform, Standard Edition Runtime Environment (JRE) に割り当てるメモリーのサイズと拡張率を制御します。次の属性を使用できます。

- SGD サーバーの Java Virtual Machine (JVM) に初期状態で割り当てるメモリーの容量 (MB)。この値は、ホスト上のランダムアクセスメモリー (RAM) の容量未満に設定します。
- 拡張係数 (%)。必要な時に JVM メモリーを動的に増やすのに使用されます。
- サーバーの JVM の最大サイズの絶対値 (MB)。この値を超えることは決してありません。

この設定を高くしすぎると、パフォーマンスが低下します。

この属性に対する変更は、サーバーまたは JVM を再起動した時点で反映されます。

Array Manager: 「Tuning Properties (Server-Specific)」⇒「Server JVM Size」

コマンド行

コマンドオプション: `--tuning-jvm-initial MB`

使用法:ここで、*MB* は、JVM への初期メモリー割り当て (M バイト) です。

コマンドオプション: `--tuning-jvm-scale percent`

使用法:ここで、*percentage* は動的な拡張係数 (%) です。

コマンドオプション: `--tuning-jvm-max MB`

使用法:ここで、*MB* は、JVM への最大メモリー割り当て (M バイト) です。

次の例は、JVM の初期サイズを 58M バイトに設定します。JVM メモリーの容量は、必要に応じて 150% まで拡張できます。JVM の最大サイズは、512M バイトに設定されます。

```
--tuning-jvm-initial 58
--tuning-jvm-scale 150
--tuning-jvm-max 512
```

毎日のリソース同期時刻

使用法:フィールドに数値を入力します。

説明

アレイで使用可能にした場合、毎日リソースの同期を開始する時刻。

サーバーのローカルタイムゾーンを使用します。

24 時間形式で時刻を指定します。たとえば、午後 4 時には 16:00 を使用します。

この属性に対する変更は、すぐに反映されます。

Array Manager: 「Tuning Properties (Server-Specific)」 ⇒ 「Resource Synchronization」

コマンド行

コマンドオプション: `--tuning-resourcesync-time hh:mm`

使用法:ここで、*hh:mm* は 24 時間形式の時刻です。

次の例は、リソース同期の時刻を 4:00 (午前 4 時) に設定します。

```
--tuning-resourcesync-time 4:00
```

負荷分散グループ

使用法:フィールドにこの SGD サーバーの負荷分散グループを入力します。

説明

この属性は、アレイ内の SGD サーバーの負荷分散グループを識別する文字列です。この情報は、アプリケーションの負荷分散に使用できます。

この設定は、帯域幅の使用状況を最適化するために使用されます。可能な場合は、アプリケーションサーバーと同じ負荷分散グループから SGD サーバーが選択されます。

アレイが広域ネットワーク (WAN) に拡がっているか、低速リンクを含んでいる場合で、負荷分散を使用している場合を除いて、この属性を空のままにしておきます。

複数の文字列を設定することができますが、アプリケーションの起動に時間がかかります。

使用する場合は、アレイ内のすべての SGD サーバーで、組織階層内のすべてのアプリケーションサーバーオブジェクトに対してこの属性を設定します。

Array Manager: 「General Properties (Server-Specific)」 ⇒ 「Location」

コマンド行

コマンドオプション: `--server-location location`

使用法:ここで、*location* は、アレイ内の SGD サーバーの負荷分散グループを識別する文字列です。

次の例は、*boston* の場所を指定します。

```
--server-location boston
```

「プロトコルエンジン」タブ

「プロトコルエンジン」タブには、SGD サーバーで実行されているプロトコルエンジンの設定を変更できるいくつかのタブが含まれています。

プロトコルエンジンは、SGD サーバー上で実行される SGD ソフトウェアコンポーネントです。プロトコルエンジンは、X11 や RDP などのネイティブプロトコルをエミュレートし、アプリケーションサーバーと通信します。プロトコルエンジンはまた、Adaptive Internet Protocol (AIP) を使用して、クライアントデバイスに表示データを送信します。

次のプロトコルエンジンの設定を変更できます。

- 文字型
- X
- 実行
- チャンネル
- 印刷
- オーディオ
- スマートカード

「文字型プロトコルエンジン」タブ

「文字型プロトコルエンジン」タブに表示される属性を使用して、端末エミュレータ処理を調整します。

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

属性に対する変更が反映されるのは、新規のプロトコルエンジンに限られます。既存のプロトコルエンジンに影響はありません。

セッションの最大数

使用法:フィールドに数値を入力します。

説明

各文字型プロトコルエンジンが処理するアプリケーションセッションの最大数。
需要を満たすために、さらに多くの文字型プロトコルエンジンが起動されます。

Array Manager: 「Character Protocol Engine Properties (Server-Specific)」 ⇒
「Process Tuning」 ⇒ 「Maximum Sessions per Engine」

コマンド行

コマンドオプション: `--cpe-maxsessions num`

使用法:ここで、*num* はアプリケーションセッションの最大数です。

次の例は、アプリケーションセッションの最大数を、文字型プロトコルエンジンあたり 20 に設定します。

```
--cpe-maxsessions 20
```

終了タイムアウト

使用法:フィールドに数値を入力します。

説明

アクティブな接続がない状態で、文字型プロトコルエンジンプロセスが稼働し続ける期間 (秒)。

Array Manager: 「Character Protocol Engine Properties (Server-Specific)」 ⇒
「Process Tuning」 ⇒ 「Exit After」

コマンド行

コマンドオプション: `--cpe-exitafter secs`

使用法:ここで、*num* は期間 (秒) です。

次の例では、アクティブな接続がない場合、プロトコルエンジンは 60 秒後に終了します。

```
--cpe-exitafter 60
```

コマンド行引数

使用法:フィールドにコマンド行引数を入力します。

説明

プロトコルエンジンに対する任意の引数。たとえば、ログファイルの名前を指定します。

この設定は、テクニカルサポートから依頼された場合にのみ変更してください。

Array Manager: 「Character Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒「Command-Line Arguments」

コマンド行

コマンドオプション:--cpe-args *args*

使用法:ここで、*args* は、プロトコルエンジンに渡す引数です。

次の例は、プロトコルエンジンのエラーログファイルを指定します。

```
--cpe-args cpeerror.log
```

「X プロトコルエンジン」タブ

「X プロトコルエンジン」タブに表示される属性を使用して、グラフィカルエミュレータプロセスを調整します。

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

属性に対する変更が反映されるのは、新規のプロトコルエンジンに限られます。既存のプロトコルエンジンに影響はありません。

モニターの解像度

使用法:フィールドに数値を入力します。

説明

想定するデフォルトのモニター解像度 (dpi)。

アプリケーションの「[モニターの解像度](#)」属性を使って、この値を変更することができます。

Array Manager: 「X Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒「Monitor Resolution」

コマンド行

コマンドオプション: `--xpe-monitorresolution dpi`

使用法:ここで、*dpi* はモニターの解像度 (dpi) です。

次の例は、96 dpi のモニター解像度を指定します。

```
--xpe-monitorresolution 96
```

フォントパス

使用法:フィールドにフォントディレクトリのパス名を入力します。

説明

X プロトコルエンジンで使うフォントを格納した SGD ホスト上のディレクトリ。

フォントパスは検索順に記載されています。

%%INSTALLDIR%% を使って、SGD のインストール先ディレクトリを表します。

フォントサーバーを記述できます。たとえば、tcp/boston:7000。

Array Manager: 「X Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒「Font Path」

コマンド行

コマンドオプション: `--xpe-fontpath fontpath`

使用法:ここで、*fontpath* はフォントディレクトリのリストです。フォントパスの各ディレクトリをカンマ (,) で区切ります。

次の例は、X プロトコルエンジンで使用されるフォントディレクトリのリストを指定します。

```
--xpe-fontpath %%INSTALLDIR%%/etc/fonts/misc,\n%%INSTALLDIR%%/etc/fonts/TTF,%%INSTALLDIR%%/etc/fonts/Type1
```

RGB データベース

使用法:フィールドに RGB データベースファイルのパス名を入力します。

説明

X プロトコルエンジンで色の名前を RGB 値に変換するのに使う RGB データベースの SGD ホスト上のフルパス名。

%%INSTALLDIR%% を使って、SGD のインストール先ディレクトリを表します。

Array Manager: 「X Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒「RGB Database」

コマンド行

コマンドオプション:--xpe-rgbdatabase *file*

使用法:ここで、*file* は RGB データベースファイルのフルパス名です。

次の例は、X プロトコルエンジンで使用される RGB データベースを指定します。

```
--xpe-rgbdatabase %%INSTALLDIR%%/etc/data/rgb.txt
```

キーボードマップ

使用法:必要なキーボードマップのオプションを選択します。カスタムキーボードマップの場合は、フィールドにファイル名を入力します。

説明

グラフィカルアプリケーションで使用するデフォルトのキーボードマップ。

ロケールに基づくキーボードマップを指定するには、次のいずれかを実行します。

- SGD サーバーのロケールを使用するには、「LANG 変数」を選択します。
- クライアントデバイスのロケールを使用するには、「クライアントの入力ロケール」を選択します。

使用される実際のキーボードマップは、
`install-dir/etc/data/keymaps/xlocales.txt` ファイルを使って決定されます。

注 - `xlocales.txt` ファイルで * および ? ワイルドカードを使用すれば、さまざまな入力ロケールをサポートできます。詳細については、`xlocales.txt` ファイルを参照してください。

ファイル名を入力して、常に特定のキーボードマップを使用することもできます。

各ユーザーのユーザープロファイルオブジェクトの「[キーボードマップ](#)」属性を使うと、この設定を無効にすることができます。

Array Manager: 「X Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒「Keyboard Map」

コマンド行

コマンドオプション: `--xpe-keymap lang | client-locale | file`

使用法: 有効な値を指定します。カスタムキーボードマップの場合は、`file` をキーボードマップファイルのフルパス名に置き換えます。

次の例では、クライアントデバイスのロケールに基づくキーボードマップが使用されます。

```
--xpe-keymap client-locale
```

クライアントウィンドウのサイズ

使用法: フィールドに水平および垂直のディスプレイのサイズ (ピクセル数) を入力します。

説明

このサーバーに接続するクライアントデバイス用として受け付ける水平ディスプレイ解像度の最大値と垂直ディスプレイ解像度の最大値。

これらの属性を使用して、「ウィンドウタイプ」属性の「クライアントウィンドウ管理」の値を調整します。

これらの属性は、「ウィンドウタイプ」が「クライアントウィンドウ管理」に設定されているアプリケーションにのみ適用されます。これらの属性はクリップ問題を避けるために使用します。

Array Manager: 「X Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒「Client Window Management」

コマンド行

コマンドオプション: `--xpe-cwm-maxwidth pixels`

コマンドオプション: `--xpe-cwm-maxheight pixels`

使用法:ここで、*pixels* は最大表示幅または最大表示高の値です。

次の例は、ディスプレイの最大サイズを 1280 x 960 ピクセルに設定します。

```
--xpe-cwm-maxwidth 1280  
--xpe-cwm-maxheight 960
```

セッション開始タイムアウト

使用法:フィールドに数値を入力します。

説明

X アプリケーションが接続するまで X プロトコルエンジンが待機する期間 (秒)。

Array Manager: 「X Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒「Session Start Timeout」

コマンド行

コマンドオプション: `--xpe-sessionstarttimeout seconds`

使用法:ここで、*seconds* はタイムアウト値 (秒) です。

次の例は、X セッションを開始するときの 60 秒のタイムアウト値を指定します。

```
--xpe-sessionstarttimeout 60
```

セッションの最大数

使用法:フィールドに数値を入力します。

説明

各 X プロトコルエンジンが処理するアプリケーションセッションの最大数。

需要を満たすために、さらに多くの X プロトコルエンジンが起動されます。

Array Manager: 「X Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒「Process Tuning」⇒「Maximum Sessions per Engine」

コマンド行

コマンドオプション:--xpe-maxsessions *num*

使用法:ここで、*num* はアプリケーションセッションの最大数です。

次の例は、セッションの最大数を、X プロトコルエンジンあたり 20 に設定します。

```
--xpe-maxsessions 20
```

終了タイムアウト

使用法:フィールドに数値を入力します。

説明

アクティブな接続がない状態で、X プロトコルエンジンプロセスが稼働し続ける期間 (秒)。

Array Manager: 「X Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒「Process Tuning」⇒「Exit After」

コマンド行

コマンドオプション:--xpe-exitafter *secs*

使用法:ここで、*num* は期間 (秒) です。

次の例では、アクティブな接続がない場合、プロトコルエンジンは 60 秒後に終了します。

```
--xpe-exitafter 60
```

コマンド行引数

使用法:フィールドにコマンド行引数を入力します。

説明

プロトコルエンジンに対する任意の引数。たとえば、ログファイルの名前を指定します。

この設定は、テクニカルサポートから依頼された場合にのみ変更してください。

Array Manager: 「X Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒「Command-Line Arguments」

コマンド行

コマンドオプション:--xpe-args *args*

使用法:ここで、*args* は、プロトコルエンジンに渡す引数です。

次の例は、プロトコルエンジンのエラーログファイルを指定します。

```
--xpe-args xpeerror.log
```

「実行プロトコルエンジン」タブ

「実行プロトコルエンジン」タブに表示される属性を使用して、アプリケーション起動処理を調整します。

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

属性に対する変更が反映されるのは、新規のプロトコルエンジンに限られます。既存のプロトコルエンジンに影響はありません。

セッションの最大数

使用法:フィールドに数値を入力します。

説明

各実行プロトコルエンジンが処理するアプリケーションセッションの最大数。

需要を満たすために、さらに多くの実行プロトコルエンジンが起動されます。

Array Manager: 「Execution Protocol Engine Properties (Server-Specific)」 ⇒ 「Process Tuning」 ⇒ 「Maximum Sessions per Engine」

コマンド行

コマンドオプション: `--execpe-maxsessions num`

使用法:ここで、*num* はアプリケーションセッションの最大数です。

次の例は、セッションの最大数を、実行プロトコルエンジンあたり 10 に設定します。

```
--execpe-maxsessions 10
```

終了タイムアウト

使用法:フィールドに数値を入力します。

説明

アクティブな接続がない状態で、実行プロトコルエンジンプロセスが稼働し続ける期間 (秒)。

Array Manager: 「Execution Protocol Engine Properties (Server-Specific)」 ⇒ 「Process Tuning」 ⇒ 「Exit After」

コマンド行

コマンドオプション: `--execpe-exitafter secs`

使用法:ここで、*secs* は期間 (秒) です。

次の例では、アクティブな接続がない場合、プロトコルエンジンは 60 秒後に終了します。

```
--execpe-exitafter 60
```

ログインスクリプトディレクトリ

使用法:フィールドにディレクトリパスの名前を入力します。

説明

ログインスクリプトを格納する SGD ホスト上のディレクトリ。

%%INSTALLDIR%% を使って、SGD のインストール先ディレクトリを表します。

アプリケーションオブジェクトの「[ログインスクリプト](#)」属性で相対パス名 (たとえば `unix.exp`) を使用する場合、このディレクトリを前提にします。

この設定は、テクニカルサポートから依頼された場合にのみ変更してください。

Array Manager: 「Execution Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒
「Login Script Directory」

コマンド行

コマンドオプション:--execpe-scriptdir *dir*

使用法:ここで、*dir* はログインスクリプトディレクトリのパス名です。

次の例では、デフォルトの SGD インストール用のログインスクリプトディレクトリは `/opt/tarantella/var/serverresources/expect` です。

```
--execpe-scriptdir %%INSTALLDIR%%/var/serverresources/expect
```

コマンド行引数

使用法:フィールドにコマンド行引数を入力します。

説明

プロトコルエンジンに対する任意の引数。たとえば、ログファイルの名前を指定します。

この設定は、テクニカルサポートから依頼された場合にのみ変更してください。

Array Manager: 「Execution Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒
「Command-Line Arguments」

コマンド行

コマンドオプション: `--execpe-args args`

使用法:ここで、*args* は、プロトコルエンジンに渡す引数です。

次の例は、プロトコルエンジンのエラーログファイルを指定します。

```
--execpe-args execpeerror.log
```

「チャネルプロトコルエンジン」タブ

「チャネルプロトコルエンジン」タブに表示される属性を使用して、SGD チャネル処理を調整します。SGD チャネルは、クライアントに関する情報を検出するために使用されます。たとえば、クライアントドライブやオーディオデバイスを検出します。

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

属性に対する変更が反映されるのは、新規のプロトコルエンジンに限られます。既存のプロトコルエンジンに影響はありません。

パケット圧縮

使用法:圧縮設定のオプションを選択します。

説明

チャネルプロトコルエンジンが、クライアント接続でデータ圧縮を使用するかどうかを指定します。

接続速度が遅い場合にチャネルプロトコルエンジンのデータ圧縮を有効にするには、「接続速度が低いとき」を選択します。

Array Manager: 「Channel Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒
「Compression」

コマンド行

コマンドオプション: `--chpe-compression auto | always | never`

使用法:有効な圧縮設定を指定します。

次の例は、クライアント接続が低速な場合にのみデータ圧縮を有効にします。

```
--chpe-compression auto
```

パケット圧縮しきい値

使用法:フィールドに圧縮しきい値 (バイト単位) を入力します。

説明

チャネルプロトコルエンジンが圧縮できるネットワークパケットの最小サイズ。

Array Manager: 「Channel Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒
「Threshold」

コマンド行

コマンドオプション: `--chpe-compressionthreshold bytes`

使用法:ここで、*bytes* は圧縮しきい値の設定 (バイト単位) です。

次の例では、256 バイトの最小パケットサイズが指定されています。この値より小さいネットワークパケットは圧縮されません。

```
--chpe-compressionthreshold 256
```

終了タイムアウト

使用法:フィールドに数値を入力します。

説明

アクティブな接続がない状態で、チャンネルプロトコルエンジンプロセスが稼働し続ける期間 (秒)。

Array Manager: 「Channel Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒
「Process Tuning」⇒「Exit After」

コマンド行

コマンドオプション: `--chpe-exitafter secs`

使用法: ここで、*secs* は期間 (秒) です。

次の例では、アクティブな接続がない場合、プロトコルエンジンは 60 秒後に終了します。

```
--chpe-exitafter 60
```

「印刷プロトコルエンジン」タブ

「印刷プロトコルエンジン」タブに表示される属性を使用して、SGD 印刷処理を調整します。

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

属性に対する変更が反映されるのは、新規のプロトコルエンジンに限られます。既存のプロトコルエンジンに影響はありません。

パケット圧縮

使用法: 圧縮設定のオプションを選択します。

説明

印刷プロトコルエンジンが、クライアント接続でデータ圧縮を使用するかどうかを指定します。

接続速度が遅い場合に印刷プロトコルエンジンのデータ圧縮を有効にするには、「接続速度が低いとき」を選択します。

Array Manager: 「Print Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒
「Compression」

コマンド行

コマンドオプション: `--ppe-compression auto | always | never`

使用法: 有効な圧縮設定を指定します。

次の例は、クライアント接続が低速な場合にデータ圧縮を有効にします。

```
--ppe-compression auto
```

パケット圧縮しきい値

使用法: フィールドに圧縮しきい値 (バイト単位) を入力します。

説明

印刷プロトコルエンジンが圧縮できるファイルの最小サイズ。

Array Manager: 「Print Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒
「Threshold」

コマンド行

コマンドオプション: `--ppe-compressionthreshold bytes`

使用法: ここで、*bytes* は圧縮しきい値の設定 (バイト単位) です。

次の例では、4096 バイトの最小ファイルサイズが指定されています。この値より小さいプリントファイルは圧縮されません。

```
--ppe-compression 4096
```

終了タイムアウト

使用法: フィールドに数値を入力します。

説明

アクティブな接続がない状態で、印刷プロトコルエンジンプロセスが稼働し続ける期間 (秒)。

Array Manager: 「Print Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒「Process Tuning」⇒「Exit After」

コマンド行

コマンドオプション: `--ppe-exitafter secs`

使用法: ここで、*secs* は期間 (秒) です。

次の例では、アクティブな接続がない場合、プロトコルエンジンは 240 秒後に終了します。

```
--ppe-exitafter 240
```

「オーディオプロトコルエンジン」タブ

「オーディオプロトコルエンジン」タブに表示される属性を使用して、SGD オーディオ処理を調整します。

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

属性に対する変更が反映されるのは、新規のプロトコルエンジンに限られます。既存のプロトコルエンジンに影響はありません。

パケット圧縮

使用法: 圧縮設定のオプションを選択します。

説明

オーディオプロトコルエンジンが、クライアント接続でデータ圧縮を使用するかどうかを指定します。

デフォルトでは、圧縮は無効になっています。これは、すでに圧縮されているオーディオデータが不必要に圧縮されないようにするためです。

接続速度が遅い場合にオーディオプロトコルエンジンのデータ圧縮を有効にするには、「接続速度が低いとき」を選択します。

Array Manager: 「Audio Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒
「Compression」

コマンド行

コマンドオプション: `--audiope-compression auto | always | never`

使用法: 有効な圧縮設定を指定します。

次の例は、クライアント接続が低速な場合にのみデータ圧縮を有効にします。

```
--audiope-compression auto
```

「スマートカードプロトコルエンジン」タブ

「スマートカードプロトコルエンジン」タブに表示される属性を使用して、SGD スマートカード処理を調整します。

これらの設定の一覧を表示するには、コマンド行で `tarantella config list` コマンドを使用します。これらの設定を編集するには、`tarantella config edit` コマンドを使用します。

属性に対する変更が反映されるのは、新規のプロトコルエンジンに限られます。既存のプロトコルエンジンに影響はありません。

パケット圧縮

使用法: 圧縮設定のオプションを選択します。

説明

スマートカードプロトコルエンジンが、クライアント接続でデータ圧縮を使用するかどうかを指定します。

接続速度が遅い場合にスマートカードプロトコルエンジンのデータ圧縮を有効にするには、「接続速度が低いとき」を選択します。

Array Manager: 「Smart Card Protocol Engine Properties (Server-Specific)」⇒
「Compression」

コマンド行

コマンドオプション: `--scardpe-compression auto | always | never`

使用法: 有効な圧縮設定を指定します。

次の例は、クライアント接続が低速な場合にデータ圧縮を有効にします。

```
--scardpe-compression auto
```

「ユーザーセッション」タブ

「ユーザーセッション」タブを使用すると、SGD サーバーのユーザーセッションを表示したり管理したりできます。ユーザーセッションは、SGD サーバーに接続されているユーザーを表します。

ユーザーセッションの情報は、「ユーザーセッションリスト」テーブルに表示されます。

「ユーザーセッションリスト」テーブル

「ユーザーセッションリスト」テーブルには、SGD サーバーのユーザーセッションの詳細が表示されます。

このテーブルの最上部に、ユーザーセッションの数が括弧で囲まれて表示されます。

「ユーザーセッションリスト」テーブルには、各ユーザーセッションに関する次の情報が含まれています。

- ユーザーの識別情報。ユーザーの一意の識別子。
- ユーザープロファイル。ユーザーが使用できる設定とアプリケーションを定義するプロファイル。
- **Secure Global Desktop** サーバー。ユーザーセッションをホストしている SGD サーバーの名前。
- ログイン時間。ユーザーが SGD サーバーにログインした時刻。

「ユーザーセッションリスト」テーブルを検索する場合は、「検索」オプションを使用します。ユーザーの識別情報やユーザープロフィールを検索するときは、検索文字列にワイルドカード「*」を使用できます。「name」という検索文字列の入力は、「*name*」の検索に相当し、検索文字列と一致するものがすべて返されます。

「ログイン時間」を検索するには、yyyy/mm/dd hh:mm:ss という書式の検索文字列を使用します。

デフォルトでは、検索によって返される結果の数は 150 個に制限されます。

ユーザーセッションに関するさらに詳細な情報を表示するには、「ユーザーセッションリスト」テーブル内のユーザーセッションのチェックボックスを選択し、「詳細の表示」ボタンをクリックします。

ユーザーセッションを終了するには、「ユーザーセッションリスト」テーブル内のユーザーセッションのチェックボックスを選択し、「終了」ボタンをクリックします。

すべてのユーザーセッションを終了するには、「現在表示されている項目を選択」アイコンをクリックしてすべてのユーザーセッションを選択し、「終了」ボタンをクリックします。

「再読み込み」ボタンをクリックすることにより、「ユーザーセッションリスト」テーブルを更新できます。

コマンド行

ユーザーセッションの詳細を表示したり、ユーザーセッションを終了したりするには、コマンド行で `tarantella webtopsession` コマンドを使用します。[375 ページの「tarantella webtopsession コマンド」](#)を参照してください。

「アプリケーションセッション」タブ

「アプリケーションセッション」タブを使用すると、SGD サーバーのアプリケーションセッションを表示したり管理したりできます。

アプリケーションセッションの情報は、「アプリケーションセッションリスト」テーブルに表示されます。

「アプリケーションセッションリスト」テーブル

「アプリケーションセッションリスト」テーブルには、SGD サーバーのアプリケーションセッションの詳細が表示されます。

このテーブルの最上部に、アプリケーションセッションの数が括弧で囲まれて表示されます。

「アプリケーションセッションリスト」テーブルには、各アプリケーションセッションに関する次の情報が含まれています。

- ユーザーの識別情報。ユーザーの一意の識別子。
- ユーザープロファイル。ユーザーが使用できる設定とアプリケーションを定義するプロファイル。
- **Secure Global Desktop** サーバー。アプリケーションセッションをホストしている SGD サーバーの名前。
- アプリケーションサーバー。アプリケーションをホストしているアプリケーションサーバーの名前。
- アプリケーション。アプリケーションの名前。
- 「起動時刻」。アプリケーションが起動された時刻。
- ステータス。アプリケーションの現在のステータス。たとえば、アプリケーションが実行中か、中断中かを示します。

「検索」オプションを使用すると、「アプリケーションセッションリスト」テーブルを検索できます。ユーザーの識別情報、ユーザープロファイル、アプリケーションサーバー、またはアプリケーションを検索するときは、検索文字列にワイルドカード「*」を使用できます。「*name*」という検索文字列の入力は、「**name**」の検索に相当し、検索文字列と一致するものがすべて返されます。

「起動時刻」を検索するには、yyyy/mm/dd hh:mm:ss という書式の検索文字列を使用します。

デフォルトでは、検索によって返される結果の数は 150 個に制限されます。

アプリケーションセッションに関するさらに詳細な情報を表示するには、「アプリケーションセッションリスト」テーブル内のアプリケーションセッションのチェックボックスを選択し、「詳細の表示」ボタンをクリックします。

アプリケーションセッションを終了するには、「アプリケーションセッションリスト」テーブル内のアプリケーションセッションのチェックボックスを選択し、「終了」ボタンをクリックします。

すべてのアプリケーションセッションを終了するには、「現在表示されている項目を選択」アイコンをクリックしてすべてのアプリケーションセッションを選択し、「終了」ボタンをクリックします。

「再読み込み」ボタンをクリックすることにより、「アプリケーションセッションリスト」テーブルを更新できます。

アプリケーションセッションをシャドウイングすると、管理者とユーザーがアプリケーションを同時に使って対話できるようになります。アプリケーションセッションをシャドウイングするには、「アプリケーションセッションリスト」テーブル内のアプリケーションセッションのチェックボックスを選択し、「シャドウイング」ボタンをクリックします。

注 – 一部の国では、ユーザーに通知せずにシャドウイングすることが法律で禁じられています。その法律に従う義務があります。

文字型アプリケーションや中断しているアプリケーションでは、シャドウイングはサポートされていません。これらのアプリケーションをシャドウイングしようとすると、警告メッセージが表示されます。

コマンド行

アプリケーションセッションの詳細を表示したり、アプリケーションセッションをシャドウイングしたり、アプリケーションセッションを終了したりするには、コマンド行で `tarantella emulatorsession` コマンドを使用します。[243 ページの「tarantella emulatorsession コマンド」](#)を参照してください。

オブジェクトと属性

SGD では、ユーザー、リソース、および組織の構造は、ディレクトリ内のオブジェクトで表現されます。オブジェクトのタイプが異なれば、属性として知られている設定内容も異なります。

この章では、SGD およびその属性で使用するオブジェクトタイプについて説明します。この章の内容は、次のとおりです。

- [93 ページの「SGD オブジェクト」](#)
- [112 ページの「属性の参照」](#)

SGD オブジェクト

SGD でサポートされるオブジェクトタイプは、次のとおりです。

- [3270 アプリケーションオブジェクト](#)
- [5250 アプリケーションオブジェクト](#)
- [アプリケーションサーバーオブジェクト](#)
- [文字型アプリケーションオブジェクト](#)
- [ディレクトリ:組織オブジェクト](#)
- [ディレクトリ:組織単位オブジェクト](#)
- [ディレクトリ \(軽量\):Active Directory コンテナオブジェクト](#)
- [ディレクトリ \(軽量\):ドメインコンポーネントオブジェクト](#)
- [ドキュメントオブジェクト](#)
- [グループオブジェクト](#)
- [ユーザープロファイルオブジェクト](#)
- [Windows アプリケーションオブジェクト](#)
- [X アプリケーションオブジェクト](#)

3270 アプリケーションオブジェクト

3270 アプリケーションをユーザーに提供する場合は、3270 アプリケーションオブジェクトを使用します。

SGD では、3270 アプリケーションのために他社製の Unix 用 TeemTalk エミュレータが使用されます。詳細は、『TeemTalk for Unix User's Guide』を参照してください。

3270 アプリケーションオブジェクトを作成するには、Administration Console または `tarantella object new_3270app` コマンドを使用します。

Administration Console では、3270 アプリケーションオブジェクトの設定内容がいくつかのタブに分けられています。

「一般」タブには、ユーザーのリンクの作成時に使用される名前とアイコンを制御する設定が含まれます。「一般」タブの属性は、次のとおりです。

- [名前](#)
- [コメント](#)
- [アイコン](#)

「起動」タブには、アプリケーションの起動方法、およびアプリケーションセッションの中断/再開を可能にするかどうかを制御する設定が含まれます。「起動」タブの属性は、次のとおりです。

- [コマンドの引数](#)
- [接続方法](#)
- [接続方法: ssh 引数](#)
- [ログインスクリプト](#)
- [環境変数](#)
- [セッション数](#)
- [アプリケーションの再開機能](#)
- [アプリケーションの再開機能: タイムアウト](#)
- [起動接続をオープンしたまま保持](#)
- [セッション終了](#)
- [ウィンドウを閉じるアクション](#)

「プレゼンテーション」タブには、ユーザーへのアプリケーションの表示方法を制御する設定が含まれます。「プレゼンテーション」タブの属性は、次のとおりです。

- [ウィンドウタイプ](#)
- [ウィンドウマネージャー](#)
- [ウィンドウのサイズ: クライアントの最大サイズ](#)
- [ウィンドウのサイズ: ウィンドウに合わせて拡大縮小する](#)

- ウィンドウのサイズ: 幅
- ウィンドウのサイズ: 高さ
- ウィンドウの色
- ウィンドウの色: カスタム色

「パフォーマンス」タブには、アプリケーションのパフォーマンスを最適化するための設定が含まれます。「パフォーマンス」タブの属性は、次のとおりです。

- コマンドの圧縮
- コマンドの実行
- 遅延更新
- グラフィックアクセラレーション
- インターレースイメージ
- 類似セッション間でリソースを共有

「クライアントデバイス」タブには、ユーザーのクライアントデバイスがアプリケーションとやりとりする方法を制御する設定が含まれます。「クライアントデバイス」タブの属性は、次のとおりです。

- キーボードマップ: ロック
- ユーロ文字
- コピー&ペースト
- コピー&ペースト: アプリケーションの Clipboard Security Level
- マウスの中ボタンのタイムアウト
- モニターの解像度

「サードパーティーエミュレータ」タブには、他社製の Unix 用 TeemTalk エミュレータの設定が含まれます。「サードパーティーエミュレータ」タブの属性は、次のとおりです。

- サーバーアドレス
- サーバーポート
- 接続終了アクション
- ウィンドウのサイズ: 最大化
- メニューバー
- 「ファイル」メニューと「設定」メニュー
- 表示されるソフトボタン
- 前景色
- 背景色
- キーボードタイプ

「割り当て済みのユーザープロファイル」タブには、アプリケーションを実行可能なユーザープロファイルオブジェクトが一覧表示されます。「[「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ](#)」を参照してください。

「アプリケーションセッション」タブには、アプリケーションの実行中および中断中のアプリケーションセッションが一覧表示されます。「[「アプリケーションセッション」タブ](#)」を参照してください。

5250 アプリケーションオブジェクト

5250 アプリケーションをユーザーに提供する場合は、5250 アプリケーションオブジェクトを使用します。

SGD では、5250 アプリケーションのために他社製の Unix 用 TeemTalk エミュレータが使用されます。詳細は、『TeemTalk for Unix User's Guide』を参照してください。

5250 アプリケーションオブジェクトを作成するには、Administration Console または [tarantella object new_5250app](#) コマンドを使用します。

Administration Console では、5250 アプリケーションオブジェクトの設定内容がいくつかのタブに分けられています。

「一般」タブには、ユーザーのリンクの作成時に使用される名前とアイコンを制御する設定が含まれます。「一般」タブの属性は、次のとおりです。

- [名前](#)
- [コメント](#)
- [アイコン](#)

「起動」タブには、アプリケーションの起動方法、およびアプリケーションセッションの中断/再開を可能にするかどうかを制御する設定が含まれます。「起動」タブの属性は、次のとおりです。

- [コマンドの引数](#)
- [接続方法](#)
- [接続方法: ssh 引数](#)
- [ログインスクリプト](#)
- [環境変数](#)
- [セッション数](#)
- [アプリケーションの再開機能](#)
- [アプリケーションの再開機能: タイムアウト](#)
- [起動接続をオープンしたまま保持](#)
- [セッション終了](#)

■ ウィンドウを閉じるアクション

「プレゼンテーション」タブには、ユーザーへのアプリケーションの表示方法を制御する設定が含まれます。「プレゼンテーション」タブの属性は、次のとおりです。

- ウィンドウタイプ
- ウィンドウマネージャー
- ウィンドウのサイズ: クライアントの最大サイズ
- ウィンドウのサイズ: ウィンドウに合わせて拡大縮小する
- ウィンドウのサイズ: 幅
- ウィンドウのサイズ: 高さ
- ウィンドウの色
- ウィンドウの色: カスタム色

「パフォーマンス」タブには、アプリケーションのパフォーマンスを最適化するための設定が含まれます。「パフォーマンス」タブの属性は、次のとおりです。

- コマンドの圧縮
- コマンドの実行
- 遅延更新
- グラフィックアクセラレーション
- インターレースイメージ
- 類似セッション間でリソースを共有

「クライアントデバイス」タブには、ユーザーのクライアントデバイスがアプリケーションとやりとりする方法を制御する設定が含まれます。「クライアントデバイス」タブの属性は、次のとおりです。

- キーボードマップ: ロック
- ユーロ文字
- コピー&ペースト
- コピー&ペースト: アプリケーションの Clipboard Security Level
- マウスの中ボタンのタイムアウト
- モニターの解像度

「サードパーティーエミュレータ」タブには、他社製の Unix 用 TeemTalk エミュレータの設定が含まれます。「サードパーティーエミュレータ」タブの属性は、次のとおりです。

- サーバーアドレス
- サーバーポート
- 接続終了アクション
- ウィンドウのサイズ: 最大化

- メニューバー
- 「ファイル」メニューと「設定」メニュー
- 表示されるソフトボタン
- 前景色
- 背景色
- キーボードタイプ

「割り当て済みのユーザープロファイル」タブには、アプリケーションを実行可能なユーザープロファイルオブジェクトが一覧表示されます。「[「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ](#)」を参照してください。

「アプリケーションセッション」タブには、アプリケーションの実行中および中断中のアプリケーションセッションが一覧表示されます。「[「アプリケーションセッション」タブ](#)」を参照してください。

アプリケーションサーバーオブジェクト

SGD を介してアプリケーションを実行するためのアプリケーションサーバーを表現する場合は、アプリケーションサーバーオブジェクトを使用します。

アプリケーションサーバーオブジェクトは、アプリケーションの負荷分散に使用されます。2 つ以上のアプリケーションサーバーオブジェクトを 1 つのアプリケーションオブジェクトに割り当てる場合、SGD では、すべてのアプリケーションサーバーにおける負荷に基づいて、使用するアプリケーションサーバーが選択されます。

アプリケーションサーバーオブジェクトを作成するには、Administration Console または `tarantella object new_host` コマンドを使用します。

Administration Console では、アプリケーションサーバーオブジェクトの設定内容がいくつかのタブに分けられています。

「一般」タブには、アプリケーションサーバーの指定およびアプリケーション認証を制御する設定が含まれます。「一般」タブの属性は、次のとおりです。

- 名前
- コメント
- アドレス
- アプリケーション起動
- ドメイン名
- パスワードキャッシュの使用
- プロンプトのロケール

「パフォーマンス」タブには、アプリケーションのパフォーマンスを最適化するための設定が含まれます。「[負荷分散グループ](#)」を参照してください。

「ホストされているアプリケーション」タブには、アプリケーションサーバー上でホストされているアプリケーションのリストが表示されます。「[「ホストされているアプリケーション」タブ](#)」を参照してください。

「アプリケーションセッション」タブには、アプリケーションサーバーの実行中および中断中のアプリケーションセッションが一覧表示されます。「[「アプリケーションセッション」タブ](#)」を参照してください。

「パスワード」タブには、アプリケーションサーバーのパスワードキャッシュエントリのリストが表示されます。「[「パスワード」タブ](#)」を参照してください。

文字型アプリケーションオブジェクト

VT420、Wyse 60、または SCO コンソールの文字型アプリケーションをユーザーに提供する場合、文字型アプリケーションオブジェクトを使用します。

文字型アプリケーションオブジェクトは、VT420、Wyse 60、または SCO コンソールの文字型アプリケーションをサポートします。「[エミュレーションタイプ](#)」属性によってアプリケーションのタイプが決まります。

文字型アプリケーションオブジェクトを作成するには、Administration Console または `tarantella object new_charapp` コマンドを使用します。

Administration Console では、文字型アプリケーションオブジェクトの設定内容がいくつかのタブに分けられています。

「一般」タブには、ユーザーのリンクの作成時に使用される名前とアイコンを制御する設定が含まれます。「一般」タブの属性は、次のとおりです。

- [名前](#)
- [コメント](#)
- [アイコン](#)

「起動」タブには、アプリケーションの起動方法、およびアプリケーションセッションの中断/再開を可能にするかどうかを制御する設定が含まれます。「起動」タブの属性は、次のとおりです。

- [アプリケーションコマンド](#)
- [コマンドの引数](#)
- [接続方法](#)
- [接続方法: ssh 引数](#)
- [ログインスクリプト](#)
- [環境変数](#)
- [応答メッセージ](#)
- [セッション数](#)

- アプリケーションの再開機能
- アプリケーションの再開機能: タイムアウト
- ウィンドウを閉じるアクション

「プレゼンテーション」タブには、ユーザーへのアプリケーションの表示方法を制御する設定が含まれます。「プレゼンテーション」タブの属性は、次のとおりです。

- ウィンドウタイプ
- エミュレーションタイプ
- 端末タイプ
- ウィンドウのサイズ: クライアントの最大サイズ
- ウィンドウのサイズ: 幅
- ウィンドウのサイズ: 高さ
- ウィンドウのサイズ: カラム
- ウィンドウのサイズ: 行
- フォントファミリー
- フォントサイズ: 固定フォントサイズ
- フォントサイズ
- 枠線のスタイル
- カーソル
- 属性マップ
- カラーマップ
- スクロールスタイル
- ステータス行
- 行の折り返し

「パフォーマンス」タブには、アプリケーションのパフォーマンスを最適化するための設定が含まれます。「パフォーマンス」タブの属性は、次のとおりです。

- アプリケーションの負荷分散
- コマンドの圧縮

「クライアントデバイス」タブには、ユーザーのクライアントデバイスがアプリケーションとやりとりする方法を制御する設定が含まれます。「クライアントデバイス」タブの属性は、次のとおりです。

- キーボードマップ
- キーボードコードの変更
- 数字パッドコードの変更
- カーソルキーコードの変更
- エスケープシーケンス

■ コードページ

「ホストしているアプリケーションサーバー」タブには、アプリケーションをホストするように設定されているアプリケーションサーバーが一覧表示されます。「[「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ](#)」を参照してください。

「割り当て済みのユーザープロファイル」タブには、アプリケーションを実行可能なユーザープロファイルオブジェクトが一覧表示されます。「[「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ](#)」を参照してください。

「アプリケーションセッション」タブには、アプリケーションの実行中または中断中のアプリケーションセッションが一覧表示されます。「[「アプリケーションセッション」タブ](#)」を参照してください。

ディレクトリ:組織オブジェクト

組織全体に適用する設定には、組織オブジェクトを使用します。

組織オブジェクトは常に、組織階層のトップレベルにあります。

組織オブジェクトには、OU オブジェクトまたはユーザープロファイルオブジェクトを含めることができます。

組織オブジェクトを作成するには、Administration Console または [tarantella object new_org](#) コマンドを使用します。

Administration Console では、組織オブジェクトの設定内容がいくつかのタブに分けられています。

「一般」タブには、組織の名前を制御する設定が含まれます。「一般」タブの属性は、次のとおりです。

■ 名前

■ コメント

「印刷」タブには、ユーザーが、Microsoft リモートデスクトッププロトコル (RDP) を使用する Windows アプリケーションから印刷するための設定が含まれます。「印刷」タブの属性は、次のとおりです。

- クライアント印刷: 上書き
- クライアント印刷
- Universal PDF プリンタ
- Universal PDF プリンタをデフォルトにする
- Universal PDF ビューア
- Universal PDF ビューアをデフォルトにする
- Postscript プリンタドライバ

「クライアントデバイス」タブには、ユーザーのクライアントデバイスがアプリケーションとやりとりする方法を制御する設定が含まれます。「クライアントデバイス」タブの属性は、次のとおりです。

- クライアントプロファイルの編集
- コピー&ペースト
- シリアルポートマッピング
- クライアントドライブマッピング

「セキュリティー」タブには、クライアントデバイスと SGD サーバー間で許可される接続を定義する設定が含まれます。「[接続](#)」を参照してください。

「割り当て済みのアプリケーション」タブには、組織内のユーザーが使用可能なアプリケーションのリストが表示されます。「[割り当て済みのアプリケーション](#)」タブを参照してください。

ディレクトリ:組織単位オブジェクト

組織内の部門、サイト、またはチームを識別するには、組織単位 (OU) オブジェクトを使用します。

OU は、組織オブジェクトまたはドメインコンポーネントオブジェクトに含めることができます。

OU オブジェクトを作成するには、Administration Console または `tarantella object new_orgunit` コマンドを使用します。

Administration Console では、OU オブジェクトの設定内容がいくつかのタブに分けられています。

「一般」タブには、OU の名前を制御する設定が含まれます。「一般」タブの属性は、次のとおりです。

- [名前](#)
- [コメント](#)

「印刷」タブには、ユーザーが Windows アプリケーションから印刷するための設定が含まれます。「印刷」タブの属性は、次のとおりです。

- [クライアント印刷: 上書き](#)
- [クライアント印刷](#)
- [Universal PDF プリンタ](#)
- [Universal PDF プリンタをデフォルトにする](#)
- [Universal PDF ビューア](#)
- [Universal PDF ビューアをデフォルトにする](#)

■ Postscript プリンタドライバ

「クライアントデバイス」タブには、ユーザーのクライアントデバイスがアプリケーションとやりとりする方法を制御する設定が含まれます。「クライアントデバイス」タブの属性は、次のとおりです。

- クライアントプロファイルの編集
- コピー&ペースト
- シリアルポートマッピング
- クライアントドライブマッピング

「セキュリティ」タブには、クライアントデバイスと SGD サーバー間で許可される接続を定義する設定が含まれます。「[接続](#)」を参照してください。

「割り当て済みのアプリケーション」タブには、組織単位内のユーザーが使用可能なアプリケーションのリストが表示されます。「[割り当て済みのアプリケーション](#)」タブを参照してください。

ディレクトリ (軽量):Active Directory コンテナオブジェクト

Microsoft Active Directory 構造を SGD 組織階層内に複製するには、Active Directory コンテナオブジェクトを使用します。

Active Directory コンテナオブジェクトは OU オブジェクトに似ていますが、追加の SGD 固有属性が含まれていないか、ユーザーがアプリケーションを割り当てることができません。これが、ディレクトリ (軽量) オブジェクトと呼ばれる理由です。

Active Directory コンテナオブジェクトは、組織オブジェクト、OU オブジェクト、またはドメインコンポーネントオブジェクトに含めることができます。

Active Directory コンテナオブジェクトを作成するには、Administration Console または `tarantella object new_container` コマンドを使用します。

Administration Console では、Active Directory コンテナオブジェクトの設定内容がいくつかのタブに分けられています。

「一般」タブには、Active Directory コンテナの名前を制御する設定が含まれます。「[名前](#)」を参照してください。

ディレクトリ (軽量):ドメインコンポーネントオブジェクト

ディレクトリ構造 (通常は Microsoft Active Directory 構造) を SGD 組織階層内に複製するには、ドメインコンポーネントオブジェクトを使用します。

ドメインコンポーネントオブジェクトは組織オブジェクトに似ていますが、追加の SGD 固有属性が含まれていないか、ユーザーがアプリケーションを割り当てることができません。これが、ディレクトリ (軽量) オブジェクトと呼ばれる理由です。

ドメインコンポーネントオブジェクトが表示されるのは、組織階層のトップレベルか、別のドメインコンポーネントオブジェクト内に限られます。

ドメインコンポーネントオブジェクトには、OU オブジェクト、ドメインコンポーネントオブジェクト、Active Directory コンテナオブジェクト、またはユーザープロフィールオブジェクトを含めることができます。

ドメインコンポーネントオブジェクトを作成するには、Administration Console または `tarantella object new_dc` コマンドを使用します。

Administration Console では、ドメインコンポーネントオブジェクトの設定内容がいくつかのタブに分けられています。

「一般」タブには、ドメインコンポーネントの名前を制御する設定が含まれます。[名前](#)を参照してください。

ドキュメントオブジェクト

ドキュメントをユーザーに提供する場合は、ドキュメントオブジェクトを使用します。

ドキュメントオブジェクトは、任意の URL を参照できます。Sun StarOffice 文書や Adobe Acrobat ファイルなど、Web 上のどのようなドキュメントでも参照できます。ドキュメントから Web アプリケーションを参照することもできます。

実際に URL をフェッチするのはユーザーの「クライアントデバイス」であるため、ファイアウォールなどのセキュリティー機能によってユーザーが URL にアクセスできない場合があります。

ドキュメントオブジェクトを作成するには、Administration Console または `tarantella object new_doc` コマンドを使用します。

Administration Console では、ドキュメントオブジェクトの設定内容がいくつかのタブに分けられています。

「一般」タブには、ユーザーのリンクの作成時に使用される名前とアイコンを制御する設定が含まれます。「一般」タブの属性は、次のとおりです。

- 名前
- コメント
- アイコン

「起動」タブには、ユーザーがドキュメントのリンクをクリックすると表示される URL が含まれます。「[URL](#)」を参照してください。

「プレゼンテーション」タブには、ユーザーへのドキュメントの表示方法を制御する設定が含まれます。「[ウィンドウタイプ: 新規ブラウザウィンドウ](#)」を参照してください。

「割り当て済みのユーザープロファイル」タブには、ドキュメントにアクセス可能なユーザーオブジェクトが一覧表示されます。「[「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ](#)」を参照してください。

グループオブジェクト

アプリケーションのグループをユーザープロファイル、OU、または組織に関連付けたり、アプリケーションの負荷分散のために類似したアプリケーションサーバーを関連付けたりする場合は、グループオブジェクトを使用します。

グループオブジェクトは OU と同じではありません。アプリケーションやアプリケーションサーバーが所属できる OU は 1 つだけですが、多数のグループのメンバーになることができます。

グループへの所属に影響を与えずに、グループのメンバーを移動することや、メンバーの名前を変更することができます。

グループオブジェクトは、オブジェクトの次のタブに追加できます。

- 「割り当て済みのアプリケーション」タブ。アプリケーションのグループをユーザープロファイルオブジェクト、OU オブジェクト、または組織オブジェクトに割り当てる場合に、このタブを使用します。グループのメンバーが再帰的に表示されますが、グループ自体は表示されません。「[「割り当て済みのアプリケーション」タブ](#)」を参照してください。
- 「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ。アプリケーションサーバーのグループをアプリケーションオブジェクトに割り当てる場合に、このタブを使用します。グループのメンバーが、アプリケーションサーバーの負荷分散に再帰的に使用されます。「[「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ](#)」を参照してください。

グループオブジェクトを作成するには、Administration Console または `tarantella object new_group` コマンドを使用します。

Administration Console では、グループオブジェクトの設定内容がいくつかのタブに分けられています。

「一般」タブには、グループの名前を制御する設定が含まれます。「一般」タブの属性は、次のとおりです。

- 名前
- コメント

「メンバー」タブは、グループオブジェクトのメンバーの表示および編集に使用されます。「[メンバー](#)」タブを参照してください。

「割り当て済みのユーザープロファイル」タブには、グループ内のアプリケーションを実行可能なユーザープロファイルオブジェクトが一覧表示されます。「[割り当て済みのユーザープロファイル](#)」タブを参照してください。

「ホストされているアプリケーション」タブには、グループ内のアプリケーションサーバー上でホストされているアプリケーションのリストが表示されます。「[ホストされているアプリケーション](#)」タブを参照してください。

ユーザープロファイルオブジェクト

組織内のユーザーを表現し、そのユーザーがアプリケーションにアクセスできるようにするには、ユーザープロファイルオブジェクトを使用します。

使用される認証機構によって、ユーザープロファイルオブジェクトを持っていないユーザーでも SGD にログインできる場合があります。

継承を使用するには、ユーザープロファイルオブジェクトを OU 内に作成します。これにより、容易かつ効率的に管理できるようになります（「[割り当て済みアプリケーションを親から継承する](#)」を参照）。

ユーザープロファイルオブジェクトを作成するには、Administration Console または `tarantella object new_person` コマンドを使用します。

Administration Console では、ユーザープロファイルオブジェクトの設定内容がいくつかのタブに分けられています。

「一般」タブには、ユーザーの指定および認証用のユーザー命名設定が含まれます。「一般」タブの属性は、次のとおりです。

- 名前
- コメント
- 姓
- ログイン
- ログイン: 複数
- ログイン名
- 電子メールアドレス
- ドメイン名

「印刷」タブには、ユーザーが Windows アプリケーションから印刷するための設定が含まれます。「印刷」タブの属性は、次のとおりです。

- [クライアント印刷: 上書き](#)
- [クライアント印刷](#)
- [Universal PDF プリンタ](#)
- [Universal PDF プリンタをデフォルトにする](#)
- [Universal PDF ビューア](#)
- [Universal PDF ビューアをデフォルトにする](#)
- [Postscript プリンタドライバ](#)

「パフォーマンス」タブには、ユーザーの帯域幅制限を制御する設定が含まれます。[帯域幅の制限](#)を参照してください。

「クライアントデバイス」タブには、ユーザーのクライアントデバイスがアプリケーションとやりとりする方法を制御する設定が含まれます。「クライアントデバイス」タブの属性は、次のとおりです。

- [クライアントプロファイルの編集](#)
- [コピー&ペースト](#)
- [キーボードマップ](#)
- [シリアルポートマッピング](#)
- [クライアントドライブマッピング](#)

「セキュリティ」タブには、クライアントデバイスと SGD サーバー間で許可される接続を定義する設定が含まれます。[接続](#)を参照してください。

「割り当て済みのアプリケーション」タブには、ユーザーが使用可能なアプリケーションのリストが表示されます。「[割り当て済みのアプリケーション](#) タブ」を参照してください。

「パスワード」タブには、ユーザーのパスワードキャッシュエントリのリストが表示されます。「[パスワード](#) タブ」を参照してください。

「トークン」タブには、ユーザーの認証トークンのリストが表示されます。「[トークン](#) タブ」を参照してください。

「ユーザーセッション」タブには、ユーザーのアクティブなユーザーセッションのリストが表示されます。「[ユーザーセッション](#) タブ」を参照してください。

「アプリケーションセッション」タブには、ユーザーの実行中および中断中のアプリケーションセッションが一覧表示されます。「[アプリケーションセッション](#) タブ」を参照してください。

Windows アプリケーションオブジェクト

Microsoft Windows のグラフィカルアプリケーションをユーザーに提供する場合は、Windows アプリケーションオブジェクトを使用します。

Windows アプリケーションオブジェクトを作成するには、Administration Console または `tarantella object new_windowsapp` コマンドを使用します。

Administration Console では、Windows アプリケーションオブジェクトの設定内容がいくつかのタブに分けられています。

「一般」タブには、ユーザーのリンクの作成時に使用される名前とアイコンを制御する設定が含まれます。「一般」タブの属性は、次のとおりです。

- 名前
- コメント
- アイコン

「起動」タブには、アプリケーションの起動方法、およびアプリケーションセッションの中断/再開を可能にするかどうかを制御する設定が含まれます。「起動」タブの属性は、次のとおりです。

- アプリケーションコマンド
- コマンドの引数
- Windows プロトコル
- Windows プロトコル: 最初にクライアントからの実行を試行する
- プロトコルの引数
- ドメイン名
- ログインスクリプト
- 環境変数
- セッション数
- アプリケーションの再開機能
- アプリケーションの再開機能: タイムアウト
- 起動接続をオープンしたまま保持
- セッション終了
- ウィンドウを閉じるアクション

「プレゼンテーション」タブには、ユーザーへのアプリケーションの表示方法を制御する設定が含まれます。「プレゼンテーション」タブの属性は、次のとおりです。

- ウィンドウタイプ
- ウィンドウマネージャー
- ウィンドウのサイズ: クライアントの最大サイズ
- ウィンドウのサイズ: ウィンドウに合わせて拡大縮小する

- ウィンドウのサイズ: 幅
- ウィンドウのサイズ: 高さ
- 発色数

「パフォーマンス」タブには、アプリケーションのパフォーマンスを最適化するための設定が含まれます。「パフォーマンス」タブの属性は、次のとおりです。

- アプリケーションの負荷分散
- コマンドの圧縮
- コマンドの実行
- 遅延更新
- グラフィックアクセラレーション
- インターレースイメージ

「クライアントデバイス」タブには、ユーザーのクライアントデバイスがアプリケーションとやりとりする方法を制御する設定が含まれます。「クライアントデバイス」タブの属性は、次のとおりです。

- キーボードマップ: ロック
- ウィンドウ管理キー
- ユーロ文字
- コピー&ペースト
- コピー&ペースト: アプリケーションの Clipboard Security Level
- マウスの中ボタンのタイムアウト
- モニターの解像度

「ホストしているアプリケーションサーバー」タブには、アプリケーションをホストしているアプリケーションサーバーが一覧表示されます。「[「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ](#)」を参照してください。

「割り当て済みのユーザープロファイル」タブには、アプリケーションを実行可能なユーザープロファイルオブジェクトが一覧表示されます。「[「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ](#)」を参照してください。

「アプリケーションセッション」タブには、アプリケーションの実行中および中断中のアプリケーションセッションが一覧表示されます。「[「アプリケーションセッション」タブ](#)」を参照してください。

X アプリケーションオブジェクト

X11 のグラフィカルアプリケーションをユーザーに提供する場合は、X アプリケーションオブジェクトを使用します。

X アプリケーションオブジェクトを作成するには、Administration Console または `tarantella object new_xapp` コマンドを使用します。

Administration Console では、X アプリケーションオブジェクトの設定内容がいくつかのタブに分けられています。

「一般」タブには、ユーザーのリンクの作成時に使用される名前とアイコンを制御する設定が含まれます。「一般」タブの属性は、次のとおりです。

- 名前
- コメント
- アイコン

「起動」タブには、アプリケーションの起動方法、およびアプリケーションセッションの中断/再開を可能にするかどうかを制御する設定が含まれます。「起動」タブの属性は、次のとおりです。

- アプリケーションコマンド
- コマンドの引数
- 接続方法
- 接続方法: ssh 引数
- X セキュリティー拡張機能
- ログインスクリプト
- 環境変数
- セッション数
- アプリケーションの再開機能
- アプリケーションの再開機能: タイムアウト
- 起動接続をオープンしたまま保持
- セッション終了
- ウィンドウを閉じるアクション

「プレゼンテーション」タブには、ユーザーへのアプリケーションの表示方法を制御する設定が含まれます。「プレゼンテーション」タブの属性は、次のとおりです。

- ウィンドウタイプ
- ウィンドウマネージャー
- ウィンドウのサイズ: クライアントの最大サイズ
- ウィンドウのサイズ: ウィンドウに合わせて拡大縮小する
- ウィンドウのサイズ: 幅
- ウィンドウのサイズ: 高さ
- ウィンドウの色
- ウィンドウの色: カスタム色

■ 発色数

「パフォーマンス」タブには、アプリケーションのパフォーマンスを最適化するための設定が含まれます。「パフォーマンス」タブの属性は、次のとおりです。

- アプリケーションの負荷分散
- コマンドの圧縮
- コマンドの実行
- 遅延更新
- グラフィックアクセラレーション
- インターレースイメージ
- カラー品質
- 類似セッション間でリソースを共有

「クライアントデバイス」タブには、ユーザーのクライアントデバイスがアプリケーションとやりとりする方法を制御する設定が含まれます。「クライアントデバイス」タブの属性は、次のとおりです。

- キーボードマップ: ロック
- ウィンドウ管理キー
- ユーロ文字
- コピー&ペースト
- コピー&ペースト: アプリケーションの Clipboard Security Level
- オーディオダイレクトライブラリ
- マウス
- マウスの中ボタンのタイムアウト
- モニターの解像度

「ホストしているアプリケーションサーバー」タブには、アプリケーションをホストしているアプリケーションサーバーが一覧表示されます。「[「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ](#)」を参照してください。

「割り当て済みのユーザープロファイル」タブには、アプリケーションを実行可能なユーザープロファイルオブジェクトが一覧表示されます。「[「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ](#)」を参照してください。

「アプリケーションセッション」タブには、アプリケーションの実行中および中断中のアプリケーションセッションが一覧表示されます。「[「アプリケーションセッション」タブ](#)」を参照してください。

属性の参照

この節では、SGD オブジェクトで使用可能な属性について説明します。

属性ごとに、Administration Console での使用方法を示します。対応するコマンド行が存在する場合は、その情報についても提供します。

アドレス

使用法:DNS (Domain Name System) 名または IP (Internet Protocol) アドレスをフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、アプリケーションサーバーオブジェクトです。

説明

この属性は、アプリケーションサーバーのネットワークアドレスを指定します。

DNS 名を使用するのが最良の方法です。

Object Manager: 「Address」

コマンド行

コマンドオプション:--address *address*

使用法: ここで、*address* は DNS 名 (推奨) または IP アドレスです。

次の例では、アプリケーションサーバーのアドレスを `naples.indigo-insurance.com` と指定します。

```
--address naples.indigo-insurance.com
```

応答メッセージ

使用法:テキスト文字列をフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

アプリケーションサーバーからエミュレータに照会が送られた場合に返すメッセージを定義します。

この属性が適用されるのは、VT420 文字型アプリケーションと Wyse 60 文字型アプリケーションに限られます。

Object Manager: 「Behavior」⇒「Answerback Message」

コマンド行

コマンドオプション: `--answermsg message`

使用法: ここで、*message* は、使用するテキスト文字列です。

次の例では、テキスト "My message" をアプリケーションサーバーからの照会に対する応答として返します。

```
--answermsg "My message"
```

アプリケーションコマンド

使用法: アプリケーションのフルパス名をフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション

説明

この属性は、ユーザーが Webtop 上、あるいはデスクトップの「スタート」または「起動」メニューでアプリケーションのリンクをクリックしたときに起動されるアプリケーションを指定します。

このパス名は、アプリケーションを実行できるすべてのアプリケーションサーバー上で同一でなければなりません。

コマンド行引数には、「[コマンドの引数](#)」属性を使用します。

X アプリケーションの場合、「[ウィンドウマネージャー](#)」属性を使って、アプリケーション用のウィンドウマネージャーを起動します。

Windows アプリケーションの場合、サブディレクトリ間のセパレータとして、バックスラッシュ (\) またはスラッシュ (/) を使用できます。コマンド行でバックスラッシュを指定する場合、エスケープシーケンス (\) を使用する必要があります。

Windows アプリケーションの場合、このフィールドを空白のままにすると、特定のアプリケーションの代わりに完全な Microsoft Windows セッションが起動します。

Object Manager: 「General」 ⇒ 「Application Command」

コマンド行

コマンドオプション: `--app pathname`

使用法: ここで、*pathname* は、アプリケーションのフルパス名です。パス名に空白文字が含まれている場合は、引用符 (") か (') で囲む必要があります。

次の例では、UNIX の X アプリケーションを指定しています。

```
--app /usr/local/bin/xfinance
```

次の例では、Windows アプリケーションを指定しています。

```
--app "c:/Program Files/Indigo Insurance/cash.exe"
```

アプリケーションの負荷分散

使用法: 「グローバル設定の上書き」チェックボックスを選択してから、オプションを選択します。「グローバル設定」タブで定義されたグローバル設定を使用するには、「グローバル設定の上書き」ボックスの選択を解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション

説明

この設定により、アプリケーションを起動する際、アプリケーションを実行するアプリケーションサーバーを選択するために、SGD が使用するアルゴリズムが決まります。アプリケーションサーバーは、アプリケーションオブジェクトの「[「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ](#)」で定義されたサーバーから選択されます。

この属性のデフォルト設定では、「グローバル設定」⇒「パフォーマンス」タブで定義された設定が使用されます。「グローバル設定の上書き」チェックボックスを選択してから、オプションを選択することで、これを上書きできます。

次の表に、Administration Console のオプションと対応するコマンド行オプションを示します。

Administration Console	コマンド行	説明
グローバル設定の上書き (選択解除)	default	「グローバル設定」⇒「パフォーマンス」タブで定義されたデフォルトのアルゴリズムを使用します。
最大空きメモリー	memory	もっとも空きメモリーが大きいアプリケーションサーバーを選択します。
最小 CPU 使用量	cpu	CPU (中央演算処理装置) のアイドル時間がもっとも長いアプリケーションサーバーを選択します。
最少アプリケーション数	sessions	SGD を通じて実行されるアプリケーションセッションがもっとも少ないアプリケーションサーバーを選択します。

注 - 「最小 CPU 使用量」および「最大空きメモリー」のアルゴリズムを使用するには、アプリケーションサーバーに SGD 拡張モジュールをインストールする必要があります。

Object Manager: 「General」⇒「Load Balancing Algorithm」

コマンド行

コマンドオプション: `--loadbal default | cpu | memory | sessions`

使用法: 設定値を指定します。

次の例では、アプリケーション実行用の空きメモリーがもっとも多いアプリケーションサーバーを使用します。

```
--loadbal memory
```

アプリケーションの再開機能

使用法: オプションを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、ユーザーがアプリケーションを再開できる時間を決定します。

Administration Console	コマンド行	説明
使用しない	never	アプリケーションを再開することはできません。 ユーザーによる終了機構がないアプリケーションで使用します。たとえば、時計のアプリケーションなどです。
ユーザーセッション中	session	アプリケーションは稼働し続け、ユーザーが SGD からログアウトするまで再開可能です。 たとえば、Web ブラウザを閉じた場合やログアウトすることなく SGD クライアントを停止した場合など、ユーザーが SGD から明示的にログアウトしなかった場合、ユーザーセッションが再開可能に設定されているアプリケーションは、一定の時間稼働し続けます (「 アプリケーションの再開機能: タイムアウト 」を参照)。 これは、デフォルト設定です。
一般	always	アプリケーションは、ユーザーが SGD からログアウトしたあとも、一定時間稼働し続け (「 アプリケーションの再開機能: タイムアウト 」を参照)、次回にログインしたときに再開することができます。 制御された方法で終了する必要があるアプリケーションで使用します。たとえば、終了する前にロックファイルを削除する必要がある電子メールアプリケーションなどです。

「ローカル X サーバー」が「[ウィンドウタイプ](#)」に設定されている X アプリケーションは、「アプリケーションの再開機能」属性の値に関係なく、再開できません。

クライアントデバイスで実行するように設定されている Windows アプリケーション (「[Windows プロトコル: 最初にクライアントからの実行を試行する](#)」を参照) は、「アプリケーションの再開機能」属性の値に関係なく、再開できません。

アプリケーションが再開可能かどうか調べるには、Webtop 上のリンクにマウスポインタを移動して、表示されるポップアップウィンドウを確認します。

Webtop には、個々のアプリケーションセッションを中断、再開するためのコントロールがあります。SGD クライアントを統合モードで使用している場合、再開機能が「一般」に設定されているアプリケーションは、ログアウトすると自動的に中断します。再びログインすると、自動的に再開します。

Object Manager: 「General」⇒「Resumable」

コマンド行

コマンドオプション: `--resumable never | session | always`

使用法: 再開機能のいずれかの有効な設定値を指定します。

次の例では、アプリケーションは決して再開されません。

```
--resumable never
```

次の例では、アプリケーションは、ユーザーが SGD からログアウトするまで再開可能です。

```
--resumable session
```

アプリケーションの再開機能: タイムアウト

使用法: アプリケーションを再開可能にする時間を、分単位でフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性を使うと、SGD サーバー上のリソースをできる限り効率的に使用することができます。この属性は「[アプリケーションの再開機能](#)」属性と一緒に使用され、中断中のアプリケーションセッションを SGD サーバーが終了できる時点を定義します。

アプリケーションの再開機能の設定	再開機能の動作
使用しない	無視されます。
ユーザーセッション中	<p>SGD クライアント接続が失われた場合は、タイマーの計時が始まります。タイマーがこのタイムアウトの値に達すると、SGD サーバーはアプリケーションセッションを終了します。ユーザーが SGD からログアウトした場合、アプリケーションセッションは終了します。</p> <p>SGD クライアントが突然終了したためにアプリケーションが中止される場合、タイムアウト時間は 20 分延長されます。</p>
一般	<p>ログアウトを含め、ユーザーが何らかの方法で SGD サーバーとの接続を解除した時点、または SGD クライアント接続が失われた時点で、タイマーの計時が始まります。タイマーがこのタイムアウトの値に達すると、SGD サーバーはアプリケーションセッションを終了します。</p> <p>SGD クライアントが突然終了したためにアプリケーションが中止される場合、タイムアウト時間は 20 分延長されます。</p>

この属性を空白のままにしておくと、「アプリケーションの再開機能」のデフォルトタイムアウト設定が使用されます。Administration Console の「一般設定」⇒「通信」タブで、デフォルトのタイムアウトを設定できます。

Object Manager: 「Advanced」⇒「Resumable For」

コマンド行

コマンドオプション: `--resumetimeout mins`

使用法: ここで、*mins* は、アプリケーションを再開可能にする時間 (分単位) です。

次の例では、アプリケーションの再開できる時間を少なくとも 30 分間に設定します。このタイムアウト時間は、「ユーザーセッション中」に再開できるよう設定されているアプリケーションに適しています。

```
--resumetimeout 30
```

「アプリケーションセッション」タブ

使用法: 「アプリケーションセッション」タブ内のボタンを使用して、アプリケーションセッションを表示したり管理したりします。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション
- ユーザープロファイル
- アプリケーションサーバー

説明

このタブには、選択したオブジェクトの実行中および中断中のアプリケーションセッションのリストが表示されます。ユーザーにとって、アプリケーションセッションは、アプリケーションサーバー上で実行中のアプリケーションを意味します。

アプリケーションセッションに関するさらに詳細な情報を表示するには、「アプリケーションセッションリスト」テーブル内のアプリケーションセッションのチェックボックスを選択し、「詳細の表示」ボタンをクリックします。

アプリケーションセッションを終了するには、「アプリケーションセッションリスト」テーブル内のアプリケーションセッションのチェックボックスを選択し、「終了」ボタンをクリックします。

アプリケーションセッションをシャドウイングするには、「アプリケーションセッションリスト」テーブル内のアプリケーションセッションのチェックボックスを選択し、「シャドウイング」ボタンをクリックします。中断しているアプリケーションや文字型アプリケーションをシャドウイングすることはできません。

注 — 一部の国では、ユーザーに通知せずにシャドウイングすることが法律で禁じられています。その法律に従う義務があります。

「再読み込み」ボタンをクリックすると、「アプリケーションセッションリスト」テーブルが更新されます。

「検索」オプションを使用すると、「アプリケーションセッションリスト」テーブルを検索できます。ユーザーの識別情報、ユーザープロファイル、Secure Global Desktop サーバー、またはアプリケーションサーバーを検索するときは、検索文字列にワイルドカード「*」を使用できます。「*name*」という検索文字列の入力は、「**name**」の検索に相当し、検索文字列と一致するものがすべて返されます。

「起動時刻」を検索するには、yyyy/mm/dd hh:mm:ss という書式の検索文字列を使用します。

デフォルトでは、検索によって返される結果の数は 150 個に制限されます。

Object Manager: 「Sessions」タブ

コマンド行

アプリケーションセッションを一覧表示、終了、またはシャドウイングするには、コマンド行で `tarantella emulatorsession` コマンドを使用します。[243 ページの「tarantella emulatorsession コマンド」](#)を参照してください。

コマンドオプション:`tarantella emulatorsession list --person pobj`

使用法:ここで、*pobj* は、ユーザープロファイルオブジェクトの完全名です。

次の例では、ユーザープロファイルオブジェクト Indigo Jones のアプリケーションセッションを一覧表示します。

```
tarantella emulatorsession list --person \  
"o=Indigo Insurance/ou=IT/cn=Indigo Jones"
```

アプリケーション起動

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、アプリケーションサーバーオブジェクトです。

説明

この属性は、このアプリケーションサーバーでアプリケーションを実行できるかどうかを指定します。

チェックボックスを選択した場合に、アプリケーションを実行できます。デフォルトでは、チェックボックスは選択されています。アプリケーションがアプリケーションサーバーで起動するには、次の条件を両方とも満たす必要があります。

- アプリケーションサーバーオブジェクトが、アプリケーションオブジェクトの「[「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ](#)」に表示されていること。

- アプリケーションの負荷分散アルゴリズムでこのアプリケーションサーバーが選択されていること。

チェックボックスの選択を解除すると、このアプリケーションサーバーで新しいアプリケーションを起動できなくなります。アプリケーションサーバーを使用できない状態にしても、すでに動作しているアプリケーションに影響はありません。アプリケーションセッションがアプリケーションサーバー上で中断されていて、そのアプリケーションが常に再開できるように設定されている場合には、それらのセッションを再開できます。

この属性を使用して、たとえば、保守作業を行なっている間はアプリケーションサーバーを一時的に使用できない状態にすることができます。特定のアプリケーションがそのアプリケーションサーバーだけで実行するように設定されている場合、ユーザーはそのアプリケーションを使用できなくなります。

Object Manager: 「Available to Run Applications」

コマンド行

コマンドオプション: `--available true | false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、アプリケーションサーバーオブジェクトでアプリケーションを実行可能にします。

```
--available true
```

コマンドの引数

使用法: アプリケーション用のコマンド行引数を、フィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、アプリケーションの起動時に使うコマンド行引数を指定します。実行するアプリケーションは、「[アプリケーションコマンド](#)」属性に引数を付けずに指定します。

X アプリケーションの場合は、`-display` 引数を指定しないでください。ディスプレイは、ユーザーごとに自動的に設定されます。

Object Manager: 「General」⇒「Arguments for Command」

コマンド行

コマンドオプション: `--args args`

使用法: ここで、`args` は、アプリケーション用のコマンド行引数です。引数は引用符 (") か (') で囲む必要があります。

次の例では、コマンド行引数を使って背景の色を `plum4` に設定して、アプリケーションを起動します。

```
--args "-bg plum4"
```

プロトコルの引数

使用法: Windows プロトコル用のコマンド行引数を、フィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、Windows アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、「[Windows プロトコル](#)」で使用するコマンド行引数を指定します。

有効な設定値は Windows プロトコルによって変わります。

Object Manager: 「Advanced」⇒「Protocol Arguments」

コマンド行

コマンドオプション: `--protoargs args`

使用法: ここで、`args` は、Windows プロトコル用のコマンド行引数です。

次の例では、アプリケーションの作業ディレクトリを `c:\mydir` に設定します。この例は、Microsoft RDP プロトコルに適用されます。

```
--protoargs "-dir c:\mydir"
```

「割り当て済みのアプリケーション」タブ

使用法: アプリケーションをユーザープロファイルオブジェクト、組織オブジェクト、または OU オブジェクトに割り当てするには、「編集可能な割り当て」テーブルの「追加」ボタンをクリックします。

ユーザープロファイルオブジェクト、組織オブジェクト、または OU オブジェクト用のアプリケーションを削除するには、「編集可能な割り当て」テーブルの「削除」ボタンをクリックします。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 組織
- 組織単位
- ユーザープロファイル

説明

「割り当て済みのアプリケーション」タブには、選択したユーザープロファイル、組織単位、または組織に割り当てられているアプリケーションのリストが表示されます。

この属性は、ユーザーが使用できる一連のアプリケーションリンクを定義します。各リンクは、「アプリケーションオブジェクトへの参照」として格納されるため、同じアプリケーションオブジェクトを多数のユーザーに割り当てることができます。あとで、オブジェクトが移動された場合、またはオブジェクト名が変更された場合、そのオブジェクトに対するすべての参照は、自動的に更新されます。

アプリケーションのグループを「割り当て済みのアプリケーション」タブに追加した場合、グループ自体ではなく、そのグループのメンバーが割り当てられます。

ユーザープロファイルオブジェクトと組織単位オブジェクトは、組織階層内の親からアプリケーションを継承できます（「[割り当て済みアプリケーションを親から継承する](#)」を参照）。親オブジェクトに割り当てられているアプリケーションを継承するには、「編集可能な割り当て」領域の「割り当て済みアプリケーションを親から継承する」チェックボックスを選択します。

Object Manager: 「Links」タブ

「割り当て済みのアプリケーション」タブの次のセクションが、アプリケーションの表示、選択、および割り当てに使用されます。

- 「有効なアプリケーション」 テーブル
- 「編集可能な割り当て」 テーブル

「有効なアプリケーション」 テーブル

「有効なアプリケーション」 テーブルには、選択したオブジェクトに割り当てられているアプリケーションオブジェクトがすべて表示されます。このテーブルの「ローカル割り当て」セクションには、ローカルリポジトリから選択されたアプリケーションが一覧表示されます。

「割り当てタイプ」列には、次のいずれかが表示されます。

- 「直接的」。この割り当ては、「編集可能な割り当て」テーブルを使用して行われたものです。
- 「間接的」。この割り当ては、グループのメンバーシップや別のオブジェクトからの継承など、別の関係の結果です。
- 「複数」。この割り当てには、複数のソース（「直接的」と「間接的」の両方）があります。

割り当てタイプが「直接的」または「間接的」である場合、「詳細を参照してください」リンクをクリックすると、リンクの発生元をトレースできる情報が表示されます。

「編集可能な割り当て」 テーブル

「編集可能な割り当て」テーブルを使用すると、ローカルリポジトリからアプリケーションを選択できます。

「編集可能な割り当て」テーブルの「追加」ボタンをクリックします。「アプリケーション割り当ての追加」ウィンドウが表示されます。

「アプリケーション割り当ての追加」ウィンドウでアプリケーションを選択するには、次のどちらかを実行します。

- ナビゲーションツリーを参照します。ツリーを参照する際、コンテンツ領域がアプリケーションに合わせて更新されます。
- 「アプリケーションの検索」フィールドを使用します。このフィールドを使用してアプリケーションを検索します。アプリケーションの名前をフィールドに入力します。検索文字列にワイルドカード「*」を使用できます。「name」という検索文字列の入力は、「*name*」の検索に相当し、検索文字列と一致するものがすべて返されます。検索結果は、コンテンツ領域の「検索結果」テーブルに表示されます。デフォルトでは、検索によって返される結果の数は 150 個に制限されます。

コンテンツ領域に表示されたアプリケーションの中から、必要なものを選択します。アプリケーションの選択が終了したら、「追加」ボタンをクリックします。

「割り当て済みのアプリケーション」タブの「有効なアプリケーション」テーブルに、選択したアプリケーションが表示されます。

「割り当て済みのアプリケーション」タブからアプリケーションを削除するには、「編集可能な割り当て」テーブルの「削除」ボタンを使用します。

コマンド行

コマンドオプション:--links *object*

使用法:ここで、*object* は、オブジェクトの完全名です。次に例を示します。

"o=applications/ou=Finance/cn=XClaim" オブジェクト名に空白文字が含まれている場合は、引用符 (") か (') で囲む必要があります。

次の例では、Pers-o-dat と Slide-o-win をリンクとして Webtop に追加します。

```
--links "o=applications/cn=Pers-o-dat" \  
        "o=applications/cn=Slide-o-win"
```

「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ

使用法: ユーザープロファイルをアプリケーションに割り当てるには、「編集可能な割り当て」テーブルの「追加」ボタンをクリックします。LDAP ディレクトリで SGD を使用している場合は、「割り当て済みのユーザープロファイル」タブの「LDAP 検索」領域を使って LDAP ディレクトリサーバー内のユーザーを検索することもできます。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- ドキュメント
- グループ
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

アプリケーションまたはアプリケーションのグループを実行可能なユーザープロファイルオブジェクトを定義する場合に、このタブを使用します。アプリケーションまたはアプリケーションのグループは、「割り当て済みのアプリケーション」タブ内のユーザープロファイル用に定義済みのアプリケーションに追加されます。

ユーザープロファイルオブジェクトは、ローカルリポジトリから選択できます。LDAP ディレクトリを使用している場合は、次のものを選択できます。

- LDAP ディレクトリ内のユーザー
- LDAP ディレクトリ内のユーザーのグループ
- LDAP 検索条件に一致する LDAP ディレクトリ内のユーザー

「割り当て済みのユーザープロファイル」タブの次のセクションが、ユーザープロファイルオブジェクトの表示、選択、および割り当てに使用されます。

- 「有効なユーザープロファイル」テーブル
- 「編集可能な割り当て」テーブル
- 「LDAP 検索」セクション

Object Manager: 「Seen By」タブ

Object Manager: 「Directory Services Integration」⇒ 「LDAP Groups」

Object Manager: 「Directory Services Integration」⇒ 「LDAP Search」

Object Manager: 「Directory Services Integration」⇒ 「LDAP Users」

「有効なユーザープロファイル」テーブル

「有効なユーザープロファイル」テーブルには、アプリケーションに割り当てられているユーザープロファイルオブジェクトがすべて表示されます。このテーブルの「ローカル割り当て」セクションには、ローカルリポジトリから選択されたユーザープロファイルが一覧表示されます。このテーブルの「LDAP 割り当て」セクションには、LDAP ディレクトリから選択されたユーザーが一覧表示されます。テーブルのこの領域を移植するには、「LDAP 割り当てのロード」リンクをクリックする必要があります。

「割り当てタイプ」列には、次のいずれかが表示されます。

- 「直接的」。この割り当ては、「編集可能な割り当て」テーブルを使用して行われたものです。
- 「間接的」。この割り当ては、LDAP 検索、グループのメンバーシップ、別のオブジェクトからの継承など、別の関係の結果です。
- 「複数」。この割り当てには、複数のソース (「直接的」と「間接的」の両方) があります。

割り当てタイプが「直接的」または「間接的」である場合、「詳細を参照してください」リンクをクリックすると、リンクの発生元をトレースできる情報が表示されます。

「編集可能な割り当て」テーブル

「編集可能な割り当て」テーブルを使って、ローカルリポジトリからユーザープロファイルオブジェクトを選択できます。LDAP 認証を使用している場合は、LDAP ディレクトリ内のユーザーやグループも選択できます。

「編集可能な割り当て」テーブルの「追加」ボタンをクリックします。「ユーザー割り当ての追加」ウィンドウが表示されます。

「ユーザー割り当ての追加」ウィンドウで選択可能なものを、次に示します。

- ローカルリポジトリ内のユーザープロファイル
- LDAP ディレクトリ内のユーザー
- LDAP ディレクトリ内のグループ

ローカルリポジトリを使用するには、「リポジトリ」リスト内で「ローカル」オプションを選択します。

ローカルリポジトリおよび LDAP ディレクトリサーバーを使用するには、「リポジトリ」リスト内で「ローカル + LDAP」オプションを選択します。

「ユーザー割り当ての追加」ウィンドウでユーザープロファイルを選択するには、次のどちらかを実行します。

- ナビゲーションツリーを参照します。 ツリーを参照する際、コンテンツ領域がユーザープロファイルに合わせて更新されます。
- 「ユーザープロファイルの検索」フィールドを使用します。選択したリポジトリ内部のユーザープロファイルを検索する場合に、このフィールドを使用します。LDAP ディレクトリ内のユーザーとグループの名前を入力できます。検索文字列にワイルドカード「*」を使用できます。「*name*」という検索文字列の入力は、「**name**」の検索に相当し、検索文字列と一致するものがすべて返されます。検索結果は、コンテンツ領域の「検索結果」テーブルに表示されます。デフォルトでは、検索によって返される結果の数は 150 個に制限されます。「検索結果」テーブルの「一致した属性」フィールドには、検索で一致した LDAP 属性が表示されます。

コンテンツ領域に表示されたユーザープロファイルの中から、必要なものを選択します。ユーザープロファイルの選択が終了したら、「追加」ボタンをクリックします。

「割り当て済みのユーザープロファイル」タブの「有効なユーザープロファイル」テーブルに、選択したユーザープロファイルが表示されます。

「割り当て済みのユーザープロファイル」タブに追加したアプリケーションを削除するには、「編集可能な割り当て」テーブルの「削除」ボタンを使用します。

「LDAP 検索」領域

「LDAP 検索」領域は、LDAP ディレクトリ内のユーザーを検索する際の、検索条件の定義に使用されます。この機能を使って、検索条件に一致する LDAP ディレクトリ内のすべてのユーザーに、アプリケーションまたはアプリケーショングループを割り当てることができます。

検索条件には、次のいずれかを使用できます。

- RFC2254 に準拠する LDAP 検索フィルタ
- RFC1959 に準拠する LDAP URL

RFC2254 検索フィルタを使用する場合は、各検索条件を二重引用符 (") と括弧で囲みます。

LDAP URL を使用する場合は、`ldap:///search-criteria` の書式を使用します。URL に指定したホスト、ポート、および戻り値の属性は、無視されます。これは、SGD 認証の一環として設定された LDAP ディレクトリサーバーが使用されるからです。

「LDAP 検索」領域には、次の 2 つのオプションが含まれます。

- 「簡易検索」。ウィンドウコントロールを使用して、簡単な LDAP 検索フィルタを「作成」できます。「フィルタコンポーネント」テーブルで、一致させる属性を選択し、その検索条件を定義します。
- 「詳細検索」。表示されるフィールドに、LDAP URL または検索フィルタを入力できます。

「簡易検索」オプションは、`cn` や `uid` などの属性に基づいている LDAP 検索フィルタを作成するためのものです。「詳細検索」オプションを使用すると、さらに複雑な LDAP 検索フィルタを作成できます。

簡易検索を作成すると、「詳細検索」領域の LDAP フィルタの文字列は灰色のテキストで表示されます。「詳細検索」オプションを選択すれば、LDAP フィルタの文字列を編集できるようになります。このため、最初に簡易検索を行い、次に手動で検索文字列を編集して詳細検索を指定することができます。

「詳細検索」と「簡易検索」は機能面で互換性がないため、「詳細検索」を指定したあとで「簡易検索」に戻ることはできません。詳細検索をいったん削除してから、簡易検索を入力し直す必要があります。

LDAP ディレクトリ内の検索開始位置を指定するには、「検索ルート」フィールドの横にある「参照」ボタンをクリックします。「LDAP 検索のルートの選択」ウィンドウを使用して、LDAP ディレクトリ内の位置を参照または検索できます。新しい「検索ルート」を選択すると、新しい LDAP URL が読み込まれます。新しい URL は、「参照」ボタンの横と「詳細検索」ボックスに表示されます。

検索で一致させる属性を指定するには、「検索フィルタ」オプションを選択します。すべての属性に一致させる (「すべてに一致」)、いずれかの属性に一致させる (「いずれかに一致」)、どの属性にも一致させない (「どれにも一致しない」)、のいずれかを選択できます。

「プレビュー」ボタンをクリックすると、LDAP 検索により返されたユーザープロフィールのリストが表示されます。

LDAP 検索定義を保存するには、「保存」ボタンをクリックします。

「有効なユーザープロフィール」タブの「LDAP 割り当てのロード」リンクをクリックします。LDAP 検索から返されたユーザープロフィールが、「有効なユーザープロフィール」テーブルの「LDAP 割り当て」セクションに表示されます。

コマンド行

コマンド行では、オブジェクト名に空白文字が含まれている場合は、引用符 (") か (') で囲む必要があります。

LDAP ユーザー

コマンドオプション: `--ldapusers user_dn`

使用法: LDAP ディレクトリ内のユーザーの識別名 (DN) を 1 つ以上入力します。

次の例では、UID が「violet」の Sales 部門のユーザーと UID が「emmarald」の Marketing 部門のユーザーにアプリケーションまたはアプリケーショングループを割り当てます。

```
--ldapusers uid=violet,ou=Sales,dc=indigo-insurance,dc=com uid=emmarald,ou=Marketing,dc=indigo-insurance,dc=com
```

LDAP グループ

コマンドオプション: `--ldapgroups group_dn`

使用法: LDAP ディレクトリ内のグループの DN を 1 つ以上入力します。

入れ子のグループ (サブグループ) が組織で使用されている場合は、グループ検索の階層範囲の変更が必要になる場合があります。

次の例では、Sales 部門と Marketing 部門のマネージャーグループにアプリケーションまたはアプリケーショングループを割り当てます。

```
--ldapgroups cn=managers,ou=Sales,dc=indigo-insurance,dc=com cn=managers,ou=Marketing,dc=indigo-insurance,dc=com
```

LDAP 検索

コマンドオプション: `--ldapsearch search_string`

使用法: 1 つ以上の LDAP 検索文字列を入力します。

次の例では、Sales 部門のマネージャーおよび Violet Carson をマネージャーとするすべての社員にアプリケーションまたはアプリケーショングループを割り当てます。

```
--ldapsearch "(&(job=manager)(dept=Sales))" \
"(manager=Violet Carson)"
```

次の例では、indigo-insurance.com の Sales 部門のマネージャーにアプリケーションまたはアプリケーショングループを割り当てます。

```
--ldapsearch "ldap:///ou=Sales,dc=indigo-insurance,dc=com??sub?job=
manager"
```

属性マップ

使用法: 属性マップのフルパス名をフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、アプリケーションで使用する属性マップを指定します。これは、太字や下線などの文字属性を、色にマッピングします。

デフォルトの属性マップを使用するには、この属性を空のままにしておきます。

属性マップのサンプル `/install-dir/etc/data/attrmap.txt` がインストールされています。

Object Manager: 「Advanced」 ⇒ 「Attribute Map」

コマンド行

コマンドオプション: `--attributemap attrmap`

使用法: ここで、`attrmap` は、使用する属性マップのフルパス名です。

次の例では、指定した属性マップを使用します。

```
--attributemap /install-dir/etc/data/myattrmap.txt
```

オーディオリダイレクトライブラリ

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、X アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、アプリケーションが SGD のオーディオリダイレクトライブラリを有効にするかどうかを指定します。

一部の X アプリケーションは、オーディオ出力に /dev/audio または /dev/dsp デバイスを使用するようにハードコードされています。オーディオリダイレクトライブラリを有効にすると、アプリケーションが、SGDAUDIODEV 環境変数で指定されたデバイスを代わりに使用するようになります。

Object Manager: 「Advanced」⇒「UNIX Audio Enable LD_PRELOAD」

コマンド行

コマンドオプション:--unixaudiopreload true | false

使用法:true または false を指定します。

次の例では、アプリケーションのオーディオリダイレクトライブラリを有効にします。

```
--unixaudiopreload true
```

背景色

使用法:有効なカラーリソース (yellow など) をフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

アプリケーションのテキストウィンドウの背景色を指定します。

色の名前は、X プロトコルエンジンの「**RGB データベース**」属性で指定したファイルを使って、RGB 値に変換されます。

Object Manager: 「3270」⇒「Background Color」

Object Manager: 「5250」⇒「Background Color」

コマンド行

コマンドオプション: `--3270bg color`

コマンドオプション: `--bg color`

使用法: ここで、*color* は、有効なカラーリソース (yellow など) です。

次の例では、3270 アプリケーションのテキストウィンドウの背景色が **plum4** に設定されます。

```
--3270bg plum4
```

次の例では、5250 アプリケーションのテキストウィンドウの背景色が **plum4** に設定されます。

```
--bg plum4
```

帯域幅の制限

使用法: リストから最大帯域幅を選択します。

この属性を持つオブジェクトは、ユーザープロファイルオブジェクトです。

説明

この属性は、ユーザーがクライアントデバイスと、X アプリケーション用および Windows アプリケーション用の SGD サーバーの間で利用できる最大帯域幅を指定します。

制限を指定しない場合は、「なし」を選択します。この場合、ユーザーは、使用可能な範囲で、できるかぎりの帯域幅を使用できます。この設定はネットワーク接続の速度についてアプリケーションの操作性を最高にします。

特定の帯域幅の制限が存在しないかぎり、この属性を変更する必要はありません。通常の使用では、「なし」を選択してください。

次の表に、Administration Console の帯域幅の設定、およびコマンド行で使用する対応する値を示します。

Administration Console	コマンド行
2400 bps	2400
4800 bps	4800
9600 bps	9600
14.4 Kbps	14400
19.2 Kbps	19200
28.8 Kbps	28800
33.6 Kbps	33600
38.8 Kbps	38800
57.6 Kbps	57600
64 Kbps	64000
128 Kbps	128000
256 Kbps	256000
512 Kbps	512000
768 Kbps	768000
1 Mbps	1000000
1.5 Mbps	1500000
10 Mbps	10000000
なし	0

Object Manager: 「General」⇒「Bandwidth Limit」

コマンド行

コマンドオプション: `--bandwidth bandwidth`

使用法: ここで、*bandwidth* は、ビット毎秒の最大帯域幅です。

次の例では、ユーザーに対して最大帯域幅を 512 kbps に制限します。

```
--bandwidth 51200
```

次の例では、ユーザーに対し、使用可能な範囲で、できるかぎりの帯域幅を使用することを許可します。

--bandwidth 0

枠線のスタイル

使用法: オプションを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、端末ウィンドウを浮き上がらせて表示するか、へこませて表示するか、「平ら」に表示する (通常) かを指定します。

Object Manager: 「Appearance」⇒「Border Style」

コマンド行

コマンドオプション: --border normal | indented | raised

使用法: 使用する枠線のスタイルを指定します。

次の例では、端末ウィンドウを浮き上がらせて表示します。

--border raised

クライアントドライブマッピング

使用法: 「クライアントドライブマッピング」テーブルを使用して、クライアントドライブマッピング (CDM) 指定を作成します。CDM 指定の作成、編集、および削除には、「追加」、「編集」、および「削除」ボタンを使用します。「上に移動」および「下に移動」ボタンを使って、指定の順序を変更します。作成した CDM 指定のリストは、「クライアントドライブマッピング」テーブルの「直接定義されたマッピング」セクションに表示されます。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 組織
- 組織単位
- ユーザープロファイル

説明

この属性は、ユーザーが Microsoft Windows、UNIX、および Linux アプリケーションサーバー上で動作するアプリケーションからアクセスできる Microsoft Windows クライアントデバイス上のドライブ、およびアプリケーションサーバー上でそのドライブに使用するドライブ文字を定義します。

「Client Drive Mapping」属性は、ドライブマッピング指定の順番に並べられたリストです。各指定の内容は、次のとおりです。

- クライアントドライブ文字またはタイプ
- クライアントドライブに対して許可するアクセス権
- アプリケーションサーバー上で、クライアントドライブのマッピングに使用するドライブ文字

注 – リスト内で最初に一致したエントリが使用されるので、ドライブ A や B などの固有の設定が、たとえば「すべてのドライブ」など一般性の高い設定よりも前に表示されるようにします。

次の表は、ドライブマッピング指定の各部分について、使用可能なオプションと、それに対応するコマンド行の値を示しています。

指定可能な「クライアントドライブ」のオプションは、次のとおりです。

Administration Console	コマンド行
すべてのドライブ	alldrives
固定ドライブ	fixeddrives
R/W リムーバブル	rw
R/O リムーバブル	ro
ネットワークドライブ	networkdrives
A:, B: ... Z:	a, b ... z

指定可能な「アクセス権」のオプションは、次のとおりです。

Administration Console	コマンド行
読み取り専用	ro
読み取り/書き込み	rw
なし	none

指定可能な「ドライブ文字」のオプションは、次のとおりです。

Administration Console	コマンド行
クライアントと同じ	same
A:, B: ... Z:	a, b ... z

Object Manager: 「Client Drive Mapping」

コマンド行

コマンドオプション: `--cdm drive_spec`

使用法: ここで、*drive_spec* は、*clientdrive:access:driveletter* 形式のドライブマッピング指定です。たとえば、*a:rw:z* のように指定します。各 *drive_spec* はパイプ文字 (|) で区切ります。

ユーザープロファイルオブジェクトの場合、次の例は、クライアントデバイス上のドライブ A に対する読み取り/書き込みアクセス権がアプリケーションサーバー上のドライブ Z を使ってユーザーに付与されることを意味します、また、クライアント上と同じドライブ文字を使ってクライアントデバイス上で定義されているすべてのネットワークドライブに対する読み取り/書き込みアクセス権も付与されることを意味します。

```
--cdm 'a:rw:z|networkdrives:rw:same'
```

ユーザーは、ユーザープロファイルオブジェクトの組織階層内の先祖の「Client Drive Mapping」属性によって、たとえば固定ドライブ C など他のドライブに対するアクセス権も持っています。

クライアント印刷

使用法: オプションを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 組織
- 組織単位
- ユーザープロファイル

説明

Microsoft RDP [Windows プロトコル](#)を使用する Windows アプリケーションから印刷する際に、ユーザーが印刷可能なクライアントプリンタを制御します。

オブジェクトの「[クライアント印刷: 上書き](#)」が有効な場合にのみ、Administration Console を使ってこの属性を編集できます。

この属性の設定は、次のいずれかよりも優先されます。

- 組織階層内の親オブジェクトの設定
- 親オブジェクトの設定が存在しない場合は、Administration Console の「グローバル設定」⇒「印刷」タブで設定されたデフォルト設定

この属性に対する変更が反映されるのは、新規ユーザーセッションだけです。

「プリンタなし」を選択した場合でも、SGD PDF プリンタは使用できます。

次の表に、Administration Console のオプションと対応するコマンド行オプションを示します。

Administration Console	コマンド行	説明
すべてのプリンタ	2	すべてのクライアントプリンタへの印刷をユーザーに許可します
デフォルトプリンタ	1	クライアントのデフォルトプリンタへの印刷をユーザーに許可します
プリンタなし	0	使用可能なクライアントプリンタはありません

デフォルトプリンタだけに印刷できるユーザーが別のプリンタに印刷する場合は、SGD からログアウトしてデフォルトプリンタを変更してから、もう一度ログインする必要があります。

Object Manager: 「Printing」⇒「Client Printers」

コマンド行

コマンドオプション: `--mapprinters 2|1|0`

使用法: 2|1|0 を指定します。

次の例では、ユーザーのデフォルトクライアントプリンタだけに印刷できるようにします。

```
--mapprinters 1
```

クライアント印刷: 上書き

使用法: ユーザープロファイルオブジェクトまたは組織単位オブジェクトの場合は、「親の設定を上書き」チェックボックスを選択します。親オブジェクト用に定義された設定を使用する場合は、「親の設定を上書き」チェックボックスの選択を解除します。

組織オブジェクトの場合は、「グローバル設定の上書き」チェックボックスを選択します。「グローバル設定」⇒「クライアントデバイス」タブで定義されたデフォルト設定を使用するには、「グローバル設定の上書き」チェックボックスの選択を解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 組織
- 組織単位
- ユーザープロファイル

説明

ユーザー固有の印刷設定を有効にします。Microsoft RDP [Windows プロトコル](#)を使用する Windows アプリケーションから印刷を行う際に、この設定が使用されます。

ユーザー固有の印刷設定を有効にすると、このオブジェクトに対する印刷設定内容が、次の設定内容よりも優先されます。

- 組織階層内の親オブジェクトの印刷設定
- 親オブジェクトの印刷設定が存在しない場合は、Administration Console の「グローバル設定」⇒「印刷」タブで設定されたデフォルトの印刷設定

この属性に対する変更が反映されるのは、新規ユーザーセッションだけです。

Object Manager: 「Printing」⇒「User-Specific Printing Configuration」

コマンド行

コマンドオプション: `--userprintingconfig 1|0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、ユーザー固有の印刷設定を有効にします。

```
--userprintingconfig true
```

クライアントプロファイルの編集

使用法:ユーザープロファイルオブジェクトまたは組織単位オブジェクトの場合は、「親の設定を上書き」チェックボックスを選択してから、「有効」オプションを選択または選択解除します。親オブジェクト用に定義された設定を使用する場合は、「親の設定を上書き」チェックボックスの選択を解除します。

組織オブジェクトの場合は、「グローバル設定の上書き」チェックボックスを選択してから、「有効」オプションを選択または選択解除します。「グローバル設定」タブで定義されたデフォルト設定を使用するには、「グローバル設定の上書き」チェックボックスの選択を解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 組織
- 組織単位
- ユーザープロファイル

説明

この属性は、SGD クライアントで使用するプロファイルをユーザーが作成または編集できるかどうかを制御します。

注 – Administration Console の「グローバル設定」⇒「クライアントデバイス」タブでも、プロファイル編集を有効にする必要があります。

次の表に、Administration Console のオプションと対応するコマンド行オプションを示します。

Administration Console	コマンド行	説明
親の設定を上書き (選択解除)	2	ユーザープロファイルまたは組織単位オブジェクト。親オブジェクトから継承した設定を使用します。 これは、デフォルト設定です。
グローバル設定の上書き (選択解除)	2	組織オブジェクト。グローバル設定を使用します。 これは、デフォルト設定です。
有効 (選択)	1	クライアントのプロファイル編集を有効にします。
有効 (選択解除)	0	クライアントのプロファイル編集を無効にします。

ユーザープロファイルオブジェクトまたは組織単位オブジェクトの場合は、「親の設定を上書き」チェックボックスの選択を解除して、組織階層内の親オブジェクトの設定を継承します。これは、各ユーザープロファイルオブジェクトを編集せずに、多数のユーザーのプロファイル編集を有効/無効にする場合に使用します。

組織オブジェクトの場合は、Administration Console の「グローバル設定」⇒「クライアントデバイス」タブで設定されたデフォルト設定を使用するには、「グローバル設定の上書き」チェックボックスの選択を解除します。

SGD は、そのユーザーのユーザープロファイルオブジェクトを検査してから、組織階層の上位にあるすべての親オブジェクトを検査して、プロファイル編集が有効になっているか無効になっているかを確認します。選択したすべてのオブジェクトが親の設定を使用するように構成されている場合は、デフォルト設定が使用されます。

システムオブジェクト組織内で、ユーザープロファイルオブジェクトのプロファイル編集が無効になっている場合は (例: o=Tarantella System Objects/cn=UNIX User Profile)、このプロファイルに割り当てられているすべてのユーザーがこの影響を受けます。

デフォルトでは、プロファイル編集は有効になっています。

Object Manager: 「General」⇒「Profile Editing」

コマンド行

コマンドオプション: `--editprofile 2|1|0`

使用法: `2|1|0` を指定します。

次の例では、プロファイルの編集を無効にします。

```
--editprofile 0
```

コードページ

使用法: オプションを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性により、エミュレータで使うコードページを指定します。文字型アプリケーションのタイプ別に、異なるコードページを指定できます。

アプリケーションのタイプ	指定可能なコードページ
SCO コンソール	<ul style="list-style-type: none">• 437 - 国際語• 850 - マルチリンガル• 852 - 中央ヨーロッパ• 860 - ポルトガル語• 863 - カナダ系フランス語• 865 - 北欧語
VT420	<ul style="list-style-type: none">• 8859-1 - ISO ラテン 1• 8859-2 - ISO ラテン 2
Wyse 60	<ul style="list-style-type: none">• Multinational - 多国語• Mazovia - ポーランド語• CP852

Object Manager: 「Behavior」 ⇒ 「Code Page」

コマンド行

コマンドオプション: `--codepage 437 | 850 | 852 | 860 | 863 | 865 | 8859-1 | 8859-2 | Multinational | Mazovia | CP852`

使用法: 文字型アプリケーションのタイプに合った有効な設定値を指定します。

次の例では、ISO 8859-1 コードページを、該当する VT420 アプリケーションで使用します。

```
--codepage 8859-1
```

発色数

使用法: リストから設定値を選択します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- X アプリケーション
- Windows アプリケーション

説明

アプリケーションの発色数。色の数が増えるにつれて、SGD サーバーおよびクライアントデバイスに必要なメモリーが増え、それら 2 つの間のネットワーク帯域幅が増えます。

Object Manager: 「General」⇒「Color Depth」

X アプリケーション

16/8 ビット、24/8 ビット、8/16 ビット、および 8/24 ビット設定は、X アプリケーションでのみ使用できます。

16/8 ビット、24/8 ビット、8/16 ビット、および 8/24 ビット設定を利用できるので、複数の発色数を使用する X アプリケーションをサポートできます。たとえば、16 ビットまたは 24 ビット High Color の X アプリケーションセッション (CDE デスクトップなど) で 8 ビットアプリケーションを実行する必要がある場合は、16/8 ビットまたは 24/8 ビット設定を使用します。

これらの設定を変更すると、システムのパフォーマンスが次のような影響を受けます。

- 1 つの発色数だけを使用するアプリケーションに比べて、SGD サーバーのメモリー使用量が増えます。
 - 各設定で使用される追加のメモリー使用量は、次のとおりです。
 - 8/16 設定では、メモリー使用量が 200% 増えます。
 - 8/24 設定では、メモリー使用量が 400% 増えます。
 - 16/8 設定では、メモリー使用量が 50% 増えます。
 - 24/8 設定では、メモリー使用量が 25% 増えます。
- 使用される帯域幅が増えます。
- 低帯域幅の接続でパフォーマンスが低下します。

X アプリケーションの発色数を高くしてネットワーク帯域幅を減らすには、「[カラー品質](#)」の設定値を変更します。

Windows アプリケーション

Windows アプリケーションの場合、16 ビットまたは 24 ビットカラーを使用して表示できるのは、Microsoft Windows 2003 Server で動作するアプリケーションだけです。デフォルトでは、Microsoft Windows 2003 Server 上のアプリケーションは 16 ビットカラーで表示されます。Windows アプリケーションオブジェクトの発色数設定がアプリケーションサーバーの設定と異なる場合は、サーバーの設定に一致するように自動的に調整されます。

コマンド行

コマンドオプション: `--depth 8 | 16 | 24 | 16/8 | 24/8 | 8/16 | 8/24`

使用法: 有効な値を指定します。

次の例では、アプリケーションの発色数を 16 ビットカラー (数千色) に設定します。

```
--depth 16
```

カラーマップ

使用法: カラーマップのフルパス名をフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、アプリケーションで使うカラーマップを指定します。カラーマップは、Color_1、Color_2 などの論理色を、表示する色にマッピングします。

デフォルトのカラーマップ `/install-dir/etc/data/colormap.txt` を使用するには、この属性を空のままにしておきます。

Object Manager: 「Advanced」 ⇒ 「Color Map」

コマンド行

コマンドオプション: `--colormap colormap`

使用法: ここで、*colormap* は、使用するカラーマップのフルパス名です。

次の例では、指定したカラーマップを使用します。

```
--colormap /usr/local/maps/mycolormap.txt
```

カラー品質

使用法: リストから設定値を選択します。

この属性を持つオブジェクトは、X アプリケーションオブジェクトです。

説明

クライアントデバイスで表示される実効発色数。カラー品質を下げると帯域幅の使用量は減少しますが、同時に、表示できる色の数が限定されるようになります。

注 – 「**発色数**」が 8-ビットに設定されている場合は、この属性を利用できません。発色数が 16 ビットに設定されている場合、利用できる設定値は 16 ビット、15 ビット、12 ビット、9 ビット、および 6 ビットだけです。

デフォルト設定「アプリケーション開始時の最適値」を使用すると、ユーザーがアプリケーションを起動したときのネットワークの状態に合った最適な発色数に固定されます。発色数は、セッションの実行中には変更されません。

「動的に調整」を指定すると、ネットワークの状態に合わせてカラー品質のレベルをセッション中の好きなときに変更できます。この設定は、次の範囲で機能します。

■ **24 ビット画像 - 12 ～ 24 ビットカラー**

■ **16 ビット画像 - 12 ～ 16 ビットカラー**

次の表に、数値の品質設定を使用するときのカラー品質の効果を示します。

カラー品質設定	16 ビットアプリケーションの カラー品質 (概算)	24 ビットアプリケーション のカラー品質 (概算)
24	-	100%
21	-	88%
18	-	75%
16	100%	67%
15	94%	63%
12	75%	50%
9	56%	38%
6	38%	25%

クライアントデバイスの物理的なカラー品質に、X セッションのカラー品質が強制的に適用されることはありません。たとえば、24 ビットカラーセッションが 8 ビットクライアントデバイスに表示されるときは、そのセッションが適切に表示されるように、画像がクライアント上でディザリングされます。

Object Manager: 「Adaptive Internet Protocol」⇒「Color Quality」

コマンド行

コマンドオプション: `--quality automatic|best|24|21|18|16|15|12|9|6`

使用法: 有効な値を指定します。

次の例では、カラー品質を 12 ビットカラーに設定します。発色数を 24 ビットに設定した場合は、クライアントデバイスでのカラー品質が約 50% まで下がります。

```
--quality 12
```

コマンドの圧縮

使用法: オプションを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション
- 文字型アプリケーション

説明

この属性は、Adaptive Internet Protocol (AIP) が送信時にコマンドを圧縮するかどうかを指定します。

「動的に調整」を選択すると、ネットワークの状態に従って、どの段階でも圧縮のオンとオフを切り替えることができます。

一部のアプリケーションでは、コマンドを圧縮しないで送信するよりも、大きなオーバーヘッドが発生します。このようなアプリケーションでは圧縮をオフにしてください。

Object Manager: 「Adaptive Internet Protocol」⇒「Command Compression」

コマンド行

コマンドオプション: `--compression automatic|on|off`

使用法: 有効なオプションを指定します。

次の例では、AIP によるコマンド圧縮を無効にします。

`--compression off`

コマンドの実行

使用法: オプションを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、Adaptive Internet Protocol (AIP) がコマンドを常に指定順に実行するか、パフォーマンスを最高にするために最適化するかを指定します。

ネットワークの状況によって、設定を決定できるようにするには、「動的に調整」を選択します。

たとえばアニメーションなど、一部のアプリケーションではコマンドを実行する順番が重要です。

Object Manager: 「Adaptive Internet Protocol」⇒「Command Execution」

コマンド行

コマンドオプション: `--execution automatic|inorder|optimized`

使用法: 有効なオプションを指定します。コマンド行でオブジェクト属性を一覧表示すると、次の内容が適用されます。

- 「inorder」属性値は、on として表示されます。
- 「optimized」属性値は、off として表示されます。

次の例では、コマンドをその発生順に実行します。

`--execution inorder`

コメント

使用法: オブジェクトの説明をフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- ドキュメント
- グループ
- アプリケーションサーバー
- 組織
- 組織単位
- ユーザープロファイル
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、オブジェクトの説明です。管理者の注釈を付けるために、これをオプションのコメントフィールドとして使用します。

説明には任意の文字を使用できます。

Object Manager: 「General」⇒「Description」

コマンド行

コマンドオプション: `--description text`

使用法: ここで、*text* はオブジェクトの説明です。説明に空白文字が含まれている場合は、引用符 (") または (') で囲む必要があります。

次の例では、オブジェクトの説明を入力します。たとえば、この説明をドキュメントオブジェクトで 사용할 ことができます。

```
--description "The intranet for Indigo Insurance"
```

接続終了アクション

使用法: `telnet` を閉じる際のオプションを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 3270 アプリケーション

■ 5250 アプリケーション

説明

アプリケーションサーバーへの telnet 接続が閉じるときに Unix 用 TeemTalk エミュレータで実行する処理を指定します。

次の表に、Administration Console のオプションと対応するコマンド行オプションを示します。

Administration Console	コマンド行	説明
ユーザーにアクションを要求	0	ユーザーに、再接続する、接続を閉じる、エミュレータを終了する、のいずれかを選択するように求めます。
再接続	2	3270 アプリケーションサーバーへの再接続を試みます。
接続を閉じる	3	接続を閉じます。
エミュレータを終了	1	Unix 用 TeemTalk エミュレータを終了します。 SGD アプリケーションセッションが終了します。

Object Manager: 「3270」⇒「Close Telnet Action」

Object Manager: 「5250」⇒「Close Telnet Action」

コマンド行

コマンドオプション:--3270tn 0|1|2|3

コマンドオプション:--tn 0|1|2|3

使用法:telnet を閉じる際の有効なオプションのいずれかを指定します。

次の例では、3270 アプリケーションサーバーへの telnet 接続を閉じるときにエミュレータを終了します。

```
--3270tn 1
```

次の例では、5250 アプリケーションサーバーへの telnet 接続を閉じるときにエミュレータを終了します。

```
--tn 1
```

接続方法

使用法:接続方法のオプションを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、SGD サーバーがアプリケーションサーバーにアクセスして、アプリケーションを起動するのに使う機構を指定します。

デフォルトの接続方法は telnet です。

文字型アプリケーションの場合、使用可能な接続方法は telnet および ssh に限られます。

Object Manager: 「General」⇒「Connection Method」

コマンド行

コマンドオプション:--method rexec | telnet | ssh

使用法: 有効な接続方法の 1 つを指定します。すべての接続方法が、すべてのタイプのアプリケーションで使用可能なわけではありません。

次の例では、接続方法 telnet を使ってアプリケーションサーバーにログインします。

```
--method telnet
```

接続

使用法:必要な数だけ接続タイプの指定を、「接続定義」テーブルを使って作成します。接続の作成、変更、および削除には、「追加」、「編集」、および「削除」ボタンを使用します。「上に移動」および「下に移動」ボタンを使って、接続の順序を変更します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 組織
- 組織単位
- ユーザープロファイル

説明

この属性は、DNS 名または IP アドレスの範囲について、クライアントデバイスと SGD サーバーの間で許可する接続を定義します。

ユーザーが SGD サーバーにログインすると、クライアントデバイスと SGD サーバーの DNS 名と IP アドレスを使って、接続のタイプが決定されます。まず、ユーザープロファイルオブジェクトの「接続」属性が選択されます。一致するエントリがない場合、親の組織単位の「接続」属性が選択され、さらに組織階層の上方向へ、組織オブジェクトに達するまで選択されます。

一致する組織オブジェクト用のエントリがない場合は、使用可能なもっとも良い接続が使用されます。

接続タイプの処理は、デフォルトではオフになっており、ユーザーはより高速にログインできます。Administration Console の「グローバル設定」⇒「セキュリティー」タブで、接続タイプの処理を有効にできます。

「接続」属性は、接続タイプの指定を順番に並べたリストです。各指定の内容は、次のとおりです。

- クライアントデバイスの DNS 名または IP アドレス。ワイルドカード ? と * を使って、複数のクライアントデバイスに一致させることができます。
- SGD サーバーの DNS 名または IP アドレス。ワイルドカード ? と * を使って、複数の SGD サーバーに一致させることができます。
- 接続タイプ

どの場合でも、DNS 名または IP アドレスは、SGD サーバーの観点から処理されます。これらは、ピア DNS 名および IP アドレスです。ネットワークがファイアウォールの両側で異なる名前を使うよう設定されている場合、SGD サーバーの側の名前をこの属性に使用する必要があります。

使用可能な接続タイプは次のとおりです。

Administration Console	コマンド行	注
標準	STD	常に使用可能です。
セキュア	SSL	ユーザーに、クライアントデバイスと SGD サーバーの間の SSL ベースのセキュア接続を提供します。 SGD セキュリティーサービスが有効な場合にだけ使用できます。それ以外の場合、セキュア接続を使用するよう設定されているユーザーにも、標準接続が代わりに提供されます。

注 – SGD サーバー上でセキュリティーサービスが有効に設定されている場合、すべての接続は、ユーザーがログインするまではセキュア接続です。ユーザーが識別されると、接続がダウングレードされる場合があります。

Object Manager: 「Connections」タブ

コマンド行

コマンドオプション: `--conntype type_spec`

使用法:ここで、*type_spec* は、*client:server:type* 形式の接続タイプ指定です。たとえば、`192.168.5.*:*:STD` と指定します。

各 *type_spec* は「パイプ」文字 (|) をで区切ります。

次の例では、ユーザープロファイルオブジェクトの場合、クライアントデバイスの IP アドレスが 192.168.5 で始まっていると、ユーザーはすべての SGD サーバーに対してセキュア接続を使用します。クライアントデバイスの IP アドレスが 192.168.5 で始まっていないと、ユーザーは SGD サーバーに対して標準接続を使用します。

```
--conntype '192.168.5.*:*:SSL|*:*:STD'
```

上記の属性を組織単位オブジェクトまたは組織オブジェクトに設定した場合、これらの接続タイプの指定が使用されるのは、ユーザープロファイルオブジェクトの「[接続](#)」属性に、クライアントデバイスおよび SGD サーバー用の一致するエントリがない場合に限られます。

接続方法: ssh 引数

使用法: 「ssh の接続方法」 オプションを選択して、ssh のコマンド行引数をフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性を使用すると、アプリケーションの「[接続方法](#)」が ssh の場合に、ssh クライアントのコマンド行引数を指定できます。

SGD での ssh のインストールおよび使用方法の詳細は、『Sun Secure Global Desktop 管理者ガイド』を参照してください。

Object Manager: 「Advanced」 ⇒ 「SSH Arguments」

コマンド行

コマンドオプション: `--ssharguments args`

使用法: ここで、*args* は、ssh コマンド行引数です。

次の例では、アプリケーションを使用するときに `-x` コマンド行オプションを使用するように、ssh クライアントを設定します。これにより、X11 転送が有効になります。

```
--ssharguments "-X"
```

コピー&ペースト

使用法: ユーザープロファイルオブジェクトまたは組織単位オブジェクトの場合は、「親の設定を上書き」チェックボックスを選択してから、「有効」オプションを選択または選択解除します。親オブジェクト用に定義された設定を使用する場合は、「親の設定を上書き」チェックボックスの選択を解除します。

組織オブジェクトの場合は、「グローバル設定の上書き」チェックボックスを選択してから、「有効」オプションを選択または選択解除します。「グローバル設定」⇒「クライアントデバイス」タブで定義されたデフォルト設定を使用するには、「グローバル設定の上書き」チェックボックスの選択を解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 組織
- 組織単位
- ユーザープロファイル

説明

この属性は、Windows または X アプリケーションのセッションでユーザーがコピー＆ペーストを使用できるかどうかを制御します。

ユーザープロファイルオブジェクトまたは組織単位オブジェクトの場合は、「親の設定を上書き」チェックボックスの選択を解除して、組織階層内の親オブジェクトの設定を継承します。これは、各ユーザープロファイルオブジェクトを編集せずに、多数のユーザーのコピー＆ペーストを有効/無効にする場合に使用します。

組織オブジェクトの場合は、Administration Console の「グローバル設定」⇒「クライアントデバイス」タブで設定されたデフォルト設定を使用するには、「グローバル設定の上書き」チェックボックスの選択を解除します。

ユーザーがアプリケーションを起動すると、SGD はそのユーザーのユーザープロファイルオブジェクトを検査してから、組織階層の上位にあるすべての親オブジェクトを検査して、コピー＆ペーストが有効になっているか無効になっているかを確認します。選択したすべてのオブジェクトが親の設定を使用するように構成されている場合は、デフォルト設定が使用されます。

デフォルトでは、コピー＆ペーストは使用可能になっています。

次の表に、Administration Console のオプションと対応するコマンド行オプションを示します。

Administration Console	コマンド行	説明
親の設定を上書き (選択解除)	2	ユーザープロファイルまたは組織単位オブジェクト。親オブジェクトから継承した設定を使用します。 これは、デフォルト設定です。

Administration Console	コマンド行	説明
グローバル設定の上書き (選択解除)	2	組織オブジェクト。グローバル設定を使用します。 これは、デフォルト設定です。
有効 (選択)	1	コピー&ペーストを有効にします。
有効 (選択解除)	0	コピー&ペーストを無効にします。

この属性に対する変更が反映されるのは、新規アプリケーションセッションだけです。

Object Manager: 「General」 ⇒ 「Clipboard Access」

コマンド行

コマンドオプション: `--clipboard 2|1|0`

使用法: 2|1|0 を指定します。

次の例では、ユーザーの Windows または X アプリケーションセッションでコピー&ペーストを無効にします。

```
--clipboard 0
```

コピー&ペースト: アプリケーションの Clipboard Security Level

使用法: フィールドに数値を入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- Windows アプリケーション
- X アプリケーション

説明

この属性を使用して、Windows または X アプリケーションのセッションにおけるユーザーのコピー&ペースト操作を制御します。

セキュリティレベルを指定する場合に、この属性を使用します。セキュリティレベルには、任意の正の整数を指定できます。数値が大きくなるほど、セキュリティレベルも高くなります。

アプリケーションのセキュリティーレベルがソースアプリケーション (データのコピー元アプリケーション) と同等以上である場合のみ、そのアプリケーションにデータをコピー&ペーストできます。

SGD クライアントも、セキュリティーレベルを保持します。クライアントがソースアプリケーションと同等以上のセキュリティーレベルを保持している場合のみ、そのクライアントデバイス上で稼働しているアプリケーションにデータをコピー&ペーストできます。[40 ページの「クライアントの Clipboard Security Level」](#)を参照してください。

コマンド行で -1 を指定して、コピー&ペースト操作を無効にします。

デフォルトのセキュリティーレベルは 3 です。

この属性に対する変更が反映されるのは、新規アプリケーションセッションだけです。

Object Manager: 「General」⇒「Clipboard Security Level」

コマンド行

コマンドオプション: `--clipboardlevel level`

使用法:ここで、*level* は、セキュリティーレベルです。

次の例では、アプリケーションのセキュリティーレベルを 5 に設定します。ソースアプリケーションまたは SGD クライアントのセキュリティーレベルが 5 以下の場合のみ、このアプリケーションに対してデータをコピー&ペーストできます。

```
--clipboardlevel 5
```

カーソル

使用法:カーソルスタイルのオプションを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、アプリケーション内にカーソルを表示する方法を指定します。

Object Manager: 「Appearance」⇒「Cursor」

コマンド行

コマンドオプション: `--cursor off | block | underline`

使用法: 使用するカーソルスタイルを指定します。

次の例では、カーソルとして下線を使用します。

```
--cursor underline
```

カーソルキーコードの変更

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、カーソルキーの動作を指定します。この属性により、カーソル移動コードを常に生成するか、カーソルキーが生成したコードをアプリケーションで変更するかが決まります。

この属性が適用されるのは、VT420 文字型アプリケーションに限られます。

Object Manager: 「Behavior」⇒「Cursor Keys」

コマンド行

コマンドオプション: `--cursorkeys application | cursor`

使用法: 必要なカーソルキーの動作を指定します。

次の例では、カーソルキーにカーソル起動コードを常に生成させます。

```
--cursorkeys cursor
```

遅延更新

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- Windows アプリケーション
- X アプリケーション

- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、表示の遅延更新を許可するかどうかを指定します。許可すると変更を蓄積することで、パフォーマンスを向上させます。

アプリケーションの表示が常に正確でなければならない場合は、このチェックボックスの選択を解除します。パフォーマンスを向上させるには、アニメーションの遅延更新をオフにします。

Object Manager: 「Adaptive Internet Protocol」⇒「Allow Delayed Updates」

コマンド行

コマンドオプション: `--delayed true|false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、アプリケーションの表示の遅延更新を有効にします。

```
--delayed true
```

表示されるソフトボタン

使用法: オプションを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

「ソフトボタン」のレベルをいくつ表示するかを指定します。

Object Manager: 「3270」⇒「Soft Button Levels」

Object Manager: 「5250」⇒「Soft Button Levels」

コマンド行

コマンドオプション:--3270b1 0|1|2|3|4

コマンドオプション:--b1 0|1|2|3|4

使用法: 0 ~ 4 のレベルを指定します。

次の例では、3270 アプリケーションの「ソフトボタン」のレベル数を 2 に設定します。

```
--3270b1 2
```

次の例では、5250 アプリケーションの「ソフトボタン」のレベル数を 2 に設定します。

```
--b1 2
```

ドメイン名

使用法: アプリケーションサーバーの認証に使用するドメインをフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- アプリケーションサーバー
- Windows アプリケーション
- ユーザープロファイル

説明

この属性は、アプリケーションサーバーの認証プロセスに使用するドメインを指定します。

注 – この属性は、SGD ログインには影響しません。

Object Manager: 「General」⇒「Windows NT Domain」

コマンド行

コマンドオプション:--ntdomain *dom*

使用法: ここで、*dom* は、アプリケーションサーバーの認証に使用するドメインです。

次の例では、ドメイン indigo を使って認証します。

```
--ntdomain indigo
```

電子メールアドレス

使用法:ユーザーの電子メールアドレスをフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、ユーザープロファイルオブジェクトです。

説明

この属性は、ユーザーの電子メールアドレスを、*name@domain* の書式で指定します。

ユーザーの認証時に、SGD はこの属性を使ってユーザーを識別できます。

Object Manager: 「General」⇒「Email Address」

コマンド行

コマンドオプション:--email *email*

使用法:ここで、*email* は、ユーザーの電子メールアドレスです。

次の例では、ユーザーの電子メールアドレスを indigo@indigo-insurance.com と定義します。

```
--email indigo@indigo-insurance.com
```

エミュレーションタイプ

使用法:エミュレーションタイプのオプションを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

アプリケーションに必要なエミュレーションのタイプを識別します。設定可能な値は SCO Console、VT420、または Wyse 60 です。選択したエミュレーションタイプに適した「[端末タイプ](#)」を設定してください。

すべての文字型アプリケーション属性をすべてのエミュレーションタイプに適用できるわけではありません。Administration Console では、エミュレーションタイプのオプションを選択すると、オブジェクトのほかの属性が有効または無効になります。

Object Manager: 「General」⇒「Emulation Type」

コマンド行

コマンドオプション: `--emulator scoconsole | vt420 | wyse60`

使用法: 適切なエミュレーションタイプを指定します。

次の例では、アプリケーションに Wyse 60 端末エミュレーションを使用します。

```
--emulator wyse60
```

環境変数

使用法: フィールドに、環境変数を 1 行に 1 つずつ入力します。新規エントリを追加するには、リターンキーを押します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、アプリケーションを実行するのに必要なすべての環境変数を指定します。たとえば、共用ライブラリにアクセスするには、環境変数 `LD_LIBRARY_PATH` を設定する必要があります。

環境変数の値に空白文字が含まれている場合、引用符 (") か (') で囲んでください。

`DISPLAY` 変数を設定しないでください。ディスプレイは、SGD によってユーザーごとに自動的に設定されます。

Object Manager: 「Advanced」⇒「Environment Variables」

コマンド行

コマンドオプション: `--env setting`

使用法: ここで、*setting* は、`VARIABLE=value` 形式の環境変数設定です。複数の変数を設定するときは、複数の `--env` 引数を使用します。

次の例では、環境変数を 2 つ設定して、アプリケーションを実行します。

```
--env LD_LIBRARY_PATH=/usr/lib "MY_VARIABLE=603 1769"
```

エスケープシーケンス

使用法: オプションを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、エミュレータからアプリケーションサーバーにエスケープシーケンスを送信する方法を指定します。エスケープシーケンスは 7 ビットまたは 8 ビットの制御コードとして送信できます。

この属性が適用されるのは、VT420 文字型アプリケーションに限られます。

Object Manager: 「Behavior」⇒「Escape Sequences」

コマンド行

コマンドオプション: `--escape 7-bit | 8-bit`

使用法: 有効な値を指定します。

次の例では、エスケープシーケンスを 8 ビットの制御コードを使って送信します。

```
--escape 8-bit
```

ユーロ文字

使用法: リストから設定値を選択します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- Windows アプリケーション

- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、ユーロ文字をサポートするアプリケーションに必要なキーコードマッピングを指定します。現在、ユーロ文字に対応している大部分のアプリケーションは iso8859-15 を使用しています。疑問がある場合は、使用している X アプリケーションのマニュアルを調べて、使用方法を確認してください。

SGD でユーロ文字を使用するには、クライアントデバイスにユーロ文字の入力機能がなければなりません。

ユーロ文字を表示するには、iso8859-15 フォントを使用するようにアプリケーションを設定する必要があります。「[コマンドの引数](#)」属性に、以下のいずれかの値を追加します。

```
-fn 5x7euro  
-fn 6x10euro  
-fn 6x13euro  
-fn 6x13boldeuro  
-fn 7x13euro  
-fn 7x13boldeuro  
-fn 7x14euro  
-fn 7x14boldeuro  
-fn 8x13euro  
-fn 8x13boldeuro  
-fn 8x16euro  
-fn 9x15euro  
-fn 9x15boldeuro  
-fn 10x20euro  
-fn 12x24euro
```

設定すると、アプリケーションは SGD で提供する iso8859-15 フォントを使用します。必要に応じて、ユーザー独自のフォントを使用できます。ただし、ユーロ文字を表示するには、iso8859-15 との互換性がなければなりません。

アプリケーションサーバーも、ユーロ文字をサポートする必要があります。

Object Manager: 「Advanced」 ⇒ 「Euro Character」

コマンド行

コマンドオプション:--euro unicode|iso8859-15

使用法:有効なオプションを指定します。

次の例では、キーコードマッピング iso8859-15 を有効にします。

```
--euro iso8859-15
```

「ファイル」メニューと「設定」メニュー

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

「ファイル」メニューと「設定」メニューの項目を有効にするかどうかを指定します。無効にした場合は、ウィンドウのサイズを変更するボタンだけがメニューバーに表示されます。

Object Manager: 「3270」⇒「Enable File and Settings Menus」

Object Manager: 「5250」⇒「Enable File and Settings Menus」

コマンド行

コマンドオプション:--3270si true|false

コマンドオプション:--si true|false

使用法: true または false を指定します。

次の例は、3270 アプリケーションの「ファイル」メニューと「設定」メニューの項目を有効にします。

```
--3270si true
```

次の例は、5250 アプリケーションの「ファイル」メニューと「設定」メニューの項目を有効にします。

```
--si true
```

フォントファミリー

使用法: リストからフォントファミリーを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、アプリケーション用の端末ウィンドウで使用するフォントファミリーを決定します。

使用可能なフォントファミリーは、Courier、Helvetica、または Times Roman だけです。これ以外のフォントファミリーを使用することはできません。

Object Manager: 「Appearance」⇒「Font Family」

コマンド行

コマンドオプション: `--font courier | helvetica | timesroman`

使用法: 有効なフォントファミリーを指定します。

次の例は、アプリケーションの端末ウィンドウで Times Roman フォントを使用します。

```
--font timesroman
```

フォントサイズ

使用法: フィールドにフォントサイズ (ポイント) を入力します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は端末ウィンドウのフォントサイズを 2 ～ 20 ポイントの範囲で定義します。

Object Manager: 「Appearance」⇒「Font Size」

コマンド行

コマンドオプション: `--fontsize points`

使用法: ここで、*points* は、フォントサイズ (ポイント) です。

次の例では、端末ウィンドウのフォントを 16 ポイントに指定します。

```
--fontsize 16
```

フォントサイズ: 固定フォントサイズ

使用法: 「固定フォントサイズ」チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性が選択されていない場合、エミュレータは、アプリケーションの「[ウィンドウのサイズ: 幅](#)」と「[ウィンドウのサイズ: 高さ](#)」に定義されている「[ウィンドウのサイズ: カラム](#)」と「[ウィンドウのサイズ: 行](#)」に合わせて、フォントサイズを選択します。アプリケーションの「[フォントサイズ](#)」の設定が、最小値として使用されます。

この属性が選択されている場合、定義されている「[フォントサイズ](#)」が使用され、必要に応じてスクロールバーが表示されます。

注 – この属性を選択した場合、「[ウィンドウのサイズ: クライアントの最大サイズ](#)」属性は無視されます。

Object Manager: 「Appearance」⇒「Fixed Font Size」

コマンド行

コマンドオプション: `--fixedfont true|false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、「[フォントサイズ](#)」で指定されたフォントサイズを端末ウィンドウに使用します。

```
--fixedfont true
```

前景色

使用法:有効なカラーリソース (yellow など) をフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

アプリケーションのテキストウィンドウのテキストの色を指定します。

色の名前は、X プロトコルエンジンの「RGB データベース」属性で指定したファイルを使って、RGB 値に変換されます。

Object Manager: 「3270」⇒「Foreground Color」

Object Manager: 「5250」⇒「Foreground Color」

コマンド行

コマンドオプション:--3270fg *color*

コマンドオプション:--fg *color*

使用法: ここで、*color* は、有効なカラーリソース (yellow など) です。

次の例では、3270 アプリケーションのテキストウィンドウ内のテキストの色が plum4 に設定されます。

```
--3270fg plum4
```

次の例では、5250 アプリケーションのテキストウィンドウ内のテキストの色が plum4 に設定されます。

```
--fg plum4
```

グラフィックアクセラレーション

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- Windows アプリケーション
- X アプリケーション

- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、グラフィックスの高速化を使用するかどうかを指定します。高速化は、グラフィックスの描画方法を最適化し、パフォーマンスを向上させますが、スムーズさと正確さを引き換えにします。たとえば、常に正確な色ではなくなります。

アプリケーションの表示が常に正確でなければならない場合は、このチェックボックスの選択を解除します。

Object Manager: 「Adaptive Internet Protocol」⇒「Use Graphics Acceleration」

コマンド行

コマンドオプション: `--accel true | false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、アプリケーションの表示のグラフィックアクセラレーションを有効にします。

```
--accel true
```

ヒント

使用法: ヒントをフィールドに入力します。各ヒントはセミコロン (;) で区切ります。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- ドキュメント
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性を使用すると、Webtop でオブジェクトの公開と表示を制御するための 1 つ以上の文字列を定義できます。

使用できる文字列の数には制限はなく、文字列の内容はどのようなものでもかまいません。各ヒントはセミコロン (;) で区切ります。Webtop ヒントには、名前 = 値という規則で名前を付けます。

この属性は、デフォルトでは空白です。

この属性は、SGD Web サービスを使用して独自の Webtop を開発する開発者のために用意されています。

注 – この属性は、Administration Console では使用できません。

Object Manager: 「General」⇒「Webtop Hints」

コマンド行

コマンドオプション: `--hints hint...`

使用法:ここで、*hint* は、Webtop ヒントです。各ヒントはセミコロン (;) で区切ります。

次の例では、アプリケーションの Webtop アイコンのサイズを指定する際に使用できるヒントを設定します。

```
--hints "preferredsize=16;"
```

「ホストされているアプリケーション」タブ

使用法: アプリケーションをアプリケーションサーバーオブジェクトに割り当てるには、「編集可能な割り当て」テーブルの「追加」ボタンをクリックします。

アプリケーションサーバーオブジェクトのアプリケーションを削除するには、「編集可能な割り当て」テーブルの「削除」ボタンを使用します。

この属性を持つオブジェクトは、アプリケーションサーバーオブジェクトです。

説明

「ホストされているアプリケーション」タブには、アプリケーションサーバーによってホストされているアプリケーションのリストが表示されます。

Object Manager: 「Seen By」タブ

「ホストされているアプリケーション」タブの次のセクションが、アプリケーションの表示、選択、および割り当てに使用されます。

- 「有効なアプリケーション」テーブル
- 「編集可能な割り当て」テーブル

「有効なアプリケーション」テーブル

「有効なアプリケーション」テーブルには、選択したオブジェクトに割り当てられているアプリケーションオブジェクトがすべて表示されます。このテーブルの「ローカル割り当て」セクションには、ローカルリポジトリから選択されたアプリケーションが一覧表示されます。

「割り当てタイプ」列には、次のいずれかが表示されます。

- 「直接的」。この割り当ては、「編集可能な割り当て」テーブルを使用して行われたものです。
- 「間接的」。この割り当ては、グループのメンバーシップや別のオブジェクトからの継承など、別の関係の結果です。
- 「複数」。この割り当てには、複数のソース（「直接的」と「間接的」の両方）があります。

割り当てタイプが「直接的」または「間接的」である場合、「詳細を参照してください」リンクをクリックすると、リンクの発生元をトレースできる情報が表示されます。

「編集可能な割り当て」テーブル

「編集可能な割り当て」テーブルを使用すると、ローカルリポジトリからアプリケーションを選択できます。

「編集可能な割り当て」テーブルの「追加」ボタンをクリックします。「アプリケーション割り当ての追加」ウィンドウが表示されます。

「アプリケーション割り当ての追加」ウィンドウでアプリケーションを選択するには、次のどちらかを実行します。

- ナビゲーションツリーを参照します。ツリーを参照する際、コンテンツ領域がアプリケーションに合わせて更新されます。
- 「アプリケーションの検索」フィールドを使用します。このフィールドを使用してアプリケーションを検索します。アプリケーションの名前をフィールドに入力します。検索文字列にワイルドカード「*」を使用できます。「*name*」という検索文字列の入力は、「**name**」の検索に相当し、検索文字列と一致するものがすべて返されます。検索結果は、コンテンツ領域の「検索結果」テーブルに表示されます。デフォルトでは、検索によって返される結果の数は 150 個に制限されます。

コンテンツ領域に表示されたアプリケーションの中から、必要なものを選択します。アプリケーションの選択が終了したら、「追加」ボタンをクリックします。

「ホストされているアプリケーション」タブの「有効なアプリケーション」テーブルに、選択したアプリケーションが表示されます。

「ホストされているアプリケーション」タブからアプリケーションを削除するには、「編集可能な割り当て」テーブルの「削除」ボタンを使用します。

コマンド行

この属性に相当するコマンド行はありません。

「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ

使用法: アプリケーションサーバーを文字型アプリケーションオブジェクト、Windows アプリケーションオブジェクト、または X アプリケーションオブジェクトに割り当てるには、「編集可能な割り当て」テーブルの「追加」ボタンをクリックします。

文字型アプリケーションオブジェクト、Windows アプリケーションオブジェクト、または X アプリケーションオブジェクトのアプリケーションサーバーを削除するには、「編集可能な割り当て」テーブルの「削除」ボタンを使用します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション

説明

この属性は、アプリケーションを実行できるアプリケーションサーバーを定義します。SGD サーバーは、アプリケーションサーバーの負荷分散機能を使って、使用するアプリケーションサーバーを決定します。各アプリケーションサーバーは、オブジェクトに対する参照として格納されるので、特定のオブジェクトが多くの「ホストしているアプリケーションサーバー」タブに表示されることがあります。あとで、オブジェクトが移動された場合、またはオブジェクト名が変更された場合、そのオブジェクトに対するすべての参照は、自動的に更新されます。

グループを「ホストしているアプリケーションサーバー」タブに追加した場合、グループ自体ではなく、そのグループのメンバーがアプリケーションサーバーの負荷分散に使用されます。

アプリケーションを実行するアプリケーションサーバーを指定しない場合、アプリケーションは、そのタイプのアプリケーションをサポートしているアレイ内のすべての SGD サーバー上で実行できます。

Object Manager: 「Hosts」 タブ

「ホストしているアプリケーションサーバー」タブの次のセクションが、アプリケーションの表示、選択、および割り当てに使用されます。

- 「有効なアプリケーションサーバー」 テーブル
- 「編集可能な割り当て」 テーブル

「有効なアプリケーションサーバー」 テーブル

「有効なアプリケーションサーバー」 テーブルには、選択したオブジェクトに割り当てられているアプリケーションサーバーオブジェクトがすべて表示されます。このテーブルの「ローカル割り当て」セクションには、ローカルリポジトリから選択されたアプリケーションが一覧表示されます。

「割り当てタイプ」列には、次のいずれかが表示されます。

- 「直接的」。この割り当ては、「編集可能な割り当て」テーブルを使用して行われたものです。
- 「間接的」。この割り当ては、グループのメンバーシップや別のオブジェクトからの継承など、別の関係の結果です。
- 「複数」。この割り当てには、複数のソース（「直接的」と「間接的」の両方）があります。

割り当てタイプが「直接的」または「間接的」である場合、「詳細を参照してください」リンクをクリックすると、リンクの発生元をトレースできる情報が表示されます。

「編集可能な割り当て」 テーブル

「編集可能な割り当て」テーブルを使用すると、ローカルリポジトリからアプリケーションサーバーを選択できます。

「編集可能な割り当て」テーブルの「追加」ボタンをクリックします。「アプリケーションサーバー割り当ての追加」ウィンドウが表示されます。

「アプリケーションサーバー割り当ての追加」ウィンドウでアプリケーションサーバーを選択するには、次のどちらかを実行します。

- ナビゲーションツリーを参照します。ツリーを参照する際、コンテンツ領域がアプリケーションサーバーに合わせて更新されます。

- 「アプリケーションサーバーの検索」フィールドを使用します。このフィールドを使用してアプリケーションサーバーを検索します。アプリケーションサーバーの名前をフィールドに入力します。検索文字列にワイルドカード「*」を使用できます。「name」という検索文字列の入力は、「*name*」の検索に相当し、検索文字列と一致するものがすべて返されます。検索結果は、コンテンツ領域の「検索結果」テーブルに表示されます。デフォルトでは、検索によって返される結果の数は 150 個に制限されます。

コンテンツ領域に表示されたアプリケーションサーバーの中から、必要なものを選択します。アプリケーションサーバーの選択が終了したら、「追加」ボタンをクリックします。

「ホストしているアプリケーションサーバー」タブの「有効なアプリケーションサーバー」テーブルに、選択したアプリケーションサーバーが表示されます。

「ホストしているアプリケーションサーバー」タブからアプリケーションサーバーを削除するには、「編集可能な割り当て」テーブルの「削除」ボタンを使用します。

コマンド行

コマンドオプション: `--appserv object`

使用法:ここで、*object* は、オブジェクトの完全名です (例: "o=appservers/ou=IT/cn=london")。オブジェクト名に空白文字が含まれている場合は、引用符 (") か (') で囲む必要があります。

次の例では、geneva と prague をアプリケーション用のアプリケーションサーバーとして追加します。

```
--appserv "o=appservers/ou=IT/cn=geneva" \  
          "o=appservers/cn=prague"
```

アイコン

使用法:「編集」ボタンをクリックして、「アプリケーションアイコンの選択」リストでアイコンのオプションを選択します。「了解」をクリックして、設定を保存します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- ドキュメント
- 3270 アプリケーション

■ 5250 アプリケーション

説明

この属性は、ユーザーの Webtop、あるいはデスクトップの「スタート」または「起動」メニューに表示されるアイコンを指定します。

Object Manager: 「General」⇒「Webtop Icon」

コマンド行

コマンドオプション: `--icon icon_name`

使用法:ここで、*icon_name* は、拡張子を含むファイル名です (例: `spreadsheet.gif`)。

次の例では、`clock.gif` アイコンを使用します。

```
--icon clock.gif
```

割り当て済みアプリケーションを親から継承する

使用法:チェックボックスを選択または選択解除して、「保存」ボタンをクリックします。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 組織単位
- ユーザープロファイル

説明

この属性は、オブジェクトの割り当て済みアプリケーションに、組織階層内のオブジェクトの親の割り当て済みアプリケーションも含めるかどうかを決定します。

親オブジェクトのこの属性の設定によって、Webtop コンテンツの集合は、最後に組織オブジェクトに達するまで階層を遡り続けることが可能です。

Object Manager: 「General」⇒「Inherit Parents Webtop Content」

コマンド行

コマンドオプション: `--inherit true | false`

使用法: true または false を指定します。

次の例では、オブジェクトは、親オブジェクトから Webtop コンテンツを継承します。

```
--inherit true
```

インターレースイメージ

使用法: オプションを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、イメージを一続きのインターレースパスで送って表示するか、上から下まで 1 回のパスで送って表示するかを決定します。

「動的に調整」を選択すると、ネットワークの状態に従って、どの段階でもインターレースのオンとオフを切り替えることができます。

多量のグラフィックスを必要とするアプリケーションを、特に低帯域幅の接続で使用する場合に、インターレースを使用します。

Object Manager: 「Adaptive Internet Protocol」⇒「Interlaced Images」

コマンド行

コマンドオプション: `--interlaced automatic|on|off`

使用法: 有効な値を指定します。

次の例では、インターレースイメージの送信を有効にします。

```
--interlaced on
```

起動接続をオープンしたまま保持

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、アプリケーションの起動に使用した接続をオープンしたまま保持するか、接続をクローズするかを指定します。

通常は、チェックボックスの選択を解除します。

次のいずれかの現象が発生した場合は、チェックボックスを選択します。

- アプリケーションが起動した直後に、終了するように思われる
- アプリケーションのシャットダウンで問題が発生した。この場合、「セッション終了」属性を「ログインスクリプトの終了」にも設定します

Object Manager: 「Advanced」⇒「Keep Launch Connection Open」

コマンド行

コマンドオプション: `--keepopen true | false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、アプリケーションの起動に使用した接続を閉じます。

```
--keepopen false
```

キーボードコードの変更

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、アプリケーションがキーボード上のキーによって生成されたコードを変更できるかどうかを決定します。

この属性が適用されるのは、Wyse 60 文字型アプリケーションに限られます。

Object Manager: 「Behavior」⇒「Application Key Mode」

コマンド行

コマンドオプション: `--appkeymode true|false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、アプリケーションのキーコード変更を無効にします。

```
--appkeymode false
```

キーボードマップ

使用法: ユーザープロファイルオブジェクトの場合は、オプションを選択します。

「カスタム値」オプションの場合は、フィールドにキーボードマップファイルのパス名を入力します。文字型アプリケーションの場合は、フィールドにキーボードマップファイルのパス名を入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- ユーザープロファイル
- 文字型アプリケーション

説明

この属性は、キーボードマップファイルのパス名を指定します。フルパス名または相対パス名を使用できます。相対パス名は、`/install-dir/etc/data/keymaps` ディレクトリに対する相対パスです。

Object Manager: 「General」⇒「Keyboard Map」

ユーザープロファイルオブジェクト

指定したキーボードマップファイルは、このユーザーが起動するすべてのグラフィカルアプリケーションで使用されます。

クライアントデバイスのロケールに基づくキーボードマップを使用するときは、「クライアントの入力ロケール」を選択します。実際に使用されるキーマップは、`/install-dir/etc/data/keymaps/xlocales.txt` ファイルを使って決定されます。

注 - `xlocales.txt` ファイルで `*` または `?` ワイルドカードを使用すれば、複数の入力ロケールをサポートできます。詳細については、`xlocales.txt` ファイルを参照してください。

SGD サーバー用に定義された X プロトコルエンジンの設定を使用してキーボードマップを決定する場合は、「X プロトコルエンジンの値」オプションを選択します。

このユーザーのために特定のキーボードマップを常に使用する場合は、ファイル名を入力します。

文字型アプリケーションオブジェクト

指定したキーボードマップファイルは、このアプリケーションで使用されます。

アプリケーションのタイプのデフォルトキーボードマップを使用するには、この属性を空のままにしておきます。デフォルトキーボードマップはエミュレータに組み込まれていますが、ファイル `anskey.txt`、`vt420key.txt`、および `w60key.txt` に記載されているキーボードマップに相当します。これらのファイルは、`/install-dir/etc/data/keymaps` ディレクトリに格納されています。

コマンド行

コマンドオプション: `--keymap keymap`

使用法: ユーザープロファイルオブジェクトの場合は、`default` または `client-locale` を使用するか、`keymap` をキーボードマップファイルのパス名に置き換えます。文字型アプリケーションの場合は、`keymap` をキーボードマップファイルのパス名に置き換えます。

次の例では、指定したキーマップを使用します。このキーマップは、`/install-dir/etc/data/keymaps` ディレクトリに格納されています。

```
--keymap mykeymap.txt
```

キーボードマップ: ロック

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、X アプリケーションがデフォルトのキーボードマッピングを変更するのを防止するかどうかを指定します。キーボードマッピングを変更できないようにする場合に、このチェックボックスを選択します。

Object Manager: 「Advanced」⇒「Lock Keymap」

コマンド行

コマンドオプション: `--lockkeymap true | false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、アプリケーションがキーボードマッピングを変更するのを防ぎます。

```
--lockkeymap true
```

キーボードタイプ

使用法: キーボードタイプのオプションを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

エミュレートする端末にキーボードをマッピングするために使用するレイアウトを指定します。

Object Manager: 「3270」⇒「Keyboard Type」

Object Manager: 「5250」⇒「Keyboard Type」

コマンド行

コマンドオプション:--3270kt pc|sun4|sun5|hp

コマンドオプション:--kt pc|sun4|sun5|hp

使用法: 有効なキーボードタイプを 1 つ指定します。

次の例では、3270 アプリケーションのキーボードタイプが pc に設定されます。

```
--3270kt pc
```

次の例では、5250 アプリケーションのキーボードタイプが pc に設定されます。

```
--kt pc
```

行の折り返し

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、ユーザーが端末ウィンドウの右端を越えて文字を入力した場合の動作を決定します。

右端より後ろにある文字を次の行に折り返すには、チェックボックスを選択します。

右端より後ろにある文字を表示しない場合は、チェックボックスの選択を解除します。文字はキーボードバッファに格納されます。

Object Manager: 「Appearance」⇒「Wrap Long Lines」

コマンド行

コマンドオプション:--autowrap true|false

使用法: true または false を指定します。

次の例では、端末ウィンドウの右端より後ろにある文字を次の行に折り返します。

```
--autowrap true
```

負荷分散グループ

使用法:アプリケーションサーバーの 1 つ以上の負荷分散グループを、フィールドに入力します。負荷分散グループを入力するたびに、リターンキーを押します。

この属性を持つオブジェクトは、アプリケーションサーバーオブジェクトです。

説明

この属性は、アプリケーションの負荷分散に使用される負荷分散グループを指定します。

任意の文字を使用できます (たとえば、"Scandinavia" や "US-East")。アプリケーションの負荷分散は、アプリケーションサーバーと SGD サーバーを同じロケーションで選択して、両者の間の「ネットワークの距離」を最短にし、パフォーマンスを最大にしようとします。ユーザーのクライアントデバイスと SGD サーバーの間の接続には、ネットワークの状況に適応した Adaptive Internet Protocol (AIP) を使用します。

アレイが広域ネットワーク (WAN) に広がっているか、低速リンクを含んでいる場合で、インテリジェントアレイルーティングの負荷分散グループ機能を使用している場合を除いて、この属性は空のままにしておきます。複数の文字列を設定することができますが、アプリケーションの起動に時間がかかります。

この属性を使用する場合は、Administration Console の「サーバー設定」⇒「一般」タブを使用して、該当するすべてのアプリケーションサーバーオブジェクト、およびアレイ内のすべての SGD サーバーで、この属性を設定してください。

Object Manager: 「Location」

コマンド行

コマンドオプション: `--location location`

使用法: ここで、*location* は、アプリケーションサーバーのロケーションです。

次の例では、アプリケーションサーバーのロケーションを Paris と設定します。

```
--location Paris
```

ログイン

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、ユーザープロファイルオブジェクトです。

説明

この属性は、このユーザープロファイルオブジェクトを使って、誰かがログインできるかどうかを指定します。

ユーザーの SGD へのアクセスを拒否する場合に、このチェックボックスの選択を解除します。

この属性は、システムオブジェクト組織内のプロファイルオブジェクトで、常に選択されます。ユーザーは、Administration Console の「グローバル設定」⇒「Secure Global Desktop 認証」タブに設定されている適切な認証機構が使用可能である限り、常にプロファイルオブジェクトを使ってログインできます。

特定の認証機構を使用するすべてのユーザーのアクセスを拒否するには、Administration Console の「グローバル設定」⇒「Secure Global Desktop 認証」タブで認証ウィザードを使用して、該当する認証リポジトリの選択を解除します。

すべてのユーザーの特定の SGD サーバーに対するログインを停止するには、Administration Console の「サーバー設定」⇒「一般」タブで、サーバーの「[ユーザーログイン](#)」の選択を解除します。

Object Manager: 「General」⇒「May Log In to Secure Global Desktop」

コマンド行

コマンドオプション: `--enabled true|false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、ユーザープロファイルオブジェクトの SGD へのログインを有効にします。

```
--enabled true
```

ログイン: 複数

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、ユーザープロファイルオブジェクトです。

説明

この属性は、ユーザープロファイルを 1 人のユーザーが使用するか、guest アカウントを使って複数のユーザーで共有できるかを指定します。

次の表は、ユーザープロファイルオブジェクトのこの属性を選択した場合と選択を解除した場合の、類似点と相違点を示します。

アカウントを共有しない場合	アカウントを共有する場合
必ず 1 人のユーザーが使用します。	複数のユーザーが使用できます。
各ユーザーにユーザー固有のアプリケーションセッションがあります。	各ユーザーにユーザー固有のアプリケーションセッションがあります。
アプリケーションセッションは、ユーザーセッション間で継続できます。	アプリケーションセッションは、ユーザーがログアウトした時点で終了します。
1 セットのパスワードキャッシュエントリがあります。	1 セットのパスワードキャッシュエントリがあり、すべてのユーザー間で共有されます。
ユーザーは、エントリをパスワードキャッシュに保存できます。	ユーザーは、エントリをパスワードキャッシュに保存できません。
ユーザーがすでにログインしている場合、別のクライアントデバイスからもう一度ログインすると、ユーザーセッションが再配置されます。古いユーザーセッションは終了します。	もう一度ログインすると、新規のユーザーセッションが作成されます。既存のユーザーセッションに影響はありません。

Object Manager: 「General」 ⇒ 「Shared Between Users (Guest)」

コマンド行

コマンドオプション: `--shared true | false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、ユーザープロファイルオブジェクトを `guest` アカウントを使って複数のユーザーで共有可能にします。

```
--shared true
```

ログイン名

使用法: ユーザーのログイン名をフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、ユーザープロファイルオブジェクトです。

説明

この属性は、ユーザーのログイン名を指定します。通常は、UNIX ユーザー名です。

この属性は、認証リポジトリによってユーザーの識別や認証に使用されることがあります。

Object Manager: 「General」 ⇒ 「Username」

コマンド行

コマンドオプション: `--user username`

使用法: ここで、*username* は、ユーザーのログイン名です。

次の例では、ログイン名を *indigo* と定義します。

```
--user indigo
```

ログインスクリプト

使用法: ログインスクリプトのファイル名をフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、アプリケーションを起動するために実行するログインスクリプトを指定します。この設定を変更するのは、アプリケーションの起動で問題が発生した場合のみにしてください。

SGD にログインスクリプトを自動的に選択させるには、この属性を空のままにしておきます。

フルパス名または相対パス名を使用できます。相対パス名は、実行プロトコルエンジンの「[ログインスクリプトディレクトリ](#)」属性の値に対する相対パスと見なされません。

ログインスクリプトの現在の作業ディレクトリは、スクリプトが格納されているディレクトリです。スクリプトが、相対パス名を使っている別のスクリプトをソースとしている場合、このディレクトリからの相対パスと見なされます。

Object Manager: 「Advanced」 ⇒ 「Login Script」

コマンド行

コマンドオプション: `--login script`

使用法:ここで、*script* は、使用するログインスクリプトのファイル名です。

次の例では、カスタムログインスクリプト `my_login.exp` を使ってアプリケーションを起動します。

```
--login my_login.exp
```

Universal PDF プリンタをデフォルトにする

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 組織
- 組織単位
- ユーザープロファイル

説明

Microsoft RDP [Windows プロトコル](#)を使用する Windows アプリケーションから印刷する場合に、SGD の「Universal PDF」プリンタをクライアントのデフォルトプリンタとして設定します。

この属性は、「[Universal PDF プリンタ](#)」が有効な場合にのみ使用できます。

オブジェクトの「[クライアント印刷: 上書き](#)」が有効な場合にのみ、Administration Console を使ってこの属性を編集できます。

「Universal PDF」プリンタはデフォルトプリンタではありません (コマンド行では `false`)。

この属性の設定は、次のいずれかよりも優先されます。

- 組織階層内の親オブジェクトの設定
- 親オブジェクトの設定が存在しない場合は、Administration Console の「グローバル設定」⇒「印刷」タブで設定されたデフォルト設定

この属性に対する変更が反映されるのは、新規ユーザーセッションだけです。

Object Manager: 「Printing」 ⇒ 「Make PDF Printer the Default for Windows 2000/3」

コマンド行

コマンドオプション: `--pdfisdefault 1|0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、「Universal PDF」プリンタを、RDP を使用する Windows アプリケーションから印刷するときのデフォルトプリンタに設定します。

```
--pdfisdefault true
```

Universal PDF ビューアをデフォルトにする

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 組織
- 組織単位
- ユーザープロファイル

説明

Microsoft RDP [Windows プロトコル](#) を使用する Windows アプリケーションから印刷する場合に、SGD の「Universal PDF ビューア」プリンタをクライアントのデフォルトプリンタに設定します。

デフォルトでは、「Universal PDF ビューア」プリンタはデフォルトプリンタではありません (コマンド行では false)。

この属性は、「[Universal PDF ビューア](#)」が有効な場合にのみ使用できます。

オブジェクトの「[クライアント印刷: 上書き](#)」が有効な場合にのみ、Administration Console を使ってこの属性を編集できます。

この属性の設定は、次のいずれかよりも優先されます。

- 組織階層内の親オブジェクトの設定
- 親オブジェクトの設定が存在しない場合は、Administration Console の「グローバル設定」⇒「印刷」タブで設定されたデフォルト設定

この属性に対する変更が反映されるのは、新規ユーザーセッションだけです。

Object Manager: 「Printing」⇒「Make PDF File Printer the Default for Windows 2000/3」

コマンド行

コマンドオプション: `--pdfviewerisdefault 1|0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、「Universal PDF ビューア」プリンタを、RDP を使用する Windows アプリケーションから印刷するときのデフォルトプリンタに設定します。

```
--pdfviewerisdefault true
```

「メンバー」タブ

使用法: グループメンバーをグループオブジェクトに追加するには、「編集可能な割り当て」テーブルの「追加」ボタンをクリックします。

グループオブジェクトからグループメンバーを削除するには、「編集可能な割り当て」テーブルの「削除」ボタンを使用します。

この属性を持つオブジェクトは、グループオブジェクトです。

説明

「メンバー」タブには、選択したグループオブジェクトのメンバーが表示されます。作成できるのは、アプリケーションのグループまたはアプリケーションサーバーのグループだけです。

グループには多数のメンバーを所属させることができ、他のグループを所属させることもできます。各メンバーは、オブジェクトに対する参照として格納されるので、特定のオブジェクトが多数のグループのメンバーになってもかまいません。あとで、オブジェクトが移動された場合、またはオブジェクト名が変更された場合、そのオブジェクトに対するすべての参照は、自動的に更新されます。

Object Manager: 「Members」タブ

「メンバー」タブの次のセクションが、グループメンバーの表示、選択、および割り当てに使用されます。

- 「有効なメンバー」テーブル
- 「編集可能なメンバー」テーブル

「有効なメンバー」テーブル

「有効なメンバー」テーブルには、選択したグループオブジェクトに割り当てられているオブジェクトがすべて表示されます。

「割り当てタイプ」列には、次のいずれかが表示されます。

- 「直接的」。この割り当ては、「編集可能な割り当て」テーブルを使用して行われたものです。
- 「間接的」。この割り当ては、グループのメンバーシップや別のオブジェクトからの継承など、別の関係の結果です。
- 「複数」。この割り当てには、複数のソース（「直接的」と「間接的」の両方）があります。

割り当てタイプが「直接的」または「間接的」である場合、「詳細を参照してください」リンクをクリックすると、リンクの発生源をトレースできる情報が表示されます。

「編集可能なメンバー」テーブル

「編集可能なメンバー」テーブルを使用すると、ローカルリポジトリからグループメンバーを選択できます。

「編集可能な割り当て」テーブルの「追加」ボタンをクリックします。アプリケーションのグループを編集しているか、アプリケーションサーバーのグループを編集しているかに応じて、「アプリケーションメンバーの追加」ウィンドウまたは「アプリケーションサーバーメンバーの追加」ウィンドウが表示されます。

「アプリケーション割り当ての追加」または「アプリケーションサーバーメンバーの追加」ウィンドウでグループメンバーを選択するには、次のどちらかを実行します。

- ナビゲーションツリーを参照します。ツリーを参照する際、コンテンツ領域がアプリケーションに合わせて更新されます。
- 「アプリケーションの検索」または「アプリケーションサーバーの検索」フィールドを使用します。アプリケーションのグループを編集しているか、アプリケーションサーバーのグループを編集しているかに応じて、このフィールドの名前が変わります。このフィールドを使用してグループメンバーを検索します。アプリケーションまたはアプリケーションサーバーの名前をフィールドに入力します。検索文字列にワイルドカード「*」を使用できます。「*name*」という検索文字列の入力は、「**name**」の検索に相当し、検索文字列と一致するものがすべて返されます。検索結果は、コンテンツ領域の「検索結果」テーブルに表示されます。デフォルトでは、検索によって返される結果の数は 150 個に制限されます。

コンテンツ領域に表示されたグループメンバーの中から、必要なものを選択します。メンバーの選択が終了したら、「追加」ボタンをクリックします。

「メンバー」タブの「有効なメンバー」テーブルに、選択したグループメンバーが表示されます。

「メンバー」タブからメンバーを削除するには、「編集可能なメンバー」テーブルの「削除」ボタンを使用します。

コマンド行

コマンドオプション: `--member object`

使用法:ここで、*object* は、オブジェクトの完全名です (例: "o=Indigo Insurance/ou=Finance/cn=XClaim")。オブジェクト名に空白文字が含まれている場合は、引用符 (") か (') で囲む必要があります。

次の例では、Indigo Jones と Emma Rald をメンバーとして指定します。

```
--member "o=Indigo Insurance/cn=Indigo Jones" \  
          "o=Indigo Insurance/ou=Marketing/cn=Emma Rald"
```

メニューバー

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

アプリケーションのメニューバーを表示するかどうかを指定します。

Object Manager: 「3270」⇒「Enable Menu Bar」

Object Manager: 「5250」⇒「Enable Menu Bar」

コマンド行

コマンドオプション: `--3270mb true|false`

コマンドオプション: `--mb true|false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、3270 アプリケーションのメニューバーが有効になります。

```
--3270mb true
```

次の例では、5250 アプリケーションのメニューバーが有効になります。

```
--mb true
```

マウスの中ボタンのタイムアウト

使用法:フィールドに、タイムアウト時間をミリ秒で入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性を使うと、2 つボタンのマウスで、マウスの左右のボタンを同時にクリックしてマウスの中ボタンをエミュレートすることができます。

この設定値は、マウスの左ボタンと右ボタンを押す間に時間が経過しても、そのアクションをマウスの中ボタンの操作とみなす時間の最大値です。

Object Manager: 「Advanced」 ⇒ 「Middle Mouse Timeout」

コマンド行

コマンドオプション:--middlemouse *ms*

使用法: ここで、*ms* は、タイムアウト時間 (ミリ秒) です。

次の例では、マウスの左ボタンと右ボタン押す操作を、マウスの中ボタンの操作と見なすには、0.3 秒以内に押す必要があります。

```
--middlemouse 300
```

モニターの解像度

使用法:フィールドに、解像度を 1 インチあたりのドット数 (dpi) で入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- Windows アプリケーション

- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、要求元の X アプリケーションに SGD がレポートするモニターの解像度を 1 インチあたりのドット数で指定します。使用するフォントサイズを決めるために、一部の X アプリケーションでは、この値が必要となります。

この属性を空のままにしておくと、X プロトコルエンジンの「[モニターの解像度](#)」属性に指定されている値がレポートされます。

デフォルトの解像度では、X アプリケーションが通常使用するフォントよりもサイズの大きいフォントを選択する傾向があります。大きいサイズのフォントが選択されると、より広い画面領域を X アプリケーションが必要とするため、クリップ問題の発生原因となります。この現象が生じた場合には、小さい値 (たとえば、75) を入力して、解像度を下げてください。

また、X プロトコルエンジンの「[フォントパス](#)」属性がコンソールまたは X 端末とは違う順番で設定されている場合、X アプリケーションが極端に大きいサイズのフォントを使用する可能性もあります。

Object Manager: 「Advanced」⇒「Monitor Resolution」

コマンド行

コマンドオプション: `--dpi dpi`

使用法: ここで、*dpi* は解像度 (dpi) です。

次の例では、75 dpi の解像度を、この情報を必要としている X アプリケーションにレポートします。

```
--dpi 75
```

マウス

使用法: 「3 ボタンマウスのみサポート」チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、X アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性では、X アプリケーションがサポートするマウスを 3 ボタンマウスだけにするかどうかを指定します。

3 ボタンマウスだけをサポートする場合は、チェックボックスを選択します。デフォルトでは、チェックボックスは選択解除されています。

Object Manager: 「Advanced」⇒「Application Supports 3-Button Mouse Only」

コマンド行

コマンドオプション: `--force3button true|false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、アプリケーションは 3 ボタンマウスだけをサポートします。

```
--force3button true
```

名前

使用法: オブジェクトに使用する名前を入力します (例: Indigo Jones)。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- Active Directory コンテナ
- 文字型アプリケーション
- ドキュメント
- ドメインコンポーネント
- グループ
- アプリケーションサーバー
- ユーザープロファイル
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション
- 組織
- 組織単位

説明

この属性は、ローカルリポジトリ内のオブジェクトの名前を指定します。

SGD オブジェクトには、次の命名規則が使用されます。

- 3270 アプリケーションオブジェクトには、「cn=」名前属性を指定します。
- 5250 アプリケーションオブジェクトには、「cn=」名前属性を指定します。
- Active Directory コンテナオブジェクトには、「cn=」名前属性を指定します。
- アプリケーションサーバーオブジェクトには、「cn=」名前属性を指定します。
- 文字型アプリケーションオブジェクトには、「cn=」名前属性を指定します。
- ドキュメントオブジェクトには、「cn=」名前属性を指定します。
- ドメインコンポーネントオブジェクトには、「dc=」名前属性を指定します。
- グループオブジェクトには、「cn=」名前属性を指定します。
- 組織オブジェクトには、「o=」名前属性を指定します。
- OU オブジェクトには、「ou=」名前属性を指定します。
- ユーザープロファイルオブジェクトには、「cn= (共通名)」、「uid= (ユーザー識別情報)」、または「mail= (電子メールアドレス)」名前属性を指定できます。
- Windows アプリケーションオブジェクトには、「cn=」名前属性を指定します。
- X アプリケーションオブジェクトには、「cn=」名前属性を指定します。

Administration Console では、バックスラッシュ文字 (\) 以外の任意の文字を名前に使用できます。

Object Manager: 「General」⇒「Name」

Object Manager: 「Name」タブ

コマンド行

コマンドオプション: `--name name`

使用法: ここで、*name* は、オブジェクトの完全名です。次に例を示します。

`"o=applications/ou=Finance/cn=XClaim"`

名前に空白文字が含まれている場合は、引用符 (") か (') で囲む必要があります。

オブジェクト名の中でスラッシュ (/) を使用するときは、バックスラッシュでエスケープ処理を行う必要があります。たとえば、o=organisation の下位に相対名 cn=a/b でオブジェクトを作成するときは、`cn=a\b` と入力します。

この結果、o=organisation/"cn=a/b" というオブジェクトが作成されます。

次の例では、組織オブジェクトの名前を Indigo Insurance と定義します。


```
--name "o=Indigo Insurance"
```

次の例では、組織単位オブジェクトの名前を Finance と定義します。このオブジェクトは、Indigo Insurance というディレクトリオブジェクトに属します。ディレクトリオブジェクトは、既に存在していなければなりません。

```
--name "o=Indigo Insurance/ou=Finance"
```

次の例では、ユーザープロファイルオブジェクトの共通名を Indigo Jones と定義します。このオブジェクトは組織オブジェクト Indigo Insurance に属しています。

```
--name "o=Indigo Insurance/cn=Indigo Jones"
```

次の例では、ドメインコンポーネントオブジェクトの名前を indigo-insurance と定義します。

```
--name "dc=com/dc=indigo-insurance"
```

セッション数

使用法: 「制限付き」チェックボックスを選択または選択解除します。「制限付き」チェックボックスを選択する場合は、「ユーザーごとの最大数」フィールドに数値を入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、ユーザーが同時に実行できるアプリケーションインスタンスの最大数を設定します。デフォルト値は 3 です。

Webtop 上のアプリケーションのリンクは、ユーザーが実行できるアプリケーションインスタンスの数を示しています。Webtop には、各アプリケーションインスタンスを中断、再開、または編集するツールも用意されています。

Object Manager: 「General」⇒「Max Instances」

コマンド行

コマンドオプション: `--maxinstances 0 | instances`

使用法: 0 を指定するか、*instances* をインスタンスの数に置き換えます。

次の例では、アプリケーションインスタンスの最大数を無制限に設定します。

```
--maxinstances 0
```

数字パッドコードの変更

使用法: リストから数字パッドの動作オプションを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、テンキーパッドの動作を指定します。常に数値を生成するか、キーパッドで生成するコードをアプリケーションで変更する必要があるかを指定します。

この属性が適用されるのは、VT420 文字型アプリケーションに限られます。

Object Manager: 「Behavior」⇒「Keypad」

コマンド行

コマンドオプション: `--keypad numeric | application`

使用法: 必要なキーパッドの動作を指定します。

次の例では、キーパッドは常に数字を生成します。

```
--keypad numeric
```

「パスワード」タブ

使用法: パスワードキャッシュ内のエントリを管理する場合に、「パスワード」タブを使用します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- アプリケーションサーバー
- ユーザープロファイル

説明

「パスワード」タブには、選択したユーザープロファイルオブジェクトまたはアプリケーションサーバーオブジェクトのパスワードキャッシュエントリが一覧表示されます。

パスワードキャッシュ内にエントリを作成するには、「パスワードキャッシュ」テーブルの「新規」ボタンを使用します。パスワードキャッシュ内のエントリを編集するには「編集」ボタン、パスワードキャッシュからエントリを削除するには「削除」ボタンを使用します。「パスワードキャッシュ」テーブルを更新するには、「再読み込み」ボタンを使用します。

「パスワードキャッシュ」テーブル内のエントリを検索する場合は、「検索」フィールドを使用します。検索文字列にワイルドカード「*」を使用できます。「*name*」という検索文字列の入力は、「**name**」の検索に相当し、検索文字列と一致するものがすべて返されます。デフォルトでは、検索によって返される結果の数は 150 個に制限されます。

「キャッシュ」⇒「パスワード」タブには、SGD アレイのパスワードキャッシュエントリがすべて表示されます。このタブの「検索」フィールドを使用すると、特定のユーザープロファイルまたはアプリケーションサーバーのパスワードキャッシュエントリを検索できます。

Object Manager: 「Passwords」 タブ

コマンド行

コマンド行で `tarantella passcache` コマンドを使用して、パスワードキャッシュ内のエントリを削除および検査します。[310 ページの「tarantella passcache コマンド」](#)を参照してください。

パスワードキャッシュの使用

使用法: 「グローバル設定の上書き」チェックボックスを選択してから、「Secure Global Desktop パスワードの試行」オプションを選択または選択解除します。「グローバル設定」⇒「アプリケーション認証」タブで定義されたデフォルト設定を使用するには、「グローバル設定の上書き」チェックボックスの選択を解除します。

この属性を持つオブジェクトは、アプリケーションサーバーオブジェクトです。

説明

この属性は、アプリケーションサーバー用にキャッシュされているパスワードがない場合に、そのサーバー上でのユーザー認証に使用するポリシーを指定します。

次の表に、Administration Console のオプションと対応するコマンド行オプションを示します。

Administration Console	コマンド行	説明
Secure Global Desktop パスワードの試行 (選択)	<code>--auth trytta</code>	ユーザーが SGD へのログインに使うパスワードがキャッシュされている場合、同じパスワードを使ってアプリケーションサーバーへのログインが試みられます。ログインに失敗した場合、ユーザーはパスワードの入力を要求されます。 コマンド行でオブジェクト属性を一覧表示すると、この属性値は <code>true</code> として表示されます。
Secure Global Desktop パスワードの試行 (選択解除)	<code>--auth nevertrytta</code>	ユーザーが SGD へのログインに利用するパスワードは、使用しません。ユーザーは、アプリケーションサーバー用にユーザー名とパスワードを入力するよう要求されます。 コマンド行でオブジェクト属性を一覧表示すると、この属性値は <code>false</code> として表示されます。
グローバル設定の上書き (選択解除)	<code>--auth default</code>	「 パスワードキャッシュの使用 」設定によって、ユーザーのパスワードを試すかどうかが決まります。 コマンド行でオブジェクト属性を一覧表示すると、この属性値は <code>default</code> として表示されます。

ユーザーが SGD へのログインに使用するパスワードは、SGD サーバーがアプリケーションサーバーも兼ねている場合、または「[Secure Global Desktop 認証](#)」タブの「[パスワードキャッシュ](#)」が選択されている場合に、パスワードキャッシュに保存できます。

Object Manager: 「Authentication」

コマンド行

コマンドオプション: `--auth trytta|nevertrytta|default`

使用法: いずれかの有効な設定値を指定します。

次の例では、ユーザーが SGD へのログイン時に入力したパスワードがキャッシュされている場合、そのパスワードを使ってログインを試みます。

```
--auth trytta
```

Postscript プリントドライバ

使用法: PDF 印刷に使用するプリンタドライバの名前を、フィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 組織
- 組織単位
- ユーザープロファイル

説明

Microsoft RDP [Windows プロトコル](#)を使用する Windows アプリケーションからの印刷時に、PDF 印刷に使用するプリンタドライバの名前。

このプリンタドライバは、SGD で使用するすべての Windows アプリケーションサーバーにインストールされている必要があります。

PostScript プリントドライバを指定してください。デフォルトは、HP Color LaserJet 8500 PS です。

入力するプリンタドライバの名前は、Windows アプリケーションサーバーにインストールされているプリンタドライバの名前と正確に一致している必要があります。特に、大文字と空白文字に注意してください。

`/install-dir/etc/data/default.printerinfo.txt` ファイルには、製造元別に並べられた一般的なプリンタドライバ名のリストが含まれています。エラーを防ぐために、このファイルからドライバ名をコピー&ペーストしてください。

この属性は、「[Universal PDF プリンタ](#)」が有効な場合にのみ使用できます。

オブジェクトの「[クライアント印刷: 上書き](#)」が有効な場合にのみ、Administration Console を使ってこの属性を編集できます。

この属性の設定は、次のいずれかよりも優先されます。

- 組織階層内の親オブジェクトの設定
- 親オブジェクトの設定が存在しない場合は、Administration Console の「グローバル設定」⇒「印刷」タブで設定されたデフォルト設定

この属性に対する変更が反映されるのは、新規ユーザーセッションだけです。

Object Manager: 「Printing」⇒「Driver Name」

コマンド行

コマンドオプション: `--pdfdriver driver_name`

使用法: ここで、`driver_name` は、PDF 印刷に使用するプリンタドライバの名前です。コマンド行で、名前に空白文字が含まれている場合は引用符を使用します。

次の例では、HP LaserJet 8000 Series PS プリンタドライバを PDF 印刷に使用するドライバとして設定します。

```
--pdfdriver "HP LaserJet 8000 Series PS"
```

プロンプトのロケール

使用法: ロケールをフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、アプリケーションサーバーオブジェクトです。

説明

この属性は、アプリケーションサーバーからのログインデータがパターン照合されたときに、ログインスクリプトで使用される言語を制御します。

SGD に用意されているログインスクリプトを使用するときは、システムプロンプトを照合するための変数を `vars.exp` スクリプトに定義します。デフォルトでは、英語のシステムプロンプトがサポートされています。このスクリプトをカスタマイズすることで、ほかのロケールのユーザーをサポートできます。

ロケールは、下線で区切られた言語 (*language*) とオプションの地域 (*territory*) という 2 つの部分で構成されています。

ロケールの言語部分は、ISO 639 言語コードを使って指定されます。たとえば、英語は `en`、日本語は `ja` です。

ロケールの地域部分は、ISO 3166 地域コードを使って使用されます。たとえば、アメリカ合衆国は `us`、日本は `jp` です。

デフォルトのロケールは `en_us` です。

Object Manager: 「Host Locale」

コマンド行

コマンドオプション: `--hostlocale ll_tt`

使用法: ここで、`ll_tt` はロケールです。

次の例では、アプリケーションサーバーオブジェクトのデフォルト言語をフランス語に設定します。フランス語のプロンプトは、このアプリケーションサーバーで使用するログインスクリプトに設定する必要があります。

```
--locale fr
```

スクロールスタイル

使用法: クロールスタイルのオプションを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、端末ウィンドウのスクロール方法を指定します。使用できるオプションは、「1行ずつ」、「数行ずつ」、「滑らかにゆっくり」です。

コマンド行でオブジェクト属性を一覧表示すると、次の内容が適用されます。

- 「line」属性値は、normal として表示される
- 「multiple」属性値は、jump として表示される

Object Manager: 「Appearance」⇒「Scroll Style」

コマンド行

コマンドオプション: `--scrollstyle line | multiple | smooth`

使用法: 使用するスクロールスタイルを指定します。

次の例では、端末ウィンドウを滑らかにスクロールします。

```
--scrollstyle smooth
```

シリアルポートマッピング

使用法: ユーザープロファイルオブジェクトまたは組織単位オブジェクトの場合は、「親の設定を上書き」チェックボックスを選択してから、「有効」オプションを選択または選択解除します。親オブジェクト用に定義された設定を使用する場合は、「親の設定を上書き」チェックボックスの選択を解除します。

組織オブジェクトの場合は、「グローバル設定の上書き」チェックボックスを選択してから、「有効」オプションを選択または選択解除します。「グローバル設定」タブで定義された設定を使用するには、「グローバル設定の上書き」チェックボックスの選択を解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 組織
- 組織単位
- ユーザープロファイル

説明

この属性は、Microsoft Windows Server 2003 アプリケーションサーバー上で稼働している Windows アプリケーションからクライアントデバイス上のシリアルポートにユーザーがアクセスできるかどうかを制御します。

デフォルトでは、ユーザープロファイルオブジェクトまたは組織単位オブジェクトは、組織階層内の親オブジェクトの設定を継承します。これは、各ユーザープロファイルオブジェクトを編集せずに、多数のユーザーのシリアルポートへのアクセスを有効/無効にする場合に使用します。これを上書きするには、「親の設定を上書き」チェックボックスを選択してから、設定を変更します。

デフォルトでは、組織オブジェクトは Administration Console の「グローバル設定」⇒「クライアントデバイス」タブで設定されたグローバル設定を使用します。これを上書きするには、「グローバル設定の上書き」チェックボックスを選択してから、設定を変更します。

次の表に、Administration Console のオプションと対応するコマンド行オプションを示します。

Administration Console	コマンド行	説明
親の設定を上書き (選択解除)	2	ユーザープロファイルまたは組織単位オブジェクト。親オブジェクトから継承した設定を使用します。 これは、デフォルト設定です。
グローバル設定の上書き (選択解除)	2	組織オブジェクトグローバル設定を使用します。 これは、デフォルト設定です。
有効 (選択)	1	シリアルポートへのアクセスを有効にします。
有効 (選択解除)	0	シリアルポートへのアクセスを無効にします。

ユーザーが Windows アプリケーションを起動すると、SGD はそのユーザーのユーザープロファイルオブジェクトを検査してから、組織階層の上位にあるすべての親オブジェクトを検査して、シリアルポートへのアクセスが有効になっているか無効になっているかを確認します。選択したすべてのオブジェクトが親の設定を使用するように構成されている場合は、デフォルト設定が使用されます。

デフォルトでは、シリアルポートへのアクセスは有効です。

Object Manager: 「General」 ⇒ 「Serial Port Mapping」

コマンド行

コマンドオプション: `--serialport 2|1|0`

使用法: 2|1|0 を指定します。

次の例では、シリアルポートへのアクセスを無効にします。

```
--serialport 0
```

サーバーアドレス

使用法: アプリケーションサーバーの DNS 名または IP アドレスをフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性には、アプリケーションを実行する 3270 (メインフレーム) または AS/400 アプリケーションサーバーを指定します。

DNS 名がわかっている場合は、IP アドレスではなく DNS 名を使用してください。

Object Manager: 「3270」 ⇒ 「3270 Host」

Object Manager: 「5250」 ⇒ 「AS/400 Host」

コマンド行

コマンドオプション: `--hostname host`

使用法: ここで、*host* は、3270 (メインフレーム) または AS/400 アプリケーションサーバーの DNS 名か IP アドレス です。

次の例では、アプリケーションサーバー `warsaw.indigo-insurance.com` 上のアプリケーションを実行します。

```
--hostname warsaw.indigo-insurance.com
```

サーバーポート

使用法: アプリケーションサーバーへの接続に使用する TCP ポート番号を、フィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、エミュレータが 3270 (メインフレーム) アプリケーションサーバーまたは AS/400 アプリケーションサーバーとデータを交換するときに使用する TCP ポートを指定します。

デフォルトでは、TCP ポート 23 が使用されます。

Object Manager: 「3270」⇒「Port Number」

Object Manager: 「5250」⇒「Port Number」

コマンド行

コマンドオプション: `--portnumber tcp`

使用法: ここで、*tcp* は、アプリケーションサーバーへの接続に使用する TCP ポート番号です。

次の例では、TCP ポート 4567 上でアプリケーションサーバーに接続します。

`--portnumber 4567`

セッション終了

使用法: リストから設定値を選択します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、アプリケーションセッションが終了する時点を決めます。

次の表に、Administration Console のオプションと対応するコマンド行オプションを示します。

Administration Console	コマンド行	説明
最後のクライアントの終了	lastclient	SGD サーバーは、セッション内で稼働している X クライアントの数を追跡し、X クライアント数がゼロ (0) になった時点でセッションを終了します。
ウィンドウマネージャーの終了	windowmanager	SGD サーバーは、ウィンドウマネージャーが終了した時点で、稼働している X クライアントの数に関係なく、セッションを終了します。
ウィンドウマネージャーのみ残っている	windowmanageralone	SGD サーバーは残っている X クライアントがウィンドウマネージャーだけになった時点でセッションを終了します。一部のウィンドウマネージャー (OpenLook など) は、X クライアントをバックグラウンドで実行するので、この条件は決して満たされることがありません。この問題が発生した場合は、「表示中のウィンドウがない」を使用してください。
ログインスクリプトの終了	loginscript	SGD サーバーは、ログインスクリプトが完了した時点で、セッションを終了します。アプリケーションのシャットダウンで問題が発生した場合は、この設定を「 起動接続をオープンしたまま保持 」とともに使用してください。
表示中のウィンドウがない	nowindows	SGD サーバーは表示しているウィンドウがなくなった時点でセッションを終了します。これは、X クライアントをバックグラウンドで実行するウィンドウマネージャー (OpenLook など) に役立ちます。
「ログインスクリプトの終了」または「表示中のウィンドウがない」	loginscriptnowindows	SGD サーバーは、ログインスクリプトの完了時、または表示しているウィンドウがなくなった時点で、セッションを終了します。この設定は、一般的な「 アプリケーションの再開機能 」が設定されていて、かつ X クライアントを使用するアプリケーションに使用します。理由は、アプリケーションサーバーが再起動する場合、またはネットワークから切断された場合に、セッションが強制的に終了されるためです。アプリケーションのシャットダウンで問題が発生した場合は、この設定を「 起動接続をオープンしたまま保持 」とともに使用してください。

Object Manager: 「General」 ⇒ 「Session Ends When」

コマンド行

コマンドオプション: `--endswhen lastclient | windowmanager | windowmanageralone | loginscript | nowindows | loginscriptnowindows`

使用法: 有効な値を指定します。

次の例では、表示しているウィンドウがなくなった時点でアプリケーションセッションを終了します。

```
--endswhen nowindows
```

類似セッション間でリソースを共有

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、「クライアントウィンドウ管理」の「[ウィンドウタイプ](#)」で設定されているアプリケーションのアプリケーションセッションで、リソースの共有を試みるかどうかを指定します。セッションを共有すると、SGD サーバーとクライアントデバイスの両方のメモリーのオーバーヘッドが減ります。

リソースは、次の属性に同じ値が設定されているアプリケーション間で共有されません。

- [ウィンドウの色: カスタム色](#)
- [ウィンドウの色](#)
- [インターレースイメージ](#)
- [グラフィックアクセラレーション](#)
- [遅延更新](#)
- [マウスの中ボタンのタイムアウト](#)
- [モニターの解像度](#)

Object Manager: 「Advanced」 ⇒ 「Share Resources Between Similar Sessions」

コマンド行

コマンドオプション: `--share true | false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、類似セッションでのリソース共有を有効にします。

```
--share true
```

ステータス行

使用法: リストからステータス行のタイプを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、アプリケーションに表示するステータス行のタイプを指定します。

アプリケーション のタイプ	使用可能なステータス行のタイプ
VT420	<ul style="list-style-type: none">なしカーソル位置と印刷モードホストからのメッセージ
Wyse 60	<ul style="list-style-type: none">なし標準拡張
SCO コンソール	<ul style="list-style-type: none">使用不能

コマンド行でオブジェクト属性を一覧表示すると、属性値 `hostmessages` は `host writable` として表示されます。

Object Manager: 「Appearance」 ⇒ 「Status Line」

コマンド行

コマンドオプション: `--statusline none | indicator | hostmessages | standard | extended`

使用法: 必要なステータス行のタイプを指定します。すべての設定がすべてのタイプの文字型アプリケーションで有効なわけではありません。

次の例では、ステータス行を表示しません。

```
--statusline none
```

姓

使用法: ユーザーの姓をフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、ユーザープロフィールオブジェクトです。

説明

この属性は、ユーザーの姓 (名字) を指定します。

名前には任意の文字を使用できます。

Object Manager: 「General」 ⇒ 「Surname」

コマンド行

コマンドオプション: `--surname name`

使用法: ここで、*name* は、ユーザーの姓です。名前に空白文字が含まれている場合は、引用符 (") か (') で囲む必要があります。

次の例では、ユーザーの姓を Jones と定義します。

```
--surname Jones
```

端末タイプ

使用法: 端末タイプのオプションを選択するか、「カスタム」オプションを選択してフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、アプリケーションに必要な端末タイプを指定します。端末タイプは、「エミュレーションタイプ」に合わせて設定します。

Object Manager: 「General」⇒「Terminal Type」

コマンド行

コマンドオプション: `--termtypes type`

使用法: ここで、*type* は、端末タイプです (例: `ansi`)。

次の例では、端末タイプ `ansi` を使用します。

```
--termtypes ansi
```

次の例では、端末タイプ `wyse60` を使用します。

```
--termtypes wyse60
```

「トークン」タブ

使用法: 「トークンキャッシュ」テーブルで、トークンキャッシュからエントリを削除するには、「削除」ボタンを使用します。「トークンキャッシュ」テーブルを更新するには、「再読み込み」ボタンを使用します。

この属性を持つオブジェクトは、ユーザープロファイルオブジェクトです。

説明

「トークン」タブは、認証トークンの認証機構に使われるトークンの管理に使用します。この認証機構は、SGD クライアントが統合モードで動作している場合に使用されます。

「トークン」タブには、選択したユーザープロファイルオブジェクトのトークンキャッシュエントリが表示されます。トークンキャッシュからトークンを削除するには、「削除」ボタンを使用します。「トークンキャッシュ」テーブルを更新するには、「再読み込み」ボタンを使用します。

「キャッシュ」⇒「トークン」タブには、SGD アレイのトークンキャッシュエントリがすべて表示されます。トークンキャッシュからエントリを削除するには、「削除」ボタンを使用します。「トークンキャッシュ」テーブルを更新するには、「再読み込み」ボタンを使用します。このタブの「ユーザー識別情報の検索」フィールドを使用すると、特定のユーザーのトークンキャッシュエントリを検索できます。

「トークンキャッシュ」テーブル内のエントリを検索する場合は、「検索」フィールドを使用します。検索文字列にワイルドカード「*」を使用できます。「*name*」という検索文字列の入力は、「**name**」の検索に相当し、検索文字列と一致するものがすべて返されます。デフォルトでは、検索によって返される結果の数は 150 個に制限されます。

Object Manager: 「Tokens」 タブ

コマンド行

コマンド行で `tarantella tokencache` コマンドを使用して、トークンキャッシュ内のエントリを削除および検査します。[360 ページの「tarantella tokencache コマンド」](#)を参照してください。

トークンキャッシュ内のエントリを表示する場合は、`tarantella tokencache list` コマンドを使用します。

コマンドオプション:`tarantella tokencache list`

次の例では、トークンキャッシュに格納されているすべてのエントリを一覧表示します。

```
tarantella tokencache list
```

Universal PDF プリンタ

使用法:チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 組織
- 組織単位
- ユーザープロファイル

説明

この属性は、Microsoft RDP [Windows プロトコル](#)を使用する Windows アプリケーションから印刷する際に、SGD の「Universal PDF」プリンタを使った印刷をユーザーに許可します。

オブジェクトの「[クライアント印刷: 上書き](#)」が有効な場合にのみ、Administration Console を使ってこの属性を編集できます。

この属性の設定は、次のいずれかよりも優先されます。

- 組織階層内の親オブジェクトの設定
- 親オブジェクトの設定が存在しない場合は、Administration Console の「グローバル設定」⇒「印刷」タブで設定されたデフォルト設定

この属性に対する変更が反映されるのは、新規ユーザーセッションだけです。

Object Manager: 「Printing」⇒「Let Users Print to a PDF Printer」

コマンド行

コマンドオプション: `--pdfenabled 1|0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、「Universal PDF」プリンタを使用して印刷することをユーザーに許可します。

```
--pdfenabled 1
```

Universal PDF ビューア

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 組織
- 組織単位
- ユーザープロファイル

説明

この属性は、Microsoft RDP [Windows プロトコル](#)を使用する Windows アプリケーションから印刷する際に、SGD の「Universal PDF ビューア」プリンタを使った印刷をユーザーに許可します。

オブジェクトの「[クライアント印刷: 上書き](#)」が有効な場合にのみ、Administration Console を使ってこの属性を編集できます。

この属性の設定は、次のいずれかよりも優先されます。

- 組織階層内の親オブジェクトの設定
- 親オブジェクトの設定が存在しない場合は、Administration Console の「グローバル設定」⇒「印刷」タブで設定されたデフォルト設定

この属性に対する変更が反映されるのは、新規ユーザーセッションだけです。

Object Manager: 「Printing」 ⇒ 「Let Users Print to a PDF Local File」

コマンド行

コマンドオプション: `--pdfviewerenabled 1|0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。

次の例では、「Universal PDF ビューア」プリンタを使用して印刷することをユーザーに許可します。

```
--pdfviewerenabled true
```

URL

使用法: URL をフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、ドキュメントオブジェクトです。

説明

オブジェクトに関連付けられている URL です。この URL は、ユーザーの Webtop、あるいはデスクトップの「スタート」または「起動」メニュー上のリンクをクリックすると表示されます。

絶対 URL または相対 URL を指定できます。相対 URL は SGD のドキュメントルート (通常は、`/install-dir/var/docroot`) からの相対 URL と見なされます。

Object Manager: 「General」 ⇒ 「URL」

コマンド行

コマンドオプション: `--url url`

使用法: ここで、*url* は URL です。値に空白文字やシェルで解釈される特殊文字が含まれている場合は、引用符 (") か (') で囲む必要があります。

次の例では、オブジェクトがクリックされた時に Indigo Insurance のホームページを表示します。

```
--url http://www.indigo-insurance.com
```

次の例では、SGD ドキュメントルートからの相対パスで指定した URL を表示します。

```
--url ../my_docs/index.html
```

「ユーザーセッション」タブ

使用法: 「ユーザーセッション」タブ内のボタンを使用して、ユーザーセッションを表示したり管理したりします。

この属性を持つオブジェクトは、ユーザープロファイルオブジェクトです。

説明

このタブには、選択したユーザープロファイルオブジェクトのアクティブなユーザーセッションが一覧表示されます。ユーザーセッションは、SGD サーバーに接続されているユーザーを表します。

選択したユーザーセッションの詳細を表示するには、「ユーザーセッションリスト」テーブル内の「詳細の表示」ボタンを使用します。選択したユーザーセッションを終了するには、「終了」ボタンを使用します。「再読み込み」ボタンをクリックすると、「ユーザーセッションリスト」テーブルが更新されます。

「ユーザーセッションリスト」テーブルを検索する場合は、「検索」オプションを使用します。ユーザーの識別情報や Secure Global Desktop サーバーを検索するときは、検索文字列にワイルドカード「*」を使用できます。「*name*」という検索文字列の入力は、「**name**」の検索に相当し、検索文字列と一致するものがすべて返されます。

「ログイン時間」を検索するには、*yyyy/mm/dd hh:mm:ss* という書式の検索文字列を使用します。

デフォルトでは、検索によって返される結果の数は 150 個に制限されます。

Object Manager: 「Sessions」タブ

コマンド行

ユーザーセッションを一覧表示したり終了したりするには、コマンド行で `tarantella webtopsession` コマンドを使用します。[375 ページの「tarantella webtopsession コマンド」](#)を参照してください。

指定したユーザープロファイルオブジェクトに関するユーザーセッションの詳細を表示するには、`tarantella webtopsession list` コマンドを使用します。

コマンドオプション: `tarantella webtopsession list --person pobj`

使用法: ここで、*pobj* は、ユーザープロファイルオブジェクトの完全名です。

次の例では、ユーザープロファイルオブジェクト Indigo Jones のユーザーセッションを一覧表示します。

```
tarantella webtopsession list \  
"o=Indigo Insurance/ou=IT/cn=Indigo Jones"
```

ウィンドウを閉じるアクション

使用法: リストから設定値を選択します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、ユーザーがウィンドウマネージャーの装飾を使用してメインアプリケーションウィンドウを閉じた場合の処理を決定します。この属性を適用できるのは、「クライアントウィンドウ管理」または「独立ウィンドウ」の「[ウィンドウタイプ](#)」で設定されているアプリケーションに限られます。

次の表に、Administration Console のオプションと対応するコマンド行オプションを示します。

Administration Console	コマンド行	説明
アプリケーションに通知	notifyapp	閉じるアクションをアプリケーションに通常の方法で通知します。アプリケーションが要求を無視した場合、SGD はアプリケーションを強制終了 (kill) します。 コマンド行でオブジェクト属性を一覧表示すると、この属性値は notifyclient として表示されます。 この設定を適用できるのは、「クライアントウィンドウ管理」の「 ウィンドウタイプ 」で設定されている X アプリケーションに限られます。

Administration Console	コマンド行	説明
アプリケーションを強制終了	killapp	SGD はアプリケーションを強制終了 (kill) します。これは、プログラム xkill を使ってアプリケーションを終了するのに似ています。この設定を使用するのは、ユーザーがアプリケーションを閉じる際に障害が発生した場合に限定します。コマンド行でオブジェクト属性を一覧表示すると、この属性値は killclient として表示されます。 この設定を適用できるのは、「クライアントウィンドウ管理」の「 ウィンドウタイプ 」で設定されている X アプリケーションに限られます。
アプリケーションセッションを中断	suspendsession	アプリケーションオブジェクトが再開可能 (「 アプリケーションの再開機能 」を参照) な場合、アプリケーションのアプリケーションセッションを中断します。アプリケーションオブジェクトが再開不能な場合、アプリケーションセッションは終了します。この設定を使用するのは、アプリケーションにユーザーを終了させる独自の機構がある場合に限定します。 SGD クライアントを統合モードで使用している場合、中断しているアプリケーションを再開するためのコントロールはありません。アプリケーションを再開するためには、いったんログアウトしてからログインし直すか、Webtop を表示する必要があります。
アプリケーションセッションを終了	endsession	SGD はアプリケーションセッションを終了します。これは、「独立ウィンドウ」の「 ウィンドウタイプ 」で設定されている Windows アプリケーションや文字型アプリケーションのデフォルト設定です。

注 - アプリケーションセッションには、複数のアプリケーションを実行している CDE セッションなど、メインのアプリケーションウィンドウを複数含めることができます。この属性が「アプリケーションセッションを中断」または「アプリケーションセッションを終了」に設定されている場合、いずれかのアプリケーションを閉じると、セッション全体が中断または終了します。

Object Manager: 「Advanced」⇒「Window Close Action」

コマンド行

```
コマンドオプション:--windowclose notifyapp | killapp |
suspendsession | endsession
```

使用法: 有効な値を指定します。

次の例では、アプリケーションのメインウィンドウを閉じると、アプリケーションオブジェクトが再開可能なかぎり、アプリケーションセッションが中断されます。

```
--windowclose suspendsession
```

ウィンドウの色

使用法: オプションを選択します。「カスタム色」オプションの場合は、色をフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、ルートウィンドウの外観を決定します。

標準 X の「ルートの波」模様を表示するには、「デフォルトの色」を選択します。ユーザー独自の色を使用するには、「カスタム色」を選択して、「**ウィンドウの色: カスタム色**」属性を指定します。

コマンド行でオブジェクト属性を一覧表示すると、属性値 `custom` が `color` として表示されます。

Object Manager: 「Appearance」⇒「Root Window」

コマンド行

コマンドオプション: `--roottype default|custom`

使用法: 有効な値を指定します。

次の例では、ルートウィンドウに `--rootcolor` を使って指定したカスタム色を使用します。

```
--roottype custom
```

ウィンドウの色: カスタム色

使用法: 「**ウィンドウの色**」属性で「カスタム色」オプションが選択されている場合に使用されます。有効なカラーリソース (`yellow` など) をフィールドに入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、ルートウィンドウの色を決定します。

色の名前は、X プロトコルエンジンの「RGB データベース」属性で指定したファイルを使って、RGB 値に変換されます。

Object Manager: 「Appearance」⇒「Color」

コマンド行

コマンドオプション: `--rootcolor color`

使用法: ここで、*color* は、有効なカラーリソース (yellow など) です。

次の例では、ルートウィンドウの色に plum4 を使用します。

```
--rootcolor plum4
```

ウィンドウ管理キー

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- Windows アプリケーション
- X アプリケーション

説明

ウィンドウ管理を処理するキーボードショートカットは、リモートセッションに送信することも、ローカルで実行することもできます。この設定が有効なのは、「[ウィンドウタイプ](#)」が「キオスク」モードに設定されているアプリケーションだけです。

この属性が有効になっているときに「キオスク」モードを終了するには、キーシーケンス `Alt + Ctrl + Shift + スペース` を使用します。これにより、ローカルデスクトップ上でキオスクセッションがアイコン化されます。

Object Manager: 相当するものではありません

コマンド行

コマンドオプション: `--remotewindowkeys 1 | 0`

使用法: 1 (true) または 0 (false) を指定します。デフォルト設定は 0 です。

次の例では、ウィンドウ管理キーをリモートセッションに送ります。

```
--mapprinters 1
```

ウィンドウマネージャー

使用法: ウィンドウマネージャーのフルパス名をフィールドに入力します。新規エントリを追加するには、リターンキーを押します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、アプリケーションで使用するウィンドウマネージャーを指定します。また、この名前を他のアプリケーションで使用して、メインアプリケーションと一緒に実行することもできます。

必要な数だけウィンドウマネージャーアプリケーションを指定できます。

「クライアントウィンドウ管理」の「[ウィンドウタイプ](#)」で設定されている X アプリケーション、または Microsoft RDP [Windows プロトコル](#)を使用する Windows アプリケーションには、ウィンドウマネージャーは必要ありません。

Object Manager: 「Advanced」⇒「Window Manager」

コマンド行

コマンドオプション: `--winmgr command`

使用法: ここで、*command* は、フルパス名です。各パス名は空白文字で区切ります。

次の例では、twm ウィンドウマネージャーを使ってアプリケーションを起動します。


```
--winmgr /usr/local/bin/twm
```

ウィンドウのサイズ: クライアントの最大サイズ

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、アプリケーションの初期サイズに影響します。

アプリケーションの起動時に、ユーザーの画面全体に表示されるようにするには、チェックボックスを選択します。

アプリケーションはウィンドウ装飾付きで表示されます。アプリケーションを、ウィンドウ装飾なしで完全に画面全体に表示するには、アプリケーションオブジェクトの「[ウィンドウタイプ](#)」属性を「キオスク」と設定します。

オブジェクトの「[ウィンドウのサイズ: 幅](#)」属性と「[ウィンドウのサイズ: 高さ](#)」属性に従って、アプリケーションのサイズを決定するには、チェックボックスの選択を解除します。

「[ウィンドウのサイズ: ウィンドウに合わせて拡大縮小する](#)」が選択されていない限り、アプリケーションサイズは、アプリケーションセッションが存続している間は変わりません。ユーザーがアプリケーションをあるクライアントデバイス上で起動し、同じアプリケーションを画面の解像度が異なるクライアントデバイス上で再開した場合、アプリケーションは画面に合わせてサイズを変更しません。

注 – この属性が選択されていて、かつアプリケーションが文字型アプリケーションである場合は、「[フォントサイズ: 固定フォントサイズ](#)」属性の選択が解除されている必要があります。

Object Manager: 「General」 ⇒ 「Clients Maximum Size」

コマンド行

コマンドオプション: `--maximize true | false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、クライアントデバイス上で、アプリケーションを最大サイズで表示します。

```
--maximize true
```

ウィンドウのサイズ: カラム

使用法: フィールドに、アプリケーションの端末ウィンドウのカラム数を入力します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、端末ウィンドウのカラム数を 5 ～ 132 の範囲で定義します。

Object Manager: 「General」 ⇒ 「Columns」

コマンド行

コマンドオプション: `--cols cols`

使用法: ここで、*cols* は、端末ウィンドウ内のカラム数です。

次の例では、アプリケーション用のウィンドウを 80 カラムに設定します。

```
--cols 80
```

ウィンドウのサイズ: 高さ

使用法: フィールドに、アプリケーションの高さをピクセルで入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション

- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、アプリケーションの高さをピクセルで定義します。高さの最小値は 10 ピクセルで、最大値は 65535 ピクセルです。

Object Manager: 「General」⇒「Height」

コマンド行

コマンドオプション: `--height pixels`

使用法: ここで、*pixels* は、アプリケーションの高さ (ピクセル) です。この属性が必要ない場合でも高さを指定する必要があります。たとえば、アプリケーションが「クライアントウィンドウ管理」の「[ウィンドウタイプ](#)」で設定されている場合や、アプリケーションが「[ウィンドウのサイズ: クライアントの最大サイズ](#)」で表示するように設定されている場合でも、高さを指定する必要があります。

次の例では、高さが 600 ピクセルのウィンドウを使用して、アプリケーションを表示します。

```
--height 600
```

ウィンドウのサイズ: 行

使用法: フィールドに、アプリケーションの端末ウィンドウの行数を入力します。

この属性を持つオブジェクトは、文字型アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、端末ウィンドウの行数を 50 ～ 100 の範囲で定義します。

Object Manager: 「General」⇒「Lines」

コマンド行

コマンドオプション: `--lines lines`

使用法: ここで、*lines* は、端末ウィンドウ内の行数です。

次の例では、アプリケーションのウィンドウを 25 行に設定します。

```
--lines 25
```

ウィンドウのサイズ: 最大化

使用法: 「最大化」チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

エミュレータウィンドウを最大化するかどうかを指定します。

これらのコマンドを使用すると、Unix 用 TeemTalk エミュレータが読み込まれるときに最大限のサイズでウィンドウが表示されます。このとき、デフォルトの行数とカラム数は変更されません。タイトルバーやソフトボタンなどのウィンドウ要素が有効になっている場合は、それらの状態もすべて維持されます。

Object Manager: 「3270」⇒「Maximize the Emulator Window」

Object Manager: 「5250」⇒「Maximize the Emulator Window」

コマンド行

コマンドオプション: `--3270ma true|false`

コマンドオプション: `--ma true|false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、3270 アプリケーションのエミュレータウィンドウが最大化されます。

```
--3270ma true
```

次の例では、5250 アプリケーションのエミュレータウィンドウが最大化されます。

```
--ma true
```

ウィンドウのサイズ: ウィンドウに合わせて拡大縮小する

使用法: 「ウィンドウに合わせて拡大縮小する」チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション

説明

この属性は、アプリケーションの表示をウィンドウに合わせて拡大縮小することを指定します。

この属性を適用できるのは、「独立ウィンドウ」または「キオスク」の「[ウィンドウタイプ](#)」属性が設定されている場合だけです。

この属性が選択されている場合、アプリケーションは表示されるウィンドウに合わせて常に拡大縮小されます。ウィンドウのサイズを変更すると、新しいウィンドウのサイズに合わせて再度アプリケーションが拡大縮小されます。このとき、スクロールバーは表示されません。

拡大縮小されたアプリケーションと拡大縮小されていないアプリケーションの表示を切り替えるときは、Scroll Lock キーを押します。

Object Manager: 「General」⇒「Scale to Fit Window」

コマンド行

コマンドオプション: `--scalable true | false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、ウィンドウに合わせてアプリケーションが拡大縮小されます。

```
--scalable true
```

ウィンドウのサイズ: 幅

使用法: フィールドに、アプリケーションの幅をピクセルで入力します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、アプリケーションの幅をピクセルで定義します。幅の最小値は 10 ピクセルで、最大値は 65535 ピクセルです。

Object Manager: 「General」⇒「Width」

コマンド行

コマンドオプション: `--width pixels`

使用法: ここで、*pixels* は、アプリケーションの幅 (ピクセル) です。この属性が必要ない場合でも幅を指定する必要があります。たとえば、アプリケーションが「クライアントウィンドウ管理」の「[ウィンドウタイプ](#)」で設定されている場合や、アプリケーションが「[ウィンドウのサイズ: クライアントの最大サイズ](#)」で表示するように設定されている場合でも、幅を指定する必要があります。

次の例では、幅が 300 ピクセルのウィンドウを使用して、アプリケーションを表示します。

```
--width 300
```

ウィンドウタイプ

使用法: リストから設定値を選択します。

この属性を持つオブジェクトは、次のとおりです。

- 文字型アプリケーション
- Windows アプリケーション
- X アプリケーション
- 3270 アプリケーション
- 5250 アプリケーション

説明

この属性は、アプリケーションをユーザーに表示する方法を決定します。

いくつかの設定値は他の属性に影響を与えます。たとえば、Administration Console で「クライアントウィンドウ管理」を選択すると、アプリケーションのサイズを設定する属性が無効になります。これらの属性をコマンド行で指定できますが、効果はありません。

次の表に、Administration Console のオプションと対応するコマンド行オプションを示します。

Administration Console	コマンド行	適用先	説明
クライアントウィンドウ管理	clientwm	X アプリケーション	<p>アプリケーションのウィンドウは、クライアントデバイス上でアプリケーションを実行している場合と同じ方法で動作します。たとえば、ウィンドウのサイズ変更、移動、最小化、最大化は、クライアントの通常のウィンドウ管理コントロールを使って実行できます。</p> <p>オブジェクトの「ウィンドウを閉じるアクション」属性は、ユーザーが最後のウィンドウまたはメインウィンドウを閉じたときに行なわれる処理を決定します。</p> <p>コマンド行でオブジェクト属性を一覧表示すると、この属性値は multiplewindows として表示されます。</p> <p>トップレベルの、サイズ変更可能なウィンドウが多数あるアプリケーションで使用します。</p>
独立ウィンドウ	independent	すべてのアプリケーションタイプ	<p>アプリケーションは Web ブラウザのツールバーやメニューのない、新規ウィンドウに表示されます。</p> <p>このウィンドウは、サイズを変更できますが、アプリケーションのサイズは変更されません。ウィンドウにスクロールバーが表示されます。オブジェクトの「ウィンドウのサイズ: 幅」属性と「ウィンドウのサイズ: 高さ」属性が、アプリケーションのサイズを決定します。</p> <p>ウィンドウを閉じると、オブジェクトの「ウィンドウを閉じるアクション」属性に従って、アプリケーションセッションが終了または中断されます。ウィンドウが閉じると、アプリケーションの終了を確認するよう求めるダイアログが表示されます。</p> <p>コマンド行でオブジェクト属性を一覧表示すると、この属性値は awtwindow として表示されます。</p>

Administration Console	コマンド行	適用先	説明
キオスク	kiosk	文字型アプリケーション、X アプリケーション、Windows アプリケーション	アプリケーションは、ウィンドウ装飾なしで、フルスクリーン表示されます。 このウィンドウをサイズ変更することや、移動することはできません。 フルスクリーンのデスクトップセッションで使用します。
ローカル X サーバー	localx	X アプリケーションと Windows アプリケーション	アプリケーションは、クライアントデバイス上にインストールされている X サーバーが使用可能な場合は、X サーバーを使って表示されます。X サーバーが使用できない場合は、独立ウィンドウに表示されます。 この設定のアプリケーションは、独立ウィンドウを使う場合でも再開できません。 クライアントデバイス上の X サーバーのホストアクセス制御が、アプリケーションサーバーに対するアクセスを許可している必要があります。ホストアクセス制御については、使用している X サーバーのマニュアルを参照してください。
シームレスウィンドウ	seamless	Windows アプリケーション	アプリケーションのウィンドウは、Windows アプリケーションサーバー上で動作しているアプリケーションのように動作します。 シームレスウィンドウで起動されているアプリケーションの表示は、Scroll Lock キーを押してシームレスウィンドウと独立ウィンドウを切り替えることができます。 コマンド行でオブジェクト属性を一覧表示すると、この属性値は seamlesswindows として表示されます。 フルスクリーンのデスクトップセッションでは使用しないでください。代わりに、キオスクウィンドウまたは独立ウィンドウを使用してください。

Object Manager: 「General」⇒「Display Using」

コマンド行

コマンドオプション: `--displayusing webtop | clientwm | newbrowser | independent | kiosk | localx | seamless`

使用法: いずれかの有効な設定値を指定します。すべての設定値をすべてのタイプのアプリケーションに適用できるわけではありません。

次の例では、アプリケーションをフルスクリーンのデスクトップセッションとして表示します。


```
--displayusing kiosk
```

次の例では、アプリケーションを独立ウィンドウに表示します。

```
--displayusing independent
```

ウィンドウタイプ: 新規ブラウザウィンドウ

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、ドキュメントオブジェクトです。

説明

Web ブラウザを使って SGD にログインするユーザーの場合、この属性を選択すると、オブジェクト用に指定した URL が新しいブラウザウィンドウに表示されます。この属性を選択しないと、URL は Webtop 上に表示されます。

Object Manager: 「General」⇒「Open in New Browser Window」

コマンド行

コマンドオプション: `--newbrowser true | false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、新しいブラウザウィンドウにドキュメントを表示します。

```
--newbrowser true
```

Windows プロトコル

使用法: 「アプリケーションサーバーからの実行を試行する」チェックボックスを選択してから、プロトコルオプションを選択します。

この属性を持つオブジェクトは、Windows アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、Windows アプリケーションのホストとして機能しているサーバーへの接続に使用するプロトコルを識別します。

Administration Console	コマンド行
Microsoft RDP	wtss
Citrix ICA	winframe

Microsoft ターミナルサービスを使用してアプリケーションを実行する場合は、「Microsoft RDP」を使用します。

クライアントデバイス上にインストールされている Windows アプリケーションだけを起動する場合は、「アプリケーションサーバーからの実行を試行する」チェックボックスの選択を解除します。これにより、「[Windows プロトコル: 最初にクライアントからの実行を試行する](#)」チェックボックスが選択されます。

定義した Windows プロトコルにコマンド行オプションを適用する場合は、「[プロトコルの引数](#)」属性を使用します。

Object Manager: 「General」⇒「Windows Protocol」

コマンド行

コマンドオプション: `--winproto wts | winframe | none`

使用法: 有効な値を指定します。

次の例では、Microsoft RDP プロトコルを使用して Microsoft Windows サーバーに接続します。

```
--winproto wts
```

Windows プロトコル: 最初にクライアントからの実行を試行する

使用法: 「最初にクライアントからの実行を試行する」チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、Windows アプリケーションオブジェクトです。

説明

この属性は、ユーザーのクライアントデバイスからアプリケーションの起動を試みるかどうかを設定します。

この属性が選択されていて、アプリケーションがクライアントデバイスにインストールされていない場合、「[Windows プロトコル](#)」の設定が使用されます。この属性が選択されている場合、Windows プロトコルを使用していても、アプリケーションを再開できません。

Object Manager: 「General」⇒「Try Running From Client First」

コマンド行

コマンドオプション: `--trylocal true | false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、アプリケーションをローカルに起動することを試みます。

```
--trylocal true
```

X セキュリティー拡張機能

使用法: チェックボックスを選択または選択解除します。

この属性を持つオブジェクトは、X アプリケーションオブジェクトです。

説明

アプリケーションの X セキュリティー拡張機能を有効にするかどうかを設定します。

X セキュリティー拡張機能は、X クライアント (ホスト) を信頼されるクライアントと信頼されないクライアントに分類します。信頼されないクライアントは、信頼されるクライアントの所有するウィンドウやリソースと対話することができません。

安全でない可能性のあるアプリケーションサーバーから X アプリケーションを実行する必要がある場合は、X セキュリティー拡張機能を有効にして、アプリケーションを信頼されないモードで実行してください。これにより、X アプリケーションが X サーバー内で実行可能な操作が制限され、表示が保護されます。

アプリケーションを信頼されないモードで実行するには、次の手順を実行します。

1. 「[接続方法](#)」に `ssh` を使用するように、X アプリケーションを設定します。

2 X11 転送を許可するように ssh を設定します。

X セキュリティー拡張機能は、-Y オプションをサポートする ssh のバージョンでのみ動作します。

Object Manager: 「Advanced」 ⇒ 「Enable X Security Extension」

コマンド行

コマンドオプション: `--securityextension true | false`

使用法: `true` または `false` を指定します。

次の例では、アプリケーションの X セキュリティー拡張機能を有効にします。

```
--securityextension true
```

第4章

コマンド

SGD には、SGD を制御および設定するための組み込みコマンドセットがあります。この章では使用可能な SGD コマンドについて説明し、コマンドごとに使用例を示します。

この章の内容は、次のとおりです。

- 230 ページの「tarantella コマンド」
- 233 ページの「tarantella archive コマンド」
- 234 ページの「tarantella array コマンド」
- 239 ページの「tarantella cache コマンド」
- 240 ページの「tarantella config コマンド」
- 243 ページの「tarantella emulatorsession コマンド」
- 251 ページの「tarantella help コマンド」
- 251 ページの「tarantella license コマンド」
- 258 ページの「tarantella object コマンド」
- 310 ページの「tarantella passcache コマンド」
- 318 ページの「tarantella print コマンド」
- 327 ページの「tarantella query コマンド」
- 334 ページの「tarantella restart コマンド」
- 335 ページの「tarantella role コマンド」
- 342 ページの「tarantella security コマンド」
- 355 ページの「tarantella setup コマンド」
- 356 ページの「tarantella start コマンド」
- 357 ページの「tarantella start cdm コマンド」
- 357 ページの「tarantella status コマンド」
- 359 ページの「tarantella stop コマンド」
- 360 ページの「tarantella stop cdm コマンド」

- 360 ページの「tarantella tokencache コマンド」
- 363 ページの「tarantella tscal コマンド」
- 368 ページの「tarantella uninstall コマンド」
- 369 ページの「tarantella version コマンド」
- 369 ページの「tarantella webserver コマンド」
- 375 ページの「tarantella webtopsession コマンド」

tarantella コマンド

`/install-dir/bin/tarantella` コマンドを使用すると、コマンド行から SGD を制御できます。

形式

`tarantella option [option-specific-arguments]`

コマンド行でのオブジェクトの命名

多くの SGD コマンドでは、それらのコマンドで設定されるオブジェクトに名前を付ける必要があります。ほとんどの場合、オブジェクトの命名は、ローカルリポジトリや LDAP ディレクトリサーバーなど、データストアのさまざまな部分から行うことができます。

コマンド行でのオブジェクト名の付け方は、オブジェクトが SGD データストアのどの部分から生じているかによって異なります。

たとえば、ローカルリポジトリ内のオブジェクトには、次の名前を指定できます。

```
.../_ens/o=Indigo Insurance/ou=Marketing/cn=Cust-o-Dat
```

ローカルリポジトリ内のオブジェクトでは、名前の `.../_ens` 部分はオプションです。次のように入力することもできます。

```
o=Indigo Insurance/ou=Marketing/cn=Cust-o-Dat
```

LDAP ディレクトリに格納されているオブジェクトには、次の名前を指定できます。

```
.../_service/sco/tta/ldapcache/cn=Cust-o-Dat,ou=Marketing,o=Indigo Insurance
```

ネットワーク上のサーバーには、次の名前を指定できます。

```
.../_dns/verona.indigo-insurance.com
```

説明

バイナリを直接実行したり、kill コマンドを使用したりすることで、SGD サーバーを制御しようとししないでください。tarantella コマンドを使う方法が、SGD サーバーを制御するための、サポートされている唯一の方法です。

このコマンドのオプションを使うと、SGD サーバーを異なる方法で制御したり、SGD サーバーに関する情報を生成したりできます。tarantella コマンドはユーザーが独自に作成したシェルスクリプト内で使用できるので、SGD の管理作業を自動化するのに役立ちます。

SGD サーバーが実行中である場合、root または ttaserv グループ内の任意のユーザーは、ほとんどの tarantella オプションを実行できます。ttaserv グループは、ユーザーのプライマリグループまたは実効グループでなくてもかまいません。このコマンドのオプションを使用可能なユーザーの詳細については、次の表を参照してください。

SGD サーバーが停止している場合に tarantella コマンドを使用できるのは、root だけです。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明	実行可能なユーザー	詳細情報
archive	SGD サーバーのログファイルをアーカイブします。	root	233 ページの「tarantella archive コマンド」
array	SGD サーバーのアレイを作成および管理します。	SGD 管理者	234 ページの「tarantella array コマンド」
cache	LDAP データのキャッシュを管理します。	SGD 管理者	239 ページの「tarantella cache コマンド」
config	グローバル設定とサーバー固有の設定を編集します。	root または ttaserv グループ	240 ページの「tarantella config コマンド」
emulatorsession	アプリケーションセッションを表示および制御します。	root または ttaserv グループ	243 ページの「tarantella emulatorsession コマンド」
help	SGD コマンドの一覧を表示します。	root または ttaserv グループ	251 ページの「tarantella help コマンド」
license	SGD のライセンスキーを追加、表示、および削除します。	root または ttaserv グループ	251 ページの「tarantella license コマンド」
object	組織階層内のオブジェクトを操作します。	root または ttaserv グループ	258 ページの「tarantella object コマンド」

オプション	説明	実行可能なユーザー	詳細情報
passcache	パスワードキャッシュを操作します。	root または ttaserv グループ	310 ページの「tarantella passcache コマンド」
print	SGD 印刷サービスを制御します。	root または ttaserv グループ	318 ページの「tarantella print コマンド」
query	SGD サーバーのログファイルを検査します。	root	327 ページの「tarantella query コマンド」
restart	SGD サービスを再起動します。	root	334 ページの「tarantella restart コマンド」
role	ユーザーに特定のロールを割り当て、そのユーザーの Webtop にそのロール固有のリンクを追加します。	root または ttaserv グループ	335 ページの「tarantella role コマンド」
security	セキュリティーサービスを制御し、証明書を管理します。	root	342 ページの「tarantella security コマンド」
setup	Setup プログラムのオプションを変更し、オリジナルのオブジェクトを復元します。	root	355 ページの「tarantella setup コマンド」
start	SGD サービスを起動します。	root	356 ページの「tarantella start コマンド」
start_cdm	クライアントドライブマッピングサービスを起動します。	root	357 ページの「tarantella start cdm コマンド」
status	アレイの SGD サーバーの現在のステータスを表示します。	root または ttaserv グループ	357 ページの「tarantella status コマンド」
stop	SGD サービスを停止します。	root	359 ページの「tarantella stop コマンド」
stop_cdm	クライアントドライブマッピングサービスを停止します。	root	360 ページの「tarantella stop cdm コマンド」
tokencache	トークンキャッシュを操作します。	root または ttaserv グループ	360 ページの「tarantella tokencache コマンド」
tscal	Windows 以外のクライアントの Microsoft Windows ターミナルサービス CAL (Client Access License) を管理します。	root または ttaserv グループ	363 ページの「tarantella tscal コマンド」
uninstall	SGD をアンインストールします。	root	368 ページの「tarantella uninstall コマンド」

オプション	説明	実行可能なユーザー	詳細情報
version	インストールされている SGD のパッケージのバージョンを表示します。	root または ttaserv グループ	369 ページの「tarantella version コマンド」
webserver	SGD Web サーバーを制御します。	root	369 ページの「tarantella webserver コマンド」
webtopsession	ユーザーセッションを表示および制御します。	root または ttaserv グループ	375 ページの「tarantella webtopsession コマンド」

注 – すべてのコマンドに `--help` オプションがあります。特定のコマンドに関するヘルプを表示するには、`tarantella command --help` コマンドを使用します。

使用例

次の例では、何もメッセージを表示せずに、SGD サーバーを停止してから再起動します。

```
tarantella restart --quiet
```

次の例では、Write-o-Win アプリケーションのリンクを、「Global Administrators」ロールのメンバーの Webtop に追加します。

```
tarantella role add_link --role global \
  --link "o=applications/cn=Write-o-Win"
```

tarantella archive コマンド

SGD サーバーのログファイルをアーカイブします。

形式

```
tarantella archive
```

説明

ログのアーカイブ作成は、ファイルを圧縮して、`/install_dir/log` ディレクトリの下
の番号付きのサブディレクトリに移動します。このディレクトリのファイル
`summary.txt` には、アーカイブの作成時の `tarantella query` コマンドの実行結
果が格納されています。

使用例

次の例では、SGD サーバーのログファイルをアーカイブします。

```
tarantella archive
```

tarantella array コマンド

このコマンドを使うと、SGD 管理者は、SGD サーバーのアレイを設定および設定解
除することができます。

このコマンドはアレイのどの SGD サーバー上でも実行できます。

形式

```
tarantella array join | detach | make_primary | list
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なサブコマンドを示しています。

サブコマンド	説明	詳細情報
join	アレイにサーバーを追加します。	236 ページの「tarantella array join」

サブコマンド	説明	詳細情報
<code>detach</code>	アレイからセカンダリサーバーを削除します。	235 ページの「 <code>tarantella array detach</code> 」
<code>make_primary</code>	セカンダリサーバーを、現在所属しているアレイのプライマリサーバーに変更します。	238 ページの「 <code>tarantella array make_primary</code> 」
<code>list</code>	アレイのメンバーの一覧を表示し、プライマリサーバーを特定します。	238 ページの「 <code>tarantella array list</code> 」

注 – すべてのコマンドに `--help` オプションがあります。特定のコマンドに関するヘルプを表示するには、`tarantella array command --help` コマンドを使用します。

使用例

次の例では、サーバー `boston` を、プライマリサーバー `newyork` のアレイに追加します。

```
tarantella array join \
  --primary newyork.indigo-insurance.com \
  --secondary boston.indigo-insurance.com
```

次の例では、セカンダリサーバー `boston` をアレイのプライマリサーバーに変更します。以前のプライマリサーバーは、セカンダリサーバーになります。

```
tarantella array make_primary \
  --secondary boston.indigo-insurance.com
```

tarantella array detach

所属している SGD サーバーのアレイから、セカンダリサーバーを削除します。

形式

```
tarantella array detach --secondary serv
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--secondary</code>	削除するセカンダリサーバーのピア DNS 名を指定します。サーバー名はセカンダリサーバーでなければならない、同じアレイに属していなければならない。 一度に 1 つのサーバーだけを削除できます。

アレイからプライマリサーバーを削除するには、まず、`tarantella array make_primary` を使用して、別のサーバーをプライマリサーバーに変更し、次に、以前のプライマリサーバーをアレイから切り離します。

アレイからサーバーを削除すると、サーバーはそのライセンスキーを失います。

注 – このコマンドを実行したあとは、SGD によるアレイのすべての SGD サーバーへの変更のコピーが終了するまで、ほかの `tarantella array` コマンドは実行せずに、しばらくお待ちください。`tarantella status` コマンドがアレイの各 SGD サーバーに同一の結果を返すと完了です。

アレイ内のセキュア通信を使用している場合は、セカンダリサーバーが切り離されるときに、そのサーバー専用の認証局 (CA) 証明書とサーバーピア証明書が生成されます。

使用例

次の例では、アレイからセカンダリサーバー `boston` を削除します。

```
tarantella array detach --secondary boston.indigo-insurance.com
```

tarantella array join

SGD サーバーのアレイに、プライマリサーバーまたはセカンダリサーバーとしてサーバーを追加します。

形式

```
tarantella array join [ --primary pserve ]  
                      [ --secondary sserve ]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--primary</code>	アレイ内のプライマリサーバーのピア DNS 名を指定します。デフォルトは、このコマンドを実行するサーバーです。
<code>--secondary</code>	追加するサーバーのピア DNS 名を指定します。セカンダリサーバーは、アレイ内の唯一のメンバー (「スタンドアロン」サーバー) でなければなりません。デフォルトは、このコマンドを実行するサーバーです。 一回に追加できるセカンダリサーバーは 1 つだけです。

注 – このコマンドを実行したあとは、SGD によるアレイのすべての SGD サーバーへの変更のコピーが終了するまで、ほかの `tarantella array` コマンドは実行せずに、しばらくお待ちください。 `tarantella status` コマンドがアレイの各 SGD サーバーに同一の結果を返すと完了です。

Advanced Load Management を使用する負荷分散アプリケーションサーバーを追加する場合は、アレイを追加したあとに `tarantella restart --warm` コマンドを使用してウォームリスタートを実行してください。新しいサーバーを追加したアレイで Advanced Load Management が使用されている場合は、サーバーを追加したあとにそのアレイ全体のウォームリスタートを実行してください。

アレイ内のセキュア通信を使用している場合は、コマンドを実行した場所に依じて、プライマリサーバーまたはセカンダリサーバーの CA 証明書を受け入れることが要求されます。

使用例

次の例では、サーバー `boston` を、プライマリサーバーが `newyork` のアレイに追加します。

```
tarantella array join \  
  --primary newyork.indigo-insurance.com \  
  --secondary boston.indigo-insurance.com
```

次の例では、コマンドを実行したサーバーを、プライマリサーバーが `newyork` のアレイに追加します。

```
tarantella array join \  
  --primary newyork.indigo-insurance.com
```

tarantella array list

SGD サーバーのアレイの各メンバーを、プライマリサーバーが見分けられるように表示します。

注 – このコマンドを実行するには、root ユーザーになる必要があります。

形式

```
tarantella array list
```

使用例

次の例では、アレイのすべての SGD サーバーを表示します。

```
tarantella array list
```

tarantella array make_primary

セカンダリサーバーを、現在所属しているアレイのプライマリサーバーに変更します。以前のプライマリサーバーは、セカンダリサーバーになります。

形式

```
tarantella array make_primary --secondary serv
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

サブコマンド	説明
--secondary	プライマリサーバーに変更するセカンダリサーバーのピア DNS 名を指定します。

注 – このコマンドを実行したあとは、SGD によるアレイのすべての SGD サーバーへの変更のコピーが終了するまで、ほかの `tarantella array` コマンドは実行させずに、しばらくお待ちください。`tarantella status` コマンドがアレイの各 SGD サーバーに同一の結果を返すと完了です。

アレイ内のセキュア通信を使用している場合は、新しいプライマリがアレイの認証局になり、アレイのすべての SGD サーバーに新しいサーバーピア証明書を発行します。

使用例

次の例では、セカンダリサーバー `boston` をアレイのプライマリサーバーに変更します。

```
tarantella array make_primary \  
  --secondary boston.indigo-insurance.com
```

tarantella cache コマンド

LDAP ディレクトリサーバーから取得したデータのキャッシュをフラッシュします。

形式

```
tarantella cache --flush  
ldapgroups | ldapconn | ldapconn-lookups | krb5config | all
```

説明

このコマンドは、LDAP ディレクトリサーバーから取得したデータのキャッシュをフラッシュします。このデータは、次の機能を使用した場合にだけ取得されます。

- LDAP 認証
- Active Directory 認証
- Directory Services Integration

次の表は、`--flush` オプションと組み合わせて使用できる値を示しています。

値	説明
<code>ldapgrouops</code>	すべての LDAP グループデータのキャッシュをフラッシュします。 Directory Services Integration で使用します。
<code>ldapconn</code>	すべての IP アドレス、ドメイン、および属性データのキャッシュをフラッシュします。
<code>ldapconn-lookups</code>	すべての LDAP 検索データのキャッシュをフラッシュします。 Directory Services Integration で使用します。
<code>krb5config</code>	現在の Kerberos 設定を SGD サーバーの元の Kerberos 設定で更新します。 SGD サーバーを再起動しないで Kerberos 設定を構成し直す場合に 使用できます。Active Directory 認証にのみ使用します。
<code>all</code>	すべての LDAP データをフラッシュします。

注 – このコマンドは、コマンドを実行した SGD サーバーのキャッシュだけをフラッシュします。

使用例

次の例では、すべての LDAP データのキャッシュをフラッシュします。

```
tarantella cache --flush all
```

tarantella config コマンド

`tarantella config` コマンドは、グローバル設定を表示し、設定します。また、アレイ内の任意の SGD サーバーのサーバー固有の設定也表示し、設定します。

形式

```
tarantella config list | edit
```


説明

次の表は、このコマンドで使用可能なサブコマンドを示しています。

サブコマンド	説明	詳細情報
list	グローバル属性とサーバー固有の属性、およびそれぞれの現在の値の一覧を表示します。	242 ページの「tarantella config list」
edit	グローバル属性とサーバー固有の属性を編集します。	241 ページの「tarantella config edit」

注 – すべてのコマンドに `--help` オプションがあります。特定のコマンドに関するヘルプを表示するには、`tarantella config subcommand --help` コマンドを使用します。

使用例

次の例では、サーバー `newyork.indigo-insurance.com` のサーバー固有の属性を表示します。

```
tarantella config list --server newyork.indigo-insurance.com
```

次の例では、コマンドを実行するサーバーの「`cpe-maxsessions`」属性を 10 と設定します。

```
tarantella config edit --cpe-maxsessions 10
```

tarantella config edit

グローバル属性とサーバー固有の属性を編集します。

形式

```
tarantella config edit { { --setting value... }...  
                        [ --array | --server serv... ]  
                      } | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--setting value...</code>	編集する 1 つの属性と、その新しい値を指定します。
<code>--array</code>	サーバー固有の属性を設定する際に、アレイ内のすべての SGD サーバーに、変更内容を適用します。
<code>--server</code>	サーバー固有の属性を変更する際に、アレイ内の <code>serv</code> で指定した各メンバーに、変更内容を適用します。各サーバーは、ピア DNS 名または IP アドレスを使って指定します。
<code>--file</code>	属性を編集する一式のコマンドを格納したバッチファイルを指定します。

`--array` オプションも、`--server` オプションも指定しない場合、このコマンドは、コマンドを実行する SGD サーバーのサーバー固有の属性を設定します。

変更できる `setting` の一覧を確認するには、`tarantella config list` を使用します。

グローバル属性の詳細については、[第 1 章](#)を参照してください。

サーバー固有の属性の詳細については、[第 2 章](#)を参照してください。

使用例

次の例では、SGD サーバー `newyork.indigo-insurance.com` and `boston.indigo-insurance.com` の「`cpe-exitafter`」属性を 50 と設定します。

```
tarantella config edit \  
  --cpe-exitafter 50 \  
  --server newyork.indigo-insurance.com \  
           boston.indigo-insurance.com
```

次の例では、コマンドを実行するサーバーの「`cpe-maxsessions`」属性を 10 と設定します。

```
tarantella config edit \  
  --cpe-maxsessions 10
```

tarantella config list

グローバル属性とサーバー固有の属性、およびそれぞれの現在の値の一覧を表示します。

形式

```
tarantella config list { [ --setting... ]  
                        [ --server serv ]  
                        } | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--setting</code>	値を表示する属性を指定します。 <code>--setting</code> オプションを指定しない場合、すべてのグローバル属性とサーバー固有の属性の一覧が表示されます。
<code>--server</code>	ピア DNS 名または IP アドレスで指定した、アレイ内で指定した SGD サーバーのサーバー固有の属性の一覧を表示します。省略した場合、コマンドを実行した SGD サーバーのサーバー固有の属性の一覧を表示します。
<code>--file</code>	属性を表示する一式のコマンドを格納したバッチファイルを指定します。

グローバル属性の詳細については、[第 1 章](#)を参照してください。

サーバー固有の属性の詳細については、[第 2 章](#)を参照してください。

使用例

次の例では、サーバー `newyork.indigo-insurance.com` のグローバル属性とサーバー固有の属性の一覧を表示します。

```
tarantella config list --server newyork.indigo-insurance.com
```

次の例では、「array-port-unencrypted」属性の値の一覧を表示します。

```
tarantella config list --array-port-unencrypted
```

tarantella emulatorsession コマンド

このコマンドを使うと、SGD 管理者はアプリケーションセッションを表示および操作できます。

形式

tarantella emulatorsession list | info | shadow | suspend | end

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なサブコマンドを示しています。

サブコマンド	説明	詳細情報
list	アプリケーションセッションを表示します。	245 ページの「tarantella emulatorsession list」
info	アプリケーションセッションに関する詳細情報を表示します。	246 ページの「tarantella emulatorsession info」
shadow	アプリケーションセッションをシャドウイングします。	247 ページの「tarantella emulatorsession shadow」
suspend	アプリケーションセッションを中断します。	249 ページの「tarantella emulatorsession suspend」
end	アプリケーションセッションを終了します。	250 ページの「tarantella emulatorsession end」

注 – すべてのコマンドに `--help` オプションがあります。特定のコマンドに関するヘルプを表示するには、`tarantella emulatorsession subcommand --help` コマンドを使用します。

使用例

次の例では、Emma Rald のアプリケーションセッションを表示します。

```
tarantella emulatorsession list \  
  --person "o=Indigo Insurance/cn=Emma Rald"
```

次の例では、指定したセッション ID のアプリケーションセッションをシャドウイングします。

```
tarantella emulatorsession shadow \  
  "paris.indigo-insurance.com:965127448604:...%2f_ens%2fo=Indigo  
Insurance%2fcn=Emma Rald"
```

tarantella emulatorsession list

指定した条件に一致するアプリケーションセッションを表示します。表示される情報には、セッション ID が含まれています。セッション ID は、他の tarantella emulatorsession コマンドで使用します。

セッション ID の例を次に示します。paris.indigo-insurance.com:965127448604:
...%2f_ens%2fo=Indigo Insurance%2fcn=Emma Rald.

セッション ID に空白文字を使用できますが、引用符 (") か (') で囲む必要があります。

形式

```
tarantella emulatorsession list
    [--person pobj]
    [--application appobj]
    [--appserver hobj]
    [--server serv]
    [--format text|count|xml]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--person	指定した人物に一致するアプリケーションセッションを表示します。ユーザープロファイルの名前を使用します。
--application	指定したアプリケーションに一致するアプリケーションセッションを表示します。アプリケーションの名前を使用します。
--appserver	指定したアプリケーションサーバーに一致するアプリケーションセッションを表示します。アプリケーションサーバーの名前を使用します。
--server	指定した SGD サーバーがホストしているアプリケーションセッションを表示します。サーバーの名前か、ピア DNS 名を使用します。
--full	クライアントの現在の IP アドレスおよびアプリケーションセッションのステータスを出力に追加します。この情報の表示には、通常より時間がかかります。
--format	出力形式を指定します (デフォルト値は text)。一致するセッションの数だけを表示する場合は、count を使用します。

--person、--application、--appserver、および --server をすべて省略した場合、すべてのアプリケーションセッションが表示されます。

使用例

次の例では、Emma Rald のアプリケーションセッションを表示します。

```
tarantella emulatorsession list \  
  --person "o=Indigo Insurance/cn=Emma Rald"
```

次の例では、SGD サーバー boston.indigo-insurance.com 上で稼働しているすべてのアプリケーションセッションを表示します。boston.indigo-insurance.com は、プロトコルエンジンが稼働しているサーバーです。

```
tarantella emulatorsession list \  
  --server boston.indigo-insurance.com
```

tarantella emulatorsession info

アプリケーションセッションに関する詳細情報を表示します。

形式

```
tarantella emulatorsession info [ --sessid sessid... ]  
                                [ --peid peid... ]  
                                [--format text|xml|quiet]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--sessid</code>	指定したセッション ID に一致するアプリケーションセッションの詳細情報を表示します。セッション ID を調べるには、 <code>tarantella emulatorsession list</code> コマンドを使用します。
<code>--peid</code>	指定したプロトコルエンジンのプロセス ID に一致するアプリケーションセッションの詳細情報を表示します。有効なプロセス ID は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">• コマンドを実行するアプリケーションサーバー上のプロセス ID を表す数値。たとえば、3456。• ピア DNS 名とプロセス ID の組み合わせ。たとえば、<code>boston.indigo-insurance.com:3456</code> は、指定した SGD サーバー上のプロセス ID を表します。
<code>--format</code>	出力形式を指定します (デフォルト設定は <code>text</code>)。 <code>--format quiet</code> を使うと、メッセージは表示されません。

終了コードは、指定したセッション ID と プロセス ID の中で、存在しないものの番号を示します。

使用例

次の例では、コマンドを実行するアプリケーションサーバー上のプロトコルエンジンのプロセス ID 「3456」と「4567」に一致するアプリケーションセッションの詳細情報を表示します。

```
tarantella emulatorsession info --peid 3456 4567
```

tarantella emulatorsession shadow

アプリケーションセッションをシャドウイングし、管理者とユーザーがアプリケーションを同時に使って対話できるようにします。アプリケーションセッションをシャドウイングできるのは、SGD 管理者に限られます。シャドウイングできるのは、Windows アプリケーションと X アプリケーションだけです。中断しているアプリケーションをシャドウイングすることはできません。

形式

```
tarantella emulatorsession shadow sessid
                                     [--read-only]
                                     [--silent]
                                     [--format text|quiet]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<i>sessid</i>	指定したセッション ID のアプリケーションセッションをシャドウイングします。セッション ID を調べるには、 <code>tarantella emulatorsession list</code> コマンドを使用します。
<code>--read-only</code>	管理者がアプリケーションと対話せずにセッションをシャドウイングすることを許可します。
<code>--silent</code>	管理者がアプリケーションと対話しながらセッションをシャドウイングすることを許可します。管理者がユーザーのセッションをシャドウイングしようとしていることが通知されないの、ユーザーはシャドウイングを拒否することができません。 このオプションを <code>--read-only</code> と一緒に使用した場合には、ユーザーはシャドウイングされることを通知されず、管理者はアプリケーションと対話することができません。 注 - 一部の国では、ユーザーに通知せずにシャドウイングすることが法律で禁じられています。その法律に従う義務があります。
<code>--format</code>	出力形式を指定します (デフォルト設定は <code>text</code>)。 <code>--format quiet</code> を使うと、メッセージは表示されません。

注 - また、Administration Console の「一般設定」⇒「アプリケーションセッション」タブからセッションをシャドウイングすることもできます。ユーザープロファイルオブジェクトまたはアプリケーションオブジェクトからセッションを選択します。ただし、Administration Console では、読み取り専用モードおよびサイレントモードでセッションをシャドウイングすることはできません。

`--silent` を使用しない場合、管理者がユーザーのセッションをシャドウイングしようとしていることがそのユーザーに通知されます。ユーザーは、シャドウイングを拒否することができます。シャドウイングが終了するときにも、ユーザーに通知されます。

終了コード 0 は、正常終了を示します。終了コード 1 は、セッションが存在しないことを示します。終了コード 2 は、セッションをシャドウイングできないことを示します。終了コード 3 は、セッションが中断中であることを示します。

使用例

次の例では、指定したセッション ID のアプリケーションセッションをシャドウイングします。

```
tarantella emulatorsession shadow \  
  "paris.indigo-insurance.com:965127448604:...%2f_ens%2fo=Indigo  
Insurance%2fcn=Emma Rald"
```

次の例では、指定したセッション ID のアプリケーションセッションをユーザーに通知せずにシャドウイングします。管理者はアプリケーションと対話することができません。

```
tarantella emulatorsession shadow \  
  "paris.indigo-insurance.com:965127448604:...%2f_ens%2fo=Indigo  
Insurance%2fcn=Emma Rald" \  
--read-only --silent
```

tarantella emulatorsession suspend

アプリケーションセッションを中断します。

形式

```
tarantella emulatorsession suspend sessid...  
                                [--format text|quiet]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<i>sessid</i> ...	指定したセッション ID のアプリケーションセッションを中断します。セッション ID を調べるには、 <code>tarantella emulatorsession list</code> コマンドを使用します。
<code>--format</code>	出力形式を指定します (デフォルト設定は <code>text</code>)。 <code>--format quiet</code> を使うと、メッセージは表示されません。

終了コード 0 は、正常終了を示します。終了コード 1 は、セッションが存在しないことを示します。終了コード 2 は、中断中のセッションがいくつかあることを示します。終了コード 3 は、存在しないセッションと中断中のセッションが混在していることを示します。

使用例

次の例では、指定したセッション ID のアプリケーションセッションを中断します。

```
tarantella emulatorsession suspend \  
  "paris.indigo-insurance.com:965127448604:...%2f_ens%2fo=Indigo  
  Insurance%2fcn=Emma Rald"
```

tarantella emulatorsession end

アプリケーションセッションを終了します。アプリケーションはただちに終了されるので、ユーザーのデータが失われることがあります。

形式

```
tarantella emulatorsession end sessid...  
                                [--format text|quiet]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<i>sessid</i> ...	終了するアプリケーションセッションのセッション ID を指定します。セッション ID を調べるには、 <code>tarantella emulatorsession list</code> コマンドを使用します。
--format	出力形式を指定します (デフォルト設定は text)。--format quiet を使うと、メッセージは表示されません。

このコマンドの終了コード 0 は、すべてのセッションが正常終了したことを示します。終了コード 1 は、存在しないセッション ID がいくつかあることを示します。

使用例

次の例では、指定したアプリケーションセッションを終了します。

```
tarantella emulatorsession end \  
  "paris.indigo-insurance.com:965127448604:...%2f_ens%2fo=Indigo  
Insurance%2fcn=Emma Rald"
```

tarantella help コマンド

SGD コマンドの一覧を表示します。

形式

```
tarantella help
```

説明

SGD コマンドの一覧を表示します。

特定のコマンドに関するヘルプを表示するには、`tarantella command --help` コマンドを使用します。

使用例

次の例では、SGD コマンドの一覧を表示します。

```
tarantella help
```

tarantella license コマンド

このコマンドは、SGD ライセンスキーを追加および削除し、ライセンス情報を表示します。

形式

```
tarantella license add | remove | list | status | query | info
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なサブコマンドを示しています。

サブコマンド	説明	詳細情報
add	アレイにライセンスキーを追加します。	253 ページの「tarantella license add」
remove	アレイからライセンスキーを削除します。	257 ページの「tarantella license remove」
list	現在インストールされているライセンスキーを表示します。	254 ページの「tarantella license list」
status	現在のライセンスの使用状況を表示します。	258 ページの「tarantella license status」
query	ライセンス侵害を含め、アレイ全体のライセンスの使用状況に関する情報を表示します。	255 ページの「tarantella license query」
info	署名付きのライセンスキー情報を生成します。	253 ページの「tarantella license info」

注 – すべてのコマンドに `--help` オプションがあります。特定のコマンドに関するヘルプを表示するには、`tarantella license command --help` コマンドを使用します。

使用例

次の例では、アレイ用に現在インストールされているライセンスキーを表示します。

```
tarantella license list
```

次の例では、ライセンスキー `XXXXXX-XXXXXX-XXXXXX-XXXXXX-XXXXXX` を追加します。これは有効な SGD ライセンスキーではありません。

```
tarantella license add XXXXXX-XXXXXX-XXXXXX-XXXXXX-XXXXXX
```

tarantella license add

ライセンスキーを SGD アレイに追加します。

形式

```
tarantella license add key...
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<i>key...</i>	有効な SGD ライセンスキー。形式は AAAAA-AAAAA-AAAAA-AAAAA-AAAAA です (大文字と小文字を区別しない A-Z の範囲の 5 文字で構成されたブロックが 5 つあり、ブロック間はハイフン (-) で区切られている)。

使用例

次の例では、ライセンスキー XXXXXX-XXXXX-XXXXX-XXXXX-XXXXX を追加します。これは有効な SGD ライセンスキーではありません。

```
tarantella license add XXXXXX-XXXXX-XXXXX-XXXXX-XXXXX
```

tarantella license info

署名付きのライセンスキー情報を生成します。

形式

```
tarantella license info
```

説明

このコマンドの出力には、次が含まれます。

- ライセンスキーのリスト。

- アレイに関する情報。
- 日付と時刻。
- SGD のバージョン。
- デジタル署名。

注 – 出力をコピーする場合は、BEGIN および END 行を必ず含めるようにしてください。

このコマンドは、プライマリ SGD サーバーで実行する必要があります。

使用例

次の例では、署名付きのライセンスキー情報を生成します。

```
tarantella license info
```

tarantella license list

アレイ用に現在インストールされているライセンスキーのリストを表示します。

形式

```
tarantella license list
```

説明

ライセンスキーおよびライセンスの詳細については、『Sun Secure Global Desktop 管理者ガイド』を参照してください。

サマリー情報については、`tarantella license status` コマンドを使用します。

使用例

次の例では、アレイ用に現在インストールされているライセンスキーを表示します。

```
tarantella license list
```

tarantella license query

アレイ全体のライセンスの使用状況を、ライセンスの侵害も含めて表示します。

形式

```
tarantella license query [ --now
                          | --history [--format text|csv|xml]
                          | --maxusers [--format text|xml] ]
```

説明

アレイ上でデータが何度も検出されることで情報の矛盾が生じることを避けるため、このコマンドはアレイ内のプライマリサーバー上で実行する必要があります。

注 – このコマンドでは、ユーザー単位でライセンスされたソフトウェアコンポーネントのライセンス使用状況だけが表示されます。

SGD では、ライセンス使用状況の履歴が 30 サンプル管理されます。サンプルは、毎日作成されます。また、サーバーの再起動 (ウォームリスタートまたはコールドリスタート) 時やライセンスキーの変更 (ライセンスの追加または削除) 時にも作成されます。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--now	アレイ全体の現在のライセンス使用状況に関する情報を表示します。これは、引数を何も指定しない場合のデフォルトです。
--history	アレイ全体のライセンス使用状況の最近の履歴を表示します。 ライセンス使用状況の情報は、サンプルとソフトウェアコンポーネントに基づいて分類されます。コンポーネントごとに次の情報が表示されます。 <ul style="list-style-type: none">使用されているライセンスの数。使用可能なライセンスの数。そのサンプリング期間にコンポーネントを使用するユーザーの最大数 (ピーク)。 --format を使用して出力形式を指定します (デフォルトで text)。

オプション	説明
--maxusers	<p>使用されているライセンスが SGD で保持する履歴 (30 サンプル) の中で最大数に達したときに、ライセンスを使用していたユーザーの数と名前を表示する場合は、このオプションを使用します。</p> <p>次のいずれかの場合にライセンスが使用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • SGD にログインしているとき。 • アプリケーションセッションが中断しているとき。 • 名前付きユーザーライセンスのリース期間内であるとき。 <p>注 - 匿名ユーザーまたはゲストユーザーが表示されるのは 1 度だけです。</p> <p>標準接続とセキュア接続は、区別して出力されます。</p> <p>--format を使用して出力形式を指定します (デフォルトで text)。</p>

最近のライセンス侵害に関する情報も、SGD 管理者が SGD にログインすると表示されます。

使用例

次の例では、アレイ全体の現在のライセンス使用状況に関する情報を表示します。

```
$ tarantella license query --now
License usage at:Tue Feb 20 12:42:21 GMT 2007
Type                In use / Total
Base                9      / 100
UNIX                9      / 100
Mainframe           0      / 100
Windows             5      / 100
AS/400              0      / 100
```

次の例では、アレイ全体のライセンス使用状況に関する最近の履歴情報を表示します。

```
$ tarantella license query --history
2007/02/14 15:45:07:
- Base          in use:5 / 100          peak: 15
- UNIX          in use:5 / 100          peak: 15
- Mainframe     in use:0 / 100          peak: 0
- Windows       in use:3 / 100          peak: 12
- AS/400        in use:0 / 100          peak: 0
2007/02/15 13:25:53:
- Base          in use:9 / 100          peak: 16
- UNIX          in use:9 / 100          peak: 16
- Mainframe     in use:0 / 100          peak: 0
- Windows       in use:5 / 100          peak: 13
- AS/400        in use:0 / 100          peak: 0
```


次の例では、使用されているライセンス数が最後に最大数に達したときにログインしていた、ユーザーの数と名前を表示します。

```
$ tarantella license query --maxusers
Maximum number of users logged in: 3
o=Indigo Insurance/ou=IT/cn=Bill Orange
o=Indigo Insurance/ou=IT/cn=Ginger Butcher
o=Indigo Insurance/ou=IT/cn=Rusty Spanner
```

tarantella license remove

SGD アレイからライセンスキーを削除します。

形式

```
tarantella license remove key...
```

説明

すべてのライセンスキーを削除すると、SGD をインストールした時期に応じて、評価モードまたは期限切れ評価モードに戻ります。期限切れ評価モードになると、SGD サーバーにログインできなくなります。期限切れ評価モードのサーバーにライセンスを付与するには、`tarantella license add` コマンドを使用して有効なライセンスキーを追加するか、またはすでにフルライセンスが付与されているアレイにそのサーバーを連結する必要があります。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>key...</code>	削除するライセンスキー

使用例

次の例では、ライセンスキー XXXXXX-XXXXXX-XXXXXX-XXXXXX-XXXXXX を削除します。これは有効な SGD ライセンスキーではありません。

```
tarantella license remove XXXXXX-XXXXXX-XXXXXX-XXXXXX-XXXXXX
```

tarantella license status

アレイの現在のライセンスステータスの概要を表示します。

形式

```
tarantella license status
```

説明

このコマンドは、次の情報を表示します。

- 使用するライセンスが付与されている SGD 製品。
- アレイの現在のライセンスモード。次のいずれかです。
 - 評価モード。評価期間の終了日が括弧で囲まれて表示されます。
 - フルライセンス。
- 付与されているライセンスの種類の詳細。ライセンスの種類の詳細については、『Sun Secure Global Desktop 管理者ガイド』を参照してください。

使用例

次の例では、アレイの現在のライセンスステータスの概要を表示します。

```
tarantella license status
```

tarantella object コマンド

tarantella object コマンドを使うと、組織階層内のオブジェクトを作成、表示、編集、および削除することができます。また、Webtop リンクを追加および削除すること、各アプリケーション用のアプリケーションサーバーの負荷分散を設定すること、および、グループのメンバーの追加および削除することができます。

形式

```
tarantella object add_host | add_link | add_member | delete | edit |  
list_attributes | list_contents | new_3270app | new_5250app |  
new_charapp | new_container | new_dc | new_doc | new_group |  
new_host | new_org | new_orgunit | new_person | new_windowsapp |  
new_xapp | remove_host | remove_link | remove_member | rename | script
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なサブコマンドを示しています。

サブコマンド	説明	詳細情報
add_host	アプリケーションを実行できるホストのリストに、アプリケーションサーバーを追加します。	261 ページの「tarantella object add_host」
add_link	Webtop にリンクを追加します。	262 ページの「tarantella object add_link」
add_member	グループにメンバーを追加します。	263 ページの「tarantella object add_member」
delete	組織階層からオブジェクトを永久に削除します。	264 ページの「tarantella object delete」
edit	オブジェクトの属性を編集します。	265 ページの「tarantella object edit」
list_attributes	オブジェクトの属性を表示します。	266 ページの「tarantella object list_attributes」
list_contents	組織単位または組織のコンテンツを表示します。	267 ページの「tarantella object list_contents」
new_3270app	3270 アプリケーションオブジェクトを作成します。	268 ページの「tarantella object new_3270app」
new_5250app	5250 アプリケーションオブジェクトを作成します。	272 ページの「tarantella object new_5250app」
new_charapp	文字型アプリケーションオブジェクトを作成します。	276 ページの「tarantella object new_charapp」
new_container	Active Directory コンテナオブジェクトを作成します。	280 ページの「tarantella object new_container」
new_dc	ドメインコンポーネントオブジェクトを作成します。	281 ページの「tarantella object new_dc」
new_doc	ドキュメントオブジェクトを作成します。	282 ページの「tarantella object new_doc」

サブコマンド	説明	詳細情報
<code>new_group</code>	グループオブジェクトを作成します。	284 ページの「 <code>tarantella object new_group</code> 」
<code>new_host</code>	アプリケーションサーバーオブジェクトを作成します。	285 ページの「 <code>tarantella object new_host</code> 」
<code>new_org</code>	組織オブジェクトを作成します。	287 ページの「 <code>tarantella object new_org</code> 」
<code>new_orgunit</code>	組織単位オブジェクトを作成します。	290 ページの「 <code>tarantella object new_orgunit</code> 」
<code>new_person</code>	ユーザープロフィールオブジェクトを作成します。	292 ページの「 <code>tarantella object new_person</code> 」
<code>new_windowsapp</code>	Windows アプリケーションオブジェクトを作成します。	296 ページの「 <code>tarantella object new_windowsapp</code> 」
<code>new_xapp</code>	X アプリケーションオブジェクトを作成します。	300 ページの「 <code>tarantella object new_xapp</code> 」
<code>remove_host</code>	アプリケーションを実行できるアプリケーションサーバーから、アプリケーションサーバーを削除します。	304 ページの「 <code>tarantella object remove_host</code> 」
<code>remove_link</code>	Webtop からリンクを削除します。	305 ページの「 <code>tarantella object remove_link</code> 」
<code>remove_member</code>	グループからメンバーを削除します。	307 ページの「 <code>tarantella object remove_member</code> 」
<code>rename</code>	オブジェクトの名前を変更するか、オブジェクトを移動します。	308 ページの「 <code>tarantella object rename</code> 」
<code>script</code>	オブジェクトコマンドのバッチスクリプトを実行します。	309 ページの「 <code>tarantella object script</code> 」

注 – すべてのコマンドに `--help` オプションがあります。特定のコマンドに関するヘルプを表示するには、`tarantella object subcommand --help` コマンドを使用します。

使用例

次の例では、組織単位 Sales に属するオブジェクトをすべて表示します。

```
tarantella object list_contents --name \
"o=Indigo Insurance/ou=Sales"
```

tarantella object add_host

アプリケーションを実行できるアプリケーションサーバーのリストに、アプリケーションサーバーの負荷分散用のアプリケーションサーバーを追加します。

形式

```
tarantella object add_host { --name obj...
                             --host hobj...
                             } | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--name	負荷分散のために設定するアプリケーションオブジェクトの名前。
--host	負荷分散プールに追加するアプリケーションサーバーオブジェクトの名前。
--file	アプリケーションサーバーの負荷分散を設定する一式のコマンドを格納したバッチファイル。

注 – オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、アプリケーションサーバー rome をアプリケーション Slide-o-Win 用の負荷分散プールに追加します。

```
tarantella object add_host \
  --name "o=applications/cn=Slide-o-Win" \
  --host "o=appservers/ou=Sales/cn=rome"
```

次の例では、グループ WinHosts をアプリケーション Write-o-Win および Slide-o-Win 用の負荷分散プールに追加します。負荷分散は、WinHosts 内のすべてのアプリケーションサーバーで実行されます。

```
tarantella object add_host \  
  --name "o=applications/cn=Write-o-Win" \  
    "o=applications/cn=Slide-o-Win" \  
  --host "o=applications/cn=WinHosts"
```

tarantella object add_link

Webtop にリンクを追加します。

形式

```
tarantella object add_link { --name obj...  
  --link lobj...  
} | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--name	Webtop リンクを追加するオブジェクトの名前。
--link	Webtop に追加するオブジェクトの名前。
--file	Webtop にリンクを追加する一式のコマンドを格納したバッチファイル。

注 – オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、アプリケーション Write-o-Win を Violet Carson の Webtop に追加します。

```
tarantella object add_link \  
  --name "o=Indigo Insurance/ou=Sales/cn=Violet Carson" \  
  --link "o=applications/cn=Write-o-Win"
```

次の例では、グループ Applications を組織単位 Sales および Marketing の Webtop に追加します。これらの OU の一方から Webtop コンテンツを継承しているすべてのユーザー (たとえば、OU に所属していて、ユーザープロフィールオブジェクトの「[割り当て済みアプリケーションを親から継承する](#)」を選択しているユーザー) の Webtop に、このグループ内のアプリケーションがすべて表示されます。

```
tarantella object add_link \  
  --name "o=Indigo Insurance/ou=Sales" \  
        "o=Indigo Insurance/ou=Marketing" \  
  --link "o=applications/cn=Applications"
```

tarantella object add_member

オブジェクトをグループに追加します。

形式

```
tarantella object add_member { --name obj...  
                               --member mobj...  
                               } | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--name	メンバーを追加するグループオブジェクトの名前を指定します。
--member	グループに追加するオブジェクトの名前を指定します。
--file	グループのメンバーを追加する一式のコマンドを格納したバッチファイルを指定します。

注 – オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、アプリケーション Write-o-Win をグループ Applications に追加します。

```
tarantella object add_member \
  --name "o=applications/cn=Applications" \
  --member "o=applications/cn=Write-o-Win"
```

次の例では、3つのアプリケーションサーバーオブジェクト `rome`、`brussels`、および `berlin` を、グループ `WinHosts` に追加します。コマンド行で `tarantella object add_host` を実行して、このグループをアプリケーションの「ホストしているアプリケーションサーバー」タブに追加することにより、アプリケーションサーバー間の負荷分散を実行できます。

```
tarantella object add_member \
  --name "o=appservers/cn=WinHosts" \
  --member "o=appservers/ou=Sales/cn=rome" \
           "o=appservers/cn=brussels" \
           "o=appservers/ou=Marketing/cn=berlin"
```

tarantella object delete

組織階層からオブジェクトを永久に削除します。

形式

```
tarantella object delete { --name obj [--children] } | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--name</code>	削除するオブジェクトの名前を指定します。
<code>--children</code>	組織単位を削除する場合、Active Directory コンテナまたはドメインコンポーネントは、オブジェクトとそのオブジェクトに属するすべてのオブジェクトを再帰的に削除していいか確認を要求します。安全策として、組織単位、Active Directory コンテナ、またはドメインコンポーネントは、 <code>--children</code> を指定しないと削除できません。
<code>--file</code>	オブジェクトを削除する一式のコマンドを格納したバッチファイルを指定します。

注 – オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、Violet Carson 用のユーザープロフィールオブジェクトを削除します。

```
tarantella object delete \  
  --name "o=Indigo Insurance/ou=Sales/cn=Violet Carson"
```

次の例では、組織単位 Sales を削除します。

```
tarantella object delete \  
  --name "o=Indigo Insurance/ou=Sales" \  
  --children
```

tarantella object edit

組織階層のオブジェクトの属性を編集します。

形式

```
tarantella object edit {  
  --name obj  
  {--attribute [value]}...  
} | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--name	属性を編集するオブジェクトの名前を指定します。
{--attribute [<i>value</i>]}...	編集する属性名とその新しい値を指定します。有効な <i>attribute</i> は、オブジェクトのタイプによって変わります。対応するリストについては、 <code>tarantella object new_object_type</code> のドキュメントを参照してください。たとえば、アプリケーションオブジェクトの属性を編集するときは、 <code>--displayusing</code> を指定して、「 ウィンドウタイプ 」属性を編集できます。属性の <i>value</i> を省略した場合は、オブジェクトから削除されます。
--file	属性を編集する一式のコマンドを格納したバッチファイルを指定します。

注 – オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、組織単位 Sales の「[割り当て済みアプリケーションを親から継承する](#)」属性を変更します。

```
tarantella object edit \  
  --name "o=Indigo Insurance/ou=Sales" \  
  --inherit false
```

tarantella object list_attributes

組織階層内のオブジェクトの属性を表示します。

形式

```
tarantella object list_attributes {  
  --name obj  
  [--attribute...]  
} | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--name	属性を表示するオブジェクトの名前を指定します。
{--attribute [value]}...	表示する属性名を指定します。有効な <i>attribute</i> は、オブジェクトのタイプによって変わります。対応するリストについては、 <code>tarantella object new_object_type</code> のドキュメントを参照してください。たとえば、アプリケーションオブジェクトの属性を表示するときは、 <code>--displayusing</code> を指定して、「 ウィンドウタイプ 」属性を表示できます。
--file	属性を表示する一式のコマンドを格納したバッチファイルを指定します。

注 – オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、Sales 組織単位の属性をすべて表示します。

```
tarantella object list_attributes \  
  --name "o=Indigo Insurance/ou=Sales"
```

次の例では、Rusty Spanner 用のユーザープロフィールオブジェクトの「電子メールアドレス」属性と「ログイン」属性を表示します。

```
tarantella object list_attributes \  
  --name "o=Indigo Insurance/ou=IT/cn=Rusty Spanner" \  
  --email --enabled
```

tarantella object list_contents

組織階層内の特定のオブジェクトの所属するオブジェクトを表示します。

形式

```
tarantella object list_contents { --name obj } | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--name	コンテンツを表示するオブジェクトの名前を指定します。
--file	オブジェクトのコンテンツを表示する一式のコマンドを格納したバッチファイルを指定します。

注 – オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、組織単位 Sales 内にあるオブジェクトをすべて表示します。

```
tarantella object list_contents \  
  --name "o=Indigo Insurance/ou=Sales"
```

tarantella object new_3270app

1 つ以上の 3270 アプリケーションオブジェクトを作成します。[94 ページの「3270 アプリケーションオブジェクト」](#)を参照してください。

形式

```
tarantella object new_3270app {  
  --name obj  
  --width pixels  
  --height pixels  
  [ --description text ]  
  [ --args args ]  
  [ --method rexec|telnet|ssh ]  
  [ --resumable never|session|always ]  
  [ --endswhen lastclient|windowmanager|windowmanageralone|nowindows|  
  loginscript|loginscriptnowindows ]  
  [ --maxinstances 0|instances ]  
  [ --displayusing webtop|clientwm|newbrowser|independent|kiosk|  
  localx ]  
  [ --maximize true|false ]  
  [ --scalable true|false ]  
  [ --icon icon_name ]  
  [ --hints hint... ]  
  [ --hostname host ]  
  [ --portnumber tcp ]  
  [ --3270tnclose 0|1|2|3 ]  
  [ --3270kt pc|sun4|sun5|hp ]  
  [ --3270bl 0|1|2|3|4 ]  
  [ --3270ma true|false ]  
  [ --3270mb true|false ]  
  [ --3270si true|false ]  
  [ --3270fg color ]  
  [ --3270bg color ]  
  [ --roottype default|custom ]  
  [ --rootcolor color ]  
  [ --compression automatic|on|off ]  
  [ --execution automatic|inorder|optimized ]
```

```

[ --interlaced automatic|on|off ]
[ --accel true|false ]
[ --delayed true|false ]
[ --ldapusers user_dn... ]
[ --ldapgroups group_dn... ]
[ --ldapsearch search_string... ]
[ --env setting... ]
[ --login script ]
[ --winmgr command... ]
[ --resumetimeout mins ]
[ --middlemouse ms ]
[ --windowclose notifyapp|killapp|suspendsession|endsession ]
[ --euro unicode|iso8859-15 ]
[ --dpi monitordpi ]
[ --keepopen true|false ]
[ --lockkeymap true|false ]
[ --share true|false ]
[ --ssharguments args ]
} | --file file

```

説明

SGD では、3270 アプリケーションのために他社製の Unix 用 TeemTalk エミュレータが使用されます。詳細については、SGD 付属の『TeemTalk for Unix User's Guide』を参照してください。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明	詳細情報
--name	SGD データストア内のオブジェクトの共通名。	191 ページの「名前」
--width	アプリケーションの幅 (ピクセル単位)。	221 ページの「ウィンドウのサイズ: 幅」
--height	アプリケーションの高さ (ピクセル単位)。	218 ページの「ウィンドウのサイズ: 高さ」
--description	オブジェクトのテキストによる説明。	146 ページの「コメント」
--args	アプリケーションの起動時に使うコマンド行回数。	121 ページの「コマンドの引数」
--method	SGD サーバーがアプリケーションサーバーにアクセスして、アプリケーションを起動するのに使う機構。	149 ページの「接続方法」
--resumable	アプリケーションの再開機能動作。	115 ページの「アプリケーションの再開機能」

オプション	説明	詳細情報
--endswhen	アプリケーションセッションを終了するタイミング。	202 ページの「セッション終了」
--maxinstances	ユーザーが同時に実行できるアプリケーションインスタンスの最大数。	193 ページの「セッション数」
--displayusing	アプリケーションをユーザーに表示する方法。	222 ページの「ウィンドウタイプ」
--maximize	アプリケーションの初期サイズ。	217 ページの「ウィンドウのサイズ: クライアントの最大サイズ」
--scalable	アプリケーションの表示をウィンドウに合わせて拡大縮小します。	221 ページの「ウィンドウのサイズ: ウィンドウに合わせて拡大縮小する」
--icon	アプリケーションの Webtop アイコン。	172 ページの「アイコン」
--hints	アプリケーションに対する追加の「名前-値」データを含む文字列。	167 ページの「ヒント」
--hostname	アプリケーションを実行する 3270 ホスト。	201 ページの「サーバーアドレス」
--portnumber	3270 ホストに接続するために使用する TCP ポート番号。	202 ページの「サーバーポート」
--3270tnclose	3270 ホストへの telnet 接続が閉じるときの動作。	147 ページの「接続終了アクション」
--3270kt	エミュレートする端末にキーボードをマッピングするために使用するレイアウト。	178 ページの「キーボードタイプ」
--3270b1	表示する「ソフトボタン」レベル数。	157 ページの「表示されるソフトボタン」
--3270ma	エミュレータウィンドウを最大化します。	220 ページの「ウィンドウのサイズ: 最大化」
--3270mb	アプリケーションのメニューバーを有効にします。	188 ページの「メニューバー」
--3270si	「ファイル」メニューと「設定」メニューの項目を有効にします。	163 ページの「「ファイル」メニューと「設定」メニュー」
--3270fg	アプリケーションのテキストウィンドウ内のテキストの色。	166 ページの「前景色」
--3270bg	アプリケーションのテキストウィンドウの背景色。	131 ページの「背景色」
--roottype	ルートウィンドウの外観。	214 ページの「ウィンドウの色」
--rootcolor	ルートウィンドウの色。	214 ページの「ウィンドウの色: カスタム色」
--compression	AIP が送信時にコマンドを圧縮するかどうかを指定します。	145 ページの「コマンドの圧縮」

オプション	説明	詳細情報
--execution	AIP がコマンドを常に指定順に実行するか、パフォーマンスを最高にするために最適化するかを指定します。	146 ページの「コマンドの実行」
--interlaced	インターレースイメージ伝送を有効にします。	174 ページの「インターレースイメージ」
--accel	アプリケーションの表示のグラフィックスの高速化を有効にします。	166 ページの「グラフィックアクセラレーション」
--delayed	アプリケーションの表示の遅延更新を有効にします。	156 ページの「遅延更新」
--ldapusers	指定した LDAP ユーザーにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ」
--ldapgroups	指定した LDAP グループにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ」
--ldapsearch	LDAP 検索条件に一致するユーザーにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ」
--env	アプリケーションを実行するのに必要な環境変数の設定。	160 ページの「環境変数」
--login	アプリケーションを起動するために使用するログインスクリプト。	183 ページの「ログインスクリプト」
--winmgr	アプリケーションで使用するウィンドウマネージャー。	216 ページの「ウィンドウマネージャー」
--resumetimeout	アプリケーションを再開可能にする時間 (分)。	117 ページの「アプリケーションの再開機能: タイムアウト」
--middlemouse	マウスの 2 つのボタンを使用してマウスの中ボタンのクリックをエミュレートするときのタイムアウト。	189 ページの「マウスの中ボタンのタイムアウト」
--windowclose	メインのアプリケーションウィンドウを閉じたときのアプリケーションセッションへの影響。	212 ページの「ウィンドウを閉じるアクション」
--euro	ユーロ文字をサポートするのに、アプリケーションが必要とするキーコードマッピング。	161 ページの「ユーロ文字」
--dpi	SGD が X アプリケーションにレポートするモニターの解像度。	189 ページの「モニターの解像度」
--keepopen	アプリケーションを起動するときに使用する接続を開いた状態にします。	175 ページの「起動接続をオープンしたまま保持」
--lockkeymap	アプリケーションがキーボードマッピングを変更するのを防止します。	177 ページの「キーボードマップ: ロック」

オプション	説明	詳細情報
--share	類似アプリケーションセッションでのリソース共有を有効にします。	204 ページの「類似セッション間でリソースを共有」
--ssharguments	ssh クライアントのコマンド行引数。	152 ページの「接続方法: ssh 引数」
--file	組織階層内に複数のオブジェクトを作成するのに使うバッチファイル。	

複数のオブジェクトを一括で作成するには、--file オプションを使用します。他のオプションは、1 つのオブジェクトを作成する場合に使用します。

使用例

次の例では、アプリケーション 3270cat の新しい 3270 アプリケーションオブジェクトを作成します。エミュレータは 3270 ホスト warsaw.indigo-insurance.com に接続します。

```
tarantella object new_3270app \
  --name "o=applications/ou=Finance/cn=3270cat" \
  --width 1000 --height 800 \
  --app /3270cat \
  --hostname warsaw.indigo-insurance.com
```

tarantella object new_5250app

1 つ以上の 5250 アプリケーションオブジェクト ([96 ページの「5250 アプリケーションオブジェクト」](#) を参照) を作成します。

形式

```
tarantella object new_5250app {
  --name obj
  --width pixels
  --height pixels
  [ --description text ]
  [ --args args ]
  [ --method telnet|ssh ]
  [ --resumable never|session|always ]
  [ --endswhen lastclient|windowmanager|windowmanageralone|nowindows|
  loginscript|loginscriptnowindows ]
  [ --maxinstances 0|instances ]
  [ --displayusing webtop|newbrowser|independent]
  [ --maximize true|false ]
```



```

[ --scalable true|false ]
[ --icon icon_name ]
[ --hints hint...]
[ --hostname host ]
[ --portnumber tcp ]
[ --tnclose 0|1|2|3 ]
[ --kt pc|sun4|sun5|hp ]
[ --bl 0|1|2|3|4 ]
[ --ma true|false ]
[ --mb true|false ]
[ --si true|false ]
[ --fg color ]
[ --bg color ]
[ --roottype default|custom ]
[ --rootcolor color ]
[ --compression automatic|on|off ]
[ --execution automatic|inorder|optimized ]
[ --interlaced automatic|on|off ]
[ --accel true|false ]
[ --delayed true|false ]
[ --ldapusers user_dn... ]
[ --ldapgroups group_dn... ]
[ --ldapsearch search_string... ]
[ --env setting... ]
[ --login script ]
[ --winmgr command... ]
[ --resumetimeout mins ]
[ --middlemouse ms ]
[ --windowclose notifyapp|killapp|suspendsession|endsession ]
[ --euro unicode|iso8859-15 ]
[ --dpi monitordpi ]
[ --keepopen true|false ]
[ --lockkeymap true|false ]
[ --share true|false ]
[ --ssharguments args ]
} | --file file

```

説明

SGD では、5250 アプリケーションのために他社製の Unix 用 TeemTalk エミュレータが使用されます。詳細については、SGD 付属の『TeemTalk for Unix User's Guide』を参照してください。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明	詳細情報
--name	SGD データストア内のオブジェクトの共通名。	191 ページの「名前」
--width	アプリケーションの幅 (ピクセル単位)。	221 ページの「ウィンドウのサイズ: 幅」
--height	アプリケーションの高さ (ピクセル単位)。	218 ページの「ウィンドウのサイズ: 高さ」
--description	オブジェクトのテキストによる説明。	146 ページの「コメント」
--args	アプリケーションの起動時に使うコマンド行回数。	121 ページの「コマンドの引数」
--method	SGD サーバーがアプリケーションサーバーにアクセスして、アプリケーションを起動するのに使う機構。	149 ページの「接続方法」
--resumable	アプリケーションの再開機能動作。	115 ページの「アプリケーションの再開機能」
--endswhen	アプリケーションセッションを終了するタイミング。	202 ページの「セッション終了」
--maxinstances	ユーザーが同時に実行できるアプリケーションインスタンスの最大数。	193 ページの「セッション数」
--displayusing	アプリケーションをユーザーに表示する方法。	222 ページの「ウィンドウタイプ」
--maximize	アプリケーションの初期サイズ。	217 ページの「ウィンドウのサイズ: クライアントの最大サイズ」
--scalable	アプリケーションの表示をウィンドウに合わせて拡大縮小します。	221 ページの「ウィンドウのサイズ: ウィンドウに合わせて拡大縮小する」
--icon	アプリケーションの Webtop アイコン。	172 ページの「アイコン」
--hints	アプリケーションに対する追加の「名前-値」データを含む文字列。	167 ページの「ヒント」
--hostname	アプリケーションを実行する AS/400 ホスト。	201 ページの「サーバーアドレス」
--portnumber	AS/400 ホストに接続するために使用する TCP ポート番号。	202 ページの「サーバーポート」
--tnclose	AS/400 ホストへの telnet 接続が閉じるときの動作。	147 ページの「接続終了アクション」
--kt	エミュレートする端末にキーボードをマッピングするために使用するレイアウト。	178 ページの「キーボードタイプ」
--bl	表示する「ソフトボタン」レベル数。	157 ページの「表示されるソフトボタン」
--ma	エミュレータウィンドウを最大化します。	220 ページの「ウィンドウのサイズ: 最大化」

オプション	説明	詳細情報
--mb	アプリケーションのメニューバーを有効にします。	188 ページの「メニューバー」
--si	「ファイル」メニューと「設定」メニューの項目を有効にします。	163 ページの「「ファイル」メニューと「設定」メニュー」
--fg	アプリケーションのテキストウィンドウ内のテキストの色。	166 ページの「前景色」
--bg	アプリケーションのテキストウィンドウの背景色。	131 ページの「背景色」
--roottype	ルートウィンドウの外観。	214 ページの「ウィンドウの色」
--rootcolor	ルートウィンドウの色。	214 ページの「ウィンドウの色: カスタム色」
--compression	AIP が送信時にコマンドを圧縮するかどうかを指定します。	145 ページの「コマンドの圧縮」
--execution	AIP がコマンドを常に指定順に実行するか、パフォーマンスを最高にするために最適化するかを指定します。	146 ページの「コマンドの実行」
--interlaced	インターレースイメージ伝送を有効にします。	174 ページの「インターレースイメージ」
--accel	アプリケーションの表示のグラフィックスの高速化を有効にします。	166 ページの「グラフィックアクセラレーション」
--delayed	アプリケーションの表示の遅延更新を有効にします。	156 ページの「遅延更新」
--ldapusers	指定した LDAP ユーザーにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ」
--ldapgroups	指定した LDAP グループにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ」
--ldapsearch	LDAP 検索条件に一致するユーザーにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ」
--env	アプリケーションを実行するのに必要な環境変数の設定。	160 ページの「環境変数」
--login	アプリケーションを起動するために使用するログインスクリプト。	183 ページの「ログインスクリプト」
--winmgr	アプリケーションで使用するウィンドウマネージャー。	216 ページの「ウィンドウマネージャー」
--resumetimeout	アプリケーションを再開可能にする時間 (分)。	117 ページの「アプリケーションの再開機能: タイムアウト」
--middlemouse	マウスの 2 つのボタンを使用してマウスの中ボタンのクリックをエミュレートするときのタイムアウト。	189 ページの「マウスの中ボタンのタイムアウト」

オプション	説明	詳細情報
--windowclose	メインのアプリケーションウィンドウを閉じたときのアプリケーションセッションへの影響。	212 ページの「ウィンドウを閉じるアクション」
--euro	ユーロ文字をサポートするのに、アプリケーションが必要とするキーコードマッピング。	161 ページの「ユーロ文字」
--dpi	SGD が X アプリケーションにレポートするモニターの解像度。	189 ページの「モニターの解像度」
--keepopen	アプリケーションを起動するときに使用する接続を開いた状態にします。	175 ページの「起動接続をオープンしたまま保持」
--lockkeymap	アプリケーションがキーボードマッピングを変更するのを防止します。	177 ページの「キーボードマップ: ロック」
--share	類似アプリケーションセッションでのリソース共有を有効にします。	204 ページの「類似セッション間でリソースを共有」
--ssharguments	ssh クライアントのコマンド行引数。	152 ページの「接続方法: ssh 引数」
--file	組織階層内に複数のオブジェクトを作成するのに使うバッチファイル。	

複数のオブジェクトを一括で作成するには、--file オプションを使用します。他のオプションは、1 つのオブジェクトを作成する場合に使用します。

使用例

次の例では、アプリケーション 5250cat の新しい 5250 アプリケーションオブジェクトを作成します。エミュレータはアプリケーションサーバー `prague` 上で動作し、AS/400 ホスト `warsaw.indigo-insurance.com` に接続されます。

```
tarantella object new_5250app \
  --name "o=applications/ou=Finance/cn=5250cat" \
  --width 400 --height 300 \
  --app /5250cat \
  --appserv "o=appservers/cn=Prague" \
  --hostname warsaw.indigo-insurance.com
```

tarantella object new_charapp

1 つ以上の文字型アプリケーションオブジェクト ([99 ページの「文字型アプリケーションオブジェクト」](#) を参照) を作成します。

形式

```
tarantella object new_charapp {
    --name obj
    --emulator scocon|vt420|wyse60
    --termtype type
    --width pixels
    --height pixels
    [ --description text ]
    [ --app pathname ]
    [ --args args ]
    [ --appserv obj... ]
    [ --method telnet|ssh ]
    [ --resumable never|session|always ]
    [ --maxinstances 0|instances ]
    [ --displayusing webtop|newbrowser|independent|kiosk ]
    [ --maximize true|false ]
    [ --cols cols ]
    [ --lines lines ]
    [ --icon icon_name ]
    [ --hints hint...]
    [ --font courier|helvetica|timesroman ]
    [ --fontsize points ]
    [ --fixedfont true|false ]
    [ --autowrap true|false ]
    [ --cursor off|block|underline ]
    [ --statusline none|indicator|hostmessages|standard|extended ]
    [ --scrollstyle line|multiple|smooth ]
    [ --border normal|indented|raised ]
    [ --answermsg message ]
    [ --appkeymode true|false ]
    [ --keypad numeric|application ]
    [ --cursorkeys application|cursor ]
    [ --escape 7-bit|8-bit ]
    [ --codepage 437|850|852|860|863|865|8859-1|8859-2|Multinational|
Mazovia|CP852 ]
    [ --ldapusers user_dn... ]
    [ --ldapgroups group_dn... ]
    [ --ldapsearch search_string... ]
    [ --loadbal default|cpu|memory|sessions ]
    [ --compression automatic|on|off ]
    [ --env setting... ]
    [ --login script ]
    [ --keymap keymap ]
    [ --attributemap attrmap ]
    [ --colormap colormap ]
    [ --resumetimeout mins ]
```

```
[ --windowclose suspendsession|endsession ]
[ --ssharguments args ]
} | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明	詳細情報
--name	SGD データストア内のオブジェクトの共通名。	191 ページの「名前」
--emulator	アプリケーションに必要なエミュレーションのタイプ。	159 ページの「エミュレーションタイプ」
--termtype	アプリケーションに必要な端末タイプ。	206 ページの「端末タイプ」
--width	アプリケーションの幅 (ピクセル単位)。	221 ページの「ウィンドウのサイズ: 幅」
--height	アプリケーションの高さ (ピクセル単位)。	218 ページの「ウィンドウのサイズ: 高さ」
--description	オブジェクトのテキストによる説明。	146 ページの「コメント」
--app	アプリケーションのフルパス名。	113 ページの「アプリケーションコマンド」
--args	アプリケーションの起動時に使うコマンド行引数。	121 ページの「コマンドの引数」
--appserv	アプリケーションを実行できるアプリケーションサーバー。	170 ページの「「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ」
--method	SGD サーバーがアプリケーションサーバーにアクセスして、アプリケーションを起動するのに使う機構。	149 ページの「接続方法」
--resumable	アプリケーションの再開機能動作。	115 ページの「アプリケーションの再開機能」
--maxinstances	ユーザーが同時に実行できるアプリケーションインスタンスの最大数。	193 ページの「セッション数」
--displayusing	アプリケーションをユーザーに表示する方法。	222 ページの「ウィンドウタイプ」
--maximize	アプリケーションの初期サイズ。	217 ページの「ウィンドウのサイズ: クライアントの最大サイズ」
--cols	端末ウィンドウ内のカラム数。	218 ページの「ウィンドウのサイズ: カラム」
--lines	端末ウィンドウ内の行数。	219 ページの「ウィンドウのサイズ: 行」
--icon	アプリケーションの Webtop アイコン。	172 ページの「アイコン」

オプション	説明	詳細情報
--hints	アプリケーションに対する追加の「名前-値」データを含む文字列。	167 ページの「ヒント」
--font	アプリケーション用の端末ウィンドウで使用するフォントファミリを決定します。	164 ページの「フォントファミリ」
--fontsize	端末ウィンドウ内のフォントサイズを定義します。	164 ページの「フォントサイズ」
--fixedfont	端末ウィンドウに対して --fontsize で指定されたフォントサイズを使用します。	165 ページの「フォントサイズ: 固定フォントサイズ」
--autowrap	ユーザーが端末ウィンドウの右端を超えて文字を入力した場合の動作を決定します。	179 ページの「行の折り返し」
--cursor	アプリケーションで使用するカーソルスタイル。	155 ページの「カーソル」
--statusLine	ステータス行のタイプを指定します。	205 ページの「ステータス行」
--scrollstyle	端末ウィンドウでのスクロール動作。	199 ページの「スクロールスタイル」
--border	端末ウィンドウで使う枠線のスタイル。	134 ページの「枠線のスタイル」
--answermsg	アプリケーションサーバーからエミュレータに照会が送られた場合に返すメッセージを定義します。	112 ページの「応答メッセージ」
--appkeymode	アプリケーションがキーボード上のキーによって生成されたコードを変更するかどうかを決定します。	175 ページの「キーボードコードの変更」
--keypad	カーソルキーの動作を指定します。	194 ページの「数字パッドコードの変更」
--cursorkeys	カーソルキーの動作を指定します。	156 ページの「カーソルキーコードの変更」
--escape	エミュレータからアプリケーションサーバーにエスケープシーケンスを送信する方法を指定します。	161 ページの「エスケープシーケンス」
--codepage	エミュレータで使うコードページ。	140 ページの「コードページ」
--ldapusers	指定した LDAP ユーザーにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ」
--ldapgroups	指定した LDAP グループにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ」
--ldapsearch	LDAP 検索条件に一致するユーザーにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ」
--loadbal	使用する負荷分散アルゴリズム。	114 ページの「アプリケーションの負荷分散」
--compression	Adaptive Internet Protocol (AIP) が送信時にコマンドを圧縮するかどうかを指定します。	145 ページの「コマンドの圧縮」

オプション	説明	詳細情報
--env	アプリケーションを実行するのに必要な環境変数の設定。	160 ページの「環境変数」
--login	アプリケーションを起動するために使用するログインスクリプト。	183 ページの「ログインスクリプト」
--keymap	キーボードマップファイルのパス名。	176 ページの「キーボードマップ」
--attributemap	アプリケーションで使う属性マップ。	130 ページの「属性マップ」
--colormap	アプリケーションで使うカラーマップ。	143 ページの「カラーマップ」
--resumetimeout	アプリケーションを再開可能にする時間 (分)。	117 ページの「アプリケーションの再開機能: タイムアウト」
--windowclose	メインのアプリケーションウィンドウを閉じたときのアプリケーションセッションへの影響。	212 ページの「ウィンドウを閉じるアクション」
--ssharguments	ssh クライアントのコマンド行引数。	152 ページの「接続方法: ssh 引数」
--file	組織階層内に複数のオブジェクトを作成するのに使うバッチファイル。	

複数のオブジェクトを一括で作成するには、--file オプションを使用します。他のオプションは、1 つのオブジェクトを作成する場合に使用します。

使用例

次の例では、アプリケーション Pers-o-dat 用の文字型アプリケーションオブジェクトを作成します。このアプリケーションはアプリケーションサーバー `prague` と `london` で実行できます。どちらのアプリケーションサーバーを使用するかは、アプリケーションサーバーの負荷分散機能によって決定されます。

```
tarantella object new_charapp \
  --name "o=applications/cn=Pers-o-dat" \
  --emulator vt420 \
  --termtype vt220 \
  --width 400 \
  --height 300 \
  --app /bin/persodat \
  --appserv "o=appservers/cn=prague" \
    "o=appservers/ou=IT/cn=london"
```

tarantella object new_container

1 つ以上の Active Directory コンテナオブジェクト ([103 ページの「ディレクトリ \(軽量\):Active Directory コンテナオブジェクト」](#) を参照) を作成します。

形式

```
tarantella object new_container { --name obj } | --file file
```

説明

複数のオブジェクトを一括で作成するには、`--file` オプションを使用します。他のオプションは、1つのオブジェクトを作成する場合に使用します。

使用例

次の例では、新規の Active Directory コンテナオブジェクトを `Users` という名前で、`indigo-insurance.com` ドメインコンポーネント内に作成します。

```
tarantella object new_container \  
  --name "dc=com/dc=indigo-insurance/cn=Users"
```

次の例では、「here-document」として定義したバッチスクリプトを使って、2つの Active Directory コンテナオブジェクトを作成します。あるいは、バッチスクリプトをファイルに保存して、それを `--file filename` を使用して参照することもできます。

```
tarantella object new_container --file - <<EOF  
  --name "dc=com/dc=indigo-insurance/cn=Users"  
  --name "dc=com/dc=indigo-insurance/cn=Applications"  
EOF
```

tarantella object new_dc

1つ以上のドメインコンポーネントオブジェクト (104 ページの「ディレクトリ (軽量):ドメインコンポーネントオブジェクト」を参照) を作成します。

形式

```
tarantella object new_dc { --name obj } | --file file
```

説明

複数のオブジェクトを一括で作成するには、`--file` オプションを使用します。他のオプションは、1つのオブジェクトを作成する場合に使用します。

使用例

次の例では、新規ドメインコンポーネントオブジェクトを `com` という名前で、組織階層のトップレベルに作成します。

```
tarantella object new_dc \  
  --name "dc=com"
```

次の例では、「here-document」として定義したバッチスクリプトを使って、2つのドメインコンポーネントオブジェクトを作成します。あるいは、バッチスクリプトをファイルに保存して、それを `--file filename` を使用して参照することもできます。

```
tarantella object new_orgunit --file - <<EOF  
  --name "dc=com"  
  --name "dc=com/dc=indigo-insurance"  
EOF
```

tarantella object new_doc

1 つ以上のドキュメントオブジェクト (104 ページの「ドキュメントオブジェクト」を参照) を作成します。

形式

```
tarantella object new_doc {  
  --name obj  
  --url url  
  [ --description text ]  
  [ --newbrowser true|false ]  
  [ --icon icon_name ]  
  [ --hints hint... ]  
  [ --ldapusers user_dn... ]  
  [ --ldapgroups group_dn... ]  
  [ --ldapsearch search_string... ]  
} | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明	詳細情報
--name	ドキュメントオブジェクトの名前。	191 ページの「名前」
--url	ドキュメントオブジェクトのリンクをクリックしたときに表示される URL。	210 ページの「URL」
--description	オブジェクトのテキストによる説明。	146 ページの「コメント」
--newbrowser	新しいブラウザウィンドウにドキュメントを表示します。	225 ページの「ウィンドウタイプ: 新規ブラウザウィンドウ」
--icon	アプリケーションの Webtop アイコン。	172 ページの「アイコン」
--hints	アプリケーションに対する追加の「名前-値」データを含む文字列。	167 ページの「ヒント」
--ldapusers	指定した LDAP ユーザーにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロフィール」タブ」
--ldapgroups	指定した LDAP グループにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロフィール」タブ」
--ldapsearch	LDAP 検索条件に一致するユーザーにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロフィール」タブ」
--file	アプリケーションサーバーの負荷分散を設定する一式のコマンドを格納したバッチファイル。	

複数のオブジェクトを一括で作成するには、--file オプションを使用します。他のオプションは、1 つのオブジェクトを作成する場合に使用します。

使用例

次の例では、新規ドキュメントオブジェクトを、共通名を PhoneList として作成し、組織単位 applications に所属させます。

```
tarantella object new_doc \  
  --name "o=Indigo Insurance/ou=Finance/ou=Administration/cn=Phone  
List" \  
  --url http://newyork.indigo-insurance.com \  
  --newbrowser false
```

次の例では、「here-document」として定義したバッチスクリプトを使って、2 つのドキュメントオブジェクトを作成します。あるいは、バッチスクリプトをファイルに保存して、それを --file *filename* を使用して参照することもできます。

```
tarantella object new_doc --file - <<EOF
--name "o=applications/ou=Finance/ou=Administration/cn=Phone List"
--url http://newyork.indigo-insurance.com \
--newbrowser false
--name "o=applications/cn=Indigo Insurance web site" \
--url http://www.indigo-insurance.com \
--newbrowser true
EOF
```

tarantella object new_group

1 つ以上のグループオブジェクト (105 ページの「グループオブジェクト」を参照) を作成します。

形式

```
tarantella object new_group {
    --name obj
    [ --description text ]
    [ --member obj... ]
    [ --ldapusers user_dn... ]
    [ --ldapgroups group_dn... ]
    [ --ldapsearch search_string... ]
} | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明	詳細情報
--name	グループオブジェクトの名前。	191 ページの「名前」
--description	オブジェクトのテキストによる説明。	146 ページの「コメント」
--member	グループオブジェクトのメンバー。	186 ページの「「メンバー」タブ」
--ldapusers	指定した LDAP ユーザーにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロフィール」タブ」

オプション	説明	詳細情報
<code>--ldapgroups</code>	指定した LDAP グループにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ
<code>--ldapsearch</code>	LDAP 検索条件に一致するユーザーにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ
<code>--file</code>	アプリケーションサーバーの負荷分散を設定する一式のコマンドを格納したバッチファイル。	

複数のオブジェクトを一括で作成するには、`--file` オプションを使用します。他のオプションは、1 つのオブジェクトを作成する場合に使用します。

使用例

次の例では、新規グループオブジェクトを、共通名を `WinHosts` として作成し、組織単位 `appservers` に所属させます。このグループのメンバーは、3 つのアプリケーションサーバー `rome`、`brussels`、および `berlin` のアプリケーションサーバーオブジェクトになります。

```
tarantella object new_group \
  --name "o=appservers/cn=WinHosts" \
  --member "o=appservers/ou=Sales/cn=rome" \
           "o=appservers/cn=brussels" \
           "o=appservers/ou=Marketing/cn=berlin"
```

次の例では、「here-document」として定義したバッチスクリプトを使って、3 つのグループオブジェクトを作成します。作成したグループにメンバーは含まれません。あとでコマンド行から `tarantella object add_member` コマンドを使って、メンバーを追加します。あるいは、バッチスクリプトをファイルに保存して、それを `--file filename` を使用して参照することもできます。

```
tarantella object new_group --file - <<EOF
  --name "o=appservers/cn=WinHosts"
  --name "o=appservers/cn=UNIXHosts"
  --name "o=applications/cn=Applications"
EOF
```

tarantella object new_host

1 つ以上のアプリケーションサーバーオブジェクト ([98 ページの「アプリケーションサーバーオブジェクト」](#)を参照) を作成します。

形式

```
tarantella object new_host {
    --name obj
    --address address
    [ --description text ]
    [ --ntdomain dom ]
    [ --available true|false ]
    [ --auth trytta|nevertrytta|default ]
    [ --location location ]
    [ --hostlocale ll_tt ]
} | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明	詳細情報
--name	Webtop リンクを追加するオブジェクトの名前。	191 ページの「名前」
--address	アプリケーションサーバーのネットワークアドレス。	112 ページの「アドレス」
--description	オブジェクトのテキストによる説明。	146 ページの「コメント」
--ntdomain	アプリケーションサーバー認証に使用される Windows ドメイン。	158 ページの「ドメイン名」
--available	このアプリケーションサーバーでアプリケーションを実行できるかどうかを指定します。	120 ページの「アプリケーション起動」
--auth	そのアプリケーションサーバー用にキャッシュされているパスワードがない場合に、そのサーバー上でのユーザー認証に使用するポリシーを指定します。	195 ページの「パスワードキャッシュの使用」
--location	アプリケーションサーバーのロケーションを記述する文字列。負荷分散に使用されます。	180 ページの「負荷分散グループ」
--hostlocale	アプリケーションサーバーのデフォルト言語設定。	198 ページの「プロンプトのロケール」
--file	Webtop にリンクを追加する一式のコマンドを格納したバッチファイル。	

注 – オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、新規アプリケーションサーバーオブジェクトを、共通名を `paris` として作成し、組織単位オブジェクト `Finance` に所属させます (所属先は既存のオブジェクトでなければならない)。

```
tarantella object new_host \  
  --name "o=appservers/ou=Finance/cn=paris" \  
  --address paris.indigo-insurance.com \  
  --auth default \  
  --location Europe-north
```

次の例では、「`here-document`」として定義したバッチスクリプトを使って、3つのアプリケーションサーバーオブジェクトを作成します。あるいは、バッチスクリプトをファイルに保存して、それを `--file filename` を使用して参照することもできます。

```
tarantella object new_host --file - <<EOF  
  --name "o=appservers/ou=Finance/cn=paris" \  
  --address paris.indigo-insurance.com  
  --name "o=appservers/cn=brussels" \  
  --address brussels.indigo-insurance.com  
  --name "o=appservers/ou=IT/cn=london" \  
  --address london.indigo-insurance.com  
EOF
```

tarantella object new_org

形式

1 つ以上の組織 (O) オブジェクト (101 ページの「ディレクトリ:組織オブジェクト」を参照) を作成します。

```
tarantella object new_org {  
  --name obj  
  [ --description text ]  
  [ --conntype type_spec... ]  
  [ --cdm drive_spec... ]  
  [ --userprintingconfig true|false ]  
  [ --mapprinters 2|1|0 ]  
  [ --pdfenabled 1|0 ]  
  [ --pdfviewerenabled 1|0 ]  
  [ --pdfdriver driver_name ]  
  [ --pdfisdefault 1|0 ]  
  [ --pdfviewerisdefault 1|0 ]  
  [ --links obj... ]
```

```
[ --editprofile 2|1|0 ]
[ --clipboard 2|1|0 ]
[ --serialport 2|1|0 ]
} | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明	詳細情報
--name	SGD データストア内の組織オブジェクトの名前。	191 ページの「名前」
--description	オブジェクトのテキストによる説明。	146 ページの「コメント」
--conntype	クライアントデバイスと SGD サーバー間で許可される接続。	149 ページの「接続」
--cdm	アプリケーションサーバー上で動作しているアプリケーションからアクセスできる Microsoft Windows クライアントデバイス上のドライブ。	134 ページの「クライアントドライブマッピング」
--userprintingconfig	ユーザー固有の印刷設定を有効にします。	138 ページの「クライアント印刷: 上書き」
--mapprinters	ユーザーが Windows アプリケーションから印刷できるクライアントプリンタ。	136 ページの「クライアント印刷」
--pdfenabled	ユーザーが SGD の「Universal PDF Printer」プリンタを使用して Windows アプリケーションから印刷できるようにします。	208 ページの「Universal PDF プリンタ」
--pdfviewerenabled	ユーザーが SGD の「Universal PDF Viewer」プリンタを使用して Windows アプリケーションから印刷できるようにします。	209 ページの「Universal PDF ビューア」
--pdfdriver	Windows アプリケーションからの印刷時に SGD PDF 印刷で使用するプリンタドライバ。	197 ページの「Postscript プリンタドライバ」
--pdfisdefault	Windows アプリケーションからの印刷時にクライアントのデフォルトプリンタとして設定する SGD の「Universal PDF Printer」プリンタ。	184 ページの「Universal PDF プリンタをデフォルトにする」
--pdfviewerisdefault	Windows アプリケーションからの印刷時にクライアントのデフォルトプリンタとして設定する SGD の「Universal PDF Viewer」プリンタ。	185 ページの「Universal PDF ビューアをデフォルトにする」

オプション	説明	詳細情報
--links	Webtop のコンテンツを定義します。	123 ページの「割り当て済みのアプリケーション」タブ
--editprofile	SGD クライアントで使用するプロフィールをユーザーが作成および編集できるかどうかを指定します。	139 ページの「クライアントプロフィールの編集」
--clipboard	Windows または X アプリケーションのアプリケーションセッションでユーザーがコピー&ペーストを使用できるかどうかを指定します。	152 ページの「コピー&ペースト」
--serialport	Microsoft Windows Server 2003 アプリケーションサーバー上で動作している Windows アプリケーションからクライアントデバイス上のシリアルポートにユーザーがアクセスできるかどうかを指定します。	199 ページの「シリアルポートマッピング」
--file	組織階層内に複数のオブジェクトを作成するのに使うバッチファイル。	

複数のオブジェクトを一括で作成するには、--file オプションを使用します。他のオプションは、1 つのオブジェクトを作成する場合に使用します。

使用例

次の例では、新規組織オブジェクトを Indigo Insurance という名前で作成します。組織内のすべてのユーザーは、OU またはユーザープロフィールオブジェクトに別の接続タイプが設定されていないかぎり、セキュア (SSL ベース) 接続を使用します。

```
tarantella object new_org \
  --name "o=Indigo Insurance" \
  --conntype '*:*:SSL'
```

次の例では、「here-document」として定義したバッチスクリプトを使って、2 つの組織オブジェクトを作成します。あるいは、バッチスクリプトをファイルに保存して、それを --file *filename* を使用して参照することもできます。

```
tarantella object new_org --file - <<EOF
  --name "o=Indigo Insurance"
  --name "o=Indigo Insurance Services"
EOF
```

tarantella object new_orgunit

1 つ以上の組織単位 (OU) オブジェクト ([102 ページの「ディレクトリ:組織単位オブジェクト」](#) を参照) を作成します。

形式

```
tarantella object new_orgunit {
    --name obj
    [ --description text ]
    [ --inherit true|false ]
    [ --conntype type_spec... ]
    [ --cdm drive_spec... ]
    [ --userprintingconfig 1|0 ]
    [ --mapprinters 2|1|0 ]
    [ --pdfenabled 1|0 ]
    [ --pdfviewerenabled 1|0 ]
    [ --pdfdriver driver_name ]
    [ --pdfisdefault 1|0 ]
    [ --pdfviewerisdefault 1|0 ]
    [ --links obj... ]
    [ --editprofile 2|1|0 ]
    [ --clipboard 2|1|0 ]
    [ --serialport 2|1|0 ]
} | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明	詳細情報
--name	SGD データストア内の組織単位オブジェクトの名前。	191 ページの「名前」
--description	オブジェクトのテキストによる説明。	146 ページの「コメント」
--inherit	オブジェクトの Webtop コンテンツに、オブジェクトの親の Webtop コンテンツも格納するかどうかを指定します。	173 ページの「割り当て済みアプリケーションを親から継承する」
--conntype	クライアントデバイスと SGD サーバー間で許可される接続。	149 ページの「接続」

オプション	説明	詳細情報
--cdm	アプリケーションサーバー上で動作しているアプリケーションからアクセスできる Microsoft Windows クライアントデバイス上のドライブ。	134 ページの「クライアントドライブマッピング」
--userprintingconfig	ユーザー固有の印刷設定を有効にします。	138 ページの「クライアント印刷: 上書き」
--mapprinters	ユーザーが Windows アプリケーションから印刷できるクライアントプリンタ。	136 ページの「クライアント印刷」
--pdfenabled	ユーザーが SGD の「Universal PDF Printer」プリンタを使用して Windows アプリケーションから印刷できるようにします。	208 ページの「Universal PDF プリンタ」
--pdfviewerenabled	ユーザーが SGD の「Universal PDF Viewer」プリンタを使用して Windows アプリケーションから印刷できるようにします。	209 ページの「Universal PDF ビューア」
--pdfdriver	Windows アプリケーションからの印刷時に SGD PDF 印刷で使用するプリンタドライバ。	197 ページの「Postscript プリンタドライバ」
--pdfisdefault	Windows アプリケーションからの印刷時にクライアントのデフォルトプリンタとして使用する SGD の「Universal PDF Printer」プリンタを設定します。	184 ページの「Universal PDF プリンタをデフォルトにする」
--pdfviewerisdefault	Windows アプリケーションからの印刷時にクライアントのデフォルトプリンタとして使用する SGD の「Universal PDF Viewer」プリンタを設定します。	185 ページの「Universal PDF ビューアをデフォルトにする」
--links	Webtop のコンテンツを定義します。	123 ページの「「割り当て済みのアプリケーション」タブ」
--editprofile	Sun Secure Global Desktop クライアントで使用するプロファイルをユーザーが作成および編集できるかどうかを指定します。	139 ページの「クライアントプロファイルの編集」

オプション	説明	詳細情報
--clipboard	Windows または X アプリケーションのアプリケーションセッションでユーザーがコピー&ペーストを使用できるかどうかを指定します。	152 ページの「コピー&ペースト」
--serialport	Microsoft Windows Server 2003 アプリケーションサーバー上で動作している Windows アプリケーションからクライアントデバイス上のシリアルポートにユーザーがアクセスできるかどうかを指定します。	199 ページの「シリアルポートマッピング」
--file	組織階層内に複数のオブジェクトを作成するのに使うバッチファイル。	

複数のオブジェクトを一括で作成するには、--file オプションを使用します。他のオプションは、1 つのオブジェクトを作成する場合に使用します。

使用例

次の例では、新規 OU オブジェクトを IT という名前で作成し、組織オブジェクト Indigo Insurance に所属させます (所属先は既存のオブジェクトでなければなりません)。この OU は、親 (組織オブジェクト) から Webtop コンテンツを継承します。OU 内のすべてのユーザーは、ユーザープロファイルオブジェクトに別の接続タイプが設定されていないかぎり、セキュア (SSL ベース) 接続を使用します。

```
tarantella object new_orgunit \
  --name "o=Indigo Insurance/ou=IT" \
  --inherit true \
  --conntype '*:SSL'
```

次の例では、「here-document」として定義したバッチスクリプトを使って、3 つの OU オブジェクトを作成します。OU Administarion は、作成したばかりの OU Finance に属します。別の方法として、バッチスクリプトをファイルに保存して、それを --file *filename* を使用して参照することもできます。

```
tarantella object new_orgunit --file - <<EOF
  --name "o=Indigo Insurance/ou=IT"
  --name "o=Indigo Insurance/ou=Finance"
  --name "o=Indigo Insurance/ou=Finance/ou=Administration"
EOF
```

tarantella object new_person

1 つ以上のユーザープロファイルオブジェクト ([106 ページの「ユーザープロファイルオブジェクト」](#)を参照) を作成します。

形式

```
tarantella object new_person {
  --name obj
  --surname surname
  [ --description text ]
  [ --user user ]
  [ --email name@domain ]
  [ --ntdomain dom ]
  [ --inherit true|false ]
  [ --shared true|false ]
  [ --enabled true|false ]
  [ --conntype type_spec... ]
  [ --cdm drive_spec... ]
  [ --keymap keymap ]
  [ --bandwidth limit ]
  [ --links obj... ]
  [ --userprintingconfig 1|0 ]
  [ --mapprinters 2|1|0 ]
  [ --pdfenabled 1|0 ]
  [ --pdfviewerenabled 1|0 ]
  [ --pdfdriver driver_name ]
  [ --pdfisdefault 1|0 ]
  [ --pdfviewerisdefault 1|0 ]
  [ --editprofile 2|1|0 ]
  [ --clipboard 2|1|0 ]
  [ --serialport 2|1|0 ]
} | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明	詳細情報
--name	SGD データストア内のオブジェクトの共通名。	191 ページの「名前」
--surname	ユーザープロファイルに使用する姓 (名字)。	206 ページの「姓」
--description	オブジェクトのテキストによる説明。	146 ページの「コメント」
--user	ユーザープロファイルの名前を使用します。通常は、UNIX ユーザー名です。	182 ページの「ログイン名」
--email	ユーザープロファイルの電子メールアドレス。	159 ページの「電子メールアドレス」
--ntdomain	アプリケーションサーバー認証に使用される Windows ドメイン。	158 ページの「ドメイン名」

オプション	説明	詳細情報
--inherit	オブジェクトの Webtop コンテンツに、オブジェクトの親の Webtop コンテンツも格納するかどうかを指定します。	173 ページの「割り当て済みアプリケーションを親から継承する」
--shared	ユーザープロファイルオブジェクトを 1 人のユーザーが使用するか、「guest」アカウントを使って複数のユーザーで共有するかを指定します。	181 ページの「ログイン: 複数」
--enabled	このユーザープロファイルオブジェクトを使って、他のユーザーがログインできるかどうかを指定します。	180 ページの「ログイン」
--conntype	クライアントデバイスと SGD サーバー間で許可される接続を定義します。	149 ページの「接続」
--cdm	ユーザーがアプリケーションからアクセスできる Microsoft Windows クライアントデバイス上のドライブ。	134 ページの「クライアントドライバマッピング」
--keymap	キーボードマップファイルのパス名。	176 ページの「キーボードマップ」
--bandwidth	この人物がアプリケーションで利用できる最大帯域幅。	132 ページの「帯域幅の制限」
--links	Webtop のコンテンツを定義します。	123 ページの「「割り当て済みのアプリケーション」タブ」
--userprintingconfig	ユーザー固有の印刷設定を有効にします。	138 ページの「クライアント印刷: 上書き」
--mapprinters	ユーザーが Windows アプリケーションから印刷できるクライアントプリンタ。	136 ページの「クライアント印刷」
--pdfenabled	ユーザーが SGD の「Universal PDF Printer」プリンタを使用して Windows アプリケーションから印刷できるようにします。	208 ページの「Universal PDF プリンタ」
--pdfviewerenabled	ユーザーが SGD の「Universal PDF Viewer」プリンタを使用して Windows アプリケーションから印刷できるようにします。	209 ページの「Universal PDF ビューア」
--pdfdriver	Windows アプリケーションからの印刷時に SGD PDF 印刷で使用するプリンタドライバ。	197 ページの「Postscript プリンタドライバ」
--pdfisdefault	Windows アプリケーションからの印刷時にクライアントのデフォルトプリンタとして使用する SGD の「Universal PDF Printer」プリンタを設定します。	184 ページの「Universal PDF プリンタをデフォルトにする」
--pdfviewerisdefault	Windows アプリケーションからの印刷時にクライアントのデフォルトプリンタとして使用する SGD の「Universal PDF Viewer」プリンタを設定します。	185 ページの「Universal PDF ビューアをデフォルトにする」

オプション	説明	詳細情報
--editprofile	SGD クライアントで使用するプロファイルをユーザーが作成および編集できるかどうかを指定します。	139 ページの「クライアントプロファイルの編集」
--clipboard	アプリケーションのアプリケーションセッションでユーザーがコピー&ペーストを使用できるかどうかを指定します。	152 ページの「コピー&ペースト」
--serialport	Microsoft Windows Server 2003 アプリケーションサーバー上で動作している Windows アプリケーションからクライアントデバイス上のシリアルポートにユーザーがアクセスできるかどうかを指定します。	199 ページの「シリアルポートマッピング」
--file	組織階層内に複数のオブジェクトを作成するのに使うバッチファイル。	

複数のオブジェクトを一括で作成するには、--file オプションを使用します。他のオプションは、1 つのオブジェクトを作成する場合に使用します。

使用例

次の例では、新規組織オブジェクトを Indigo Insurance という名前で作成します。Indigo は組織オブジェクトから Webtop コンテンツを継承し、セキュア (SSL-ベース) 接続を使用します。

```
tarantella object new_person \
  --name "o=Indigo Insurance/cn=Indigo Jones" \
  --surname Jones \
  --user indigo \
  --email indigo@indigo-insurance.com \
  --inherit true \
  --conntype '*:*:SSL'
```

次の例では、「here-document」として定義したバッチスクリプトを使って、3 つのユーザープロファイルオブジェクトを作成します。あるいは、バッチスクリプトをファイルに保存して、それを --file *filename* を使用して参照することもできます。

```
tarantella object new_person --file - <<EOF
  --name "o=Indigo Insurance/cn=Indigo Jones" --surname Jones
  --name "o=Indigo Insurance/ou=IT/cn=Bill Orange" --surname Orange
  --name "o=Indigo Insurance/ou=Finance/cn=Mulan Rouge" --surname Rouge
EOF
```

tarantella object new_windowsapp

1 つ以上の Windows アプリケーションオブジェクト (108 ページの「Windows アプリケーションオブジェクト」を参照) を作成します。

形式

```
tarantella object new_windowsapp {
    --name obj
    --width pixels
    --height pixels
    [ --description text ]
    [ --winproto wts|winframe|none ]
    [ --trylocal true|false ]
    [ --ntdomain dom ]
    [ --app pathname ]
    [ --args args ]
    [ --appserv obj... ]
    [ --method rexec|telnet|ssh ]
    [ --resumable never|session|always ]
    [ --endswhen lastclient|windowmanager|windowmanageralone|nowindows|
loginscript|loginscriptnowindows ]
    [ --maxinstances 0|instances ]
    [ --displayusing webtop|newbrowser|independent|kiosk|localx|
seamless ]
    [ --maximize true|false ]
    [ --scalable true|false ]
    [ --depth 8|16|24 ]
    [ --icon icon_name ]
    [ --hints hint... ]
    [ --clipboardlevel level ]
    [ --roottype default|custom ]
    [ --rootcolor color ]
    [ --compression automatic|on|off ]
    [ --execution automatic|inorder|optimized ]
    [ --interlaced automatic|on|off ]
    [ --accel true|false ]
    [ --delayed true|false ]
    [ --ldapusers user_dn... ]
    [ --ldapgroups group_dn... ]
    [ --ldapsearch search_string... ]
    [ --loadbal default|cpu|memory|sessions ]
    [ --env setting... ]
    [ --login script ]
    [ --winmgr command... ]
    [ --protoargs args ]
    [ --resumetimeout mins ]
```



```
[ --middlemouse ms ]
[ --windowclose suspendsession|endsession ]
[ --euro unicode|iso8859-15 ]
[ --dpi monitordpi ]
[ --keepopen true|false ]
[ --lockkeymap true|false ]
[ --remotewindowkeys true|false ]
} | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明	詳細情報
--name	SGD データストア内のオブジェクトの共通名。	191 ページの「名前」
--width	アプリケーションの幅 (ピクセル単位)。	221 ページの「ウィンドウのサイズ: 幅」
--height	アプリケーションの高さ (ピクセル単位)。	218 ページの「ウィンドウのサイズ: 高さ」
--description	オブジェクトのテキストによる説明。	146 ページの「コメント」
--winproto	アプリケーションのホストサーバーへの接続に使うプロトコル。	225 ページの「Windows プロトコル」
--trylocal	アプリケーションをユーザーのクライアントデバイス上で起動してみるかどうかを設定します。	226 ページの「Windows プロトコル: 最初にクライアントからの実行を試行する」
--ntdomain	アプリケーションサーバーの認証処理に使う Windows NT ドメイン。	158 ページの「ドメイン名」
--app	アプリケーションのフルパス名。	113 ページの「アプリケーションコマンド」
--args	アプリケーションの起動時に使うコマンド行引数。	121 ページの「コマンドの引数」
--appserv	アプリケーションを実行できるアプリケーションサーバー。	170 ページの「「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ」
--method	SGD サーバーがアプリケーションサーバーにアクセスして、アプリケーションを起動するのに使う機構。	149 ページの「接続方法」
--resumable	アプリケーションの再開機能動作。	115 ページの「アプリケーションの再開機能」
--endswhen	アプリケーションセッションを終了するタイミング。	202 ページの「セッション終了」

オプション	説明	詳細情報
--maxinstances	ユーザーが同時に実行できるアプリケーションインスタンスの最大数。	193 ページの「セッション数」
--displayusing	アプリケーションをユーザーに表示する方法。	222 ページの「ウィンドウタイプ」
--maximize	アプリケーションの初期サイズ。	217 ページの「ウィンドウのサイズ: クライアントの最大サイズ」
--scalable	アプリケーションの表示をウィンドウに合わせて拡大縮小します。	221 ページの「ウィンドウのサイズ: ウィンドウに合わせて拡大縮小する」
--depth	アプリケーションの発色数。	141 ページの「発色数」
--icon	アプリケーションの Webtop アイコン。	172 ページの「アイコン」
--hints	アプリケーションに対する追加の「名前-値」データを含む文字列。	167 ページの「ヒント」
--clipboardlevel	アプリケーションのクリップボードセキュリティレベル。	154 ページの「コピー&ペースト: アプリケーションの Clipboard Security Level」
--roottype	ルートウィンドウの外観。	214 ページの「ウィンドウの色」
--rootcolor	ルートウィンドウの色。	214 ページの「ウィンドウの色: カスタム色」
--compression	Adaptive Internet Protocol (AIP) が送信時にコマンドを圧縮するかどうかを指定します。	145 ページの「コマンドの圧縮」
--execution	Adaptive Internet Protocol (AIP) がコマンドを常に指定順に実行するか、パフォーマンスを最高にするために最適化するかを指定します。	146 ページの「コマンドの実行」
--interlaced	インターレースイメージ伝送を有効にします。	174 ページの「インターレースイメージ」
--accel	アプリケーションの表示のグラフィックスの高速化を有効にします。	166 ページの「グラフィックアクセラレーション」
--delayed	アプリケーションの表示の遅延更新を有効にします。	156 ページの「遅延更新」
--ldapusers	指定した LDAP ユーザーにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ」
--ldapgroups	指定した LDAP グループにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ」
--ldapsearch	LDAP 検索条件に一致するユーザーにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ」
--loadbal	使用する負荷分散アルゴリズム。	114 ページの「アプリケーションの負荷分散」

オプション	説明	詳細情報
--env	アプリケーションを実行するのに必要な環境変数の設定。	160 ページの「環境変数」
-login	アプリケーションを起動するために使用するログインスクリプト。	183 ページの「ログインスクリプト」
--winmgr	アプリケーションで使用するウィンドウマネージャー。	216 ページの「ウィンドウマネージャー」
--protoargs	Windows プロトコル (--winproto) と一緒に使うコマンド行引数。	122 ページの「プロトコルの引数」
--resumetimeout	アプリケーションを再開可能にする時間 (分)。	117 ページの「アプリケーションの再開機能: タイムアウト」
--middlemouse	マウスの 2 つのボタンを使用してマウスの中ボタンのクリックをエミュレートするときのタイムアウト。	189 ページの「マウスの中ボタンのタイムアウト」
--windowclose	メインのアプリケーションウィンドウを閉じたときのアプリケーションセッションへの影響。	212 ページの「ウィンドウを閉じるアクション」
--euro	ユーロ文字をサポートするのに、アプリケーションが必要とするキーコードマッピング。	161 ページの「ユーロ文字」
--dpi	SGD が X アプリケーションにレポートするモニターの解像度。	189 ページの「モニターの解像度」
--keepopen	アプリケーションを起動するときに使用する接続を開いた状態にします。	175 ページの「起動接続をオープンしたまま保持」
--lockkeymap	アプリケーションがキーボードマッピングを変更するのを防止します。	177 ページの「キーボードマップ: ロック」
--remotewindowkeys	ウィンドウ管理キーストロークをリモートセッションに送ります。	215 ページの「ウィンドウ管理キー」
--file	組織階層内に複数のオブジェクトを作成するのに使うバッチファイル。	

複数のオブジェクトを一括で作成するには、--file オプションを使用します。他のオプションは、1 つのオブジェクトを作成する場合に使用します。

使用例

次の例では、アプリケーション Write-o-Win 用の新しい Windows アプリケーションオブジェクトを作成します。このアプリケーションは、アプリケーションサーバー rome 上で実行されます。

```
tarantella object new_windowsapp \
  --name "o=applications/cn=Write-o-Win" \
  --width 1000 --height 800 \
  --app c:\\programs\\apps\\write.exe \
  --appserv "o=appservers/ou=Sales/cn=rome"
```

tarantella object new_xapp

1つ以上のX アプリケーションオブジェクト (109 ページの「X アプリケーションオブジェクト」を参照) を作成します。

形式

```
tarantella object new_xapp {
  --name obj
  --width pixels
  --height pixels
  [ --description text ]
  [ --app pathname ]
  [ --args args ]
  [ --appserv obj... ]
  [ --method rexec|telnet|ssh ]
  [ --resumable never|session|always ]
  [ --endswhen lastclient|windowmanager|windowmanageralone|nowindows|
loginscript|loginscriptnowindows ]
  [ --maxinstances 0|instances ]
  [ --displayusing webtop|clientwm|newbrowser|independent|kiosk|
localx ]
  [ --maximize true|false ]
  [ --scalable true|false ]
  [ --depth 8|16|24|16/8|24/8|8/16|8/24 ]
  [ --icon icon_name ]
  [ --hints hint...]
  [ --clipboardlevel level ]
  [ --roottype default|custom ]
  [ --rootcolor color ]
  [ --compression automatic|on|off ]
  [ --execution automatic|inorder|optimized ]
  [ --quality automatic|best|24|21|18|16|15|12|9|6 ]
  [ --interlaced automatic|on|off ]
  [ --accel true|false ]
  [ --delayed true|false ]
  [ --ldapusers user_dn... ]
  [ --ldapgroups group_dn... ]
  [ --ldapsearch search_string... ]
```

```
[ --loadbal default|cpu|memory|sessions ]
[ --env setting... ]
[ --login script ]
[ --winmgr command... ]
[ --resumetimeout mins ]
[ --middlemouse ms ]
[ --force3button true|false ]
[ --windowclose notifyapp|killapp|suspendsession|endsession ]
[ --euro unicode|iso8859-15 ]
[ --dpi monitordpi ]
[ --keepopen true|false ]
[ --lockkeymap true|false ]
[ --share true|false ]
[ --securityextension true|false ]
[ --ssharguments args ]
[ --unixaudiopreload true|false ]
[ --remotewindowkeys true|false ]
} | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明	詳細情報
--name	SGD データストア内のオブジェクトの共通名。	191 ページの「名前」
--width	アプリケーションの幅 (ピクセル単位)。	221 ページの「ウィンドウのサイズ: 幅」
--height	アプリケーションの高さ (ピクセル単位)。	218 ページの「ウィンドウのサイズ: 高さ」
--description	オブジェクトのテキストによる説明。	146 ページの「コメント」
--app	アプリケーションのフルパス名。	113 ページの「アプリケーションコマンド」
--args	アプリケーションの起動時に使うコマンド行引数。	121 ページの「コマンドの引数」
--appserv	アプリケーションを実行できるアプリケーションサーバー。	170 ページの「「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ」
--method	SGD サーバーがアプリケーションサーバーにアクセスして、アプリケーションを起動するのに使う機構。	149 ページの「接続方法」
--resumable	アプリケーションの再開機能動作。	115 ページの「アプリケーションの再開機能」

オプション	説明	詳細情報
--endswhen	アプリケーションセッションを終了するタイミング。	202 ページの「セッション終了」
--maxinstances	ユーザーが同時に実行できるアプリケーションインスタンスの最大数。	193 ページの「セッション数」
--displayusing	アプリケーションをユーザーに表示する方法。	222 ページの「ウィンドウタイプ」
--maximize	アプリケーションの初期サイズ。	217 ページの「ウィンドウのサイズ: クライアントの最大サイズ」
--scalable	アプリケーションの表示をウィンドウに合わせて拡大縮小します。	221 ページの「ウィンドウのサイズ: ウィンドウに合わせて拡大縮小する」
--depth	アプリケーションの発色数。	141 ページの「発色数」
--icon	アプリケーションの Webtop アイコン。	172 ページの「アイコン」
--hints	アプリケーションに対する追加の「名前-値」データを含む文字列。	167 ページの「ヒント」
--clipboardlevel	アプリケーションのクリップボードセキュリティレベル。	154 ページの「コピー&ペースト: アプリケーションの Clipboard Security Level」
--roottype	ルートウィンドウの外観。	214 ページの「ウィンドウの色」
--rootcolor	ルートウィンドウの色。	214 ページの「ウィンドウの色: カスタム色」
--compression	Adaptive Internet Protocol (AIP) が送信時にコマンドを圧縮するかどうかを指定します。	145 ページの「コマンドの圧縮」
--execution	Adaptive Internet Protocol (AIP) がコマンドを常に指定順に実行するか、パフォーマンスを最高にするために最適化するかを指定します。	146 ページの「コマンドの実行」
--quality	クライアントデバイスで表示される実効発色数。	143 ページの「カラー品質」
--interlaced	インターレースイメージ伝送を有効にします。	174 ページの「インターレースイメージ」
--accel	アプリケーションの表示のグラフィックスの高速化を有効にします。	166 ページの「グラフィックアクセラレーション」
--delayed	アプリケーションの表示の遅延更新を有効にします。	156 ページの「遅延更新」
--ldapusers	指定した LDAP ユーザーにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ」
--ldapgroups	指定した LDAP グループにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ」

オプション	説明	詳細情報
--ldapsearch	LDAP 検索条件に一致するユーザーにアプリケーションを割り当てます。	125 ページの「割り当て済みのユーザープロファイル」タブ
--loadbal	使用する負荷分散アルゴリズム。	114 ページの「アプリケーションの負荷分散」
--env	アプリケーションを実行するのに必要な環境変数の設定。	160 ページの「環境変数」
--login	アプリケーションを起動するために使用するログインスクリプト。	183 ページの「ログインスクリプト」
--winmgr	アプリケーションで使用するウィンドウマネージャー。	216 ページの「ウィンドウマネージャー」
--resumetimeout	アプリケーションを再開可能にする時間 (分)。	117 ページの「アプリケーションの再開機能: タイムアウト」
--middlemouse	マウスの 2 つのボタンを使用してマウスの中ボタンのクリックをエミュレートするときのタイムアウト。	189 ページの「マウスの中ボタンのタイムアウト」
--force3button	アプリケーションが 3 ボタンマウスだけをサポートすることを指定します。	190 ページの「マウス」
--windowclose	メインのアプリケーションウィンドウを閉じたときのアプリケーションセッションへの影響。	212 ページの「ウィンドウを閉じるアクション」
--euro	ユーロ文字をサポートするのに、アプリケーションが必要とするキーコードマッピング。	161 ページの「ユーロ文字」
--dpi	SGD が X アプリケーションにレポートするモニターの解像度。	189 ページの「モニターの解像度」
--keepopen	アプリケーションを起動するときに使用する接続を開いた状態にします。	175 ページの「起動接続をオープンしたまま保持」
--lockkeymap	アプリケーションがキーボードマッピングを変更するのを防止します。	177 ページの「キーボードマップ: ロック」
--share	類似アプリケーションセッションでのリソース共有を有効にします。	204 ページの「類似セッション間でリソースを共有」
--securityextension	アプリケーションの X セキュリティー拡張機能を有効にします。	227 ページの「X セキュリティー拡張機能」
--ssharguments	ssh クライアントのコマンド行引数。	152 ページの「接続方法: ssh 引数」
--unixaudiopreload	SGD オーディオリダイレクトライブラリを有効にします。	131 ページの「オーディオリダイレクトライブラリ」
--remotewindowkeys	ウィンドウ管理キーストロークをリモートセッションに送ります。	215 ページの「ウィンドウ管理キー」
--file	組織階層内に複数のオブジェクトを作成するのに使うバッチファイル。	

複数のオブジェクトを一括で作成するには、`--file` オプションを使用します。他のオプションは、1つのオブジェクトを作成する場合に使用します。

使用例

次の例では、アプリケーション XFinance 用の新規 X アプリケーションオブジェクトを作成します。このアプリケーションはアプリケーションサーバー `paris`、`bonn`、または `lisbon` で実行できます。どのアプリケーションサーバーを使用するかは、アプリケーションサーバーの負荷分散機能によって決定されます。

```
tarantella object new_xapp \  
  --name "o=applications/ou=Finance/cn=XFinance" \  
  --width 1000 --height 800 \  
  --app /usr/local/bin/xfinance \  
  --appserv "o=appservers/ou=Finance/cn=paris" \  
            "o=appservers/ou=Finance/cn=bonn" \  
            "o=appservers/cn=lisbon"
```

tarantella object remove_host

アプリケーションを実行するときにアプリケーションサーバーの負荷分散に利用できるアプリケーションサーバーのリストから、アプリケーションサーバーを削除します。

形式

```
tarantella object remove_host { --name obj...  
                                --host hobj...  
                                } | --file file
```


説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--name	負荷分散のために設定するアプリケーションオブジェクトの名前を指定します。
--host	負荷分散プールから削除するアプリケーションサーバーオブジェクトの名前を指定します。
--file	アプリケーションサーバーの負荷分散を設定する一式のコマンドを格納したバッチファイルを指定します。

注 - オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、アプリケーションサーバー rome をアプリケーション Slide-o-Win 用の負荷分散プールから削除します。

```
tarantella object remove_host \  
  --name "o=applications/cn=Slide-o-Win" \  
  --host "o=appservers/ou=Sales/cn=rome"
```

次の例では、グループ WinHosts をアプリケーション Write-o-Win および Slide-o-Win 用の負荷分散プールから削除します。WinHosts に含まれるすべてのアプリケーションサーバーに対して、負荷分散が実行されなくなります。

```
tarantella object remove_host \  
  --name "o=applications/cn=Write-o-Win" \  
         "o=applications/cn=Slide-o-Win" \  
  --host "o=appservers/cn=WinHosts"
```

tarantella object remove_link

Webtop からリンクを削除します。

形式

```
tarantella object remove_link { --name obj...
                                --link lobj...
                                } | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--name	Webtop リンクを削除するオブジェクトの名前を指定します。
--link	Webtop から削除するオブジェクトの名前を指定します。
--file	Webtop からリンクを削除する一式のコマンドを格納したバッチファイルを指定します。

注 – オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、アプリケーション Write-o-Win を Violet Carson の Webtop から削除します。

```
tarantella object remove_link \
  --name "o=Indigo Insurance/ou=Sales/cn=Violet Carson" \
  --link "o=applications/cn=Write-o-Win"
```

次の例では、グループ Applications を組織単位 Sales および Marketing の Webtop から削除します。これらの OU の一方から Webtop コンテンツを継承しているすべてのユーザー (たとえば、OU に所属していて、ユーザープロファイルオブジェクトの「[割り当て済みアプリケーションを親から継承する](#)」を選択しているユーザー) の Webtop には、このグループ内のすべてのアプリケーションが表示されなくなります。ただし、別のところから継承しているアプリケーションは表示されます。

```
tarantella object remove_link \
  --name "o=Indigo Insurance/ou=Sales" \
  --name "o=Indigo Insurance/ou=Marketing" \
  --link "o=applications/cn=Applications"
```

tarantella object remove_member

グループからオブジェクトを削除します。

形式

```
tarantella object remove_member { --name obj...
                                   --member mobj...
                                   } | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--name	メンバーを削除するグループオブジェクトの名前を指定します。
--member	グループから削除するオブジェクトの名前を指定します。
--file	グループのメンバーを削除する一式のコマンドを格納したバッチファイルを指定します。

注 – オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

アプリケーション Write-o-Win をグループ Applications から削除します。

```
tarantella object remove_member \
  --name "o=applications/cn=Applications" \
  --member "o=applications/cn=Write-o-Win"
```

次の例では、3つのアプリケーションサーバーオブジェクト rome、brussels、および berlin を、グループ WinHosts から削除します。

```
tarantella object remove_member \
  --name "o=appservers/cn=WinHosts" \
  --member "o=appservers/ou=Sales/cn=rome" \
           "o=appservers/cn=brussels" \
           "o=appservers/ou=Marketing/cn=berlin"
```

tarantella object rename

組織階層内のオブジェクトの名前を変更します。またはオブジェクトを移動します。

形式

```
tarantella object rename {  --name obj...
                           --newname newobj...
                           } | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--name	名前を変更する、または移動するオブジェクトの名前を指定します。
--newname	オブジェクトの新しい名前を指定します。
--file	オブジェクトを移動する、またはオブジェクト名を変更する一式のコマンドを格納したバッチファイルを指定します。

注 – オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、ユーザプロフィールオブジェクト Elizabeth Blue の名前を Liz Blue に変更します。

```
tarantella object rename \
  --name "o=Indigo Insurance/ou=Sales/cn=Elizabeth Blue" \
  --newname "o=Indigo Insurance/ou=Sales/cn=Liz Blue"
```

次の例では、Ginger Butcher を 組織単位 IT から Sales に移動します。

```
tarantella object rename \
  --name "o=Indigo Insurance/ou=IT/cn=Ginger Butcher" \
  --newname "o=Indigo Insurance/ou=Sales/cn=Ginger Butcher"
```

tarantella object script

tarantella object コマンドのバッチスクリプトを実行します。または、コマンドを対話形式で実行できるようにします。

形式

```
tarantella object script
```

説明

バッチスクリプトは、標準の tarantella object コマンドを 1 行に 1 コマンドずつ、tarantella object プリフィックスを付けない形式で、格納しています。たとえば、tarantella object edit ではなく edit を使用します。

バッチスクリプトでは、コマンドを複数行に分けて指定する場合、バックスラッシュ (\) を使って行を区切ることができます。シャープ記号 (#) で始まる行はコメントと見なされ、無視されます。

コマンドの値に二重引用符 (") またはバックスラッシュ (\) 文字を含める必要がある場合は、バックスラッシュでそれらを保護する必要があります。たとえば、--args オプションの値に「c:\ Program Files」を指定する場合は、次のように入力する必要があります。

```
--args "\"c:\\Program Files\\""
```

このコマンドは標準入力から読み取ります。たとえば、「here-document」を使って次のバッチスクリプトを実行できます。

```
$ tarantella object script <<EOF
commands
EOF
```

標準入力为空の場合、tarantella object コマンドを対話形式で実行できます。

使用例

次の例では、グループ Applications を組織単位 Sales および Marketing に追加し、Sales OU の「[割り当て済みアプリケーションを親から継承する](#)」属性を false に設定します。

```
tarantella object script <<EOF
add_link \
  --name "o=Indigo Insurance/ou=Sales" \
        "o=Indigo Insurance/ou=Marketing" \
  --link "o=Indigo Insurance/cn=Applications"
```

```
edit \  
  --name "o=Indigo Insurance/ou=Sales" \  
  --inherit false  
EOF
```

tarantella passcache コマンド

このコマンドは、アプリケーションサーバーのパスワードキャッシュを操作します。SGD 管理者は、エントリを作成、変更、削除、および検査できます。

形式

tarantella passcache new | edit | list | delete

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なサブコマンドを示しています。

サブコマンド	説明	詳細情報
new	パスワードキャッシュにエントリを作成します。	316 ページの「tarantella passcache new」
edit	パスワードキャッシュに格納されている既存のエントリを変更します。	313 ページの「tarantella passcache edit」
list	パスワードキャッシュの内容一覧を表示します。	315 ページの「tarantella passcache list」
delete	パスワードキャッシュからエントリを削除します。	311 ページの「tarantella passcache delete」

注 – すべてのコマンドに `--help` オプションがあります。特定のコマンドに関するヘルプを表示するには、`tarantella passcache command --help` コマンドを使用します。

使用例

次の例では、SGD ユーザー Indigo Jones 用のパスワードキャッシュエントリを、アプリケーションサーバーオブジェクト `prague` で表したアプリケーションサーバー上に作成します。

```
tarantella passcache new \  
  --person "o=Indigo Insurance/cn=Indigo Jones" \  
  --resource "o=Indigo Insurance/cn=prague" \  
  --resuser indigo \  
  --respass rainbow
```

次の例では、SGD ユーザー Indigo Jones 用のパスワードキャッシュに格納されているエントリを表示します。

```
tarantella passcache list \  
  --person "o=Indigo Insurance/cn=Indigo Jones"
```

tarantella passcache delete

アプリケーションサーバーのパスワードキャッシュに格納されているエントリを削除します。

注 – このコマンドを使用して、アプリケーションサーバー上での認証のために常にスマートカードを使用するという設定を削除することもできます。

形式

```
tarantella passcache delete { [ --person pobj | --anon | --ldap ]  
                             [ --resource resource ]  
                             } | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--person	パスワードキャッシュエントリを削除するユーザープロファイルオブジェクトの名前を指定します。
--anon	すべての匿名ユーザー用のパスワードキャッシュエントリを削除します。
--ldap	LDAP 統合用のパスワードキャッシュエントリを削除します。この特別なエントリは、LDAP 認証機能でのみ使用されます。これは LDAP ディレクトリサーバーのユーザー名とパスワードで、Administration Console の「グローバル設定」⇒「SGD 認証」タブで入力できます。 ユーザー名にはフルネームを使用します (例: cn=Bill Orange,cn=Users,dc=indigo-insurance,dc=com)。 --ldap オプションを指定した場合、--resource オプションは無視されます。
--resource	パスワードキャッシュエントリが該当するアプリケーションサーバーまたは Microsoft Windows ドメインを指定します。リソースの場合、名前を使用します。次のいずれかを指定できます。 <ul style="list-style-type: none">• アプリケーションサーバーオブジェクト (例: o=appservers/cn=paris)。• DNS 名 (例: .../_dns/paris.indigo-insurance.com)。• Windows ドメイン (例: .../_wns/indigo.dom)。• アレイを意味する「.../_array」。これは、SGD へのログインに使用するパスワードをキャッシュする場合に使用します (「パスワードキャッシュの使用」を参照)。
--file	削除するパスワードキャッシュエントリを格納したファイルを指定します。

--person、--anon、または --ldap のいずれも指定しない場合、指定したリソース用のすべてのパスワードキャッシュエントリが削除されます。

--resource を指定しない場合、人物 (または匿名ユーザー) 用のすべてのパスワードキャッシュエントリが削除されます。

注 – オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、ユーザー Indigo Jones 用のパスワードキャッシュエントリをすべて削除します。


```
tarantella passcache delete \
  --person "o=Indigo Insurance/cn=Indigo Jones"
```

次の例では、アプリケーションサーバー `prague.indigo-insurance.com` 上の匿名ユーザー用のパスワードキャッシュエントリをすべて削除します。

```
tarantella passcache delete \
  --anon \
  --resource .../_dns/prague.indigo-insurance.com
```

tarantella passcache edit

アプリケーションサーバーのパスワードキャッシュに格納されているエントリを編集します。

形式

```
tarantella passcache edit {
{ --person pobj | --anon | --ldap }
  --resource resource
  --resuser resuser
[ --respass respass ]
} | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--person</code>	パスワードキャッシュエントリを編集するユーザープロファイルオブジェクトの名前を指定します。
<code>--anon</code>	匿名ユーザー用のパスワードキャッシュエントリを編集します。
<code>--ldap</code>	LDAP 統合用のパスワードキャッシュエントリを編集します。この特別なエントリは、LDAP 認証機能でのみ使用されます。これは LDAP ディレクトリサーバーのユーザー名とパスワードで、Administration Console の「グローバル設定」⇒「SGD 認証」タブで入力できます。 ユーザー名にはフルネームを使用します (例: <code>cn=Bill Orange,cn=Users,dc=indigo-insurance,dc=com</code>)。 <code>--ldap</code> オプションを指定した場合、 <code>--resource</code> オプションは無視されます。

オプション	説明
--resource	パスワードキャッシュエントリが該当するアプリケーションサーバーまたは Microsoft Windows ドメインを指定します。リソースの場合、名前を使用します。次のいずれかを指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> アプリケーションサーバーオブジェクト (例: o=appservers/cn=paris)。 DNS 名 (例: .../_dns/paris.indigo-insurance.com)。 Windows ドメイン (例: .../_wns/indigo.dom)。 アレイを意味する「.../_array」。これは、SGD へのログインに使用するパスワードをキャッシュする場合に使用します (「パスワードキャッシュの使用」を参照)。
--resuser	リソースに対して適切なユーザー名を指定します。このオプションには、このリソース用の認証ボックスにユーザーが入力するテキストを設定します。
--respass	--resuser に関連させるパスワードを指定します。 このオプションを省略した場合、パスワードの入力を要求されます。
--file	編集するパスワードキャッシュエントリを格納したファイルを指定します。

注 – オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、アプリケーションサーバーオブジェクト `prague` で表したアプリケーションサーバー上のユーザー `Indigo Jones` 用のパスワードキャッシュエントリを編集します。

```
tarantella passcache edit \
  --person "o=Indigo Insurance/cn=Indigo Jones" \
  --resource "o=appservers/cn=prague" \
  --resuser indigo \
  --respass rainbow
```

次の例では、アプリケーションサーバー `paris.indigo-insurance.com` 上の匿名ユーザー用のパスワードキャッシュエントリを編集します。

```
tarantella passcache edit \
  --anon \
  --resource .../_dns/paris.indigo-insurance.com
```

tarantella passcache list

アプリケーションサーバーのパスワードキャッシュに格納されているエントリを表示します。

形式

```
tarantella passcache list { [ --person pobj | --anon | --ldap ]
                             [ --resource resource ]
                             [ --resuser resuser ]
                             [ --format text | xml ]
                           } | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--person	パスワードキャッシュエントリを表示するユーザープロフィールオブジェクトの名前を指定します。
--anon	匿名ユーザー用のパスワードキャッシュエントリを表示します。
--ldap	LDAP 統合用のパスワードキャッシュエントリを表示します。この特別なエントリは、LDAP 認証機能でのみ使用されます。これは LDAP ディレクトリサーバーのユーザー名とパスワードで、Administration Console の「グローバル設定」⇒「SGD 認証」タブで入力できます。 ユーザー名にはフルネームを使用します (例: cn=Bill Orange,cn=Users,dc=indigo-insurance,dc=com)。 --ldap オプションを指定した場合、--resource オプションは無視されます。
--resource	アプリケーションサーバーまたは Microsoft Windows ドメインのパスワードキャッシュエントリを表示します。リソースの場合、名前を使用します。次のいずれかを指定できます。 <ul style="list-style-type: none">• アプリケーションサーバーオブジェクト (例: o=appservers/cn=paris)。• DNS 名 (例: .../_dns/paris.indigo-insurance.com)。• Windows ドメイン (例: .../_wns/indigo.dom)。• アレイを意味する「.../_array」。これは、SGD へのログインに使用するパスワードをキャッシュする場合に使用します (「パスワードキャッシュの使用」を参照)。

オプション	説明
<code>--resuser</code>	特定のアプリケーションサーバーのユーザー名のパスワードキャッシュエントリを表示します。
<code>--format</code>	出力形式を指定します (デフォルト値は <code>text</code>)。
<code>--file</code>	表示するパスワードキャッシュエントリを格納したファイルを指定します。

すべての引数を省略した場合、または `--format` だけを指定した場合、パスワードキャッシュに格納されているすべてのエントリが表示されます。

注 - オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、SGD ユーザー Indigo Jones 用のパスワードキャッシュに格納されているエントリを表示します。

```
tarantella passcache list \
    --person "o=Indigo Insurance/cn=Indigo Jones"
```

次の例では、パスワードキャッシュに格納されているすべてのエントリを表示します。

```
tarantella passcache list
```

tarantella passcache new

形式

```
tarantella passcache new {
{ --person pobj | --anon | --ldap }
--resource resource
--resuser resuser
[ --respass respass ]
} | --file file
```

説明

アプリケーションサーバーのパスワードキャッシュにエントリを追加します。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--person	パスワードキャッシュエントリを作成するユーザープロフィールオブジェクトの名前を指定します。
--anon	匿名ユーザー用のパスワードキャッシュエントリを作成します。
--ldap	LDAP 統合用のパスワードキャッシュエントリを作成します。この特別なエントリは、LDAP ログイン認証機能でのみ使用されます。これは LDAP ディレクトリサーバーのユーザー名とパスワードで、Administration Console の「グローバル設定」⇒「SGD 認証」タブで入力できます。ユーザー名にはフルネームを使用します (例: cn=Bill Orange,cn=Users,dc=indigo-insurance,dc=com)。 --ldap オプションを指定した場合、--resource オプションは無視されます。
--resource	パスワードキャッシュエントリが該当するアプリケーションサーバーまたは Microsoft Windows ドメインを指定します。リソースの場合、名前を使用します。次のいずれかを指定できます。 <ul style="list-style-type: none">• アプリケーションサーバーオブジェクト (例: o=appservers/cn=paris)。• DNS 名 (例: .../_dns/paris.indigo-insurance.com)。• Windows ドメイン (例: .../_wns/indigo.dom)。• アレイを意味する「.../_array」。これは、SGD へのログインに使用するパスワードをキャッシュする場合に使用します (「パスワードキャッシュの使用」を参照)。
--resuser	リソースに対して適切なユーザー名を指定します。このオプションには、このリソース用の認証ボックスにユーザーが入力するテキストを設定します。
--respass	--resuser に関連させるパスワードを指定します。 このオプションを省略した場合、パスワードの入力を要求されます。
--file	パスワードキャッシュに追加するエントリを格納したファイルを指定します。

注 - オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、SGD ユーザー Indigo Jones 用のパスワードキャッシュエントリを、アプリケーションサーバーオブジェクト `prague` で表したアプリケーションサーバー上に作成します。

```
tarantella passcache new \  
  --person "o=Indigo Insurance/cn=Indigo Jones" \  
  --resource "o=appservers/cn=prague" \  
  --resuser indigo \  
  --respass rainbow
```

次の例では、パスワードの入力を要求するアプリケーションサーバー `paris.indigo-insurance.com` の匿名ユーザー用のパスワードキャッシュエントリを作成します。

```
tarantella passcache new \  
  --anon \  
  --resuser \  
  --resource .../_dns/paris.indigo-insurance.com
```

tarantella print コマンド

このコマンドを使うと、アレイ全体の SGD 印刷サービスを管理できます。

形式

```
tarantella print start | stop | status | pause | resume | list | cancel  
| move
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なサブコマンドを示しています。

サブコマンド	説明	詳細情報
cancel	印刷ジョブをキャンセルします。	319 ページの「tarantella print cancel」
list	印刷ジョブを表示します。	320 ページの「tarantella print list」
move	ある SGD サーバーのキューにある印刷ジョブを、別の SGD サーバーに移動します。	321 ページの「tarantella print move」

サブコマンド	説明	詳細情報
pause	印刷を一時停止します。	323 ページの「tarantella print pause」
resume	印刷を再開します。	324 ページの「tarantella print resume」
start	アレイの印刷サービスを開始します。	324 ページの「tarantella print start」
status	印刷サービスに関する情報を表示します。	325 ページの「tarantella print status」
stop	アレイの印刷サービスを停止します。	326 ページの「tarantella print stop」

注 – すべてのコマンドに `--help` オプションがあります。特定のコマンドに関するヘルプを表示するには、`tarantella print command --help` コマンドを使用します。

使用例

次の例では、アレイの SGD 印刷サービスを開始します。

```
tarantella print start
```

次の例では、Bill Orange の印刷ジョブをすべて表示します。

```
tarantella print list --person "o=Indigo Insurance/ou=IT/cn=Bill
Orange"
```

tarantella print cancel

現在スプールされている SGD の印刷ジョブをキャンセルします。

このコマンドはアレイのどの SGD サーバーでも実行できます。

形式

```
tarantella print cancel { --all
                          | --jobid id...
                          | --person pobj...[--server serv]
                          | --server serv }
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--all</code>	アレイ全体のスプールされている印刷ジョブをすべてキャンセルします。
<code>--jobid</code>	指定したジョブ ID のジョブをキャンセルします。
<code>--person</code>	指定した各ユーザープロファイルに所属するジョブをキャンセルします。 ユーザープロファイルは名前指定する必要があります。 <code>--server</code> を指定しないでこのオプションを使用すると、指定した各ユーザープロファイルのすべての印刷ジョブがキャンセルされます。
<code>--server</code>	指定した各 SGD サーバー上のジョブをキャンセルします。各サーバーは、ピア DNS 名を使って指定します。 <code>--person</code> を指定しないでこのオプションを使用すると、指定した各サーバー上の指定した各ユーザープロファイルの印刷ジョブがキャンセルされます。

使用例

次の例では、Bill Orange の印刷ジョブをキャンセルします。

```
tarantella print cancel --person "o=Indigo Insurance/ou=IT/cn=Bill Orange"
```

次の例では、SGD サーバー `detroit` 上の印刷ジョブをすべてキャンセルします。

```
tarantella print cancel --server "detroit.indigo-insurance.com"
```

tarantella print list

現在スプールされている印刷ジョブを表示します。

このコマンドはアレイのどの SGD サーバーでも実行できます。

形式

```
tarantella print list { --jobid id... | [ --person pobj... ]  
[ --server serv... ]  
}  
[ --format text|brief ]
```


説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--jobid	指定したジョブ ID のジョブを表示します。
--person	指定した各人物に所属するジョブを表示します。人物は名前で指定する必要があります。
--server	指定した SGD サーバーのジョブを表示します。各サーバーは、ピア DNS 名を使って指定します。 --person オプションを指定しないでこのオプションを使用すると、そのサーバー上で指定されたユーザープロファイルに対してスプールされている印刷ジョブだけが表示されます。
--format	出力形式を指定します。 「text」形式は、印刷ジョブ別に、印刷ジョブの各属性 (ジョブ ID、ジョブの所有者など) を 1 行に 1 つずつ格納したテキストを表示します。ジョブとジョブの間には、空行が 1 行入っています。これはデフォルト値です。 「brief」形式は、印刷ジョブの属性を 1 行で表示します。

--jobid、--person、または--server を省略した場合、アレイ全体のすべての印刷ジョブが表示されます。

使用例

次の例では、Bill Orange の印刷ジョブをすべて「text」形式で表示します。

```
tarantella print list --person "o=Indigo Insurance/ou=IT/cn=Bill Orange"
```

次の例では、SGD サーバー detroit および chicago 上の Bill Orange と Rusty Spanner の印刷ジョブを「text」形式で表示します。

```
tarantella print list \  
--person "o=Indigo Insurance/ou=IT/cn=Bill Orange" \  
"o=Indigo Insurance/ou=IT/cn=Rusty Spanner" \  
--server "detroit.indigo-insurance.com" \  
"chicago.indigo-insurance.com"
```

tarantella print move

ある SGD サーバーのキューにある印刷ジョブを、別の SGD サーバーに移動します。

一時的に使用できない SGD サーバー上で「印刷されないままになっている」印刷ジョブは、このコマンドを使用して移動できます。

注 – このコマンドで移動できるのは、SGD 印刷キュー (*/install-dir/var/print/queue*) に現在入っている印刷ジョブだけです。

形式

```
tarantella print move --server serv
                        [ --printer printer_name ]
                        [ --cups {y | n | auto} ]
                        [ --preserve ]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--cups	印刷ジョブの移動元の SGD サーバーが CUPS (Common UNIX Printing System) を使用していることを指定します。 このオプションを使用しない場合は、デフォルト値の auto が指定されていると見なされ、SGD は CUPS が使用されているかどうかを検出しようとします。CUPS が正しく検出されない場合は、このオプションを使用して、CUPS が使用されていること (y) または使用されていないこと (n) を指定します。
--preserve	印刷ジョブを指定した SGD サーバーに移動するのではなく、コピーします。元の印刷ジョブは SGD 印刷キューに残ります。 注 - 元の SGD サーバーで SGD 印刷サービスを再起動したときに、それらの印刷ジョブが削除されていなければ、印刷が実行されます。
--printer	印刷ジョブの移動先となる SGD サーバー上のプリンタ名。この引数を空白のままにしておくと、デフォルトの tta_printer が使用されます。
--server	印刷ジョブの移動先となる SGD サーバーのピア DNS の完全修飾名。

使用例

次の例では、コマンドを実行した SGD サーバー上の印刷ジョブを SGD サーバー *boston.indigo-insurance.com* 上の *tta_boston* という名前のプリンタに移動します。

```
tarantella print move --server boston.indigo-insurance.com --printer
tta_boston
```

tarantella print pause

このコマンドはアレイのどの SGD サーバーでも実行できます。

SGD 印刷サービスを一時停止します。新規印刷ジョブのプールは続行されますが、`tarantella print resume` コマンドを使用して印刷サービスが再開されるまで印刷されません。

`--server` を使用しない場合は、アレイ全体の印刷サービスが一時停止します。

注 – アレイの SGD サーバー上の印刷サービスを個別に一時停止すると、ユーザーにとっての問題が発生することがあります。印刷サービスを一時停止する場合は、常にアレイ全体のサービスを一時停止してください。

形式

```
tarantella print pause [ --server serv... ]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--server</code>	指定した各 SGD サーバー上の印刷サービスが一時停止します。各サーバーは、ピア DNS 名を使って指定します。

使用例

次の例では、アレイ全体の印刷サービスを一時停止します。

```
tarantella print pause
```

次の例では、SGD サーバー `detroit` および `chicago` 上の印刷サービスを一時停止します。

```
tarantella print pause --server "detroit.indigo-insurance.com"  
"chicago.indigo-insurance.com"
```

tarantella print resume

`tarantella print pause` コマンドを使って中断されている SGD 印刷サービスを再開します。スプールされているジョブの印刷が開始されます。

`--server` を使用しない場合は、アレイ全体の印刷サービスが再開します。

このコマンドはアレイのどの SGD サーバーでも実行できます。

注 – アレイの SGD サーバー上の印刷サービスを個別に再開すると、ユーザーに対し問題が発生することがあります。印刷サービスを再開する場合は、常にアレイ全体のサービスを再開してください。

形式

```
tarantella print resume [ --server serv... ]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--server</code>	指定した各 SGD サーバー上の印刷サービスが再開します。各サーバーは、ピア DNS 名を使って指定します。

使用例

次の例では、アレイ全体の印刷サービスを再開します。

```
tarantella print resume
```

次の例では、SGD サーバー `detroit` および `chicago` 上の印刷サービスを再開します。

```
tarantella print resume --server "detroit.indigo-insurance.com"  
"chicago.indigo-insurance.com"
```

tarantella print start

SGD 印刷サービスを開始します。`--server` を使用しない場合は、アレイ全体の印刷サービスが開始します。

このコマンドはアレイのどの SGD サーバーでも実行できます。

注 – アレイの SGD サーバー上の印刷サービスを個別に開始すると、ユーザーに対し問題が発生することがあります。印刷サービスを開始する場合は、常にアレイ全体のサービスを開始してください。

形式

```
tarantella print start [ --server serv... ]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--server</code>	指定した各 SGD サーバー上の印刷サービスを開始します。各サーバーは、ピア DNS 名を使って指定します。

使用例

次の例では、アレイ全体の印刷サービスを開始します。

```
tarantella print start
```

次の例では、SGD サーバー `detroit` 上の印刷ジョブを開始します。

```
tarantella print start --server "detroit.indigo-insurance.com"
```

tarantella print status

SGD 印刷サービスに関する次の情報を表示します。

- 印刷サービスが使用可能か、使用不能か、または一時停止されているか
- スプールされている印刷ジョブの数

このコマンドはアレイのどの SGD サーバーでも実行できます。

形式

```
tarantella print status [ --summary | --server serv | --namemapping ]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--summary	アレイの情報を表示します。
--server	指定した SGD サーバーの情報を表示します。サーバーは、ピア DNS 名を使って指定します。
--namemapping	印刷に使用される現在のネームマッピングをすべて表示します。印刷ネームマッピングテーブルを使用すると、ユーザーがアプリケーションで印刷してから、印刷ジョブを失うことなくアプリケーションを終了できます。 このネームマッピングは、時間がたつと期限切れになります。期限切れタイムアウトは、Administration Console の「グローバル設定」タブの「セキュリティ」タブで設定できます。

使用例

次の例では、アレイの SGD 印刷サービスに関する情報を表示します。

```
tarantella print status --summary
```

tarantella print stop

SGD 印刷サービスを停止します。印刷ジョブは受け付けられず、スプールされません。

--server を使用しない場合は、アレイ全体の印刷サービスが停止します。

このコマンドはアレイのどの SGD サーバーでも実行できます。

注 – アレイの SGD サーバー上の印刷サービスを個別に停止すると、ユーザーに対し問題が発生することがあります。印刷サービスを停止する場合は、常にアレイ全体のサービスを停止してください。

形式

```
tarantella print stop [ --server serv... ] [ --purge ]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--purge</code>	保留されている印刷ジョブをすべて削除します。省略した場合、スプールに現在格納されている印刷ジョブは印刷されます。
<code>--server</code>	指定した各 SGD サーバー上の印刷サービスが停止します。各サーバーは、ピア DNS 名を使って指定します。

使用例

次の例では、保留中の印刷ジョブをすべて削除して、アレイ全体の印刷サービスを停止します。

```
tarantella print stop --purge
```

次の例では、SGD サーバー `detroit` 上の印刷ジョブを停止します。

```
tarantella print stop --server "detroit.indigo-insurance.com"
```

tarantella query コマンド

サーバーのログファイルを調べます。

形式

```
tarantella query audit | billing | errlog | uptime
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なサブコマンドを示しています。

サブコマンド	説明	詳細情報
audit	条件に一致するログエントリを表示します。	328 ページの「tarantella query audit」
billing	請求処理ログファイルを照会します。	331 ページの「tarantella query billing」
errlog	SGD のコンポーネントのエラーログを表示します。	333 ページの「tarantella query errlog」
uptime	SGD サーバーの稼働時間を表示します。	334 ページの「tarantella query uptime」

注 – すべてのコマンドに `--help` オプションがあります。特定のコマンドに関するヘルプを表示するには、`tarantella query command --help` コマンドを使用します。

使用例

次の例では、すべてのエラーログを表示します。

```
tarantella query errlog
```

次の例では、SGD サーバー `newyork.indigo-insurance.com` の稼働時間を表示します。

```
tarantella query uptime --server newyork.indigo-insurance.com
```

tarantella query audit

条件に一致するすべてのログエントリを表示します。

形式

```
tarantella query audit {  
  --app app |
```



```

--person person |
--host host |
--filter filter }
[ --server arrayhost ]
[ --format text|csv|xml ]

```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--app	特定のアプリケーションに関するログエントリを表示します。アプリケーションのオブジェクト名を使用します。
--person	特定の人物に関するログエントリを表示します。人物のオブジェクト名を使用します。
--host	特定の SGD サーバーに関するログエントリを表示します。サーバーのオブジェクト名か、ピア DNS 名を使用します。
--filter	一致するエントリを検索して表示するための LDAP 検索フィルタで、RFC2254 に準拠しています。フィルタは引用符で囲んでください。フィルタに使用できる照合ルールは、"=", "~=", "<=", および ">=" です。
--server	ピア DNS 名を使って指定した SGD サーバーのログエントリだけを表示します。このオプションを省略した場合、アレイ全体のログエントリが表示されます。
--format	出力形式を指定します (デフォルト設定は text)。テキスト形式を選択した場合、SGD は画面上で読みやすい形式のログを出力しますが、これには記録されたすべての詳細情報は表示されません。CSV 形式を使用すると、記録された詳細情報はすべて表示されますが、これはファイルに出力する場合のみに適しています。

注 – 表示される出力内容は、アレイ用の「ログフィルタ」の設定によって変わります。このコマンドで処理するログエントリを生成するには、Administration Console の「グローバル設定」タブの「監視」タブの「ログフィルタ」属性に、.jsl ファイルに出力するフィルタが 1 つ以上入力されていることを確認します。

フィルタを使用する

フィルタに使用する属性は、.jsl ログファイルで使用されているログフィールドです。次の表に、一般的に使用されている属性を示します。

フィールド名	説明
log-category	ログフィルタで使用するログコンポーネント/サブコンポーネント/重要度。たとえば、server/printing/* ログフィルタのエントリを検索するときは、"(log-category=*printing*)" フィルタを使用できます。
log-date	イベント発生時のシステム日時。形式は yyyy/MM/dd HH:mm:ss.SSS です。
log-ip-address	イベントに関連付けられているクライアントまたはサーバーの IP アドレス。
log-keyword	監査可能なイベントのキーワード。
log-localhost	イベントが発生した SGD サーバーのピア DNS 名。
log-pid	イベントのプロセス ID。
log-security-type	接続に使用されているセキュリティーのタイプ (std または ssl)。
log-systime	イベント発生時のシステム時刻 (ミリ秒単位、UTC 時間)。
log-tfn-name	イベントに関連付けられているオブジェクトの名前。たとえば、アプリケーションセッションを起動すると、ユーザー、アプリケーション、および SGD サーバーの名前が記録されます。

注 – すべてのログフィールドのリストは、
/install-dir/var/serverresources/schema/log.at.conf スキーマファイルで参照できます。

使用例

次の例では、SGD サーバー boston.indigo-insurance.com にログ出力された UNIX ユーザー indigo のログエントリをすべて表示します。

```
tarantella query audit \  
  --person .../_user/indigo \  
  --server boston.indigo-insurance.com
```

次の例では、Write-o-Win アプリケーションに関するすべてのログエントリを CSV (comma-separated values) 形式で出力します。

```
tarantella query audit \
  --app "o=applications/cn=Write-o-win" \
  --format csv
```

次の例では、Write-o-Win アプリケーションに関して 2003 年 10 月 23 日以降に発生したすべてのログエラーを人間が判読できるテキスト形式で出力します。

```
tarantella query audit \
  --filter "(&(log-category=*error*)(log-tfn-name=o=applications/cn=Write-o-win) \
(log-date>=2003/10/23 00:00:00.0))" \
  --format text
```

tarantella query billing

アレイ、またはアレイのサブセットの一定期間内の課金処理情報を出力します。情報は CSV 形式で区切られた値の形式で出力されます。

形式

```
tarantella query billing
  { --full | --sessions | --summary }
  --start date
  --days days
  --end date
  [ --servers arrayhost... ]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--full	すべてのユーザーセッションとアプリケーションセッションに関する詳細情報を表示します。
--sessions	すべてのアプリケーションセッションに関する情報を表示します。
--summary	課金処理情報のサマリーと、アプリケーションセッションの概要を表示します。
--start	表示する課金情報の開始日を指定します。形式は YYYY/MM/DD です (例: 2000/05/01)。

オプション	説明
--days	課金情報を表示するために --start で指定した開始日からの日数を指定します。
--end	表示する課金情報の終了日を指定します。形式は YYYY/MM/DD です (例: 2000/05/20)。終了日は排他的です。これは、たとえば --start 2001/01/19 --end 2001/01/23 は --start 2001/01/19 --days 4 と同じです。両方とも 19 日、20 日、21 日、22 日のデータを照会するという意味です。
--servers	ピア DNS 名を使って指定した SGD サーバーの課金情報だけをレポートします。--servers を省略した場合、アレイ全体の課金情報がレポートされます。

課金処理ファイルは、毎日現地時間の午前 0 時に書き込まれます。

このコマンドはアレイのプライマリサーバー上で実行する必要があります。

注 – データのログ出力を開始する前に、課金処理サービスを使用可能 (「[課金サービス](#)」を参照) にして、アレイのすべての SGD サーバーを再起動する必要があります。

使用例

次の例では、2000 年 5 月 1 日から 30 日間のアレイ全体の請求情報を表示します。

```
tarantella query billing \
  --full \
  --start "2000/05/01" \
  --days 30
```

次の例では、2000 年 1 月 1 日から 30 日間のサーバー prague と paris の請求情報のサマリーを表示します。

```
tarantella query billing \
  --summary \
  --start "2000/01/01" \
  --days 30 \
  --servers prague.indigo-insurance.com \
            paris.indigo-insurance.com
```

次の例では、2001 年 1 月 19 日から 2001 年 1 月 22 日までのアレイ全体のすべてのアプリケーションセッションの請求情報を表示し、結果を Sessions.csv というファイルに出力します。

```
tarantella query billing \
  --sessions \
  --start "2000/01/19" \
  --end "2000/01/23" \
  > sessions.csv
```

tarantella query errlog

SGD のコンポーネントのエラーログを表示します。

形式

```
tarantella query errlog
[ all|xpe|tpe|print|jservice|pemanager|proxy|wm ]
[ --server arrayhost ]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
all xpe tpe print jservice pemanager proxy wm	表示するコンポーネントのエラーログを指定します。デフォルト値の「all」を使うと、すべてのエラーログが表示されます。
--server	ピア DNS 名を使って指定した SGD サーバーのエラーログを表示します。このオプションを省略した場合、アレイのすべての SGD サーバーのエラーログが表示されます。

注 – JService コンポーネントのエラーログ情報を表示するには、Administration Console の「グローバル設定」⇒「監視」タブの「ログフィルタ」属性に、error.log ファイルに出力するフィルタが 1 つ以上入力されていることを確認します。この属性には、デフォルトでこのように指定されています。

使用例

次の例では、すべてのエラーログを表示します。

```
tarantella query errlog
```

次の例では、SGD サーバー `newyork.indigo-insurance.com` 上の X プロトコルエンジンのエラーログを表示します。

```
tarantella query errlog xpe --server newyork.indigo-insurance.com
```

tarantella query uptime

SGD サーバーの稼働時間を表示します。

形式

```
tarantella query uptime [ --server arrayhost ]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--server</code>	ピア DNS 名を使って指定した SGD サーバーに関する情報を表示します。このオプションを省略した場合、アレイのすべての SGD サーバーの情報が表示されます。

使用例

次の例では、アレイのすべての SGD サーバーの稼働時間を表示します。

```
tarantella query uptime
```

tarantella restart コマンド

SGD サーバー上の SGD サービスを停止してから、再起動します。現在接続しているユーザーがいる場合は、確認を要求します。

形式

```
tarantella restart [ --warm | --force | --kill ] [ --quiet ]
```

説明

このコマンドを実行しても、SGD Web サーバーや Web サービスは再起動されません。それらのサービスを再起動するには、`tarantella webserver restart` コマンドを使用してください。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--quiet</code>	確認を要求しません。接続しているユーザーがいる場合でも、SGD サービスを停止します。
<code>--warm</code>	SGD サーバーの「ウォームリスタート」を試みます。ウォームリスタートは、他のコンポーネントに影響を与えることなく、JServer コンポーネントを再起動します。 これは、ユーザーセッションやアプリケーションセッションには効果がありません。 このオプションを使用するのは、SGD にユーザーが 1 人もログインできない場合か、アプリケーションを起動できない場合で、特に理由が見つからない場合に限定してください。
<code>--force</code>	SGD サービスの停止を強制的に試みます。
<code>--kill</code>	SGD サービスが使用しているプロセス ID を強制終了します。 このオプションを使用するのは、他の方法で SGD サーバーを停止させることが困難な場合に限定します。

SGD サービスを停止すると、サスペンド中のアプリケーションセッションを含む、すべてのアプリケーションセッションが終了されます。

使用例

次の例では、現在接続しているユーザーがいる場合でも確認メッセージを表示せずに、SGD サービスを停止してから、再起動します。

```
tarantella restart --quiet
```

tarantella role コマンド

このコマンドは、ユーザーに指定のロールを割り当て、そのロールに適用されるリンクをそのユーザーの Webtop に追加する場合に使用します。

形式

```
tarantella role add_link | add_member | list | list_links |  
list_members | remove_link | remove_member
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なサブコマンドを示しています。

サブコマンド	説明	詳細情報
add_link	特定のロールに従事するユーザーの Webtop にリンクを追加します。	337 ページの「 tarantella role add_link 」
add_member	特定のロールに所属メンバーを追加します。	338 ページの「 tarantella role add_member 」
list	選択可能なすべてのロールの一覧とその説明を表示します。	338 ページの「 tarantella role list 」
list_links	特定のロールに所属しているメンバー用の Webtop リンクを表示します。	339 ページの「 tarantella role list_links 」
list_members	特定のロールに所属しているメンバーを表示します。	340 ページの「 tarantella role list_members 」
remove_link	特定のロールに所属しているユーザーの Webtop からリンクを削除します	341 ページの「 tarantella role remove_link 」
remove_member	特定のロールから、所属しているメンバーを削除します。	342 ページの「 tarantella role remove_member 」

注 – すべてのコマンドに `--help` オプションがあります。特定のコマンドに関するヘルプを表示するには、`tarantella role subcommand --help` コマンドを使用します。

使用例

選択可能なすべてのロールの一覧とその説明を表示します。

```
tarantella role list
```

次の例では、アプリケーション Indigo Time 用のリンクを、「Global Administrators」ロールに所属しているユーザーの Webtop に追加します。


```
tarantella role add_link \  
  --role global \  
  --link "o=applications/cn=Indigo Time"
```

tarantella role add_link

特定のロールに所属しているユーザーの Webtop にリンクを追加します

形式

```
tarantella role add_link {  
    --role rolename  
    --link lobj...  
} | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--role	ロールの名前を指定します (例: global)。使用可能なロールを調べるには、 <code>tarantella role list</code> コマンドを使用します。
--link	ロールに所属しているユーザーの Webtop に追加するオブジェクトの名前を指定 します (例: o=applications/cn=Indigo Time)。
--file	特定のロールに所属しているユーザーの Webtop にリンクを追加する一式のコマ ンドを格納したパッチファイルを指定します。

注 – オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

アプリケーション Indigo Time 用のリンクを、「Global Administrators」ロールに所属しているユーザーの Webtop に追加します。

```
tarantella role add_link \  
  --role global \  
  --link "o=applications/cn=Indigo Time"
```

tarantella role add_member

特定のロールに所属メンバーを追加します。

形式

```
tarantella role add_member {  
    --role rolename  
    --member mobj...  
} | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--role	ロールの名前を指定します (例: global)。使用可能なロールを調べるには、 tarantella role list コマンドを使用します。
--member	ロールに所属させるユーザーのユーザープロファイルオブジェクトまたはプロファイルオブジェクトの名前を指定します。
--file	特定のロールに所属メンバーを追加する一式のコマンドを格納したバッチファイルを指定します。

注 - オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、Sid Cerise を「Global Administrators」ロールに追加します。

```
tarantella role add_member \  
    --role global \  
    --member "o=Indigo Insurance/ou=Finance/cn=Sid Cerise"
```

tarantella role list

使用可能なロールをすべて表示し、各ロールに適用可能なロールオブジェクトの名前を含む説明を表示します。

形式

```
tarantella role list
```

説明

他の `tarantella role` コマンドでは、短縮名 (例: 「global」) を使用します。

使用例

選択可能なすべてのロールの一覧とその説明を表示します。

```
tarantella role list
```

tarantella role list_links

特定のロールに所属しているメンバー用の Webtop リンクを表示します。各リンクの名前が表示されます。

形式

```
tarantella role list_links --role rolename | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--role</code>	ロールの名前を指定します (例: global)。使用可能なロールを調べるには、 <code>tarantella role list</code> コマンドを使用します。
<code>--file</code>	ロールに所属している Webtop リンクを表示する一式のコマンドを格納したバッチファイルを指定します。

注 – オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、「Global Administrators」ロールに所属しているメンバー用のすべての Webtop リンクの名前を表示します。

```
tarantella role list_links --role global
```

tarantella role list_members

特定のロールに所属しているメンバーを表示します。各メンバーの名前が表示されます。

形式

```
tarantella role list_members --role rolename | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--role	ロールの名前を指定します (例: global)。使用可能なロールを調べるには、 <code>tarantella role list</code> コマンドを使用します。
--file	特定のロールに所属しているメンバーを表示する一式のコマンドを格納したバッチファイルを指定します。

注 – オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

「Global Administrators」ロールに所属しているすべてのメンバーの名前を表示します。

```
tarantella role list_members --role global
```

tarantella role remove_link

特定のロールに所属しているユーザーの Webtop からリンクを削除します

形式

```
tarantella role remove_link {  
    --role rolename  
    --link lobj...  
} | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--role	ロールの名前を指定します (例: global)。使用可能なロールを調べるには、 <code>tarantella role list</code> コマンドを使用します。
--link	ロールに所属しているユーザーの Webtop から削除するオブジェクトの名前を指定します。 たとえば、 <code>o=applications/cn=Indigo Time</code> と指定します。
--file	特定のロールに所属しているユーザーの Webtop からリンクを削除する一式のコマンドを格納したバッチファイルを指定します。

注 - オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、「Global Administrators」ロールのメンバーの Webtop から Write-o-Win アプリケーション用のリンクを削除します。

```
tarantella role remove_link \  
    --role global \  
    --link "o=applications/cn=Write-o-Win"
```

tarantella role remove_member

特定のロールから、所属しているメンバーを削除します。

形式

```
tarantella role remove_member {  
    --role rolename  
    --member mobj...  
} | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--role	ロールの名前を指定します (例: global)。使用可能なロールを調べるには、 tarantella role list コマンドを使用します。
--member	ロールに所属することを望まないユーザーのオブジェクト名を指定します。
--file	特定のロールから所属メンバーを削除する一式のコマンドを格納したパッチファイルを指定します。

注 – オブジェクト名に空白文字が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、Sid Cerise を「Global Administrators」ロールから削除します。

```
tarantella role remove_member \  
    --role global \  
    --member "o=Indigo Insurance/ou=Finance/cn=Sid Cerise"
```

tarantella security コマンド

SGD セキュリティーサービスを制御し、X.509 証明書を管理します。

形式

tarantella security certinfo | certrequest | certuse | customca |
decryptkey | fingerprint | peerca | start | stop

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なサブコマンドを示しています。

サブコマンド	説明	詳細情報
certinfo	インストールされている X.509 証明書に関する情報または証明書発行要求 (CSR) に関する情報を表示し、オプションで、指定した非公開キーが特定の証明書に含まれている公開キーと一致しているか検査します。	344 ページの「tarantella security certinfo」
certrequest	SGD セキュリティーサービスで使用する X.509 証明書を取得するための CSR と対応するキーペアを作成します。	346 ページの「tarantella security certrequest」
certuse	SGD セキュリティーサービスで使用する X.509 証明書をインストールします。または、事前に証明書をインストールしてある場合は、インストール先を指定します。	348 ページの「tarantella security certuse」
customca	SGD セキュリティーサービスで使用するカスタム認証局 (CA) のルート証明書をインストールします。	350 ページの「tarantella security customca」
decryptkey	暗号化されている非公開キーを復号化して、SGD で使用できるようにします。	351 ページの「tarantella security decryptkey」
fingerprint	この SGD サーバーにインストール済みの X.509 証明書のフィンガプリントを表示します。	352 ページの「tarantella security fingerprint」
peerca	アレイ内のセキュア通信に使用するプライマリサーバーの CA 証明書を表示、インポート、またはエクスポートします。	353 ページの「tarantella security peerca」
start	SSL ベースのセキュア接続を使用可能にします。セキュア接続を必要とするユーザーにセキュア接続を提供します。	354 ページの「tarantella security start」
stop	SSL ベースのセキュア接続を使用不能にします。セキュア接続を必要とするユーザーには、代わりに標準接続を提供します。	355 ページの「tarantella security stop」

注 – すべてのコマンドに `--help` オプションがあります。特定のコマンドに関するヘルプを表示するには、`tarantella security subcommand --help` コマンドを使用します。

使用例

次の例では、`/tmp/boston.csr` に格納されている CSR に関する情報を表示します。

```
tarantella security certinfo \  
  --csrfile /tmp/boston.csr
```

次の例では、DER (Definite Encoding Rules) 形式で保存されているキー `/opt/keys/key1` を復号化して、復号化したキーを `/opt/keys/key2` に格納します。

```
tarantella security decryptkey \  
  --enckey /opt/keys/key1 \  
  --deckey /opt/keys/key2 \  
  --format DER
```

tarantella security certinfo

インストールされている X.509 証明書 (`--certfile`) に関する情報、または証明書発行要求 (`--csrfile`) に関する情報を表示します。

形式

```
tarantella security certinfo [ --certfile certfile [ --keyfile keyfile ] ]  
                             [ --checkkey ] [ --full ]  
tarantella security certinfo --csrfile csrfile [ --full ]
```

説明

また、このコマンドは、指定した非公開キーが公開キーと一致しているか検査することもできます。つまり、特定の証明書の公開キーは、対応する非公開キーを使って暗号化されたテキストを、復号化することができます。

`certfile` と `keyfile` を指定しないで 1 番目の形式を使用すると、[tarantella security certuse](#) コマンドを使ってインストールされたキーと証明書を検査します。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--certfile</code>	X.509 証明書を格納したファイルの格納場所を指定します。このコマンドは、この証明書に関する次の情報を表示します。 <ul style="list-style-type: none">• サーバーと組織に関する情報。• サーバーの代替 DNS 名。• 証明書を承認した CA の資格。• 証明書が有効な期間 (日付)。 証明書ファイルのフルパスを指定する必要があります。
<code>--keyfile</code>	非公開キーの格納場所を指定します。 キーファイルのフルパスを指定する必要があります。
<code>--checkkey</code>	特定の非公開キーが、証明書ファイルで指定した X.509 証明書に含まれている公開キーと一致しているか検査します。 <ul style="list-style-type: none">• <code>--certfile</code> と <code>--keyfile</code> の両方を指定した場合、このコマンドはキーファイルで指定した非公開キーが、証明書ファイルの公開キーと一致しているか検査します。• <code>--certfile</code> だけを指定した場合、このコマンドは証明書ファイルに証明書と非公開キーの両方が含まれていると見なして、非公開キーが証明書の公開キーと一致しているか検査します。• <code>--certfile</code> と <code>--keyfile</code> を両方とも省略した場合、このコマンドは <code>/install-dir/var/tsp</code> ディレクトリにインストールされている証明書と非公開キーを検査します。
<code>--csrfile</code>	CSR を格納したファイルの格納場所を指定します。このコマンドは、この CSR に関する次の情報を表示します。 <ul style="list-style-type: none">• CSR が対応するサーバーの DNS 名 (または選択した共通名)。• サーバーの代替 DNS 名。• 組織の名前と所在地。 CSR ファイルのフルパスを指定する必要があります。
<code>--full</code>	指定した証明書または CSR に関するより詳細な情報 (証明書に含まれている公開キーの内容など) を表示します。

使用例

次の例では、`/opt/certs/newyork.cert` に格納されている証明書に関する詳細情報を表示します。

```
tarantella security certinfo \  
  --certfile /opt/certs/newyork.cert \  
  --full
```

次の例では、/opt/certs/boston.cert に格納されている証明書に関する情報を表示し、非公開キー /opt/keys/boston.key がその証明書に含まれている公開キーと一致しているか検査します。

```
tarantella security certinfo \  
  --certfile /opt/certs/boston.cert \  
  --keyfile /opt/keys/boston.key \  
  --checkkey
```

次の例では、/tmp/boston.csr に格納されている CSR に関する情報を表示します。

```
tarantella security certinfo \  
  --csrfile /tmp/boston.csr
```

tarantella security certrequest

CSR および公開キーと非公開キーのペアを生成します。

形式

```
tarantella security certrequest --country country  
                                --state state  
                                --orgname org  
                                [ --ouname ou ]  
                                [ --email email ]  
                                [ --locality locality ]  
                                [ --keylength length ]
```

説明

生成した CSR を、サポートしている CA に送信し、SGD セキュリティーサービスで使用する証明書を取得します。

次の点に注意してください。

- CA が認証に格納されているホスト名の変更を許可している場合、認証に完全修飾 DNS 名が記載されていることを確認します (たとえば、boston ではなく、boston.indigo-insurance.com)。

- SGD サーバーに複数の DNS 名が含まれる場合 (ファイアウォールの内側と外側で異なる名前を使って認識されている場合など)、証明書 of 「代替の件名」 として追加の DNS 名を指定できます。 これにより、複数の DNS 名を証明書に関連付けることができます。
- このコマンドで生成した非公開キーと CSR のコピーを作成し、安全な場所 (たとえば、金庫に入れたフロッピーディスク) に保管してください。キーの情報は、`/install-dir/var/tsp` ディレクトリに格納されています。非公開キーを紛失した場合や、非公開キーが損傷した場合、CSR を使って取得したすべての証明書が使用できなくなります。
- このコマンドは、実行するたびに新規のキーペアを生成します。このコマンドを使って CSR を生成し、その CSR を使って証明書を取得した場合、再度このコマンドを実行すると、以前の証明書は使用できなくなります。

`tarantella security certinfo` コマンドを使うと、証明書と CSR に関する情報を表示できます。

`--ouname`、`--email`、または `--locality` を指定しない場合、SGD は CSR からのこれらの情報を単に省略します。デフォルト値はありません。

このコマンドで指定可能なオプションは次のとおりです。

オプション	説明
<code>--country</code>	組織が存在する国を指定します。ISO 3166 国コードを使用します。たとえば、アメリカは US、ドイツは DE です。
<code>--state</code>	組織が存在する州または地域を指定します。ここでは、短縮形は使用しないでください。たとえば、Mass. または MA. ではなく、Massachusetts と指定します。
<code>--orgname</code>	組織の正式な登記されている名前を指定します。
<code>--ouname</code>	組織内の部門 (組織単位) の名前を必要に応じて指定します。 組織単位 (OU) を指定する必要がある場合、この設定を使って組織名の略称を指定できます。
<code>--email</code>	業務用の電子メールアドレスを指定します。このアドレスは、CSR の送信先の CA との通信に使用されます。
<code>--locality</code>	組織が存在する都市を必要に応じて指定します。
<code>--keylength</code>	キーペアの長さを指定します。デフォルト値は 1024 です。512 ビットか 1024 ビットのキーを使用してください。

注 – 値に空白文字が含まれている場合は、引用符 (") または (') で囲む必要があります (例: "Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、マサチューセッツ州の Indigo Insurance 用で、連絡先が Bill Orange の CSR を生成します。

```
tarantella security certrequest \  
  --country US \  
  --state MA \  
  --orgname "Indigo Insurance" \  
  --email "orange@indigo-insurance.com"
```

tarantella security certuse

SGD セキュリティーサービスで使用する X.509 証明書をインストールします。または、事前に証明書をインストールしてある場合は、インストール先を指定します。

形式

```
tarantella security certuse  
tarantella security certuse --certfile cfile [ --keyfile kfile ]
```

説明

証明書は、Base 64 でエンコードされた PEM 形式のファイルで、OpenSSL で使用する場合と同様にヘッダー行に「BEGIN CERTIFICATE」が含まれていなければなりません。

引数を指定しない場合、このコマンドは標準入力から証明書を読み込んで、*/install-dir/var/tsp* にインストールします。

X.509 証明書をインストールしたあと、`tarantella restart` コマンドを使って SGD を再起動する必要があります。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--certfile</code>	<p>証明書を格納したファイルの格納場所を指定します。<code>--keyfile</code> 引数を指定しない場合、SGD は 証明書ファイルに証明書と対応する非公開キーの両方が含まれていると見なします。</p> <p>このオプションは次のように使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none">• 既に Web サーバーなど、別の製品用にインストールされている証明書について SGD に通知します。この場合、SGD は、証明書ファイル (指定されている場合は、さらにキーファイル) のコピーではなく、シンボリックリンクを作成します。• <code>tarantella security certrequest</code> コマンドを使って CSR を生成したあとで、CA から受信した証明書をインストールします。この場合、SGD は証明書を SGD セキュリティーサービスで使うために、<code>/install-dir/var/tsp</code> にインストールします。 <p>証明書ファイルのフルパスを指定する必要があります。</p>
<code>--keyfile</code>	<p><code>--certfile</code> の証明書を復号化するのに必要な非公開キーを格納したファイルの格納場所を指定します。</p> <p>このオプションを使って、既にインストールされている非公開キーに関する情報を SGD に通知します。<code>tarantella security certrequest</code> コマンドを使って CSR を生成して証明書を取得した場合、このオプションを使う必要はありません。</p> <p>キーファイルのフルパスを指定する必要があります。</p>

使用例

次の表は、使用例のシナリオと、`tarantella security certuse` コマンドで使用する対応する オプションを示しています。

シナリオ	コマンド
<code>tarantella security certrequest</code> コマンドを使って CSR を生成し、CA に送信しました。CA から返信が送られてきた認証を、テンポラリファイル <code>/tmp/cert</code> に保存しました。	<code>tarantella security certuse </tmp/cert</code>
既に証明書があります (<code>tarantella security certrequest</code> コマンドは使用しなかった)。認証は <code>/opt/certs/cert</code> にインストールされており、この認証の暗号解除に必要なキーは <code>/opt/keys/key</code> にインストールされています。	<code>tarantella security certuse --certfile /opt/certs/cert --keyfile /opt/keys/key</code>
既に証明書があります (<code>tarantella security certrequest</code> コマンドは使用しなかった)。単一のファイル <code>/opt/certs/cert</code> に証明書と、暗号解除に必要なキーが両方とも格納されています。	<code>tarantella security certuse --certfile /opt/certs/cert</code>

tarantella security customca

SGD セキュリティサービスで使用するカスタム CA のルート証明書をインストールまたは削除します。

形式

```
tarantella security customca
tarantella security customca --rootfile carootfile | --remove
```

説明

証明書は、Base 64 でエンコードされた PEM 形式のファイルで、OpenSSL で使用する場合と同様にヘッダー行に「BEGIN CERTIFICATE」が含まれていなければなりません。

引数を指定しない場合、このコマンドは標準入力からルート証明書を読み取ります。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--rootfile</code>	CA のルート証明書を格納したファイルの格納場所を指定します。SGD は証明書を SGD セキュリティーサービスで使うために、 <code>/install-dir/var/tsp</code> にインストールします。 ルート証明書ファイルのフルパスを指定する必要があります。
<code>--remove</code>	SGD セキュリティーサービスで使うために現在インストールされているすべてのカスタム CA のルート証明書を削除します。

使用例

次の例では、CA のルート証明書をファイル `/tmp/rootcert` からインストールします。インストールが完了したら、このファイルは削除できます。

```
tarantella security customca \  
  --rootfile /tmp/rootcert
```

tarantella security decryptkey

暗号化されている非公開キーを復号化して、SGD で使用できるようにします。このコマンドを使うと、SGD で排他的に使用する別の証明書を取得する代わりに、別の製品 (たとえば Web サーバー) で使用している X.509 証明書を使用することができます。

形式

```
tarantella security decryptkey --enckey enckeyfile  
                               --deckey deckeyfile  
                               [ --format PEM|DER ]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--enckey	復号化する暗号化された非公開キーの格納場所を指定します。復号化できる非公開キーは、SSLeay 証明書ライブラリまたは OpenSSL 証明書ライブラリを使った製品で暗号化された非公開キーに限られます。 暗号化された非公開キーファイルのフルパスを指定する必要があります。
--deckey	復号化したキーを保存するファイルを指定します。 注 - セキュリティー上の理由で、暗号解除された形式で保存されている場合は特に、非公開キーに対するアクセスを制限することが非常に重要です。承認されていないユーザーが非公開キーにアクセスした結果として、セキュリティが著しく侵害されることがあります。非公開キーはこのような危険性を考慮して保管してください。 復号化されたキーファイルのフルパスを指定する必要があります。
--format	暗号化されたキーが保存されている形式を指定します。デフォルト値は、PEM 形式です。

注 - 暗号化を解除できるのは、元々 SSLeay 証明書ライブラリまたは OpenSSL 証明書ライブラリを使用する製品によって暗号化された非公開キーに限られます。

この方法による証明書の共有方法については、「`tarantella security certuse` コマンド」を参照してください。

使用例

次の例では、キー `/opt/keys/key1` (DER 形式で保存されているキー) を暗号解除して、複合化されたキーを `/opt/keys/key2` に格納します。

```
tarantella security decryptkey \  
  --enckey /opt/keys/key1 \  
  --deckey /opt/keys/key2 \  
  --format DER
```

tarantella security fingerprint

SGD サーバーにインストール済みの X.509 証明書のフィンガプリントを表示します。

形式

```
tarantella security fingerprint
```

説明

このコマンドを使用してフィンガを取得し、ユーザーに配布することで、接続先の SGD サーバーが信頼されているサーバーであることが保証されます。詳細については、『Sun Secure Global Desktop 管理者ガイド』を参照してください。

使用例

次の例では、SGD サーバーにインストール済みの X.509 証明書のフィンガプリントを表示します。

```
tarantella security fingerprint
```

tarantella security peerca

アレイ内のセキュア通信に使用するプライマリサーバーの CA 証明書を表示、インポート、またはエクスポートします。

形式

```
tarantella security peerca [ --show | --import hostname | --export ]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--show	アレイのプライマリサーバーの CA 証明書を表示します。
--import	指定したサーバーから CA 証明書をインポートします。
--export	このサーバーから CA 証明書をエクスポートします。

使用例

次の例では、アレイのプライマリサーバーの CA 証明書を表示します。

```
tarantella security peerca --show
```

tarantella security start

アレイ全体またはアレイの一部の SSL ベースのセキュア接続を使用可能にします。SGD は、セキュア接続を必要とするユーザーにセキュア接続を提供します。

形式

```
tarantella security start [ --array | --server serv... ]
```

説明

特定の SGD サーバーに対するセキュア接続を可能にするには、事前にそのサーバー用の X.509 証明書をインストールしておく必要があります。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--array	適切な X.509 証明書を保持するアレイ内のすべてのサーバー上で、セキュア接続を使用可能にします。 注 - アレイのすべてのサーバーに X.509 証明書をインストールした場合にのみ、このオプションを使用します。
--server	指定したサーバーのセキュア接続を使用可能にします。各サーバーには、アレイ内の SGD サーバーのピア DNS 名を指定します。

両方のオプションを省略した場合、コマンドを実行した SGD サーバー上のセキュア接続を使用可能にします。

使用例

次の例では、アレイ全体のセキュア接続を使用可能にします。

```
tarantella security start --array
```

tarantella security stop

アレイ全体またはアレイの一部の SSL ベースのセキュア接続を使用不能にします。セキュア接続を必要とするユーザーには、可能な場合は代わりに標準接続を提供します。

形式

```
tarantella security stop [ --array | --server serv... ][ --keep ]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--array	アレイ内のすべてのサーバー上のセキュア接続を使用不能にします。
--server	指定したサーバーのセキュア接続を使用不能にします。各サーバーには、アレイ内の SGD サーバーのピア DNS 名を指定します。
--keep	既存のセキュア接続がある場合は保持するよう指定します。省略した場合、すべてのセキュア接続をクローズします。

引数を両方とも省略した場合、コマンドを実行した SGD サーバー上のセキュア接続を使用不能にします。

使用例

次の例では、アレイ全体のセキュア接続を使用不能にしますが、既存のセキュア接続がある場合は保持します。

```
tarantella security stop --array --keep
```

tarantella setup コマンド

このコマンドを使うと、設定のオプションを変更することができます。画面に表示される指示に従ってください。

形式

```
tarantella setup
```

説明

週単位のアーカイブ処理のオンとオフを切り換えることができます。アーカイブ処理をオンにした場合、ログを作成する時刻のスケジュールを設定できます。

また、インストール時に作成されたデフォルトのオブジェクトと Webtop リンクを再作成することもできます。管理者が独自に作成したオブジェクトがこの操作によって削除されることはありませんが、オリジナルと同じ名前のオブジェクトは置き換えられます。

使用例

次の例では、設定のオプションの変更を可能にします。

```
tarantella setup
```

tarantella start コマンド

SGD サーバー上の SGD サービスを起動します。

形式

```
tarantella start
```

説明

SGD 印刷サービスを含む、SGD サーバー上の SGD サービスを起動します。

このコマンドを実行しても、SGD Web サーバーや Web サービスは起動されません。それらのサービスを起動するには、`tarantella webserver start` コマンドを使用してください。

使用例

次の例では、SGD サービスを起動します。

```
tarantella start
```

tarantella start cdm コマンド

CDM サービスを起動します。

形式

```
tarantella start cdm
```

説明

このコマンドが実行された SGD サーバー上でクライアントドライブマッピングサービスを起動します。

使用例

次の例では、SGD サーバー上のクライアントドライブマッピングサービスを起動します。

```
tarantella start cdm
```

tarantella status コマンド

SGD サーバー情報をレポートします。

形式

```
tarantella status [ --summary | --byserver | --server serv | --ping  
[serv] ]  
[ --format text|xml ] [ --verbose ]
```

説明

SGD サーバーの情報をレポートします。アレイの詳細情報、アレイ全体で稼働中またはサスペンド中のユーザーセッションとアプリケーションセッションの数、およびセッションの分散方法をレポートします。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--summary	アレイのグローバルな情報のサマリーを表示します。これは、デフォルト設定です。
--byserver	アレイ内の各サーバーの詳細情報を表示します。
--server	指定したサーバーの詳細情報を表示します (ピア DNS 名で入力する)。
--format	出力形式を指定します。デフォルト値は <code>text</code> です。
--ping	迅速な健全性検査を実行します。実行対象は、アレイのすべての SGD サーバーまたは指定した単一の SGD サーバーになります。
--verbose	コマンド出力を表示する前に、サーバーの健全性検査を表示し、通信中のサーバーの一覧を表示します。

使用例

次の例では、アレイ全体のセッションに関する情報の概要を表示します。

```
tarantella status
```

次の例では、SGD サーバー `boston.indigo-insurance.com` の詳細なステータス情報をレポートします。

```
tarantella status --server boston.indigo-insurance.com
```

tarantella stop コマンド

SGD サーバー上の SGD サービスを停止します。

形式

```
tarantella stop [ --force | --kill ] [ --quiet ]
```

説明

SGD サーバー上の SGD サービスを停止します。現在接続しているユーザーがいる場合は、確認を要求します。これには SGD 印刷サービスも含まれます。

このコマンドを実行しても、SGD Web サーバーや Web サービスは停止しません。それらのサービスを停止するには、`tarantella webserver stop` コマンドを使用してください。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--quiet</code>	確認を要求しません。接続しているユーザーがいる場合でも、SGD サービスを停止します。
<code>--force</code>	SGD サービスの停止を強制的に試みます。
<code>--kill</code>	SGD サービスが使用しているプロセス ID を強制終了します。このオプションを使用するのは、他の方法で SGD サーバーを停止させることが困難な場合に限定します。

注 – SGD サービスを停止させるのに、UNIX の `kill` コマンドを使用しないでください。

SGD サービスを停止すると、中断中のアプリケーションセッションを含む、すべてのアプリケーションセッションが終了します。

使用例

次の例では、現在接続しているユーザーがいる場合でも確認メッセージを表示せずに、SGD サービスを停止します。

```
tarantella stop --quiet
```

tarantella stop cdm コマンド

クライアントドライブマッピング (CDM) サービスを停止します。

形式

```
tarantella stop cdm
```

説明

このコマンドが実行された SGD サーバー上でクライアントドライブマッピングサービスを停止します。

使用例

次の例では、SGD サーバー上のクライアントドライブマッピングサービスを停止します。

```
tarantella stop cdm
```

tarantella tokencache コマンド

このコマンドは、認証トークンを使ってログインする際に使用されるトークンキャッシュを処理します。SGD 管理者はトークンキャッシュに格納されているすべてのエントリを表示および削除できます。

形式

tarantella tokencache delete | list

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なサブコマンドを示しています。

サブコマンド	説明	詳細情報
delete	トークンキャッシュからエントリを削除します。	361 ページの「tarantella tokencache delete」
list	トークンキャッシュの内容一覧を表示します。	362 ページの「tarantella tokencache list」

注 – すべてのコマンドに --help オプションがあります。特定のコマンドに関するヘルプを表示するには、tarantella tokencache *command* --help コマンドを使用します。

使用例

次の例では、パスワードキャッシュに格納されているすべてのエントリを削除します。

```
tarantella tokencache delete --all
```

次の例では、トークンキャッシュ内のすべてのエントリおよびトークンの作成日時を一覧表示します。

```
tarantella tokencache list --creationtime
```

tarantella tokencache delete

トークンキャッシュ内のエントリを削除します。トークンキャッシュは、認証トークンを使ってログインする際に使用されます。

形式

```
tarantella tokencache delete {  
    [ --username username | --all ]  
    [ --format text | xml ] }  
    | --file file
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--username	削除するエントリの名前を指定します。
--all	キャッシュに格納されているすべてのエントリを削除します。
--format	出力形式 (デフォルト値は text)。
--file	処理するバッチファイルを指定します。このファイルには、上記のオプションを使用して各設定を 1 つの行に記述します。 stdin から読み取るときは、--file - を使用します。

使用例

次の例では、トークンキャッシュに格納されているすべてのエントリを削除します。

```
tarantella tokencache delete --all
```

tarantella tokencache list

トークンキャッシュの内容一覧を表示します。トークンキャッシュは、認証トークンを使ってログインする際に使用されます。

形式

```
tarantella tokencache list [ --creationtime ] [ --format text | xml ]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--creationtime</code>	キャッシュ内の各トークンの作成日時を一覧表示します。
<code>--format</code>	出力形式を指定します (デフォルト値は <code>text</code>)。

使用例

次の例では、トークンキャッシュ内のすべてのエントリおよびトークンの作成日時を一覧表示します。

```
tarantella tokencache list --creationtime
```

tarantella tscal コマンド

Windows 以外のクライアントの Microsoft Windows ターミナルサービスクライアントアクセスライセンス (CAL) を管理するときは、`tarantella tscal` コマンドを使用します。

形式

```
tarantella tscal free | list | return
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なサブコマンドを示しています。

サブコマンド	説明	詳細情報
free	別の Windows 以外のクライアントで使用するために、ターミナルサービス CAL を解放します。	364 ページの「tarantella tscal free」
list	Windows 以外のクライアントに現在予約されているターミナルサービス CAL の一覧を表示します。	366 ページの「tarantella tscal list」
return	ターミナルサービス CAL を Windows ライセンスサーバーに戻します。	367 ページの「tarantella tscal return」

注 – すべてのコマンドに `--help` オプションがあります。特定のコマンドに関するヘルプを表示するには、`tarantella tscal subcommand --help` コマンドを使用します。

使用例

次の例では、Windows 以外のクライアントに現在予約されているターミナルサービス CAL の一覧を表示します。

```
tarantella tscal list
```

tarantella tscal free

Windows 以外のクライアントが使用できるように Microsoft Windows ターミナルサービス CAL を解放するときは、`tarantella tscal free` コマンドを使用します。

形式

```
tarantella tscal free [ --inuseby user | --calid id ]
```

説明

CAL を解放できるのは、Windows ターミナルサービスを使用するアプリケーションセッションがない場合だけです。

注 – 解放された CAL は Windows のライセンスサーバーには戻りません。

通常、最後の Windows アプリケーションが終了したときに CAL が自動的に解放されるように設定されている場合は、このコマンドを実行する必要はありません。ただし、SGD サーバーをアレイから削除したり、アレイとの接続が失われたりしているのに、CAL がまだ使用されている状態になっていることがあります。このような場合、このコマンドを実行して CAL を解放できます。

引数を使用しない場合は、Windows ターミナルサービスを使用するアプリケーションセッションが存在しない CAL がすべて解放されます。

プライマリサーバーが利用できないときに、このコマンドを SGD アレイ内のセカンダリサーバー上で実行した場合は、CAL 情報が不正確になることがあります。これは、CAL 情報に変更がある場合には、プライマリサーバーがアレイのすべての SGD サーバーの更新を行うためです。プライマリサーバーが利用できない状態でコマンドを実行した場合は、警告が表示されます。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--inuseby	次のいずれかのユーザーの場合、そのユーザーの CAL だけを解放します。 <ul style="list-style-type: none">• 特定のユーザー名。• ワイルドカードフィルタ。 * 文字は、ワイルドカードフィルタでのみ使用できる文字です。任意の文字を含む任意の長さの文字列を表します。 たとえば、--inuseby "*green*" 引数を指定した場合は、名前に文字列「green」を含むユーザーの CAL のうち、使用されていない CAL のみを解放します。
--calid	解放する CAL の ID。解放する CAL の ID を取得するには、tarantella tscal list コマンドを使用します。

使用例

次の例では、Elizabeth Blue の CAL を解放します。

```
tarantella tscal free --inuseby "o=Indigo Insurance/ou=Sales/cn=Elizabeth Blue"
```

tarantella tscal list

Windows 以外のクライアントに現在予約されている Microsoft Windows ターミナルサービス CAL の一覧を表示するときは、tarantella tscal list コマンドを使用します。

形式

```
tarantella tscal list [ --inuseby user | --inuse | --free ]
                      [ --type name ]
                      [ --format text|xml ]
```

説明

引数を使用しない場合は、すべての CAL の一覧と、それらが使用中かどうかが表示されます。

プライマリサーバーが使用できないときに、このコマンドを SGD アレイ内のセカンダリサーバー上で実行した場合は、一覧が不正確になることがあります。これは、CAL 情報に変更がある場合には、プライマリサーバーがアレイのすべての SGD サーバーの更新を行うためです。プライマリサーバーが利用できない状態でコマンドを実行した場合は、警告が表示されます。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--inuseby	次のいずれかのユーザーの場合、そのユーザーが使用している CAL だけを表示します。 <ul style="list-style-type: none">• 特定のユーザー名。• ワイルドカードフィルタ。 ユーザーの名前については、tarantella emulatorsession list コマンドを使用して調べることができます。 * 文字は、ワイルドカードフィルタでのみ使用できる文字です。任意の文字を含む任意の長さの文字列を表します。 たとえば、--inuseby "*"green*" 引数を指定した場合は、名前に文字列「green」を含むユーザーの CAL のみを表示します。
--inuse	現在使用されている CAL だけを表示します。
--free	現在使用されていない CAL だけを表示します。
--type	特定の種類のターミナルサービスサーバーに接続できる CAL だけを表示します。WinNT4-TS-CAL または Win200x-TS-CAL を指定できます。 注 - この名前の大文字と小文字は区別されません。
--format	出力形式を指定します (デフォルト値は text)。

使用例

次の例では、Windows 以外のクライアントの CAL のうち、現在使用されていない CAL を表示します。

```
tarantella tscal list --free
```

tarantella tscal return

解放されているすべての Microsoft Windows ターミナルサービス CAL を Windows ライセンスサーバーに戻すときは、tarantella tscal return コマンドを使用します。

形式

```
tarantella tscal return --free
```

説明

注 – Windows ライセンスサーバーは、最後に使用された日から約 90 日が経過するまでは、戻された CAL の再発行を許可しない場合があります。

CAL を戻せる状態にするには、tarantella tscal free コマンドを使用して CAL を解放します。

通常、CAL が 90 日間使用されなかったときに、自動的に戻るように設定されている場合は、このコマンドを実行する必要はありません。ただし、SGD サーバーがアレイから削除されている場合は、このコマンドを使用して CAL を手動で戻すことができます。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--free	解放されているすべての CAL を Windows ライセンスサーバーに戻します。

使用例

次の例では、解放されているすべての CAL を Windows ライセンスサーバーに戻します。

```
tarantella tscal return --free
```

tarantella uninstall コマンド

SGD または指定した SGD のパッケージをアンインストールします。

形式

```
tarantella uninstall { [ package... ] [ --purge ] | --list }
```

説明

SGD またはその一部をシステムから削除します。または、インストールされている SGD のパッケージの一覧を表示します。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<i>package...</i>	アンインストールする個別のパッケージを指定します。パッケージを省略した場合、このコマンドは SGD のパッケージをすべてアンインストールします。現在、SGD は単一パッケージとしてインストールできます。
--purge	SGD のパッケージをすべて削除した場合、組織に関連するすべての設定情報も削除されます。--purge を省略した場合、設定情報はそのまま残ります。
--list	現在インストールされている SGD のパッケージをすべて表示します。

使用例

次の例では SGD を完全にアンインストールして、すべての設定情報を削除します。

```
tarantella uninstall --purge
```

tarantella version コマンド

インストールされている SGD のコンポーネントのバージョン番号をレポートします。

形式

```
tarantella version
```

説明

SGD サーバー上にインストールされている SGD のコンポーネントのバージョン番号を、SGD サーバーに関する情報を一緒に表示します。

インストールされている SGD のコンポーネントに関する情報は、Webtop 上でも入手できます。Webtop の左下隅にある「?」ボタンをクリックします。

使用例

次の例では、インストールされている SGD のコンポーネントのバージョン番号を表示します。

```
tarantella version
```

tarantella webserver コマンド

SGD Web サーバーを制御するには、tarantella webserver コマンドを使用します。

形式

```
tarantella webserver start | stop | restart | add_trusted_user |  
delete_trusted_user | list_trusted_users
```

説明

このコマンドは、SGD サーバーには影響しません。

次の表は、このコマンドで使用可能なサブコマンドを示しています。

サブコマンド	説明	詳細情報
start	SGD Web サーバーを起動します。	373 ページの「tarantella webserver start」
stop	SGD Web サーバーを停止します。	374 ページの「tarantella webserver stop」
restart	SGD Web サーバーを再起動します。	374 ページの「tarantella webserver restart」
add_trusted_user	サードパーティーの認証機構を使用するユーザーのユーザー名およびパスワードを追加します。	370 ページの「tarantella webserver add_trusted_user」
delete_trusted_user	サードパーティーの認証機構を使用するユーザーのユーザー名およびパスワードを削除します。	371 ページの「tarantella webserver delete_trusted_user」
list_trusted_users	サードパーティーの認証機構を使用するユーザーのユーザー名の一覧を表示します。	372 ページの「tarantella webserver list_trusted_users」

注 – すべてのコマンドに `--help` オプションがあります。特定のコマンドに関するヘルプを表示するには、`tarantella webserver subcommand --help` コマンドを使用します。

使用例

次の例では、SGD Web サーバーを起動します。

```
tarantella webserver start
```

```
tarantella webserver add_trusted_user
```

サードパーティーの認証を使用するユーザーのユーザー名およびパスワードを追加します。

形式

```
tarantella webserver add_trusted_user username
```

説明

username を入力すると、SGD によってパスワードの入力が要求されます。パスワードは、6 文字以上でなければいけません。

この新規ユーザーを有効にするには、`tarantella webserver restart` を使用して SGD Web サーバーを再起動する必要があります。

このコマンドを使用して、信頼されているユーザーのパスワードを変更することはできません。`tarantella webserver delete_trusted_user` コマンドを使用して、信頼されているユーザーを最初に削除する必要があります。

このコマンドを実行すると、

`/install-dir/webserver/tomcatversion/conf/tomcat-users.xml` にある Tomcat ユーザーの「データベース」にユーザー名が追加され、パスワードの SHA ダイジェストが作成されます。また、このユーザーには「SGDEExternalAuth」ロールが割り当てられます。このロールは、SGD 外部認証 Web サービスにアクセスするときに必要なになります。

使用例

次の例では、L3nNy_G0db3r を信頼されているユーザーとして追加します。

```
tarantella webserver add_trusted_user L3nNy_G0db3r
```

tarantella webserver delete_trusted_user

サードパーティーの認証を使用するユーザーのユーザー名およびパスワードを削除します。

形式

```
tarantella webserver delete_trusted_user username
```

説明

このユーザーを無効にするには、`tarantella webserver restart` を使用して SGD Web サーバーを再起動する必要があります。

このコマンドを実行すると、`/install-dir/webserver/tomcat/version/conf/tomcat-users.xml` にある Tomcat ユーザーの「データベース」からユーザー名が削除されます。

使用例

次の例では、信頼されているユーザーとして `L3nNy_G0db3r` を削除します。

```
tarantella webserver delete_trusted_user L3nNy_G0db3r
```

tarantella webserver list_trusted_users

サードパーティーの認証を使用するユーザーのユーザー名の一覧を表示します。

形式

```
tarantella webserver list_trusted_users
```

説明

各ユーザー名は、コンマで区切って表示されます。このコマンドでは、サードパーティーの認証が現在有効になっているかどうか也表示されます。

このコマンドを実行すると、
`/install-dir/webserver/tomcat/version/conf/tomcat-users.xml` にある Tomcat ユーザーの「データベース」内のユーザー名が表示されます。

使用例

次の例では、信頼されているユーザーの一覧を表示します。

```
tarantella webserver list_trusted_users
```

tarantella webserver start

SGD サーバー上で SGD Web サーバーおよび Java サブレット/JavaServer Pages サービスを起動するときは、tarantella webserver start コマンドを使用します。

形式

```
tarantella webserver start [ --http ] [ --ssl ] [ --servlet ]
```

説明

引数を指定しない場合は、SGD Web サーバーおよび Java サブレット/JavaServer Pages サービスの両方が起動します。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--http	Java サブレット/JavaServer Pages サービスを起動せずに、SGD Web サーバーを起動します。
--servlet	SGD Web サーバーを起動せずに、Java サブレット/JavaServer Pages サービスを起動します。
--ssl	SSL を有効にして SGD Web サーバーを起動します。

注 – 後ろのコマンドを使用して SGD Web サーバーおよび Java サブレット/JavaServer Pages サービスの両方を起動する場合は、Java サブレット/JavaServer Pages サービスを最初に起動する必要があります。

使用例

次の例では、SGD Web サーバーおよび SGD Web サービスを起動します。

```
tarantella webserver start
```

tarantella webserver stop

SGD サーバー上で SGD Web サーバーおよび Java サブレット/JavaServer Pages サービスを停止するときは、tarantella webserver stop コマンドを使用します。

形式

```
tarantella webserver stop [ --http ] [ --servlet ]
```

説明

引数を指定しない場合は、SGD Web サーバーおよび Java サブレット/JavaServer Pages サービスの両方が停止します。

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--http	Java サブレット/JavaServer Pages サービスを停止せずに、SGD Web サーバーを停止します。
--servlet	SGD Web サーバーを停止せずに、Java サブレット/JavaServer Pages サービスを停止します。

使用例

次の例では、SGD Web サーバーおよび SGD Web サービスを停止します。

```
tarantella webserver stop
```

tarantella webserver restart

SGD Web サーバーを再起動するには、tarantella webserver restart コマンドを使用します。

形式

```
tarantella webserver restart [ --http ] [ --ssl ] [ --servlet ]
```

説明

引数を指定しない場合は、SGD Web サーバーおよび Java サブレット/JavaServer Pages サービスの両方が再起動します。

オプション	説明
--http	Java サブレット/JavaServer Pages サービスを起動せずに、SGD Web サーバーを再起動します。
--servlet	SGD Web サーバーを起動せずに、Java サブレット/JavaServer Pages サービスを再起動します。
--ssl	SSL を有効にして SGD Web サーバーを再起動します。

注 – 後ろのコマンドを使用して SGD Web サーバーおよび Java サブレット/JavaServer Pages サービスの両方を再起動する場合は、Java サブレット/JavaServer Pages サービスを最初に再起動する必要があります。

使用例

次の例では、SGD Web サーバーおよび Java サブレット/JavaServer Pages サービスを再起動します。

```
tarantella webserver restart
```

tarantella webtopsession コマンド

このコマンドを使うと、SGD 管理者はユーザーセッションを表示および終了できます。

形式

```
tarantella webtopsession list | logout
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なサブコマンドを示しています。

サブコマンド	説明	詳細情報
list	指定した人物またはサーバーに一致するユーザーセッションを表示します。	376 ページの「tarantella webtopsession list」
logout	Webtop からユーザーをログアウトさせます。	378 ページの「tarantella webtopsession logout」

注 – すべてのコマンドに `--help` オプションがあります。特定のコマンドに関するヘルプを表示するには、`tarantella webtopsession subcommand --help` コマンドを使用します。

使用例

次の例では、SGD サーバー `detroit` が保持しているすべてのユーザーセッションの詳細を表示します。

```
tarantella webtopsession list \  
  --server "o=Indigo Insurance/cn=detroit"
```

次の例では、Emma Rald を Webtop からログアウトさせます。

```
tarantella webtopsession logout \  
  --person "o=Indigo Insurance/ou=Marketing/cn=Emma Rald"
```

tarantella webtopsession list

指定した人物またはサーバーに一致するユーザーセッションを表示します。

形式

```
tarantella webtopsession list [ --person pobj | --server serv ]  
                             [ --format text|count|xml ]
```


説明

セッションごとに、次の詳細が表示されます。

- 印刷状態。ユーザーが印刷を一時停止しているかどうかを示します。
- クライアント。クライアントの IP アドレス。
- ログイン時間。ユーザーがログインしたときのタイムスタンプ。
- ユーザー。特定のユーザー名。
- ログイン先。ユーザーセッションを運用している SGD サーバー。
- 接続タイプ。接続に標準接続またはセキュア接続のどちらが使用されているかを指定します。

Administration Console の次のタブを使用して、ユーザーセッションの詳細を表示できます。

- 「セッション」タブ
- 「Secure Global Desktop サーバー」⇒「ユーザーセッション」タブ
- ユーザープロファイルオブジェクト用の「ユーザーセッション」タブ

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
--person	指定した人物に一致するユーザーセッションの詳細を表示します。ユーザープロファイルオブジェクトの名前を使用します。
--server	指定した SGD サーバーに一致するユーザーセッションの詳細を表示します。SGD サーバーオブジェクトの名前か、ピア DNS 名を使用します。
--format	出力形式を指定します (デフォルト設定は text)。一致するセッションの数だけを表示する場合は、count を使用します。

人物もサーバーも指定しない場合、このコマンドはアレイ全体のすべてのユーザーセッションを表示します。

共用ユーザー (guest) と匿名ユーザーは、「システムオブジェクト」組織にある同じプロファイルを共用できる場合でも、一意の名前を持ちます。共用ユーザー (guest) と匿名ユーザーには、プロファイルオブジェクトの名前ではなく一意の名前を付けます (例: .../_dns/newyork.indigo-insurance.com/_anon/1)。

注 - オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、SGD サーバー `detroit` が保持しているすべてのユーザーセッションの詳細を表示します。

```
tarantella webtopsession list \  
  --server "o=Indigo Insurance/cn=detroit"
```

次の例では、アレイ全体のセッションのすべてのユーザーセッションを表示します。

```
tarantella webtopsession list
```

tarantella webtopsession logout

指定した各人物のユーザーセッションを終了します。このコマンドは、人物を Webtop からログアウトさせる効果があります。

形式

```
tarantella webtopsession logout --person pobj...  
                                [--format text|quiet]
```

説明

次の表は、このコマンドで使用可能なオプションを示しています。

オプション	説明
<code>--person</code>	指定した人物のユーザーセッションを終了します。ユーザープロフィールオブジェクトの名前を使用します。
<code>--format</code>	出力形式を指定します (デフォルト設定は <code>text</code>)。 <code>--format quiet</code> を使うと、メッセージは表示されず、終了コードがログアウトしたセッションの数を示します。

Administration Console の次のタブを使用して、ユーザーセッションを終了できます。

- 「セッション」タブ
- 「Secure Global Desktop サーバー」⇒「ユーザーセッション」タブ
- ユーザープロフィールオブジェクト用の「ユーザーセッション」タブ

共用ユーザー (guest) と匿名ユーザーは、「システムオブジェクト」組織にある同じプロフィールを共用できる場合でも、一意の名前を持ちます。ゲストユーザーまたは匿名ユーザーに、プロフィールオブジェクトの名前ではなく、一意の名前を付けます。

たとえば、.../_dns/newyork.indigo-insurance.com/_anon/1。

注 - オブジェクト名に空白文字 () が含まれている場合は、二重引用符 (") か一重引用符 (') で囲む必要があります (例: "o=Indigo Insurance")。

使用例

次の例では、Emma Rald を Webtop からログアウトさせます。

```
tarantella webtopsession logout \  
  --person "o=Indigo Insurance/ou=Marketing/cn=Emma Rald"
```

次の例では、匿名ユーザーのユーザーセッションを終了します。

```
tarantella webtopsession logout \  
  --person .../_dns/newyork.indigo-insurance.com/_anon/1
```


索引

数字

- 3 ボタンマウス、サポート, 191
- 3270 アプリケーションオブジェクト, 94
 - コマンド行から作成, 272
- 5250 アプリケーションオブジェクト, 96
 - コマンド行から作成, 276

A

- Active Directory コンテナオブジェクト, 103
 - コマンド行から作成, 281
- Active Directory 認証
 - クライアント証明書の使用, 19
 - ディレクトリサーバーの URL, 16
 - デフォルトドメイン, 20
 - パスワード, 18
 - ベースドメイン, 19
 - 有効化, 10, 15
 - ユーザー名, 18
- AIP コマンド
 - 圧縮, 145
 - 実行順序, 146
- arantella stop cdm コマンド, 360

D

- Directory Services Integration, 16
- DNS 名、外部, 62

G

- guest アカウント, 181

J

- JVM、メモリー割り当て, 68

K

- keepalive メッセージ, 29

L

- LDAP 認証, 7
 - ディレクトリサーバーの URL, 16
 - パスワード, 18
 - 有効化, 10, 16
 - ユーザープロファイルの検索
 - デフォルトの LDAP プロファイルを使用, 8
 - もっとも近い LDAP を使用, 9
 - ユーザー名, 18

P

- PDF 印刷
 - PDF ファイルへの印刷
 - デフォルトのクライアントプリンタ, 46
 - 有効化, 45
 - PDF プリンタへの印刷
 - デフォルトのクライアントプリンタ, 44
 - 有効化, 44
 - Universal PDF ビューア、有効, 209
 - Universal PDF プリンタ、有効, 208
 - Windows アプリケーション、プリンタドライバ, 47
 - デフォルトプリンタ, 184, 185
 - プリンタドライバ, 197

R

RGB データベース, 75

S

SCO コンソールアプリケーション, 99

SecurID 認証

有効化, 12

SGD クライアント

クライアントプロファイル編集の有効化, 42

プロファイル編集, 139

SGD サーバー

運用停止, 63

外部 DNS 名, 62

セキュリティー設定, 64

設定の変更, 60

パフォーマンスの調整, 66

ファイル記述子、制限, 68

無効になっているユーザーログインの Web ページ, 64

ユーザーセッション、制限, 67

ユーザーログインの許可, 63

要求、制限, 67

リソースの同期, 69

SGD サービスの起動, 356

SGD サービスの再起動, 335

SGD サービスの停止, 360

SGD のアンインストール, 368

SSL, 29

プレーンテキストトラフィックを受け入れる
, 65

T

tarantella archive コマンド, 234

tarantella array コマンド

detach, 236

join, 237

list, 238

make_primary, 238

概要, 235

tarantella cache コマンド, 239

tarantella config

グローバル設定

array-audio, 36

array-audio-quality, 36

array-billingservices, 54

array-cdm, 33

array-cdm-fallbackdrive, 35

array-cdm-wins, 34

array-clipboard-clientlevel, 40

array-clipboard-enabled, 40

array-editprofile, 42

array-logfilter, 53

array-port-encrypted, 28, 29

array-resourcesysnc, 32

array-scard, 38

array-serialport, 39

array-unixaudio, 37

array-unixaudio-quality, 38

launch-allowsmartcard, 23

launch-alwayssmartcard-initial, 25

launch-alwayssmartcard-state, 25

launch-details-initial, 27

launch-details-showonerror, 27

launch-details-state, 27

launch-expiredpassword, 22

launch-loadbalancing-algorithm, 49

launch-savepassword-initial, 25

launch-savepassword-state, 25

launch-savetappassword, 4

launch-showdialog, 23

launch-showdialogafter, 26

launch-trycachedpassword, 21

login-ad, 15

login-ad-base-domain, 19

login-ad-default-domain, 20

login-anon, 12

login-atla, 11

login-autotoken, 4

login-ens, 13

login-ldap, 16

login-ldap-pki-enabled, 19

login-ldap-thirdparty-ens, 9

login-ldap-thirdparty-profile, 8

login-ldap-url, 17

login-nt, 11

login-nt-domain, 14

login-secrid, 12

login-thirdparty, 5

login-thirdparty-ens, 6

login-thirdparty-noens, 7

- login-unix-group, 13
- login-unix-user, 14
- printing-mapprinters, 43
- printing-pdfdriver, 47
- printing-pdfenabled, 44
- printing-pdfisdefault, 44
- printing-pdfviewerenabled, 45
- printing-pdfviewerisdefault, 46
- security-applyconnections, 51
- security-newkeyonrestart, 50
- security-printmappings-timeout, 51
- security-xsecurity, 52
- sessions-aipkeepalive, 29
- sessions-loadbalancing-algorithm, 48
- sessions-timeout-always, 31
- sessions-timeout-session, 30
- xpe-tzmapfile, 41

サーバー設定

- audiope-compression, 86
- chpe-compression, 82
- chpe-compressionthreshold, 83
- chpe-exitafter, 84
- cpe-args, 73
- cpe-exitafter, 72
- cpe-maxsessions, 72
- execpe-args, 81
- execpe-exitafter, 80
- execpe-maxsessions, 80
- execpe-scriptdir, 81
- ppe-compression, 84
- ppe-compressionthreshold, 85
- ppe-exitafter, 86
- scardpe-compression, 87
- security-acceptplaintext, 65
- security-connectiontypes, 64
- security-firewallurl, 66
- server-dns-external, 62
- server-location, 70
- server-login-enabled, 63
- server-redirection URL, 64
- tuning-jvm-initial, 68
- tuning-jvm-max, 68
- tuning-jvm-scale, 68
- tuning-maxconnections, 67
- tuning-maxfiledescriptors, 68
- tuning-maxrequests, 67
- tuning-resourcesync-time, 69
- xpe-args, 79
- xpe-cwm-maxheight, 76
- xpe-cwm-maxwidth, 76
- xpe-exitafter, 78
- xpe-fontpath, 74
- xpe-keymap, 75
- xpe-maxsessions, 78
- xpe-monitorresolution, 74
- xpe-rgbdatabase, 75
- xpe-sessionstarttimeout, 77

tarantella config コマンド

- edit, 241
- list, 242
- 概要, 240

tarantella emulatorsession コマンド

- end, 250
- info, 247
- shadow, 247
- suspend, 249
- 概要, 243

tarantella license コマンド

- add, 253
- info, 254
- list, 254
- query, 256
- remove, 257
- status, 258
- 概要, 252

tarantella object コマンド

- add_host, 261
- add_link, 262
- add_member, 263
- delete, 264
- edit, 265
- list_attributes, 267
- list_contents, 267
- new_3270app, 272
- new_5250charapp, 276
- new_charapp, 280
- new_container, 281
- new_dc, 281
- new_doc, 283
- new_group, 285
- new_host, 287
- new_org, 289
- new_orgunit, 292

- new_person, 295
- new_windowsapp, 299
- new_xapp, 303
- remove_host, 305
- remove_link, 306
- remove_member, 307
- rename, 308
- script, 309
- tarantella passcache コマンド
 - delete, 312
 - edit, 314
 - list, 315
 - new, 317
 - 概要, 310
- tarantella print コマンド
 - cancel, 319
 - list, 321
 - move, 322
 - pause, 323
 - resume, 324
 - start, 325
 - status, 326
 - stop, 327
 - 概要, 318
- tarantella query コマンド
 - audit, 331
 - billing, 332
 - errlog, 333
 - uptime, 334
 - 概要, 328
- tarantella restart コマンド, 335
- tarantella role コマンド
 - add_link, 337
 - add_member, 338
 - list, 339
 - list_links, 340
 - list_members, 340
 - remove_link, 341
 - remove_member, 342
 - 概要, 336
- tarantella security コマンド, 344
 - certinfo, 346
 - certrequest, 348
 - certuse, 350
 - customca, 351
 - decryptkey, 352
 - fingerprint, 353
 - peerca, 354
 - start, 354
 - stop, 355
- tarantella setup コマンド, 356
- tarantella start コマンド, 356
- tarantella status コマンド, 358
- tarantella stop コマンド, 360
- tarantella tokencache コマンド
 - delete, 362
 - list, 363
 - 概要, 361
- tarantella tscal コマンド
 - free, 365
 - list, 367
 - return, 367
 - 概要, 364
- tarantella uninstall コマンド, 368
- tarantella version コマンド, 369
- tarantella webserver コマンド
 - add_trusted_user, 371
 - delete_trusted_user, 372
 - list_trusted_users, 372
 - restart, 375
 - start, 373
 - stop, 374
 - 概要, 370
- tarantella webtopsession コマンド
 - list, 378
 - logout, 379
 - 概要, 376
- tarantella コマンド
 - help, 251
 - 概要, 230
- telnet 接続、終了アクション, 148

U

- UNIX オーディオ
 - 音質, 38
 - 有効化, 37
- UNIX グループ ID、使用した認証, 13
- UNIX の認証

- 有効化, 10
- ユーザープロファイルの検索
 - デフォルトを使用, 14
 - ローカルリポジトリで UNIX グループ ID を使用, 13
 - ローカルリポジトリで UNIX ユーザー ID を使用, 13
- UNIX ユーザー ID、使用した認証, 13
- UNIX ユーザープロファイル, 13, 14

V

- VT420 アプリケーション, 99
 - エスケープシーケンス, 161

W

- Webtop アイコン, 173
- Windows アプリケーション
 - PDF ファイルへの印刷, 45
 - デフォルトプリンタ, 46
 - PDF プリンタドライバ, 47
 - PDF プリンタへの印刷, 44
 - デフォルトプリンタ, 44
 - 印刷設定, 42
 - クライアントからの起動, 227
 - クライアントプリンタ、有効化, 43
 - スマートカードの有効化, 38
- Windows アプリケーションオブジェクト, 108
 - コマンド行から作成, 299
- Windows ターミナルサービス
 - CAL を管理するためのコマンド, 364
- Windows ドメインコントローラの認証
 - ドメイン名, 14
 - 有効化, 11
- Windows プロトコル、引数, 122
- WINS、クライアントドライブアクセスの有効化, 34
- Wyse 60 アプリケーション, 99

X

- X アプリケーションオブジェクト, 109
 - コマンド行から作成, 303

- X ディスプレイ、xauth を使用したセキュリティー保護, 52
- X プロトコルエンジン, 73
 - X セッション開始のタイムアウト, 77
 - アクティブな接続のタイムアウト, 78
 - アプリケーションセッションの最大数, 78
 - 色の名前、RGB 値への解決, 75
 - ウィンドウの最大サイズ, 76
 - キーボードマップ、デフォルト, 75
 - コマンド行の引数, 79
 - ディスプレイのサイズ, 76
 - デフォルトのモニター解像度, 74
 - フォントディレクトリ, 74
- X.509 証明書
 - インストール, 350
- xauth、X ディスプレイのセキュリティー保護, 52

あ

- アプリケーション
 - keepalive のタイムアウト, 29
 - アプリケーションサーバーの割り当て, 170
 - 一般的な再開機能のタイムアウト, 31
 - ウィンドウタイプ, 223
 - ウィンドウのサイズ
 - 高さ, 219
 - 幅, 222
 - 起動
 - コマンド行引数, 122
 - 起動ダイアログ
 - 「起動の詳細」領域の表示, 27
 - 表示するまでの遅延時間, 26
 - 再開, 116, 118
 - 初期表示サイズ, 217
 - 中断, 116, 118
 - 認証
 - スマートカードの使用, 23
 - 認証ダイアログ
 - 表示, 23
 - 「常にスマートカードを使う」ボックス, 25
 - 「パスワードを保存」ボックス, 25
 - 負荷分散, 49
 - 有効期限が切れたパスワード, 22
 - ユーザーセッション再開機能のタイムアウト, 30

- ユーザープロファイル割り当て, 126
- アプリケーションサーバー
 - DNS 名, 112
 - アプリケーションを実行できるようにする, 120
 - 使用可能なアプリケーション, 168
 - 認証、ドメイン名, 158
 - 負荷分散, 114, 180
 - ロケール設定, 198
- アプリケーションサーバーオブジェクト, 98
 - コマンド行から作成, 287
- アプリケーションセッション
 - 一覧表示, 245
 - 管理, 89
 - 最大数, 72, 78, 80, 193
 - シャドウイング, 89, 247
 - 終了, 89, 203, 250
 - 詳細情報の表示, 89
 - ステータス情報の表示, 247
 - 制御, 243
 - 中断, 249
 - 負荷分散, 48
- アプリケーションセッションのシャドウイング, 89
- アプリケーション認証
 - SGD パスワードの使用, 21
 - Shift キーを押しながらクリック, 23
 - スマートカード, 23
 - 設定, 20
 - 有効期限が切れたパスワード、ユーザーのオプション, 22
- アプリケーションの起動
 - SGD パスワードの使用, 21
 - ダイアログボックス, 26, 27
 - 認証ダイアログボックスの表示, 23
 - プロセスの調整, 79
- アプリケーションの負荷分散, 70
- アレイ
 - 課金サービスの有効化, 54
 - ステータス情報, 358
 - セキュリティー設定, 50
- 暗号キー, 50

- い
- 一般的な再開機能アプリケーション、タイムアウト, 31
- 色の名前、RGB 値への解決, 75
- 印刷
 - PDF, 42
 - Windows アプリケーション、クライアントブリ
ンタの有効化、, 43
 - アプリケーション終了のタイムアウト, 51
 - ネームマッピング、一覧表示, 326
 - プロセスの調整, 84
 - ユーザー固有の設定, 138
- 印刷ネームマッピングのタイムアウト, 51
- 印刷プロトコルエンジン, 84
 - アクティブな接続のタイムアウト, 86
 - 最小パケットサイズ, 85
 - データ圧縮, 84, 85

- う
- ウィンドウマネージャー、指定, 216

- え
- エミュレータウィンドウ、最大化, 220
- エラーメッセージ、ログへの記録, 53

- お
- オーディオ
 - UNIX
 - 音質, 38
 - 有効化, 37
 - Windows
 - 音質, 36
 - 有効化, 36
 - 音質, 36
 - 有効化, 36
- オーディオ処理、調整, 86
- オーディオプロトコルエンジン, 86
 - データ圧縮, 86
- オブジェクトの名前の指定, 192
- オブジェクトの命名規則, 230

- か
- カーソルスタイル, 155

外部認証, 6, 8

課金サービス、アレイでの有効化, 54

き

キーボードショートカット、リモートセッションに送信, 215

キーボードマップ

デフォルト設定, 75

ファイル名, 176

ロック, 178

「起動の詳細」領域, 27

く

クライアントデバイス

WINS の有効化, 34

アクセスの有効化, 33, 135

未使用のドライブ文字の検索, 35

クライアントデバイス、設定, 32

クライアントドライブマッピング

tarantella start cdm コマンド, 357

サービスの起動, 357

サービスの停止, 360

クライアントプロファイル

編集, 42

グラフィカルエミュレータプロセス、調整, 73

クリップボード

コピー&ペーストの有効化, 40

セキュリティ保護, 40

グループオブジェクト, 105

コマンド行から作成, 285

メンバー, 186

け

言語、キーボード, 75

こ

コードページ, 141

コピー

セキュリティ保護, 40

有効化, 40

コマンド行回数, 73, 79, 81

さ

サードパーティーの認証, 1

有効化, 5

ユーザーの識別情報

LDAP リポジトリを検索, 7

デフォルトのサードパーティー識別情報を使用, 7

ローカルリポジトリの検索, 6

ユーザープロファイルの検索

デフォルトの LDAP プロファイルを使用, 8

もっとも近い LDAP を使用, 9

再開機能のタイムアウト, 30, 31, 116, 118

し

システム認証, 1

Active Directory, 10, 15

LDAP, 10, 16

SecurID, 12

SGD パスワードのキャッシュ, 4

UNIX, 10

Windows ドメインコントローラ, 11

匿名, 12

認証トークン, 4, 11

有効化, 6

実行プロトコルエンジン, 79

アクティブな接続のタイムアウト, 80

アプリケーションセッションの最大数, 80

コマンド行の回数, 81

ログインスクリプト、場所, 81

シリアルポート、アクセスの有効化, 39

診断メッセージ、ログへの記録, 53

す

スマートカード

アプリケーション認証ダイアログ, 25

アプリケーション認証を使用, 23

サービスの有効化, 38

プロセスの調整, 87

スマートカードプロトコルエンジン, 87

データ圧縮, 87

せ

セキュア接続, 29

- SSL, 64, 65
- 使用不能にする, 355
- 有効, 354
- 有効化, 51, 64
- セキュリティー設定, 50, 64
- セッション ID, 245
- 接続タイプ
 - セキュア, 64
 - 標準, 64
- 設定のオプション, 356
- そ
- 属性
 - Postscript プリンタドライバ (--pdfprinter), 197
 - Universal PDF ビューア (--pdfviewerenabled), 209
 - Universal PDF ビューアをデフォルトにする (--pdfviewerisdefault), 185
 - Universal PDF プリンタ (--pdfenabled), 208
 - Universal PDF プリンタをデフォルトにする (--pdfisdefault), 184
 - URL (--url), 210
 - Windows プロトコル
 - 最初にクライアントからの実行を試行する (--trylocal), 227
 - Windows プロトコル (--winproto), 226
 - X セキュリティ拡張機能 (--securityextension), 227
 - アイコン (--icon), 173
 - アドレス (--address), 112
 - アプリケーション起動 (--available), 120
 - アプリケーションコマンド (--app), 113
 - アプリケーションの再開機能
 - タイムアウト (--resumetimeout), 118
 - アプリケーションの再開機能 (--resumable), 116
 - アプリケーションの負荷分散 (--loadbal), 114
 - インターレースイメージ (--interlaced), 174
 - ウィンドウ管理キー (--remotewindowkeys), 215
 - ウィンドウタイプ
 - 新規ブラウザウィンドウ (--newbrowser), 225
 - ウィンドウタイプ (--displayusing), 223
 - ウィンドウの色 (--roottype), 214
 - ウィンドウの色、カスタム色 (--rootcolor), 215
 - ウィンドウのサイズ
 - ウィンドウに合わせて拡大縮小する (--scalable), 221
 - カラム (--cols), 218
 - 行 (--lines), 219
 - クライアントの最大サイズ, 217
 - 最大化 (--3270ma), 220
 - 高さ (--height), 219
 - 幅 (--width), 222
 - ウィンドウマネージャー (--winmgr), 216
 - ウィンドウを閉じるアクション (--windowclose), 212
 - エスケープシーケンス (--escape), 161
 - エミュレーションタイプ (--emulator), 159
 - 応答メッセージ (--answermsg), 113
 - オーディオリダイレクトライブラリ (--unixaudiopreload), 131
 - カーソル (--cursor), 155
 - カーソルキーコードの変更 (--cursorkeys), 156
 - カラー品質 (--quality), 144
 - カラーマップ (--colormap), 143
 - 環境変数 (--env), 160
 - キーボードコードの変更, 176
 - キーボードタイプ (--3270kt), 178
 - キーボードマップ (--keymap), 176
 - キーボードマップ (--lockkeymap), 178
 - 起動接続をオープンしたまま保持 (--keepopen), 175
 - 行の折り返し (--autowrap), 179
 - クライアント印刷
 - 上書き (--userprintingconfig), 138
 - クライアント印刷 (--mapprinters), 137
 - クライアントドライブマッピング (--cdm), 135
 - クライアントプロファイルの編集 (--editprofile), 139
 - グラフィックアクセラレーション (--accel), 167
 - コードページ (--codepage), 141
 - コピー&ペースト
 - Clipboard Security Level (--clipboardlevel), 154
 - コピー&ペースト (--clipboard), 153
 - コマンドの圧縮 (--compression), 145
 - コマンドの実行 (--execution), 146

コマンドの引数 (--args), 122
コメント (--description), 147
サーバーアドレス (--hostname), 201
サーバーポート (--portnumber)
3270, 202
シリアルポートマッピング (--serialport), 200
数字パッドコードの変更 (--keypad), 194
スクロールスタイル (--scrollstyle), 199
ステータス行 (--statusline), 205
姓 (--surname), 206
セッション数 (--maxinstances), 193
セッション終了 (--endwhen), 203
接続終了アクション (--3270tnclose), 148
接続方法
ssh 引数 (--ssharguments), 152
接続方法 (--method), 149
前景色 (--3270fg), 166
属性マップ (--attributemap), 130
帯域幅の制限 (--bandwidth), 132
遅延更新 (--delayed), 157
電子メールアドレス (--email), 159
ドメイン名 (--ntdomain), 158
名前 (--name), 192
背景色 (--3270bg), 131
パスワードキャッシュの使用 (--auth), 195
発色数 (--depth), 142
表示されるソフトボタン (--3270bl), 157
ヒント (--hints), 167
フォントサイズ
固定フォントサイズ (--fixedfont), 165
フォントサイズ (--fontsize), 164
フォントファミリー (--font), 164
負荷分散グループ (--location), 180
プロトコルの引数 (--protoargs), 122
プロンプトのロケール (--host locale), 198
「ホストしているアプリケーションサーバー」
タブ (--appserv), 170
マウス (--force3button), 191
マウスの中ボタンのタイムアウト (--
middlemouse), 189
メニューバー (--3270mb), 188
「メンバー」タブ (--member), 186
モニターの解像度 (--dpi), 190
ユーロ文字 (--euro), 162

類似セッション間でリソースを共有 (--
share), 204
ログイン (--enabled), 181
ログインスクリプト (--login), 183
ログイン名 (--user), 182
ログイン、複数 (--shared), 181
枠線のスタイル (--border), 134
割り当て済みアプリケーションを親から継承す
る (--inherit), 173
「割り当て済みのアプリケーション」タブ (--
links), 123
割り当て済みのユーザープロファイル(--
ldapgroups), 126
割り当て済みのユーザープロファイル(--
ldapsearch), 126
割り当て済みのユーザープロファイル(--
ldapusers), 126
「ファイル」メニューと「設定」メニュー (--
3270si), 163
組織オブジェクト, 101
コマンド行から作成, 289
組織単位オブジェクト, 102
コマンド行から作成, 292
ソフトボタンのレベル, 157

た

帯域幅の制限、ユーザー, 132
タイムアウト
X プロトコルエンジン, 77, 78
アプリケーションの再開, 116
印刷ネームマッピング, 51
印刷プロトコルエンジン, 86
実行プロトコルエンジン, 80
チャネルプロトコルエンジン, 84
文字型プロトコルエンジン, 72
タイムゾーン、クライアントから Windows への
マッピング, 41
端末ウィンドウ
カラム数, 218
行数, 219
行の折り返し, 179
枠線のスタイル, 134
端末エミュレータ処理、調整, 71

ち

チャンネル処理、調整, 82
チャンネルプロトコルエンジン, 82
 アクティブな接続のタイムアウト, 84
 最小パケットサイズ, 83
 データ圧縮, 82, 83

て

ディスプレイのサイズ
 高さの最大値, 76
 幅の最大値, 76
デフォルトメイン、Active Directory 認証, 20
テンキーパッド, 194
電子メールアドレス、ユーザー, 159

と

トークンキャッシュ、エントリの削除, 207
ドキュメントオブジェクト, 104
 コマンド行から作成, 283
匿名ユーザー認証
 有効化, 12
匿名ログイン
 有効化, 12
ドメインコンポーネントオブジェクト, 104
 コマンド行から作成, 281
ドライブ文字、検索, 35

に

認証ウィザード, 1
認証トークン
 管理, 207
 作成, 4
認証トークンの認証, 4
 有効化, 11

ね

ネットワークパケット圧縮
 印刷, 84, 85
 オーディオ, 86
 スマートカード, 87
 チャンネル処理, 82, 83

は

バージョン番号、表示, 369
パスワード, 4
 SGD
 アプリケーションの起動で使用, 21
 キャッシュへの保存, 4
 アプリケーションサーバー
 保存, 25
パスワードキャッシュ, 21
 暗号化, 50
 有効化, 4
発色数, 142

ひ

引数, 73, 79, 81
表示の更新、遅延, 157
標準接続, 28
 有効化, 64

ふ

ファイアウォール
 SGD に関連しない Web サーバートラフィック
 の転送, 66
 セキュア接続、有効化, 29
 標準接続、有効化, 28
ファイル記述子、制限, 68
フォント、場所, 74
負荷分散, 70, 114, 180
 アプリケーション, 49
 アプリケーションセッション, 48
 アルゴリズム, 48, 49

へ

ペースト
 セキュリティ保護, 40
 有効化, 40
ベースドメイン、Active Directory, 19

ほ

ポート番号
 セキュア接続, 29
 標準接続, 28
「ホストされているアプリケーション」タブ, 168

「ホストしているアプリケーションサーバー」タブ
、 170

め

メモリー、JVM 設定, 68

「メンバー」タブ, 186

も

文字型アプリケーションオブジェクト, 99

コマンド行から作成, 280

文字型プロトコルエンジン, 71

アクティブな接続のタイムアウト, 72

アプリケーションセッションの最大数, 72

コマンド行の引数, 73

モニターの解像度、デフォルト, 74

ゆ

ユーザーセッション

一覧表示, 378

管理, 88

終了, 88

詳細情報の表示, 88

ユーザーのログアウト, 379

ユーザーセッション再開機能アプリケーション、タイムアウト, 30

ユーザープロファイルオブジェクト, 106

コマンド行から作成, 295

ユーザーログイン

SGD サーバーで有効にする, 63

SGD パスワードのキャッシュ, 4

サードパーティーの認証の使用, 5

セキュア接続の使用, 51

匿名, 12

無効になっているサーバーログインの Web ページ, 64

ユーロ文字, 162

よ

要求、制限, 67

ら

ライセンス

tarantella license add コマンド, 253

tarantella license info コマンド, 254

tarantella license list コマンド, 254

tarantella license query コマンド, 256

tarantella license remove コマンド, 257

tarantella license status コマンド, 258

Windows ターミナルサービス CAL の一覧を表示, 367

Windows ターミナルサービス CAL の解放, 365

Windows ターミナルサービス CAL のコマンド
、 364

Windows ターミナルサービス CAL を戻す, 367
ステータステーブル, 55

ライセンスキー

一覧表示, 55

削除, 55

追加, 55

り

リソースの同期

スケジューリング, 69

有効化, 32

ろ

ログイン

有効, 181

ログインスクリプト、場所, 81

ログファイル

アーカイブ, 234

アレイのメンバーの稼働時間の表示, 334

課金処理情報の表示, 332

コンポーネントのエラーログの表示, 333

調査, 328

場所, 53

フィルタ, 53

フィルタを使ったログエントリの表示, 331

わ

「割り当て済みのアプリケーション」タブ, 123

割り当て済みのユーザープロファイルタブ, 126

